
死 怨

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死 怨

【Nコード】

N3505H

【作者名】

聖騎士

【あらすじ】

さきたのぼる

崎田晃19才♂大学1年生。待望の一人暮らしを始め、彼は毎晩ネット掲示板での会話を楽しんでいた。ところがある日変わったサイトにたどり着く。サイト名は『Sion』いわゆる『学校裏サイト』のようだが……今や欠かせないコミュニケーションツールとなったインターネット。パソコンや携帯電話で手軽に世界中とつながることができる。だがもし『あの世』とつながってしまったら……ネットを通じて拡がる怨念と怨嗟。もうだれもトメラレナイ……（『夏のホラー2009』怖い話は好きですか？）『人気投票第2位』

→プロローグ(前書き)

>i1650—275<

プロローグ

赤い何もない荒れ果てた大地

血を流したような赤い黄昏^{たそがれ}の空

うねる大地を遠くまで見やると薄墨色^{うすずみ}の山並み^{やまな}が霞^{かす}んで見える

オオオオ……アアアア……

その赤い荒野を数百億の声がうねりとなって押し寄せてくる

悪意……怨嗟^{えんさ}……怨念……

感情が大きな渦となって津波のように押し寄せてくる

今 歴史が終わろうとしていた……

第1章 崎田 晃(前書き)

注…この作品は僕の初期の作品で、以前ケータイサイトにて連載していたものです。一般的な小説作法には従っておらず、カタカナ擬音語もたくさん使用しています。読みづらいとは思いますがご了承ください。

第1章 崎田 晃

……4219……4219……4219……

「あった！うおっしやああ！！」

今までの苦しかった受験勉強を思い出して俺は渾身こんしんのガッツポーズをした。

俺は崎田 晃のぼる19才♂。

去年の春、地元じもとの公立高校を卒業して大学受験に失敗、一年間自宅と予備校を往復するだけの味気無い青春時代を過ごした。高校時代は陸上部に所属し、県レベルではそれなりに実績を残せた。その実績も大学受験では役に立たず、一年間彼女も作らず、必死に勉強した。

その努力がついに実ったのだ！

渋谷駅からJRに乗り、上野駅へ。さらに新幹線に乗り、地元へ向かった。

……俺もやっと大学生か……予備校時代はホント社会の底辺にいてって感じだったよな……これでやっと家を出られる！一人暮らしができる！食事は不安だけど、今の時代コンビニという強い味方もある。

うん。何とかなるぞ。来週には住むところを探さなきゃ……この時期みんな引っ越しするからなあ……あんまりきれいじゃなくてもいいから、安いところにしよう。仕送りだけじゃ絶対足りないし。

そっか、あと、バイトも探さなきゃ……うーん！夢は広がるばかりだ！

「あつれ〜？崎田くんじゃない？」

夢が広がって幸せな気分になっていると、突然通路を挟んで反対側の窓際から若い女に声を掛けられる。

「へっ？」

人間、予想外の出来事に遭遇するとベタな反応しかできなくなるらしい。だからベタなのだが。

「お、お前……み、美鈴か？」

吉崎美鈴^{よしざき みすず}19才^{みすず}♀は、俺の同級生だ。確かハンドボール部で、いつも元気が有り余ってるイメージがある。

「こんなところで何してんの？」

何って新幹線に乗ってるに決まってんじゃないかねえか！……とは言えず、

「あ、大学の合格発表があって、その帰りだよ。」

「へえ〜……崎田くんって大学受験組だったんだ。てっきり地元に就職したのかと思ってた。」

それは、大学に行くようには見えないと解釈していいのかな？

「で、どうだったの？」

「楽勝！」

俺は右手の親指を立てる。

「えっ！？合格したの？おめでとう！」

“えっ！？” ってなんだ！？ “えっ！？” って！

「まあね。ありがとう。」

とりあえず、“おめでとう”を親以外に言ってもらえるのはいい気分だ。かわいい女の子ならなおさらだ。

美鈴はハンドボール部に所属していた割にはそんなにゴツくない。どちらかというスレンダーなタイプだ。

後ろで茶色がかったロングヘアーを一つにまとめ、大きい目がくりくりと動く様子は、世の中全てに好奇心を抱いているように見える。くつきり二重瞼にうっすらとアイラインを入れ、つやつやと光る薄目の唇はすでに同級生ではなく、大人の女性を感じさせる。

「どこの大学？」

「青山学園大だよ。」

「えっ！？青山！？」

また“えっ！？”か！俺が青山に受かるのがそんなにおかしいか！？ところが……

「アタシといっしょじゃん。よろしくね！コ・ウ・ハ・イ。」

……………

な、なに〜〜〜〜！？

そんなラブコメ的偶然があるなんて……これはラブコメか？

「住むとことか決まったの？もちろん一人暮らしするんでしょ？」

俺は来週探しに行くことを話す。

「ふう〜ん……で、どこに住みたいの？」

「お前はどこに住んでんだよ？」

「ふふっ！オシエナイ。」

「なんじゃ！そりゃ〜〜！」

ラブコメ的な会話をしながら俺は心拍数が上昇し、アドレナリンはかなり分泌されていた。

高校時代はあまり話したことはなかった。特に意識したことはなかったが、彼女はとにかく目立つ存在だった。

運動神経が抜群だったので、体育祭や球技大会では常にヒーロー、いや、ヒロイン。

ずのうめいせき
頭脳明晰、ようしたんれい容姿端麗、運動抜群ときたら近寄ってくる男の数も半端ではなかったはずだ。

ま、いわゆる高嶺の花ってやつだな。

この俺はときたら、3年の時に陸上部の後輩に一度告られ、しばらくつきあったが、自然消滅した経験があるだけだ。もちろん手をつなぐ以上の関係には発展しなかった。ま、高校に入って部活の先輩に恋をするっていうのは、女の子の通過儀礼みたいなものだな。

??

こいつは通過儀礼したのかな？

けれどもそんなことは聞けず、美鈴とは高校時代の思い出話や、共通の友人の現状などをワイワイ話しながら、数時間はあっという

間に過ぎていった。

間に挟まれていたどっかのオヤジすまん！イマドキの若者だからケシカランのだ！

俺は美鈴と、携帯番号とメアドを交換し地元の駅前で別れた。

桜のつぼみがふくらんできた頃、俺は東京都民になった。アパートの場所は板橋区にした。いろいろ探してはみたが、どうしても手の届く物件がなかったのだ。まあ、乗り換えの一回くらい面倒ではないだろう。

東京は高えなあ……物価も建物も。

引っ越しと言っても、実家から持ってきたのはお気に入りの服やらゲーム、漫画などで、大きめの段ボール3つくらいしかない。後は現地調達だ。

都民だし。

都民だし。

2回言いたくなるくらい浮かれていた。

イマドキの若者が住むのは何とかパレスとか名前が付いてる、おしゃれなアパートなんだろうが、田舎から出てきた一介のサラリーマンの息子としては『あすなろ荘』が精一杯だった。

悪くないじゃん！『あすなろ荘』！漫画家が集まってきそうな名前だし！名作『鉄腕アトム』が生まれたのはこういうアパートだ！

「うーん、俺も一国一城の主かあ。」

とりあえず、使ってみたかった言葉だ。

一通り片付けをし、他の住人の部屋にタオルを持って挨拶に行き、一息つくとも時間はもう夕方5時になろうとしている。

「腹減ったなあ。何か買ってこようかな。」

とりあえずコンビニと病院の場所は確認してある。すると、

ピンポーン！

ん？だれだ？いきなり新聞の勧誘か？俺、田舎者だから断るの苦手なんだよなあ……

「遅くなりましたあ！○×電器です！」

作業服を着た電器屋さんが立っている。おお！そうだ！合格祝いにオヤジに買ってもらったパソコンだ！そういえば今日の午後届くって言ってたっけ。

「すいませ〜ん。」

なぜ謝るのか自分でもわからないが、とりあえず小心者の俺はそう言ってドアを開ける。

電器屋さんは気さくなお兄さんだった。

一時間くらいで各種接続は終わり、何かわからないことがあったらご連絡くださいと言い残し、電器屋さんは去って行った。俺はその時気が付く。

「今日からだれにも邪魔をされずネットができる！！」

いや、一人暮らしだから当たり前なのだが、今まで部屋の外の『ミシッ』というかすかな足音にさえ敏感になり、まるで忍者のように壁に張り付いて外の様子を探っていた日々が走馬燈のように頭を

駆けめぐる。

「一人暮らしってスゲー！」

わけのわからない感動をしてから、俺はコンビニに食料を調達しに行く。弁当とウーロン茶、ポテトチップスと箱ティッシュ（？）を買い込んで、俺は意気揚々《いきようよう》と戻って来る。イマドキの若者はテレビよりも、ネットかゲームだ。俺もご多分に漏れず、ゲームは好きだ。しかし、今まで携帯でのネット交流はあったものの、パソコンのウェブサイトを見たことはない。家にパソコンがなかったのだ。

何とかチューブの動画などにも、とても興味があったが、携帯から見ることはできなかった。そんなことをして料金の請求書が届いた^{あかつき}暁には親に殺されるので。

一人暮らしは自由だが、お金に関しては自宅よりも厳しい。学費と最低限の生活費は親に出してもらうが、携帯料金や遊ぶお金などは自分で稼ぐしかない。

とりあえず、池袋の漫画喫茶にアルバイトが決まっていたので、これからはいくらでもインターネットができる！

携帯は電話かメールでおk！

お、さっそくネットっぽいぞ！

俺は腹ごしらえをしながら、パソコンの電源を入れた。

ヒューイイイイイイイイイン……

パワーランプとインターネットの自動接続ランプが点滅する。いよいよだ！

プロバイダー接続など面倒な手続きは全て電器屋のお兄さんにやってもらっていたので、俺はすぐにネットの世界に入ることができた。

とりあえずプロバイダーのHPから、某有名検索サイトに行ってみる。

「とりあえず男は黙って2ちゃんねるでしょう！」

俺は『エルメスたん』に会えることを期待していた。しかし、よく考えれば『電車男』は2ちゃんねるにはいても、『エルメスたん』はいるわけではない。

そんなこともわからないくらい俺は浮かれていた。

「おお、これが2ちゃんねるか……スゲーな。」

膨大なスレッドに目がチカチカしてきた。とりあえず毒男スレッドを開いてみた。

……女なんか女なんか女なんか

……合コンキボンヌ

……明日のAKBどうする？

あるあるある！

俺と同じような男(?) たちがたくさん書き込みをしていた。

「オモシレー！」

他にも『一人暮らし』スレッドがあったので、とりあえず俺も書き込みを試みることにした。

……この春東京に出てきた田舎者です。だれかお話しませんか？

ヘン？

しばらく弁当を食べたり、ウーロン茶を飲んだりしながら他のスレッドを覗き、また『一人暮らし』スレに戻ってみた。すると、返事が書き込んであった。

キタロー『ボクもこの春東京にきました。お互い寂しいけどがんばろう。』

おお！同志よ！

でも俺は寂しくはない。しかし、『寂しくはない、サイコーだ』とか書き込むと『空気嫁お』とか突っ込まれそうだったので、

ボンジョルノ『そうですね。お互いガンバロー！』

と書き込んでおいた。

『ボンジョルノ』というハンドルネームは『ノボル』を逆さまにして、『ボルノ』にして、後は何となく変えてみた。

ヘン？

しばらくすると、別なヤツから書き込みがあった。

ヤサキ『あんまりどっぷり浸かるとオタクになるぞ。』

ダレ？

ボンジョルノ『あなたはダレですか？』

ヤサキ『通りすがりの者だ。』

そっか……こんな人もいるんだな……

ボンジョルノ『わかりました。気をつけます。リア友もたくさんつくります。』

……出身どこ？

……いくつ？

……彼女はいた？

……どの学校？

俺は一つ一つの質問に適当に答え、他のネット住人にも同じようなことを聞いた。いつの間にか深夜1時を回っていた。……本当に他愛のない会話だった。

だれもいない六畳間で、今現在ネットを通じて同じ時間を共有し、顔も知らないたくさんの人とお互いの事を話すという経験は、とても楽しく、刺激的だった。

しかし、明日からバイトがある。来週には大学が始まる。あまり夜更かしをしすぎて、生活に支障が出て困る。俺は『寝落ちしまポ』と覚えたての『ネット語』（？）を使い、掲示板を出た。

数日間はバイト先とアパート、レンタルビデオ屋（もうDVDショップでいいんじゃない？）とコンビニを回るだけの生活が続いた。もちろん、夜はネット住人たちと他愛のない会話を楽しんでいる。こここのところ、よく特定のヤツと話をするようになった。いや、もちろん掲示板で。

最初の日友達になった『キタロー』。

大学1年生で、江東区辺りに住んでいるらしい。気が弱く、ときどきイラッとさせられるが、基本的にイイヤツだ。

次に『アイン』。志村けんではない。『アインシュタイン』から

取ったらしい。

恐ろしく頭のいい奴だ。社会的な問題などの話題には、常に確かな論評をする。パソコンにもかなり詳しい。エロサイトもかなり教えてもらっている。

次に『ナエトル』。

言うまでもなくあのアニメから取ったHNだ。二十歳過ぎとは言っているが、どうも言葉が子どもっぽい。だってHNが『ナエトル』だぞ！？俺の予想では小学校高学年から中一ってとこだ。俺とはいつもゲームの話題で盛り上がる。

そして最後に『ウィツシュ』。

20代のOLさんらしい。一人暮らしで彼氏とはうまくいっていないらしい。彼女は『男ってバカばかり。』が口癖だった。俺は『ウィツシュ』の愚痴聞き役だ。

ボンジョルノ『ところでいいエロ画像知らない？AV女優もいいけど、素人のモロ画像キボンヌ。』

俺も若い健康な男の子だ！こういうの見たがって何が悪い！

アイン『ここどうだ？運がよければモザイク無しが見つかるぜ。』

掲示板にはリンクが貼り付けてあった。

ボンジョルノ『謝謝！』

キタロー『ボクも見てみる！』ボン いい画像があったら交換しよう！』

ふっ……キタローよ。戦友として共に戦おうではないか。戦利品は山分けだ。

アイン『ただ詐欺サイトもあるし、変なところに飛ばされたりするから気をつけろよ。』

ありがとうアイン。君の優しさは決して無駄にはしない。

ボンジヨルノ『でわ、落ち!』

アイン『がんばれ、おまいら。』

キタロー『また明日ね。戦況報告よろ。』

ウィツシュ『ホント男ってバカばかり!ヤルことしか頭にないの?』

ああそうさ。『しか』ではないがほとんどその本能が男の行動の基本だよ。

さらに続くウィツシュの罵詈雑言ばりぞうごんを無視し、俺はアインの教えてくれたサイトに跳んだ。



その夜、俺は燃え尽きた。真っ白な灰になるまで……
時刻は午前1時を回っていた。これ以上戦うと明日からの大学生

活とバイトに支障が出るので、ネットを閉じて寝ようとした。

その時、キタローにいい画像があったら交換しようと言われていたことを思い出した。

待ってる戦友！俺は今夜一晩で数々の戦場をくぐり抜けてきた。

お前もいっしょに燃え尽きよう！

いろいろなサイトに跳びながら良さそうな画像をピックアップして保存していくと、突然変わった画像を見つけた。

「うわっ！これはエゲツないなあ……」

明らかに十代前半と思われる全裸の少女が縄で縛られている。猿轡^{ぐろわ}をかまされ、両足が引き裂かれそうなほど開かれている。そのため、ほとんど毛の生えていない陰部が丸見えになっている。両手は背中で縛られており、かなり苦しそうな表情をしている。わずかに膨らんでいる乳房には縄が食い込んでいて痛々しい。

「うわああ……これは俺の趣味じゃないなあ……」

違うページに跳ぼうとしたが、万が一キタローにそういう趣味があったらこれはお宝画像に違いない。そう思って念の為保存しておくことにした。

俺は画像にポインタを持ってきてクリックした。すると画面が真っ黒になってしまった。

「あつれ〜？どうしたのかな……？ウイルスにでも感染しちゃったかな……」

カチカチマウスをクリックしていると、真っ黒な画面に何か模様が浮かんできた。これは『六芒星^{ろくぼうせい}（ヘキサグラム）』だ！何かの本で見たことがある。三角形の向きを逆にして重ね合わせたその

形は禍々《まがまが》しいイメージを与えている。

「何だ……これ……気持ち悪いな……」

六芒星の模様が完全にはつきりと浮き出ると、その下に『Enter』の文字が出た。

「ここから入るのか……」

気味が悪かったが、好奇心が勝り、俺はサイトの中に入った。
どんなグロい画像が出てくるのかと、ドキドキしながら待っていると、普通の掲示板のようなサイトが出てきた。黒い背景に血のついた指でなぞったような文字が書いてある。

『Si on』

「何だこれ？ 『しおん』って読むのかな？ こんな掲示板サイト聞いたことないな……」

俺は眠気も忘れてスレッドを見てみた。

……私立○○中学でのいじめについて
……××小学校5年2組の3人グループについて
……都立□□高校化学教師佐々木に死を！

「何だこれ？ いわゆる『学校裏サイト』ってやつか？」

しかし何かおかしい。

『学校裏サイト』なら、単一の学校か学級のことを書かれているはずだ。

たぶん。

「イマドキのワカイモンは何をするかわからんなあ。」

このサイトは日本全国の学校や学級について書かれてある。まるで学校の不満をぶつける場のようなのだ。

「うちの学校はあるかな……」

……地元の高校もこれから通う大学もスレッドにはなっていないかった。俺は少し残念に思いながら、画面をスクロールさせていった。すると真ん中より少し上辺りにあるスレッドに目が止まった。

……『板橋区立大東中学校2年1組への復讐』

ウチのアパートの近くの中学校じゃん！『復讐』ってタイトルが気持ち悪いけど、近所のよしみで見してみよう。俺はスレッドタイトルをクリックした。

1…信人2003年3月21日

ボクは絶対に許さない。ボクをこんな目に遭わせたアイツら全員絶対殺す。

うわあ……いきなりキツいなあ……

124…信人2003年6月12日

復讐は終わった。次はだれにしようか。

はあ？終わったんならいいじゃねえか！？

とりあえず突っ込んでみる。

俺はスクロールを戻して、一番新しいスレッドを開いてみた。

……千葉県立流沢高校野球部

ふんふん。

1…明仁2008年2月26日

俺は事故で死んだんじゃない！アイツらに殺されたんだ！

……『殺された』？

社会的にという意味か？

俺は背筋に冷たいものを感じたが、あえて好意的に解釈してみた。

25…明仁2008年4月8日

やっと最後の一人を見つけた。これから殺しに行く。

……ってこれ今日じゃねえか！『殺しに行く』とかヤバいだろこれ
れは！

俺は怖くなってサイトを閉じようと、右上の×のボタンをクリックした。すると、画面が切り替わった。

「何だっ！？こりゃ！？」

『メインメニュー』

と画面の真ん中に無機質な文字で書かれてあった。そしてその下にはメニュー名が連なっていた。

怨絞 怨裂 怨囁 怨虫
怨滅 怨打 怨剥 怨搾

何だ！？これは！？気持ちわりい！！

そう思って×を押してサイトを閉じようとする……ポインタが勝手に動き出した！

ツツツとポインタはメニューの方へ動き、『怨打』の上で止まった。そして勝手にクリックしてしまった。

『怨打…ダウンロード開始 10%』

何だ！？何が起こってるんだ？

『怨打…ダウンロード 20%』

わけのわからないモノをダウンロードしたくない！俺は起動ボタンを長押しし、強制終了させようとした。しかし、画面は消えなかった。

『怨打…ダウンロード 30%』

俺は電源コードに飛び付き、思いっ切り引っ張った！

ブッン！

一気に電源が消え、部屋の中の温度が元に戻ったような気がした。

ハア……ハア……ハア……何だったんだ今は……かなりヤバ
い気がする。もうあのサイトには近付かないようにしよう……
俺はもうパソコンを開く気も起きず、布団に潜り込んだ。
その時俺は気付いていなかった。
消える直前、画面から誰かが覗いていたことを。
恨めしそうな目で。

第2章 横山瑞希

ボクは横山^{よこやま} 瑞希^{みずき}18才♂。

この春、千葉県の高校を卒業し、東京の二流私立大学に進学した。高校時代は野球部に所属し、ご多分に漏れず甲子園を目指したりもした。スコアラーだったが。

千葉から大学までは通うつもりなら通えなくはなかったが、せっかくのキャンパスライフを楽しむためには、やはり一人暮らしをしたかった。うちは裕福な家庭であつたので、父親名義でマンションを買ってもらった。場所は江東区で、そこから大学までは地下鉄で一本だった。

地元を離れたかつた理由は他にもある。『あの事件』だ。

庄司明仁^{しょうじあきひと}……同じ野球部だった。

ボクはまだスコアラーとしてベンチに入れたが、彼はベンチにさえも入れてもらえない万年補欠だった。先輩や同級生から彼はいつもいじめられていた。試合に負けた腹いせに、監督に怒られたストレス解消のためにと、彼は事あるごとにいじめられていた。荷物持ちや全員のユニフォームを洗濯させるなどはまだいい方で、バットで殴ったり、わざと厳しいノックをして顔や身体にボールをぶつけるなどの暴力。一番ひどかつたのは彼が試合に出してもらった時だ。

『明仁のくせに生意気だ。』

『お前がいると他のヤツが出られなくなるから死ね。』

などと言われ、部室で全裸にされ、全身痣だらけになるまで殴られ、小便をかけられた。

中心となつていじめていたのは一つ上の学年の笹木先輩と同じ学年の香取と山崎。笹木先輩が卒業してからはもっぱら香取と山崎二人でいじめていたが、ボクを含め他のやつらも見えて見ぬ振りだった。

いつ自分がやられるか怖かったからだ。

卒業を前にして明仁は死んだ。事故だった。

部室内に倒れていたのを発見されたらしいが、頭にスパイクが刺さっていたらしい。転んだ時に運悪くスパイクがあったようだ。

衝撃的な事件だったが、卒業を控えた時期でもあったので、彼のことにはみんな意識的に触れないようにしていた。

しかし、笹木先輩と香取が相次いで亡くなり、明仁のことはみんな嫌でも意識せざるを得なくなった。

笹木先輩はバイクに乗っている時にトラックに正面衝突して即死した。

香取は変死だった。彼女とラブホテルにいる時に、風呂で溺れたのだ。いくら待っても香取が浴室から出てこないの、彼女が不審に思っ
て見に行ったら、浴槽の中で息絶えていたらしい。

さらに、二人とも共通して、鈍器で頭を殴られていた。

香取の頭蓋骨は陥没していた。香取の彼女は容疑者として逮捕され、現在は取り調べ中だ。

問題は笹木先輩だ。

先輩は一人でバイクに乗っていた。犯人は走行中の先輩をどうやって殴ったのか。

先輩は真上から殴られていた。

気味が悪くて、明仁の祟りだと言うヤツもいた。ボクはもう地元にはいたくなかった。

これ以上ここにいたら、ボクも明仁に崇られてしまうんじゃないかとの恐怖心もあったからだ。両親もその辺のところは理解してくれていたらしい。何も言わず、一人暮らしを認めてくれた。

実際に一人暮らしを始めると、思った以上に解放感よりも寂しさが募った。食事や洗濯、掃除など今までの必要のなかった日常の雑務も面倒臭い。ネットの世界に寂しさの埋め合わせを求めてしまうのかもしれないだろう。

高校時代に付き合った女の子がいなかったわけではなかった。友

人もそれなりにいたが、深いつきあいのあった友人はいなかった。元来裕福な家庭で育ったため、他人から見ると我が儘わままに感じられる部分があったのだろう。だからボクはあまり自己主張しないことにした。我が儘わままより優柔不断の方が周りに面倒を見てもらえる。かまってもらえる。そう思ったからだ。

インターネットの掲示板で友人を捜そうと思ったのも、そういう自分が受け入れられるかどうか試してみたかったからだ。

一人暮らしを始めて数日経ったある時、掲示板サイトの『一人暮らし』スレッドに気になる書き込みを見つけた。

『この春東京に出てきた田舎者です。だれかお話ししませんか？』

プッ！何だこの素人丸出しの書き込みは。マジで田舎者らしい。

いや、正確に言えばネットの世界での田舎者ということか。

明らかにヘンな書き込みだが、新しい自分を試すのにはいい相手かもしれない。ボクは応えてみることにした。相手のレベルに合わせて。

ハンドルネームはどうしよう。ボクの名前は『みずき』だから……みずき……水木……水木……アレしかない。

キタロー『ボクもこの春東京にきました。お互い寂しいけどがんばろう。』

よし。これでいいだろう。

一人暮らしというものは寂しいものだ。こういう風に声を掛けられ、きつと心を許すに違いない。

すると彼から返事があった。

ボンジョルノ『そうですね。お互いガンバロー！』

ププッ！ボ……『ボンジョルノ』！？“挨拶”だろ！？それ！固有名詞じゃないし！ヘンだ！明らかにヘンだ！

いや、ここは突っ込まずにスルーしておこう。今後のために。

……その後は、深すぎず浅すぎずの距離感を保ちながらネット上での彼とのつき合いが続いた。いろいろ聞かれたが適当に応えておいた。

住んでいる場所はいまいに“江東区辺り”と言っておいたが、家庭が裕福だとか、出身地が千葉県などは黙っていた。

彼に何か聞かれても、なるべく自己主張しないようにし、なるべく合わせるように気をつけた。

本当の自分を出せずに、作られた自分を演じるとなかなか疲れる。明日からの大学生活では楽しくやっていけるのだろうか、心配になった。

すると、彼（ボンジョルノ↓最近は長くて面倒くさいのでボンと呼ぶようにした）が、他のネット住人に過激なアダルトサイトの場所を聞いていた。

エロDVDは見たことはあったが、モザイク無しのモロ画像は見たことがなかった。

他のネット住人が親切にもリンク先を掲示板に貼り付けてくれたので、ボクも簡単に跳べそうだ。ボクはすかさず割り込んだ。

キタロー『ボクも見てみる！』ボンいい画像があったら交換しよう！』

こう言っておけば割り込まれたことに気を悪くはしないだろう。ちよつとキタローっぽくなかったかな？

しかし、ボンは気を悪くした様子もなく、意気揚々《ようよう》とエロサイトに跳ぼうとしている。ボクは安心して、ボンのノリに合わせて挨拶した。

キタロー『また明日ね。戦況報告よろ。』

こればかりだ。

高校時代確かにつきあった女の子はいたが、セックスはしなかった。というよりできなかった。

自分では気が付かなかったが、ボクはロリコンらしい。しかも、中学生以下の少女にしか性欲を覚えないのだ。

高校生の女の子に欲望を覚えることはなく、結局何度も別れる羽目になったのである。

ボクはリンク先に跳び、いろいろなサイトを覗いた。しかし、ボクが興奮するような画像はあまりなかった。

「チッ！素人のモロ画像っていうから期待したけど、みんなオバハンやん！時間の無駄だったな。」

ボクはネットを閉じようとしたが、一つのリンク先が気になった。

『JS画像』

“JS”とは『Jyosi（女子）』の“J”と『Syougakusei（小学生）』の“S”だ。

これだ！

期待に胸を躍おどらせてサイトを開く。

サイトの中には小学生くらいの少女の全裸写真が何枚も貼られている。

ボクは興奮し、さらに奥のページまで進んでいく。すると突然、雰囲気が一変する。

花畑や海など美しい背景だった画像が、殺風景なコンクリートむ

き出しの部屋を背景とした画像に変わったのだ。さらに、被写体である少女たちの姿にも変化があった。

今まではポーズをとったりしていたのだが、ここの画像は縛られている。イスに縛り付けられている画像もあれば、天井から逆さに吊されている画像もある。もちろん全裸だ。

そこでボクはあることに気づいた。

「これ……みんな同じ女の子だ……」

よく見ると髪型や体型など微妙に違いはあるが、同じ少女だ。

身体の変化、つまり成長しているのがわかるということは、何年にも渡ってこの画像が撮影されたということだ。

「けっこうかわいい子だな……」

ボクはなるべく残虐ざんぎやくそうではない画像を選び、保存しようとして画像をクリックした。すると画面が真っ暗になる。

「あれっ？」

マウスをカチカチとしてみたが変化がない。

「やっべくなあ。」

変なウイルスにでも引っかけたのかと思い、一旦強制終了いったんしよ
うとしたその時、画面に何か模様のようなものが浮かんできた。

三角形の向きを逆にして重ね合わせた模様……“六芒星”ろくぼうせいだ！

「何だ……これ……」

気味が悪かったが、ボクの中で何か気になるものがあつた。

“Enter”の文字が画面に現れた。

「よしっ！」

ボクは意を決して入り口をクリックした。すると、赤い、指で書きたぐったような文字が現れた。

『Sion』

「“しおん”？　どういう意味だ？」

下にスクロールさせていくと、どうも“2ちゃんねる”のような掲示板サイトらしい。スレッドを見てみるといろいろな学校名が出ており、何と自分の出身校があつた。

……千葉県立流沢高校野球部

鼓動が激しくなるのがわかる。ここは“学校裏サイト”だ。明仁へのいじめをだれかが暴露ばくろしているんだ。

自分のことが書かれてはいないか気になり、スレッドを開いてみた。すると……

1…明仁2008年2月26日

俺は事故で死んだんじゃない！

アイツらに殺されたんだ！

ドクン！

心臓が止まるかと思った。

『明仁』！？……『あきひと』！？まさかそんなことが……

死んだ人間がネットの掲示板にスレッドを立てるなんて有り得ない！しかもこの日は明仁が死んだ翌日だ！

ボクは背筋に冷たい汗を感じながらさらにスクロールさせていった。

25…明仁2008年4月8日

やっと最後の一人を見つけた。

これから殺しに行く。

“殺しに行く”？

“最後の一人”？

ボクは動悸^{ふしつ}が激しくなるのを感じた。

24…明仁2008年3月14日

香取に復讐した。

女といっしょだった。

風呂に入っていたので、後ろから殴ってやった。

最後までやってやるつもりだったが、勝手に溺れて死んでしまった。

次はこんな簡単には殺さない。

23…明仁2008年3月13日

香取を見つけた。

22…明仁2008年3月10日

笹木に復讐した。

バイクに乗っていた。

上から殴ったら勝手に事故を起こした。
もっと苦しめたかった。

誰かのいたずらか！？それにしても日付は間違いなく2人が亡くなった日だし、状況も正確だ。それに、明仁の視点で書かれているのも不気味だ。

誰かが明仁に同情して書いているとしてもこれは悪趣味過ぎる。ボクは掲示板に書き込んでみようと思った。

26..瑞希2008年4月9日

おい！お前はダレだ！

悪趣味にも程があるぞ！

時計を見るともう午前2時近い。掲示板の日付は変わっていた。数分待つてページを更新してみると返答が書いてあった。

27..明仁2008年4月9日

お前はだれだ？

瑞希？

ああ、スコアラーの瑞希か。

スコアラーということを知っているのであれば、同級生か同じ野球部のヤツに違いない。

28..瑞希2008年4月9日

そうだ！

お前はダレだ！

明仁や笹木先輩たちのことにはもう触れるな！
もう終わったことなんだ！

29..明仁2008年4月9日

終わってなどいない。

俺の苦しみはこんなものじゃない！
次はお前だ。

30..瑞希2008年4月9日
次？

次ってどういうことだ！？
俺は何もしていない！

……すぐに返答があった。

31..明仁2008年4月9日
そう何もしなかった。止めなかった。同罪だ。
俺は山崎のところに行く。
お前のところには悠姫が行くそうだ。
死ね。

……ドクン！ドクン！動悸どうきがさらに激しくなる。
画面が切り替わった。

『メインメニュー』

無機質な文字で書かれた下に、難しそうな漢字のメニューが並んでいた。すると……ポインタが勝手に動き出した。

ツツツツ---

たくさんある中の、最初のメニューの上に止まった。

『怨絞』

カッチン……ひとりでにクリックすると今度は画面に小さなウィンドウが現われた。

『怨絞…ダウンロード開始10%』

ダウンロード!? 一体何をダウンロードしているんだ!?

『怨絞…ダウンロード中 20%』

ボクは言い知れぬ恐怖を覚えた。

……30%……40%……50%……60%……70%……80%……

部屋の温度が急激に下がった気がする。

『怨絞…ダウンロード中 90%』

恐怖と好奇心がないまぜになり、画面から目を離すことができない。そして……

『怨絞…ダウンロード完了』

小さなダウンロードウィンドウが消えると画面が切り替わる。

女がこっちを見ている。顔は真っ青で生気がなく、長い黒髪は乱れている。まぶたのない丸い目をカッと見開き、その目は恨みに満ちて血走っている。唇のない口は真一文字に結んでいた。

ボクは女を見た瞬間金縛りになり、身動きもできず、声も出せなくなっていた。

ぬるうううううう！

女がディスプレイから出てくる。そしてボクの首に向け、両手を伸ばしてくる。ボクの恐怖は限界に達する。

「うああああああアアア！！」

ボクは目をつぶり、女の両手を振りほどく。

ハッと気がつくと、女はいなくなっている。ディスプレイは先程の掲示板を写し出している。

身体が動く！

「あ……あ……声も出る！……今のは何だったんだ……？」

少しホッとしてマウスに手を伸ばそうとすると……後ろに人の気配がした。

ハッとして椅子の背もたれ越しに背後を振り返る。誰もいない……いつもの自分の薄暗い部屋があるだけだ。しかし……何かが違う……

言い知れぬ不安を感じながらディスプレイの方に向き直る。

ボクは気付いていなかった。

女は『上』にいた。

天井から真下のボクを睨んでいた。

まぶたのない目で。

口を真一文字に結んで。

女は真下に両手を伸ばし、いきなりボクの顔を手のひらで驚掴わしづかみにした。

ガッ！

何が起こったのかわからなかった。すると、

ガッッ！グチュ！

女のもう片方の手がボクの喉仏のどぼとけを挟えぐり取った。声帯えぐを挟えぐり取られた俺は声を出すことができない。

「ぎゅびゅおおおおっ……ごぼ」

ボクは自分の喉のどから奇妙な音が出るのを聞く。冷たい……喉のどが急に冷たく感じられる……

ガッ！ギユッ！

女はボクの首を両手で絞しめる。

ギユウウウウウウウ！

女はものすごい力で首を絞しめ上げ始めた。ボクは苦しさと痛みのため、上を見る。

目が合うと、女は真一文字の口をつり上げて、『にたあ』っと笑った。

ボクの目からは涙が溢あふれ、顔がむくんでいくのがわかった。視界がだんだん暗くなっていき、そこでボクの意識と人生が途切とぎれた。



瑞希が息絶えてなお、悠姫は手をゆるめることはなかった。

ブチッ！ブチブチブチブチッ！

瑞希の首がちぎれる。

ズルウウウウ！

瑞希の首はちぎれ、背骨だけが頭とつながっていた。瑞希の頭は背もたれの方に折れ曲がり、プランプランと揺れている。

悠姫はしばらくの間、ヌラヌラとした瑞希の背骨を両手でなでていた。そして、

プツン！

パソコンの電源が切れ、ディスプレイは真っ暗になった。

第3章 清水沙江子

「美鈴！美鈴ってば！」

前を歩いている吉崎美鈴にアタシはやつとのことで追い付いた。

美鈴はこの大学で知り合った友人だ。彼女は高校時代ハンドボールをやっていたとかで、常に活動的だ。お陰で帰宅部だったアタシが彼女のペースに付いていくのはとてもたいへんだ。

アタシは清水沙江子19才♀。青山学園大学経済学部2年次生。

アタシは男運が悪い。いや、アタシの男を見る目がないと言うべきか。とにかく、誰と付き合っても長続きしない。アタシが嫉妬深いのかも知れないが、男という生き物は常に別の女を捜しているように感じられる。少しでも気を許すとすぐに身体を求めてくるケダモノだ。それでもアタシは寂しさに堪え切れず人の温もりを求めてしまい、ヘンな男に引っ掛かってしまう。悪循環だ。

この日もまた、大学に入って8人目の彼氏と別れた愚痴を美鈴に聞いてもらおうと、彼女の講義が終わるのを待っていたのだ。

「何よ沙江子、またフラれたの？」

美鈴は屈託のない笑顔で、アタシが追いつくのを講義棟の出口で待ってくれていた。

「フラれたんじゃないわよ！アタシが振ったの。ホント男ってバカばかり。」

「出たな、決め台詞！」

美鈴はスタスタと社会学部 棟の方へ歩いていく。

「美鈴どこ行くの？講義は今日はもう終わりでしょ？」

「ああ、後輩に会いに行くのよ。いっしょに食事しに行く約束があるの。」

「へえー！めずらしいわね！」

美鈴は普段から一人で行動することが多い。美人だし、さっぱりとした活動的な性格なので、言い寄る男は多い。でも、みんなことごとく撃沈されていた。特定の彼氏を作る気はないようだ。アタシにとってそんな美鈴の人は、一つの憧れだった。

「でも沙江子、アタシんところ来るの久しぶりじゃない？いったいどうしたの？」

「ちょっと前まではネットの掲示板で話を聞いてもらってたんだけど……」

「ネット？『2ちゃんねる』とかいうやつ？」

「そうそう！」

「アタシそういうのやったことないからよくわかんないけど、危なくないの？」

「もちろん個人情報を書かないわよ。ハンドルネームって偽名使うし。」

「ふうん。」

美鈴は興味なさげにうなずく。

「アタシは一応二十代のOLってことになってるのよ。いろいろ話を聞いてもらえるからよかったんだけど……」

「どうしたの？」

美鈴が大きく綺麗な目を向ける。アタシは同性にも関わらずドキッとした。

「最近その人たち掲示板に来なくなっちゃったのよね……」

「『たち』っていったい何人に愚痴聞いてもらってたわけ？」

「けっこういろいろな人に聞いてもらってたけど、特に仲がよかった人が4人かな。」

「ふうん。」

相変わらず興味なさげだ。

「でも特に話の合う人が一人いて、ほとんどその人に聞いてもらってたんだけど、最近掲示板に来ないのよね……」

アタシは上目遣い^{うわめづか}に美鈴を見る。美鈴はギクツとして、そそくさと離れていく。

「だから、アタシの愚痴聞いてよぉ〜！」

美鈴はダッシュして逃げる。

「また今度ねえ〜！」

「もう〜！」

美鈴……何だか楽しそうだったな……

アタシは走り去る美鈴の後ろ姿を見ながら、ため息をつく。

『ウィッシュ』というハンドルネームは、深夜番組の影響だ。ピンク色のワゴン車に男女が相乗りして、世界中を旅しながら恋愛するバラエティー番組だ。『ウィッシュ』とは、しばらく前にその番組のテーマソングを歌っていたアーティストで、とても気に入っていたから真似してみた。

ウィッシュ『ボンちゃんいますか？』

アタシは携帯電話から掲示板に書き込みしてみた。

やっぱり返答はない。キタローも同じだ。

『ボンちゃん』は本当は『ボンジョルノ』というヘンなHNなのだが、長いので『ボンちゃん』と呼んでいる。ネット仲間のキタローが名付け親だ。しかし、今は二人とも全く掲示板に姿を現さない。

「つまんないなあ〜！」

元カレにメールして飲みにも行こうかと考えたが、それも何となくムカつくので止めた。

二週間前、ボンちゃんとキタローはエロサイトの話をしていた。もしかしたらそのサイトに行けば二人の手掛かりが見つかるかも。そう思ったアタシは、帰宅する前にお気に入りバーに寄って行くことにした。このまま何もせず誰も待つ人のいない部屋に帰って、一人パソコンと向かい合う気にはなれなかった。

「もしかしたらいい男にナンパされるかも知れないしね！」

何となくいいコトがありそうな気がして、足取りも軽く渋谷駅に向かう。



「崎田！お待たせ！」

美鈴が来た。

うーん、やっぱりカワイイな。彼氏とかいるのかな？

バシン！

「いてっ！」

ぼうっとしていると、美鈴に肩を叩かれた。

「何アタシに見とれてんの！さっさと行こ！お腹空いちやった！」

美鈴からメールが来たのは昨日の夜だ。

『オナニー中ごめんね。明日講義終わったら時間ある？ 美鈴』

なぜわかった？

「ハラヘツタ〜♪ハラヘツタ〜♪」

奇妙な歌を歌う美鈴のあとについて、俺は駅までの道を歩いて行く。そういえばさっき呼び捨てにされたような……？この間の新幹線の中で話した時は『くん』づけだったと思うけど……ま、いいか。

「なあ、どこ行くんだよ？」

「ゴハン！」

「いや、それはわかるけど……」

「どっか連れてってよ！」

「ブッ！お前から誘って来たんじゃないか！」

“連れてって”というフレーズに少し、いやかなりドキドキした。

「え〜……こういう時、男性はレディをちゃんとエスコートするものよ。」

「もしかして俺に奢^{おご}らせる気か……？」

「うっす！ゴチになります！」

美鈴は空手家のポーズをしておどける。

……

……もらったばかりのバイト代が……ま、いいか。こんなカワイイ子と飯を食いに行けるだけでもラッキーだからな……

「こんなカワイイ子とゴハンを食べに行けるだけでもラッキーだぞ！」

……エスパーか！？お前は！？



アタシは自宅のある吉祥寺駅近くにあるバー『ラ・パン』に入った。ここは、うるさ過ぎず、静か過ぎず、混んではないがガラガラでもない。一人で考え事するにはピッタリのお店だ。アタシはいつものカウンター席に座り、レモンライムサワーを注文する。店の中にはカップルや仕事帰りのサラリーマン、OLなどがサワサワと楽しそうに話している。アタシは何とはなしに携帯電話を開く。

「美鈴は今ごろ楽しく食事してるんだろぅな……」

話を聞いてもらえなかった腹いせにメールでも送ってやろうかと思っただ。

『今一人で飲んでます。今度はちゃんと話聞いてね♪』

……これでよし。

携帯を閉じようと思ったが、メールを送ったことで余計に寂しくなり、また掲示板を開いてみる。

……来てる！ボンちゃんではないがキタローだ！二週間ぶりにいい話し相手できたので、アタシは喜んで書き込みをする。

ウィツシュ『キタロー』おひさ！何で今まで来なかったの！？』

ちょっと怒りながらも、寂しさをアピる……と。

キタロー『楽しい掲示板を見つけました。ぜひ来てください。』

アドレスが貼り付けてある。

アタシは何回かページを更新してみたが一向に返事が書き込まれない。リンクの貼ってある掲示板にいるのかな？アタシは跳んでみることにした。

『Si on』

指で書きなぐったような赤い字が書いてある掲示板サイトが画面に現われる。

「なに、これ……？」

アタシは画面をスクロールさせる。すると下からいろいろな学校名や『許さない!』『〇〇死ね!』などのスレッドタイトルがたくさん現われる。

「やだ、これ……学校裏サイトじゃない？」

アタシは気味が悪かったが、キタローを搜したかった。

よく見ると、上の方にキタローの立てたらしいスレッドタイトルを見つける。

【ボクの功罪^{こうざい} キタロー】

これだ!アタシは迷わずクリックする。

何で今まで掲示板に來なかつたの?ここはなんなの?何でこんなところにいるの?

聞きたいことは山ほどある。

1…キタロー2008年4月9日

ボクは確かに明仁を見殺しにした。でも何で死ななきゃならないんだ!?

「何……これ……?『死ななきゃならない』ってどういうこと……?」

アタシは気味が悪かったが、キタローに聞くしか方法はない。

2…ウィツシュ2008年4月25日

キタロー!いったいどういふこと?明仁ってだれ?死ぬとか……何だか気持ち悪いよ!

すぐに返答がくる。

3…瑞希2008年4月25日

来てくれたんだね。仲間が増えてうれしいよ。

名前がキタローではなく『瑞希』になっている。これって本名？

4…ウィッシュ2008年4月25日

仲間とかワケわかんないよ！

いったいどういうこと？

またすぐに返答がくる。

5…瑞希2008年4月25日

俊夫が迎えに行くって。

「もう、ワケわかんない！」

アタシは頭に来て携帯の電源ボタンを押して消そうとする。すると……

『怨虫…ダウンロード開始10%』

……えっ？……なにこれ？……

『怨虫…ダウンロード 20%』

「ヤダー！」

アタシは携帯を閉じて、会計を済ませて店を出た。けれども、閉じられた携帯の中ではダウンロードが進んでいた。

.....

『怨虫…ダウンロード 60%』

「もう！ワケわかんない！」

ホント男ってバカばかり！

アタシは足早に自宅への道のりを歩く。自宅まで大通りを歩いて行けば10分くらい。

公園を抜ければ5分で着く。そんなに暗い公園じゃないし、何より早く帰って、シャワーを浴びて温かい布団にもぐり込みたい。アタシは迷わず公園に入る。

.....

……そうだ！美鈴に話そう！少しはもやもやもスッキリするかも知れない。

アタシはポケットから携帯を出して開く。

「キャアアアアアア！」

携帯電話にはゴキブリが挟まっていた。

カサカサカサカサ……

ゴキブリは投げ捨てた携帯から茂みの方へ消えて行く。
何なのよ……何なのよ何なのよ何なのよ！

タッタッタッタ……

誰かが走って来る！

アタシは座ったまま後ろを振り向く。

「どうしました!？」

サラリーマン風の若い男が走って来た。

「あ……ちょっとびっくりして……」

男の人は辺りを注意深く見回して聞いた。

「痴漢かひったくりにでも襲われたのかと思いました……」

額にはうっすらと汗がにじんでいる。

ああ……この人はアタシのために走って来てくれたんだ……

「あ……あの……ゴキブリが……」

「ゴキブリ？」

「あ、もうそっちの方にいなくなっちゃったんですけど……」

アタシはゴキブリの消えた茂みを指差した。男の人は念のため茂みも調べてくれて、アタシの携帯を拾ってくれる。

「もう大丈夫みたいですね。念のためお宅までお送りしましょうか？」

男の人は携帯をアタシに渡しながら聞く。アタシは一瞬迷ったが、

「あ……家はもうすぐそこなんで、あ……あの……ありがとうございます……」

ヤラカシタ〜!!

アタシは言ったそばから後悔した。

「そうですか……それじゃ、気をつけて。」

男の人は大通りの方へ歩いて行ってしまう。

やっちまった〜! 運命の出会いだったかも知れないのに……

アタシは男の人の後ろ姿を見送りながら、男ってバカばかりじゃないなって思った。ほうつとため息をついて後ろを振り向くと、男の子が立っていた。

小学生くらいの男の子だ。

白いYシャツを着て、半ズボンをサスペンダーで吊っている。

どこかの小学校の制服かしら。

しかも不思議なことに虫捕り網と虫かごを持っている。

4月って昆虫採集したっけ?

虫かごは空っぽだ。

「ボク、どうしたの? お母さんは?」

もう夜の9時を過ぎている。小学生が一人で公園で遊んでいる時間帯じゃない。

すると突然男の子は泣き出す。

エーン、エーン、エーン……

きっと迷子ね。昆虫採集に夢中になってこんな時間になっちゃったのね。それで迷子になってしまったんだ……

アタシは勝手にそう解釈して男の子の前にしゃがみ、頭をポンポンと撫なでた。

「泣かないで……お家どこ？お姉ちゃんを送って行ってあげる。」

そう言って顔をのぞき込むと、
ガシッ！

いきなり両手で顔を掴つかまれた。

「な、なに……？」

「うえええん……うえええん……うえおおおおおおお、
おー！」

男の子が顔を上げると、口の中が真っ黒だった。いや、黒いんじゃない！口の中いっぱい虫が詰まっている！ゴキブリ、ムカデ、ゲジゲシ、カマドウマ、蜘蛛……ありとあらゆる虫が口の中一杯に蠢うごめいている……

さらに口の中からうのようにあふれ出してくる！

「きゃ……うごおごぐおごぐ……」

叫び声を上げようとすると、大量の虫が口の中に飛び込んでくる。

「ゴボボボボ……」

口……喉……胃……身体の中に蠢く異物が入り込む。

痛い……痛い……イタイイタイイタイイタイイタイイタイ
イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ
……

アタシは仰向けに倒れる。男の子はアタシの上に覆い被おおかぶさってくる。さらに大量の虫が流し込まれる……

ドロツ……

男の子の左目の眼球が落ち、中からカマキリが出てくる。

ブチッ……ブチッ……ブチブチ！

アタシの喉が中から喰い破られる。

ブチブチッ！

アタシの頬から何かが出ていく……アタシの胸……お腹……下腹部……アタシの身体中が喰い破られる……

ああ……さっきやっぱり送ってもらえばよかったな……

バリバリバリバリ！

男の子の頭が割れ、さらにミミズやうじ虫、蟻^{あり}などが出て来るのを見ながら、アタシの意識は途切れた。



沙江子が息絶えてもなお、虫たちは沙江子の身体中を喰い破っていく。

ドロツ！

沙江子の両の眼球を喰い破り、ムカデと蜘蛛が出てくる。

ベリッ……ベリッ……！

頭皮を突き破り、ゴキブリが大量にわき出してくる。もう俊夫の姿はなく、沙江子は人間の形をした黒い虫の山になっていた。

第4章 工藤直樹

ピピピピ！　ピピピピ！

携帯電話のアラームが鳴っている……

俺は渋々起き出して、習慣でテレビをつける。顔を洗って新聞を取ってくる。

『……今日未明、武蔵野市吉祥寺○×の路上で若い女性の遺体が発見されました。……』

食パンをトースターで焼き、マーガリンとコーヒーを用意する。

一人暮らしを始めたころはきちんと朝食を作っていたが、面倒臭くなって最近は食パンや菓子パンで済ませることが多くなってしまった。

『女性^{きょせい}は全身に無数の嚙^{かじ}られたような傷跡があり、解剖して原因を究明^{きゅうめい}することになっています。亡くなったのは青山学園大学経済学部2年清水沙江子さん19才。沙江子さんは帰宅途中と見られ……』

ブッ！

俺はコーヒーを吐き出した。

「うちの大学じゃん！」

俺は急いで美鈴に電話をする。

♪

♪

美鈴お気に入りのおミステル曲が流れる。

「……ただいま電話に出られません……」

「俺だ。崎田です。また連絡します。」

俺は留守録し、今度はメールを打つ。

『テレビ見た？うちの2年生が殺されたって。経済学部の清水沙江子さんだって。知ってる？』

これでよし。

身近なところで殺人事件だなんてやっぱり東京はおっかないなあ

……

時間は間もなく7時になろうとしていた。

「今日は遅番か……」

俺はバイトのシフトを携帯のスケジュールで確認し、一時限目の講義に間に合うように部屋を出た。

◇ ◇ ◇

『次のニュースです。昨日、江東区△△のマンションで若い男性の腐乱死体が発見されました。男性は横山瑞希さん18才と見られま

す。横山さんは頭部がほとんど切断された状態で死後2週間ほどで見られます。横山さんと連絡が途絶えたため不審に思った両親がマンションを訪れ発見されました……」

『同じく埼玉県志木市のアパートで山崎貴浩さん18才の腐乱死体が発見されました。山崎さんは全身を鈍器のようなもので強打され、全身の骨が砕かれた状態で発見されました……』

『警察の調べでは、殺された横山さんと山崎さんの二人は同じ高校の野球部で……室内に物色された形跡はなく、恨みによる犯行とみて捜査を進めています。』

「何だかひどい事件が続くなあ。ま、オレには関係ないけどね。」

「直ちゃん！学校遅れるわよう！」

「はぁーい！うるさいなあ……もう……」

オレは階下に降りて行く。

オレは工藤直樹12才♂。新潟県長岡市立上長岡小学校の6年生だ。

ポケモンとモンハンにハマっている。パソコンが得意でよくネットの掲示板にも書き込みをしている。小学生だとナメられるから年齢は偽っているけど。

ネットではいろいろな人と話せるから楽しい。特に楽しいのは『いじめ』に関する話だ。

日本全国のいじめられっ子の相談に乗ってやるんだ。小中学生はもちろん、高校生や大人までいじめに悩んでいる。ボクは相談に乗りながらも、そいつらを内心ではバカにしている。

だってそうだろう？

いじめなんて、いじめられるヤツが悪いんだ。悔しかったらいじめ返せばいい。

もちろんオレは負けたりしない。

オレは学校では頭のいい、いい子で通っているが、陰ではかなりいじめをしている。

世の中弱肉強食だ。負けるヤツが悪い。

今日も放課後にはいつも遊んでやっている孝たかしを体育館裏へ呼び出す。

オレの仲間は3人。

なかやまよしひさ きくち まさや
中山義久と菊地雅哉と田中太一の3人だ。

おさななじ
義久は幼馴染みで、幼稚園の頃からの腐れ縁えんだ。同じクラスなのでいつもつるんでいる。

雅哉も同じクラスだ。身長が高くせに、気が弱い。いつもオレたちに金魚のフンみたいにくっついている。

太一は4年生の時に転校してきた。始めこそオレにいじめられていたが、孝がいじめられるようになって、オレたちの仲間に入りたがったので入れてやった。

のぐち たかし
そして野口 孝。どん臭くて、頭も悪い典型的ないじめられっ子だ。見ていて本当にいらいらする。

「孝……お前昨日さあゝモンハンやってなかったあゝ？」

オレが聞くとこいつはビクツと身体を反応させる。まるで小動物みたいだ。どうやっていたぶってやろうかとゾクゾクする。

「ぼ、ぼく……」

「お前はムカつくからやるなっつたただろ？ 『ヤマト』ってお前のキャラだよな？」

ガンッ！

オレは孝に蹴りを入れる。

「約束破ったから参加料取らねえとなあ……」

オレは義久に目配^{めくば}せする。義久は孝のバックを奪い、中から財布を取り出す。

「そ、それ、買い物のお金……」

孝の家は共働きらしく、買い物や夕食の支度は孝がやっているらしい。

孝には小一の弟と3才の妹がいた。

義久は孝の財布から四千円を抜き取りオレに渡す。

「一人千円ずつかよ。こんなのゲーセンに行ったって30分も遊べやしねえ。」

義久が財布を孝に投げ付けながら言う。

「お、お金返して！そのお金がないとうちは生活できない……！」
「知ったことかよ！」

ガンッ！ガンッ！ガンッ！

オレが孝に蹴りを入れるのを合図に、3人が一斉に蹴りを入れる。

ドカッ！ドカドカドカドカッ！

顔は傷付けない。傷害罪で補導されちゃうからね。

あくまでも精神的にいたぶるのが目的だから、腹や背中を集中的に痛め付ける。孝は亀のように丸くなって呻^{うめ}いている。

「うつ……うつ……うつ……」

孝は涎よだれと鼻水と涙でぐちよぐちよになっている。

「じゃあな！カス！」

「てめえみてえなのは生きてる価値ねえよ！」

「お願いだから死んでえ？」

「ハッハッハッ……」

オレたちはうずくまる孝を放置してゲーセンに行く。ま、これがいつもの風景だ。

オレたちはゲーセンで孝の金を使い切った。

「やっぱ千円じゃ足りねえよなあ。」

「今度は家から金持って来させようぜ。」

オレたちはしばらく、明日孝をどう痛め付けるか話した後帰宅した。

「ただいま。」

「直ちゃん、おかえりー！遅かったけどまた図書館でお勉強してたの？」

母親がすり寄ってくる。

「うん、そうだよ。」

「えらいわねえー！すぐにご飯にするからお風呂入ってらっしゃい。」

一人息子のオレに対して母親はかなり過保護だ。以前、だれかにチクられ、いじめの疑いで学校に呼ばれた時も、

『ウチの直ちゃんがそんなことするはずありません!』

って校長室で怒鳴りまくり、問題をうやむやにした実績がある。普段はかなりウザいが、役に立つうちはいい子でいた方が利口ってもんだ。

オレは風呂に入り、夕飯を食べた後、勉強をするからと言って自分の部屋で、いつもの通りパソコンで掲示板を開く。

「相変わらずいいねえなあ……」

ちょっと前までは『一人暮らし』スレッドでなかなかおもしろいやつらと話せたのだが、最近は全く書き込みがない。オレは仕方なく『いじめ』スレッドで学校や教師の批判を書き込んでから、ゲームをすることにする。

しばらくゲームをしていると、携帯に着信があった。雅哉からだ。

「何だ？ 今ごろ？ メールでいいじゃん……」

オレが携帯に出ると、雅哉はかなり焦った様子で口早に喋り立てた。
くちばや しやべ

「な、直樹！ い、今、親から聞いたんだけど、孝がまだ家に帰っていないんだって！ 先生たちがみんな捜してるみたいだけど、見つかってないって！ 今から搜索願い出すみたいだよ！」

雅哉の親はPTA役員だ。児童が一人行方不明なので駆り出されたのだろう。

「ヤバイな……まさかあそこでまだくたばってるんじゃないだろうな……」

オレは血の気が引いた。

孝がいなくなったことじゃない。自分の立場がヤバくなることを恐れた。

「オレ学校に行ってみるよ！もしかしてあそこにまだいるかも知んねえし。」

「直樹く！オレらヤバくないか？孝が自殺とかして、遺書にオレたちにいじめられたとか書いてあったら……」

雅哉、お前もオレと同じだな。

「オレ今から学校行ってみるよ。何かわかったら連絡くれ！」

「わかった！親にまた聞いとくよ！」

オレは携帯を切り、パーカーのポケットに突っ込み、階段を駆け降りた。

「お母さん！孝がいなくなっちゃったんだって。ちょっと学校に行つて来る！」

「えっ！なに！？こんな時間に？すぐ……」

バダン！

母親の声を途中で遮り、オレは玄関を飛び出す。

自転車をとばして10分で学校に着く。学校は職員室やら会議室やら電気がついており、慌^{あわ}ただしい人の動きが見える。オレは校門

のそばに自転車を隠し、見つからないように体育館の裏へ走って行く。

体育館裏はかなり暗かったが、街灯の灯でかろうじて見ることができた。

孝は……………いない！

オレはほっとして雅哉に電話をする。

「オレだ！今体育館裏にいるんだけど、アイツいないよ。そっちは何かわかったか？」

「いや、搜索願いを出しに孝の親が警察に行ったみたいだけど、他に情報はないな。」

「わかった。」

オレは一安心して家に戻り、その日はさっさと寝てしまった。



遅番の日は帰るのが午前1時を過ぎてしまう。俺は部屋に帰るとシャワーを浴び、さっさと寝ることにした。

「結局美鈴からは何の連絡もなかったなあ……………」

大学でもバイト先でも携帯を何度も開いてチェックしたが、着歴もメールもなかった。

俺は清水沙江子の事件が気になった。

「まさか美鈴の身にも何かあったんじゃないだろうな……」

美鈴は経済学部だ。明日捜しに行ってみようと思い、眠りに落ちた。



ピピピピ！　ピピピピ！

「ふぁ～……」

携帯のアラームを止めて時間を見ると朝の8時過ぎだった。

「ふぁ～……」

今日の講義は午後からだったが、俺は美鈴を捜しに行くつもりだったので、大学に行く準備を始めた。無意識でつけたテレビでは朝のニュースをやっている。

『……今朝のニュースです。昨夜遅く、新潟県長岡市郊外の山中で小学生の遺体が発見されました。発見されたのは、長岡市立上長岡小学校6年生の野口　孝くん、12才。野口くんは木の枝にロープで首を吊って亡くなっており、警察では自殺とみて関係者に事情を聞いています。』

「かぁ～！　今度は小学生が自殺かよ！　ホント世も末だな……」

……

んっ……？ 何か引っ掛かる……
ん……？

『関係者に事情を聞いています。』

！！！！！！

「そうか！！」

俺は美鈴と食事に行った時のことを思い出した。あの時は『ジョナサン』に飯を食いに行った。確か美鈴がスパゲティミートソースとチキンピラフとバジリコサラダを平らげて、さらにストロベリーパフェを追加注文するところだった……

どんだけ食うんだよ……アイツは……いや、そんなことはどうでもいい！確かその時美鈴の携帯にメールが来た。美鈴は返事を返さなかった。俺は「返さなくていいの？」って聞いた。そしたら美鈴はこう言わなかったか？

『ああ、サエコはいいのよ。いつものことだから。』

『サエコ』が『沙江子』だったら？

つまり、清水沙江子が死ぬ直前に美鈴にメールを送っていたとしたら？

思いつ切し関係者じゃん！！

もうわかった！

美鈴は警察にいる。事情聴取じじょうちゆうしきされているのだ。

俺は心配になり、今日の講義はサボって武蔵野署に行くことにし

た。

「待ってろよ！美鈴！俺が助けてやる！」

俺は勢い勇いさんで部屋を出た。

◇ ◇ ◇

ヤバイ！めっちゃヤバイ！アイツまさか本当に自殺してたなんて……遺書とか書いてたのかな……？

オレは学校へ向かって歩きながら、先生や警察に事情を聞かれた時の言い訳を考えていた。

『いじめてません。遊んでいただけです。』

これじゃダメだ。いじめっ子の典型的な言い訳じゃねえか。

『僕は孝くんのことが大好きでした。確かにやり過ぎちゃった時もあったかもしれないけど、まさか孝くんがそんなに悩んでたなんて……』

うん、これだな。

めっちゃくちや涙を流して悲しんでる振りをすればいいだろう。どうせ学校なんていじめがあったなんて認めたくないだろうし、後は母親がかばってくれるだろう……

そんなことを考えながら校門まで来た。

「直樹！」

義久だ。

「おい、どうする？」

義久はかなりびびっているようだ。

「心配すんなって。別にオレらが殺したわけじゃねえんだから。」
「そりゃそうだけどさ……」

昇降口に入ると雅哉と太一が待っていた。

「直樹く！どうする？ヤバイよ……」

「お前らもかよ！大丈夫だって！とりあえず悲しそうな顔しとけ！」

その日は全校集会で、校長から事件の事情説明とカウンセラーが県から派遣されるらしく、その説明で学校は終わった。

「義久！せっかく午前中で帰れたんだから、家寄ってかないか？」
「えっ？……いいよ……遠慮しとく……」

義久はかなりショックを受けてるみたいだ。

「そっか……んじゃ雅哉は？」

「オレも遠慮しとく……うちの親、ピリピリしちゃってたいへんなんだ……」

「そっか……そうだな……太一はどうする？」
「ボクは……行こうかな。気晴ししたいし……」

「よっしゃ、決まりだ。じゃあな！」

オレは二人と別れ、太一といっしょに家に帰った。



ピルルルル！ ピルルルル！

家に帰って太一とゲームをしていたら、雅哉から電話が来た。

「んっ？ 雅哉からだ。何だ今さら。やっぱ遊びたくなったのか？」

オレは電話に出る。

「あ！ 直樹く！ たいへんだよく！ ありえねえよおく！」

雅哉はかなり動揺どうようしている。

「何だよ！？ どうしたんだよ！？ 何がありえねえんだよ！」

「孝だよお！ 孝からメールが来たんだよおく！ たった今！」

「はあ！？ 何だ！？ そりゃ！ そんなことありえねえじゃん！ 死んでんだぞ！ 孝は！」

太一が心配そうに聞いている。

「知ってるよ！ そんなの。でもほんとだよお！ 直樹く！ どうしよう

……」

「わかった、わかった。なんてメールしてきたんだ？」

「まだ見てないよお！オレおっかなくて……」

「ばっか！見てみなきゃわかんねえだろ！？見てみろよ！」

「わかった……見てみる……」

オレは一旦^{いったん}電話を切る。

「雅哉くんどうしたの？」

太一は不安そうな顔をしている。

しばらくすると雅哉からまた電話が来た。

ピルルル……

オレはすぐに出る。

「雅哉！なんて書いてあった？」

「直樹……ヤバイよ……『絶対許さない』って……『剛が仕返しに行く』って……何だよ！これ！？剛ってだれだよ！……しかも勝手に何かダウンロード始めちゃってるんだよ！オレの携帯……おん……おん……何て読むんだ？これ……？『おんめつ』……『怨滅』かな？直樹……おれおっかねえよお……！」

「わかった！待ってろ！すぐ行く！」

オレは急いで家を出て太一といっしょに雅哉の家に向かった。

ピルルルル！　ピルルルル！

今度は義久からだ！

「義久！雅哉がたいへんなんだ！お前もいっしょに……」

オレが言い終わらないうちに義久が絶叫する。

「直樹！孝からメールが来た！『絶対許さない』って！『美那が代わりに仕返しに行く』って！これどういうことだよ！しかも何かダウロード始まって止まんねえんだ！『怨搾 10%』とか……」

オレは絶句した。何かヤバいことが起きてる。

「義久！雅哉もだ！孝からメールが来た。お前と同じで何かダウンロードしてる！今すぐ雅哉ん家に来い！」

「わかった……すぐ行く！」

オレは電話を切って先を急ごうとする。すると……
太一が立ち止まって携帯を開いている。

「おい！何やってんだ！急いでんだぞ！」

「直樹……ボクんところにも来た……」

太一が携帯を見せる。

【0001 4/27 15:38 野口 孝】

ゾワァッ！

オレは背筋に冷たいものを感じた。

「太一！そのメール絶対開くな！絶対だぞ！」

「あ……あ……ボク……ボク……もうイヤだ!!」

ガシャン!

太一は携帯を地面に投げ出す。

パカッ! コロンッ!

携帯の裏蓋うらぶたが取れ、バッテリーが転がり出る。

「落ち着け! 太一! 開かなきゃ大丈夫なんだか……」

オレはバッテリーの取れた携帯を拾って、太一に返そうとして凍こおり付く。

『怨裂…ダウンロード開始 10%』

「何だ!? これ? 何でダウンロードなんかしてるんだ? ……何で動いてんだよ! ?」

「もうイヤだああ!」

太一は走って行ってしまう。

オレの手にはバッテリーのない太一の携帯が握られたままだった

……

『怨裂…ダウンロード 20%』

太一はもう見えなくなってしまった。

『怨裂…ダウンロード 30%』

オレの手の中にある太一の携帯は、バッテリーがないのにダウンロードが続いている。

『怨裂…ダウンロード 40%』

オレは電源ボタンを長押しして、電源を切ろうとする。

『怨裂…ダウンロード 50%』

「やっぱりダメか……」

………

『怨裂…ダウンロード 60%』

「ちくしょう！何なんだよ！」

ガシャン！

オレは思いつ切り太一の携帯をアスファルトに投げ付ける。携帯の液晶は壊れ、バラバラになる。もう何も写ってはいなかった。

でもオレは壊しても関係ないということを感じ取っていた。

オレはバラバラになった太一の携帯をそのままにして、雅哉の家に向かった。

雅哉の家はひっそりとしていた。家の人は誰もいないのか、呼び鈴を押しても誰も出て来ない。

ガチャ！ガチャ！

オレは扉を開けようとしたが、鍵が掛かっている。

「くそっ！雅哉あ！雅哉あ！」

玄関の扉をバンバン叩いたが、誰も出てくる気配はない。オレは庭に回った。

雅哉の家は庭に面してリビングがあり、出入りのできる大きなサツシがある。そのサツシには鍵が掛かっていた。なかった。

オレは庭から靴を脱いで上がり込む。

「雅哉あ！」

シーシーシー……

オレは雅哉の部屋のある2階に上がった。二階の突き当たりにある部屋が雅哉の部屋だ。

何度も遊びに来ているのでよくわかっている。

オレは部屋の戸を開けた。

部屋の中には誰もいなかった……しかし……何だか生臭い……いや……血の匂いだ！

「雅哉……どこにいるんだよ……」

一見すると部屋の中には誰もいないように見えるが、明らかに違和感がある。

ベットだ。人が寝ているように盛り上がっている。

「雅哉……？」

オレは布団をめくる。雅哉がいた。しかし……頭がなかった。
ベットには赤黒く血溜まりがで、布団をめくった途端もの凄い
匂いが顔を襲う。

「うわっ……うわあああああ！」

オレは走って逃げた。

何だよ……何があったんだよ……何で雅哉が死んでんだよ……

オレはパニックになり、義久の家に向かった。

ハア……ハア……ハア……ハア……

混乱と疲労で頭がおかしくなりそうだった。

「義久に……警察に連絡させよう……ハア……ハア……オレは……
塾があるから……」

もう正常な判断ができる状態ではなかった。義久の家が見えてくる。

呼び鈴を押そうとすると……玄関が開いているのに気づく。扉が
少し開いていて、人間の手が見える。

誰か倒れている！

オレは走り寄る。

玄関の扉を開けると倒れているのが誰だかわかった。やっぱり義
久だった。

「義久！」

オレは義久を抱え起こす。義久は……目がなかった。

顔にポッカリ2つの穴が空いている。真っ赤な穴には何もなく、
奥に脳の白い一部が見え、ピンク色の脳漿が穴から垂れた。

「うっ……うげ……」

オレは吐きそうになって義久から離れる。すると、穴が空いているのは顔だけではないのがわかった。

身体中穴だらけだ。少し小さいこぶし大の赤黒い穴が、義久の胴体にいくつも空いている。

グニユ！

オレの手が何かに触った。恐る恐る見ると……人間の心臓だった。

「わぁ……あああああ！」

あまりにも非日常的なものに触れたオレは、またパニックに陥り、義久の家の中に逃げた。

グニユ……

また何か踏み付ける。

胃だった。よく見ると玄関先の廊下には人間の臓器が散乱している。

「ウゲ……ゲエエエエ！」

オレはたまらずその場に吐いた。肝臓……肺……その他オレにはよくわからないものがたくさん落ちている。さらにもう一つ小さな心臓がトイレの前の廊下に落ちている。涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながら、オレは這いつくばってトイレの戸を開けた。

中には義久の妹が死んでいた。やはり両眼は無く、身体中穴だら

けだ。床には血溜まりちだができています。

「明日香ちゃん！明日香ちゃん……まだ小二なのに……」

「くっそお！何でだよ！明日香ちゃんには関係ないだろ！俺たちだけ狙えばいいじゃねえか！」

オレは叫んでいた。

……そうだ！太一！

アイツにも知らせてやらなきゃ！太一もこのままじゃ殺されちまう！

オレはそこで気付く。

太一の携帯は壊れてしまった。家電いえでんの番号は知らない。

「くそっ！」

オレは義久の家を飛び出して、太一の家に向かって走った。

「間に合ってくれ！」

無駄だとは感じつつも、オレは太一の無事を祈って走り続けた。走りながらオレは冷静になっていく自分に気付く。

たぶんオレは殺される。孝かその仲間に。

それは自分のしてきたことの報いだから仕方がない。でも、明日香ちゃんは関係なかった！

『将来は直樹くんとけっこんするう！』

『おい！俺は直樹の兄貴になるのは嫌だぞ！』

兄と妹のもうなくなってしまうた幸せを思い、涙が出てくる。せめて、オレたちの死が無駄にならないようにしたい。

オレは走りながら警察に電話をして、今まであったこと、きつとこれから起こるであろうことを全て話した。信じてもらえるかなんて関係ない。ちよつとでもいいから手掛かりを残したい。きつと誰かがこの怨念の連鎖^{れんさ}を止めてくれると信じて……

太一の家に着いた。

玄関の鍵は開いており、太一の靴が乱暴に脱ぎ散らかされている。相当慌てて帰ってきたんだろう。

「太一！」

返事はない。中は予想通りシーンとして人気がない。

オレは覚悟を決めて中に入る。

二階にある太一の部屋に上がって行くと、義久の家で嗅^かいできたばかりのあの匂いがする。

血の匂いだ。

「太一！」

やはり返事はない。オレは太一の部屋の戸を開けた。

部屋の中は地獄だった。

太一はバラバラに引き裂かれていた。両手、両足、頭が部屋全体にばらまかれている。胴体も胸と腰で、上下に分断されている。部屋の中は血と内臓の匂いで充満している。

ぼうっとしているとオレの携帯に着信があった。

【0001 4／27 16..57 野口 孝】

「来たか……」

オレはメールを開く。逃げられないのはわかっている。

『直樹、お前を絶対許さない。死ね。』

オレは返信する。

『剛とか美那とかだれだ？太一はだれがやったんだ？』

すぐに返信が来る。

『太一に仕返しをしたのは信人だよ。みんなぼくのようにいじめで死んだ人たちさ。』

メールを開くとすぐにダウンロードが始まる。

『怨剥…ダウンロード開始 10%』

オレはまたすぐに返信する。

『明日香ちゃんは関係ないだろう？どうして殺した！？』

『怨剥…ダウンロード 20%』

またすぐ返信がくる。

『悠姫には誰も逆らえない。』

何？意味がよくわからない……悠姫って誰だ？

『怨剥…ダウンロード 30%』

逆らえないって……？

『怨剥…ダウンロード 40%』

オレが考えている間にもダウンロードはどんどん進んでいく。オレはダッシュで太一の家を出る。

『怨剥…ダウンロード 50%』

今からじゃ自分の家に帰ろうとしても間に合わない。それに家には母親がいる。母親は巻き込みたくない。ウザかったが今まで育ててくれた恩がある。明日香ちゃんのようにたぶんいっしょに殺されてしまうだろう。

だからオレはもう一度義久の家に向かった。たぶん残された時間はあと5分くらいだろう。義久の家は、さっきの電話をもし信じてもらえてたなら警察が来るころだ。ギリギリ間に合う。無関係の警察官まで巻き添えにしたくはないが、このままじゃ連続強盗殺人事件で処理されかねないからな。

「さあ！来いよ！」

『怨剥…ダウンロード 60%』

………

『怨剥…ダウンロード 70%』

早く！……早く！……

『怨剥…ダウンロード 80%』

ハア！……ハア！……ハア！……

『怨剥…ダウンロード 90%』

もうすぐ……もうすぐだ……あの角を曲がったら義久ん家が見える……

『怨剥…ダウンロード完了』

警察は………いた！

パトカーが一台義久ん家の前にちょうど停まるところだった。

「お巡りさん！」

オレは走ってパトカーに近付く。中から警官が2人降りて来る。

「君が電話をくれた工藤くんかい？」

「ハア……ハア……はい……そうで……す……」

オレは息が切れてうまくしゃべれない。

「君の通報が正しければ、今あの家の中には中山さん家のお子さんが殺されてるんだね。」

「……はい。」

オレは間違っていて欲しかった。

「オレが見てくる。お前はここで工藤くんと待っている。」
「はいっ！」

年配の警官がもう一人の若い警官に言いつけて、義久の家に入
て行く。
？

おかしい。

玄関先に義久の死体があり、義久や明日香ちゃんの内臓が散乱し
ていたはずだ。玄関の扉を開けた瞬間に何らかの反応を示すはずだ。
……そろそろ5分は経つ。まだ出て来ない。

「おかしいな……ちよつとここで待ってなさい。」

もう一人の若い警官も義久の家の中に入って行く。

……さらに5分が過ぎる。警官は2人とも出て来ない。オレの身
にも何も起こらない。

その時、

ピーピーピー！

パトカーの無線から声が聞こえた。

『こちら八前^{やいば}だ。田中宅、菊地宅で情報通り遺体を発見。そっちは
どうだ？』

オレはとっさに無線に出る。

「こちら中山宅です。お……お巡りさんが2人とも中から出てきま
せん。」

『……君は誰だ？』

「ボ……ボクはくどうっ……」

いきなり後ろから首を締められた。ルームミラーを見ると……長い黒髪の女の子が血走った目でオレを睨んでいる。

「ぐが……が……ごう……」

『おい！どうした！？おい！君！……』

オレは必死に首に掛かった手を引き剥がそうとしたが、もの凄^{すこ}い力で絞^しめられ全く剥^はれない。

すると、女の子がこの世のものとは思えない声で話す。

『たかしのかわりにきたよおお……絶対許さないってえ……』

だんだん顔が赤くなり、むくんできたのがわかる。

「げ……げえ……うごっ」

『おい！君！おい！……』

無線からはまだオレを呼ぶ声がする。オレは必死に手を伸ばし、無線を取ろうとしたが届かない。

『だからあ……ころすねえ……』

ベリベリッ！！

急に首が冷たくなる。首の皮膚が全て剥^はぎ取られていた。

「がああああああおおおごごごう……」

あまりの出来事に首に手をやると激痛が走る。

「あがつ……があ！」

あまりの痛みに手を離すと、

グチャ！

まだ皮膚の残っている首の付け根の部分を、脇の下から女の子の
 つか
 両手が掴む。

ベリベリベリベリベリベリベリベリベリベリ！

胴体の前面の皮膚が剥^はがされる。

「あゝ
あゝ
あゝ
あゝ
あゝ
あゝ
あゝ
あゝ
ああ
ああ！」

パトカーの運転席に座った形だったので、オレの引き剥がされた
胴体の皮膚はハンドルに覆い被さる。

「あ……あ……ああ……」

ベリ
イツ
！

両手の皮膚がゴム手袋を無理矢理引き抜くように剥がされる。

外から見たらオレはきつと、首から下は真つ赤な肉人形みたいだ

ろうな……

そんなことを考えていると、

[illegible]

パトカーの音が遠くに聞こえる。

ああ、来てくれた……
そこでオレの意識は途切れた。
……



八前たちが中山宅に来た時は、時すでに遅しかった。

「八前さん！家の中見て来ます！」

「ああ、気をつけろよ……」

八前はパトカーの運転席で真っ赤な人形のようになって絶命している子どもを見ていた。

「何てむごいことを……ナンマンダブ……」

ふと見ると、そばの地面に携帯電話が落ちている。

「この子のか？」

携帯電話は着信ランプがついている。

【メール着信…野口 孝】

………

第5章 新堂瑛士

武蔵野署に着いたのは正午近くになってからだった。道がわからず迷っていたからだ。

結局タクシーを使った。

どうしたらいいのかわからなかったので、受付の婦警さんに聞いてみる。

「あ……あの……、吉崎美鈴という者がこちらに拘留（こいうりせう）されています。しゃいますでしょうか？」

「はあ？」

しまった！これじゃ何言いたいのかわからんじゃないか！

「いや、吉祥寺の女子大生変死事件の事情聴取か何かで、吉崎美鈴という者がこちらにいると思うのですが……」

「はあ……あなたは身内の方ですか？」

「ああ、身内っていうか、友達です。」

なぜか婦警さんはクスッと笑う。

「そちらに掛けて少々お待ちください。」

言われるがままに入口横のベンチに座る。

しばらく待つと、やたらと身長の高い、いかつい顔をした中年の刑事が現われた。

「刑事課のミタライです。」

名刺には『武蔵野署 刑事課 巡査部長 御手洗 淳』と書いてある。

「おてあらいじゅん……」

「みたらいいあつしだ。こちらへ来てもらえるかな？」

俺は御手洗刑事の後に付いて二階に上がり、広いが誰もいない部屋に入る。プレートには『刑事課』と書いてあった。

「ま、そこにかけてまえ。」

御手洗刑事は応接セットを示した。俺は素直に座り、コーヒーメーカーでコーヒーを淹れている御手洗刑事に聞いてみた。

「あ、あの！美鈴はここにいますか？」

御手洗刑事はコーヒーを二つ持って来ながら言った。

「ああ、いるとも。」

「あの……会えますか？」

「その前に質問していいか？」

「はい。」

「君は友達と言ったな。」

「はい。」

「彼女がここにすることはまだ誰にも知らせていない。なぜわかった？」

「昨日から連絡が取れなくなって、清水さんと最後にメールしたのが美鈴だって思い出したからです。」

「なぜ最後にメールしたのが彼女だってわかるんだ？」

御手洗は鋭い目で睨んでいる。
そっか、俺疑われてんだ。

「ああ、ちょうど清水さんからメールが来た時、俺たち飯食ったんす。」

「メールの内容は？」

「あ、それはわかりません。見せてもらったわけではないので……」
「なるほど……ちなみにその時食べていたメニューは？」

俺は二人のメニューを言う。

「ちょっとここで待っていなさい。」

御手洗刑事は奥の部屋に入って行く。

またしばらく一人で座って待っていると、さっき御手洗刑事が入って行ったドアから美鈴が出て来た。

「美鈴……」

「崎田……」

「大丈夫かよ？何回もメールしたんだぞ。」

「吉崎さんの携帯電話は、我々が預かっていた。」

御手洗刑事が美鈴の後ろで言った。

……いたんだ……小っちゃくて見えなかった……

「崎田……沙江子が……アタシがちゃんと話を聞いてあげてればこんなことにはならなかったのに……」

「お前のせいじゃないよ……」

こんな暗い顔の美鈴は初めて見る。

「御手洗さん、美鈴はもう帰っていいんですよ？」

「そうだな。必要なことは話してもらった。もしまだ何かあればこちらから連絡するので、その時はまたご協力願いたい。」

「……はい。」

俺と美鈴が部屋から出ようとすると、さっきの受付の婦警さんがやって来る。

「御手洗巡査部長、事件直前にガイ者と接触したという男性が出頭してきております。」

「なにっ！すぐに指紋の照合に回せ。」

俺と美鈴はびっくりして顔を見合わせる。

清水沙江子が死ぬ直前に誰かに会っていたなんて。

「刑事さん！その人にアタシも会っていいですか？話が聞きたいんです！」

美鈴が御手洗刑事に詰め寄る。

「バカ言うな。一般人の君達が重要参考人の接見に立ち会えるわけないだろう？さ、早く帰りたいまえ。」

「でも……」

美鈴はまだ食い下がろうとする。

「美鈴、刑事さんの言う通りだよ。帰ろう。」

俺は美鈴の肩を掴む。

「崎田……うん、わかった……」

俺たちが出て行くと入れ違いに若いサラリーマン風の男が部屋に入って行く。

「あの人が……」

「美鈴さん？」

婦警さんにうながされるが、美鈴はさっきの男が気になるようで、何度も後ろを振り返っている。

「長岡さん！あの……！」

階段を降りながら、美鈴が婦警さんに話し掛ける。

「なに？」

「あの人……本当に沙江子と最後に会った人だって証拠あるんですか？」

婦警さんは困っている。

「うーん……ホントは言っちゃいけないんだけど、吉崎さんにはいろいろ協力してもらったからいいかな？」

婦警さんは小さな声で言う。

「実はね、清水さんの携帯には本人以外の指紋がついてたの。その指紋は『本人の指紋の上についてた』。つまり、最後に携帯に触った人物なのよ。」

婦警さんに連れられて出口まで来ると、美鈴は婦警さんにぴよこんとお辞儀をする。

「長岡さんいろいろお世話になりました。」

「いろいろ不自由させてすまなかったわね。」

「いいえ、ありがとうございました。」

「くれぐれも自分で何とかしようとか思っちゃダメよ。」

婦警さんは子どもに言い聞かせるように言った。

「……はい。」

「じゃ、カレシくん。吉崎さんをよろしくね。」

「な……そんなんじゃないません!」

美鈴は真っ赤だ。

「そうですよ!俺にだって選ぶ権利がありまゲボ!」

美鈴のボディブローはかなり効いた。婦警さんは笑って手を振りながら中へ入って行った。

「ゲホ、ゲホ……」

「アンタセクハラで捕まえてもらったら?」

「ハハッ」

「何がおかしいのよ?」

「やっぱ美鈴はこうでなくっちゃな!」

「なっ……」

美鈴はまた赤くなりうつむく。

「……ツタ。」

「ん？なに？」

「ハラヘツタ！」

ガクッ！ラブコメ的展開を期待すればこれか！
時間はもう2時近かった。

「じゃ、あそこ行こうか。」

俺たちは警察署の目の前にあるファミリーレストランに入った。
俺は警察署の建物がよく見える席に坐してもらった。

「ねえ、崎田、何でこの席にしたの？アタシ禁煙席の方がよかった
んだけど。」

「見張らなくていいの？」

「？」

「さっきの人に話聞きたいんでしょ？」

美鈴は大きな目をさらに大きくする。

「崎田……」

美鈴はうつむく。

「崎田を巻き込むわけにはいかないよ。」

「いいよ。今日はどうせ講義は間に合わないし、何より美鈴一人に
任せておけないしな。」

「崎田……ありがとう。」

正面切って感謝されるとかなり照れるので、俺は話題を変えた。

「それより、清水さんのメールってどんなだったの？」

美鈴はバックから携帯を出して見せてくれた。

『今一人で飲んですます今度はちゃんと話聞いてね』

「『一人で飲んでも』っていうことは、あの男の人はメールの後で知り合ったのかな？」

「やっぱり直接聞いてみないとわかんないよね……」

美鈴は携帯をしまい、警察署を見つめた。



「あゝ、食った！食った！幸せ〜！」

美鈴はかなり腹が減っていたようで、今日は海老フライとハンバーガーのミックスセット、ライス、コンポタージュスープ×2と海鮮サラダ、てりやきピザMサイズにチョコレートパフェ、チーズケーキとジンジャーエール×2を平らげた。

これだけ食べるのに、こいつのモデル体型はどうやって維持してるんだ……？

ホント毎回不思議に思う。

食後のコーヒーが運ばれてきたところで、俺は気になっていたこ

とを聞いた。

「そういえばさ、昨日って家に帰ったの？」

「ううん、警察が用意してくれたビジネスホテルに泊まったの。さっきの婦警さんがいろいろ面倒みてくれて……」

「そっか、俺てつきり牢屋に入ってたのかと思ったよ。」

「何にも悪いことしてないのに留置所に入れられるわけないでしょ！」

「そうだよな。……それにしたって拘束時間長かったよな。何聞かれてたんだ？」

「何って……沙江子との関係とか、友人関係、沙江子がどんな子とか大学での様子とか……かな。」

「美鈴は清水さんと仲良かったの？」

「同じ学部でわりと仲はいい方だったけど、昔のことは本人から聞いたことぐらいしか知らないわよ。」

「誰かに嫌われてたとか、恨まれてたとかはなかった？」

「ううん……彼氏と別れたからアタシに愚痴聞いてもらうつもりだったらしいんだけど、殺されるほど恨まれるっていうのは考えづらいな……」

「わかんないぞ……フラれた腹いせにストーカーしたりするヤツだっているからな。」

「アンタもフラれたら仕返しとかする？」

「俺！？俺はしないよ！フラれるも何も彼女とかいないし……」

「へえー！崎田って彼女いないんだ。」

話が変わる方向に流れてきたので、俺は話題を戻した。

「他に清水さんが恨まれるような心当たりってある？」

「あればとくに警察に話してるわよ。」

「そうだよな……」

「どちらかというと恨む方だったかも。いっつも男運悪くて『男ってバカばかり』が決まり文句だったし。」

ドクン！

心臓が止まるかと思った。

『男ってバカばかり』？

「アハハ……」

美鈴は笑っていたが、俺は凍り付いてしまった。

『男ってバカばかり』……ウイッシュの口癖だ……

「そういえば、ネットの掲示板で話聞いてもらってるって言ったよ。二十代のOLって嘘ついてたらしいけど、4人ぐらい仲のいい人がいたんだって。でも最近来ないってヘコンでた。」

間違いない！ウイッシュは清水沙江子だ！

清水沙江子とウイッシュが同一人物なら、今回の変死事件の『犯人』に心当たりは……ある！

あの掲示板……

『S i o n』……

俺は美鈴にそのことを話そうか迷った。美鈴は俺を巻き込みたくないと言ったが、俺も美鈴を巻き込みたくない。あれはやばい。やばすぎる。俺の防衛本能が、生存本能が危険を示している。

「崎田……」

美鈴が不審そうに声をかける。

「何でもない！何でもないよ！」

俺は必死に否定する。

「あれ……」

美鈴は外を指差している。

警察署の入口から、小さい男（間違いなく御手洗刑事）と若いサラリーマン風の男が出て来て、パトカーに乗り込むのが見えた。

「どこ行くんだろう……」

俺は動揺を見抜かれないうちに極力平静を装って話した。

「たぶんアタシが泊まったのと同じホテルに行くんだと思う。」

「何でわかるの？」

「だって、携帯に指紋が残ってるような重要参考人がこんなに早く帰れるわけじゃないじゃん。きっと指紋が一致したから、明日警視庁から管理官とか偉い人たちが来て本格的に事情聴取するのよ！」

「お前警察に詳しいな〜！」

「『事件は会議室で起きてるんじゃない！』ってね！」

「おいおい……テレビや映画の見過ぎだよ……」

「行こう！タクシー拾わなきゃ！」

何だかラブコメから刑事ドラマになってきたな……
俺は会計を済ませ（また奢らされた）、店を出た。



『武蔵野ビジネスホテル』というまんまなネーミングのホテルに入れるようになったのは夜の7時を過ぎていた。護衛か監視の私服警官がいて、面の割れている（すでに刑事ドラマにどっぷりな俺）俺たちは中に入れてもらえないと思い、いなくなるまで近くの喫茶店で時間を潰さざるをえなかったからだ。

「もういないね。」

美鈴が建物の陰から覗いて言う。

「後はどの部屋かだな。どうやって探す？」

「簡単よ。ついて来て！」

美鈴はコンビニに入って行く。

「何でコンビニなんだよ？」

「いいから！崎田は黙っててね！」

美鈴は弁当とペットボトルのお茶を買う。

「お前……まさか……」

「そう！そのまさか！」

「まだ食い足りないのか？」

ズコッ！

美鈴は転びそうになる。

「あんたばかあ！？」

今度はア○カで来たか……

「身内を装って夕食を届けるのに決まってるでしょ！？」

「えっ！？だってお前あの人の名前知ってるの？」

「まあかせえなさあい！」

美鈴はドンと胸を叩く。叩いた拍子に大きめの胸がプルンツと揺れて、俺はドキドキしてしまった。

「経済学っていうのはお金の学問じゃないのよ。人間の心理を深く理解しなきゃ学べないんだから。」

何だかよくわからないが、任せろというからには任せることにしよう。

「アタシが妹で崎田が弟って設定ね。」

「でも家族構成なんて警察は調べてあるんじゃないの？」

「『警察』は、ね。」

……！

そうか、ホテルの人はそんなこと知らないか。それに一般人はこのホテルに殺人事件の重要参考人が泊まっているなんて知らないものな……

「すみませえん。」

俺は美鈴の後にオドオドしてついていく。

「外に出られないからって、武蔵野署の御手洗さんに言われて夕食を持って来たんですが…?」

人の良さそうなフロントの人に堂々と話し掛ける美鈴を、俺は心から尊敬した。

「ああ、312号室の曾根崎さんね。お身内の方ですか?」

「はい。妹と弟です。」

こんな簡単に!?!?どうなってる個人情報保護法!?!?

「お届けしますか?」

「ああ、いいです。しばらく会えなくなるみたいなんで直接届けます。ほら、晃!行くよ!」

俺は出来の悪い弟という設定らしい。

「ありがとうございますあ。」

美鈴はありったけの笑顔でエレベーターホールにテクテクと歩いて行く。

あまりに堂々とし過ぎていて、フロントの人は全く疑っていない。女ってスゲーなあと思う。

美鈴はエレベーターに乗り、『3』のボタンを押した。扉が閉まる。

「楽勝！」

俺たちは右手の親指を立てた。

俺たちは3階まで上がって、312号室の前まで来た。幸い廊下に人影はない。

ピンポーン！

美鈴が呼び鈴を押すと、中から返事が聞こえた。

「はい。」

「夕食を届けに来ましたあ。」

「あ、そうですか。ちよつと待ってください。」

ガチャガチャとチェーンを開ける音がしてドアが開く。

「あれ？婦警さんじゃないんですか？」

二十代前半と思われる好青年が、ネクタイを外したラフな格好で立っている。

「すみません。亡くなった清水沙江子の友人です。曾根崎さんにお話を伺いたくて来てしまいました。」

俺たちは深々と頭を下げる。

「そうですか……清水さんの……どうぞ、お入りください。」
「失礼します。」

俺たちは部屋に入る。

「突然すみません。アタシ、沙江子と同じ大学の吉崎美鈴と言います。」

「俺は崎田 晃です。」

厳密に言う俺は清水沙江子とは大学の友人というよりネット仲間なのだが、あえて何も言わないでおいだ。

「曾根崎慎太郎そねざき しんたろうです。」

差し出された名刺には『(株)Dyson』と書いてあった。

「Dysonってゲームソフトで有名なあのDysonですよね？」

俺はナエトルとよく盛り上がったゲームの話を思い出して聞いた。

「ああ、ゲームソフト開発は一部門であってそれだけじゃないんだよ。他にもプロバイダやレンタルサーバなんかも手掛けてる。どちらかといえばそっちの方がメインかな？」

「レンタルサーバって……」

「サイトの運営者にサーバを貸して、そのレンタル料をもらうんだよ。」

「ねえ、晃！そんなこと聞きに来たんじゃないでしょ！？」

「あ、ごめん。」

『晃』？

美鈴の中ではまだ設定が続いているらしい。

「沙江子に会った時のことを教えてください。」

曾根崎さんは急に苦しそうな表情になる。

「清水さんが殺されたのは僕のせいなんだ……」

「どういことですか？」

美鈴が怪訝けげんそうに聞いた。

「僕がきちんと最後まで自宅に送って行っていれば、あんなことにはならなかったのに……」

曾根崎さんは頭を抱えてしまう。

「ち、ちよつと待ってください。状況がわからないので、最初から順番に話していただけますか？」

「そうか……すまない。君たちは僕より若いのにしっかりしてるんだなあ。」

「そんなことはないですよ。」

俺はこの人の言うことは信じていいと思った。

曾根崎さんは深呼吸を一つすると、ゆっくりと語り始めた。

「一昨日僕は仕事で帰りが遅くなってしまった。アパートは吉祥寺駅から歩いて20分くらいのところにある。帰りを急いでいると公園から女の人の悲鳴が聞こえた。僕は痴漢かひったくりかと思って走って行った。清水さんは一人で座り込んで、携帯電話を投げ出していた。僕は『どうしました？』と声をかけた。清水さんは『ゴキブリがいてびっくりしてしまっただが、もうあっちの方に行ってしまった。』と言った。」

「ゴキブリ？」

俺と美鈴は思わず聞き返してしまった。

「そう。確かに清水さんはそう言った。」

「すみません。続けてください。」

俺は先を促す。

「僕は念のため清水さんの指差した茂みを確認したが、ゴキブリはいなかった。僕は携帯を拾って渡し、家まで送ると言った。清水さんは『近くだから大丈夫。』と言った。

僕は心配だったがあまりしつこいとかえって怖がらせてしまうと思い、そのままその場を離れてしまった。今思えば強引にでも家まで送ってあげれば良かったと後悔しているよ。」

曾根崎さんは涙を流している。

「曾根崎さん……」

美鈴も泣いている。

「曾根崎さん。誰も清水さんが亡くなった責任が曾根崎さんにあるなんて思っではないと思います。それより、赤の他人の清水さんに対してそこまで責任を感じてくれる曾根崎さんはすごく立派な人だと思います。」

俺は思ったことを素直に言った。

「崎田くん……ありがとう。」

「晃……そろそろ行こう。」

美鈴は立ち上がって涙を拭く。

「これ、冷めちゃったけど食べてください。」

美鈴はコンビニで買ってきた弁当とお茶を曾根崎さんに差し出す。

「ありがとうございます。遠慮なく頂いておくよ。」

曾根崎さんは笑顔で受け取ってくれた。

「君たちは犯人を捕まえるつもりなのかい？」

「それは御手洗さんたちに任せます。ただ、できる限りのことはしたいと思っています。」

美鈴はきつと曾根崎さんと同じく清水さんに対して責任を感じてるんだなと思った。

「それじゃ、失礼します。ありがとうございました。」

美鈴と俺は深々と頭を下げる。

「何か協力できることがあったら言ってくれ。ま、しばらくは警察に拘束されてるだろうけどね。」

曾根崎さんの握手は力強く温かった。

時間はもう夜の9時を回っている。俺たちはホテルを出て駅に向かった。

「曾根崎さん、いい人だったね。」

美鈴がしみじみと言う。

「そうだね……」

俺は考え事をしていた。清水沙江子Ⅱウィッシュ……

「沙江子もこういう時こそ素直について行けばよかったのにね。」
「うん……」

ゴキブリ……虫……『全身に囓られた跡』……メニューにあった
『怨虫』

「……人の話聞いてないでしょ？」

「うん……えっ!？」

気がつけば美鈴が睨んでいる。

「晁、ホテル出てから変だよ! 何考えてるのよ!」

通りすがりの人たちが『ホテル出てから』という部分を聞いて、
クスクス笑っている。

「ちょ……美鈴! ちょっとこっちに来い!」

俺は道の端に美鈴を引っ張って行く。

「美鈴……頼みがある。」

「なによ。」

「この件は俺に任せてくれないか？」

「えっ!？」

「美鈴には関わって欲しくないんだ。」

「どういうこと？」

「危険なんだ……すごく。美鈴の身に何かあったら……」

「何かって……アンタ何か知ってるの？」

ヤバい……墓穴を掘ってしまった……

「いや、清水さんみたいに殺されたら……」

「何隠してるの……?」

「うっ!」

「言いなさい!」

「ヤダ!」

「言え!!」

「ヤダ!!」

「言え!!!」

「ヤダ!!!」

「……」

諦めたか?
あきら

「うゝ……うゝ……」

マズい……これは……泣かれる……

「沙江子はおアタシに話を聞いてもらいたがってた……アタシがちやんと話を聞いてあげていれば沙江子は死ななかったかも知れないのに……」

美鈴の目は涙でいっぱいだ。

「アンタはアタシにこの先ずっと後悔してろって言うの?」

涙が一筋頬を流れる。

「何にも知らないまま白々と生きて行けって?」

美鈴はまっすぐ俺を見つめている。

「危険なら晁の身にも何かあるかも知れないんでしょ?」

俺はハッとして美鈴を見る。

「そんなのやだ!」

「美鈴……」

美鈴はポタポタと大粒の涙をこぼしている。

「わかったよ……話すよ。後で電話する。今日はもう遅いから送って行くよ。」

「ヤダ! 今から話して! 後でなんて言ってどうせ自分で勝手に進めちゃうんでしょ?」

ギクッ!

やっぱり無理か……

「でも、こんなところで話せる内容じゃないんだよね……」

「アンタん家に行こう。」

「へっ!」

「板橋でしょ？アタシ練馬だから終電なくなってもタクシーで帰れるし。」

チッ、そういうことか……しかし、意外と近くに住んでたんだな。

「晃の部屋になんか泊まったらそれだけで妊娠しちゃうわよ。」

「どんだけなんだよ！俺は！……わかったよ。とりあえず飯だけは買って帰ろう。」

「決まりっ！」



俺の家に着いたのは夜11時過ぎだった……

「へえ〜！思ったより片付いてんだね。もっとティッシュとかエロDVDとか散乱してるかと思った。」

「だからどんだけなんだよ！俺は！……とりあえずその辺座っつけ。今コップ持ってくるから。」

俺は内心ドキドキだった。俺の部屋に女の子がいる！しかも飛びっ切りカワイイ娘が！

やっぱ一人暮らしっていいなあ……

「ねえ晃、このパソコン、インターネットできる？」

美鈴はパソコンの電源を入れようとしている。

「やめろ!! 触るな!」

美鈴はビクツとして手を引っ込める。

「何よ……そんなに怒らなくなったっていいじゃない……」

「あ……ゴメン……実はこれが『犯人』かも知れないんだ……」

「はぁ!？」

「話すと長くなるから後で。とりあえず先に飯食おうよ。」

「う、うん……」

美鈴は納得がいてないようだったが、とりあえず買ってきたお握りを開け始める。

「もうこんな時間だから何にもテレビやってないよな。」

俺はリモコンでテレビをつける。テレビでは深夜のお笑い番組をやっているはずだったが、緊急特番をやっていた。

『新潟県無差別大量殺人』

俺と美鈴は息を飲んだ。

今日の夕方、小学生5人、警官二人が何者かにかなり異常な殺され方をしたらしい。

長岡市……ここって確か今朝小学生が自殺したところじゃ……

『……いじめによる自殺と見られる野口 孝くんを入れると2日間で6人の小学生が亡くなっており……』

「いじめによる自殺……」

俺は身体中に電気が走ったかと思った。

異常な殺され方……あのメニュー

いじめ……自殺……あの掲示板……

『S i o n』……

全てつながっているように感じる。俺の中で疑惑が確信に変わっていった。

「晃……？」

美鈴が不安そうに見ている。俺は覚悟を決めて話した。

「美鈴、信じられないかも知れないけど、これは本当の話なんだ……」

俺は全て話した。

掲示板仲間のウィッシュ清水沙江子のこと。学校裏サイトのよ
うな掲示板『S i o n』のこと。気味の悪いメニュー。勝手に始ま
るダウンロード。

……

美鈴はしっかりと話を聞いてくれた。

「だいたいわかったわ。アタシはあんまりそういう掲示板には詳しくないけど、勝手にダウンロードなんてできるもんなの？」

「俺はよくわかんないな……誰かそういうことに詳しいヤツでもいい
れば……」

そこで俺は閃いた。^{ひらめ}

「そうだ！アイツがいた！」

『アイン』……

「アイツって誰？」

「ネット仲間でそういうのに詳しいヤツがいるんだ。頭が良くってパソコンにも詳しい。最初に『Sion』とリンクしてたエロサイトを教えてくれたのもアイツだし……」

……しまった！

「エロサイト？」

美鈴はにいと笑った。

「あ……いや……その……」

「やっぱりそういうの見てたんだ。ま、しょうがないか。男の子だもんね。」

俺は設定通り出来の悪い弟にでもなったような気分だった。

「と……とにかく、『2ちゃんねる』を見てみよう。ちょうどこの時間によく話してたんだ。」

時間は午前0時を回ったところだ。^{ちゅうちょ}

電源を入れる時にはかなり躊躇した。あれ以来俺はパソコンに触っていなかった。パソコンが起動した途端にダウンロードが始まる

気がしていた。

しかし、この異常な殺人事件を解明する手掛かりをつかむためには勇気を出すしかない……

俺は電源を入れた。

ヒューイイイイイイン……

「特に前と変わりはないな……」

「大丈夫……？」

美鈴の顔が俺のすぐ横にある。いい匂いがして、俺は一瞬怖さを忘れた。

「うん……どうやら大丈夫みたいだ。あの掲示板に行かなきゃ大丈夫みたいだな。」

「その『Si on』って掲示板を直接見られれば話は早いのにね。」

「それは危険過ぎるな。」

俺は『2ちゃんねる』にアクセスした。

「へえ〜！これがあの有名な『2ちゃんねる』かあ〜！」

美鈴は興味深々だ。

俺はとりあえず以前出入りしていた『一人暮らし』スレッドに行ってみた。

「いないな……」

アインらしき人物はいなかった。ウィッシュはもちろんだが、ナエトルやキタローもない。

キタローはあの時俺と同じエロサイトに行くと言っていた。俺は悪い予感を感じたが、今はアインを捜すのが先決だと思い考えるのを止め、過去スレを溯^{さかのぼ}っていった。

しかし、25日のところに気になる書き込みを見つけた。

キタロー『楽しい掲示板を見つけました。ぜひ来てください。』

アドレスが貼り付けてある。

「25日……清水さんが亡くなった日だ……『楽しい掲示板』……」

俺は直感した。このリンク先はきっと『S i o n』だ……
っていうことはキタローは……

「美鈴……間違いない。清水さんはここからあの掲示板に行ったんだ。キタローと話がしたくて……」

「沙江子……」

美鈴は涙目でデイスプレイを見ている。

俺はこれ以上 溯^{さかのぼ}ってウィッシュの書き込み、つまり生前の清水沙江子の書き込みを美鈴には見せたくなかった。今の美鈴にはあまりにも酷だ。それにヤバイ会話もしてるし。

「別なスレッドを搜してみよう。」

俺は『一人暮らし』スレッドを閉じた。

他にもいくつかアインの出没していたスレッドを覗いてみたが、それらしいヤツはいなかった。

「うーん、困ったな……」

俺が困っていると、美鈴が横から一つのスレッドを指差す。

「ねえ、ここなんてどう？」

『新潟県無差別大量殺人について』

「ああ……アイツ好きそうだな……」

俺は中に入ってみる。

いろいろなヤツが好き勝手なことを言っている。するとつい10分ほど前にアインの書き込みを見つけた！

「いた！」

「えっ！？ ホント？」

美鈴がまたくつついてくる。

ホントヤバいんですけど……

アイン『あの事件は人間の仕業じゃない。』

アイツらしい感想だな……相変わらずだ。

アインの書き込みは軽く叩かれている。

「はーん、自分の書き込みの反応を見てるな……」

俺はすぐに書き込む。

ボンジョルノ『アイン』至急連絡乞う。』

「これでよし！っと。」

『ププッ！『ボンジョルノ』ってなに！？』

「へ、へんか……？」

「へん！へん！思いつ切りへん！名前じゃないじゃん！挨拶でしょ？フランス語の！」

「そっかー！どっかで聞いたことあると思ったらフランス語の挨拶かぁー！」

美鈴は腹を抱えてヒィヒィ言って笑っている。

ホント泣いたり笑ったり忙しいヤツだな。ま、泣くより笑ってる方が全然いいけどな。

そんなことを考えているうちにアインからメールが来た。アインとはよくエロ画像の交換などをしていたので、フリーメールでやり取りをしていた。

『ボンちゃん！久しぶりだな！いきなりどうした？』

美鈴が“ボンちゃん”にツボってまた転げ回って笑っている。

『実は先日あった【女子大生変死事件】と今日あった【新潟県無差別大量殺人】の犯人についてなんだけど興味あるだろ？』

『なに！？何でそんなこと知ってるんだ？もしかして今まで2ちゃんに來なかつたのはそのせいかな？』

『まあな。話せば長くなるから電話で話せるかな？』

『ああ、いいとも。090****だ。』

俺はすぐに電話をかける。

「やあ、オレだ。アインだ。」

「ボンジョルノだ。お前の力が借りたい。人の命がかかっているん

だ。」

「いきなりヘビーだな……わかった。詳しく話してもらおうか。」

……俺は今までのことを包み隠さず全て話した。

「なるほど……こいつぁホントにヘビーだ。こっちでいろいろやってもいいが、これは合流した方が良さそうだな。」

「合流？」

俺は意味がわからなかった。

「オレがそっちに行つてやる。明日でいいか？」

「そんないきなり！」

「バカ！人の命がかかってるって言ったのはボンちゃんの方だぞ！オレは静岡に住んでる。明日の昼頃に東京駅に迎えに来られるか？」

「ああ、たぶん大丈夫だと思うけど……」

「じゃ決まりだ。細かい時間は新幹線に乗る前に連絡する。それまでパソコンはもう開くなよ。」

「わ、わかった。」

「それじゃな。」

アインに一方的に決められてしまった。

「講義どうしよう……」

俺が呟くと美鈴がバシンと背中を叩く。

「何言ってるの！人の命がかかってんでしょ！？それどころじゃないわよ！アタシがついてんだから心配しないの！」

「ええー！お前いつしよに来る気かよ！？」

「当たり前でしょ！？アンタ一人に任せておけないわよ！ボンちゃん！」

ガクッ！

俺は力が抜けた。こりや当分言われそうだ……

結局タクシーを呼んで美鈴が帰ったのは午前3時過ぎだった。美鈴にはアインから連絡が入り次第電話することにした。



翌日アインから12…38東京駅着だとの連絡を受けた。

俺は美鈴と池袋で待ち合わせをして（俺が遅れたせいで、待っている間3人にナンパされたそうだ）、時間通りに東京駅に着いた。

「どんな人だろうね。アインさんって。」

相変わらず美鈴は好奇心いっぱい大きな目をくりくりさせている。すると俺の携帯にアインから着信がある。

「今着いた。どこにいる？」

俺たちはわかりやすいように『銀の鈴』前で待っている。

「わかった。今行く。」

10分ほど待っているとアインらしき人が来た。

身長は180cm近い長身。細面で色白のイケメンだ。眼鏡を掛けていて、髪はナチュラルなセミロング。白いシャツにきっちりとしたスラックスが医者をイメージさせた。

「よう！ボンちゃんか？こっちが美鈴ちゃんか？」

「初めまして。吉崎美鈴です。」

美鈴がぴよこんと頭を下げる。

「もう本名でいいだろ？俺は崎田……崎田 晃だ。」

「オレは新堂瑛士^{しんどう えいじ}。よろしくな。」

瑛士は細いわりにはがっしりとした手を差し出した。

第6章 八前信彦

俺たちはすぐに“あすなる荘”には向かわず、東京駅近くの喫茶店へ入った。

瑛士がそう望んだからだ。

「改めて自己紹介するよ。新堂瑛士、21才。静岡医科大学の3回生だ。」

「静岡医科大学!？」

美鈴が驚いたような声を出す。

「美鈴知ってるのか？」

「知ってるも何も、超エリート医大よ! お金持ちのお坊ちゃん大学と言われているけど、実際かなり優秀じゃないと入れないわ。」

「へえー! アイン……いや……新堂さんって頭のいいお坊ちゃんだったんだ。」

「それはよしてくれ。金持ちなのは親だからオレじゃない。今は脛^{すね}を噛^{かじ}ってるけど、ゆくゆくは家を出るつもりだ。」

「へえー、もったいない。」

俺は素直に感想を述べた。

「ついでに“新堂さん”ってのも止めてくれ。年上だからって気にしないで、『瑛士』でいいよ。」

「了解。」

俺は安心した。気難しいヤツだったら疲れちゃうもんな。

「俺は青山学園大学1年崎田 晃、でこっちが同じく2年の吉崎美鈴。俺たち高校の同級生なんだ。」

「そっか。付き合ってるわけじゃないの？」

「まさかぁ！」

俺は笑い飛ばす。美鈴と俺じゃ月とスッポンだ。

美鈴も笑っていたがどこかぎこちない。

ヤバイ……付き合ってるなんて言われてムカついたのかも。

俺は急いで話題を変える。

「学校の方は大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないけどそれどころじゃないだろ？人の命がかかってるんだから。」

「まあ……ね。」

それは俺たちもいっしょだった。

「それで事件のことなんだけど……」

瑛士は周りを憚^{はば}って声をひそめた。

「実は変死事件には以前から興味があって、俺なりに少し調べてたんだ。」

瑛士はスーツケースのような黒いバックからノートパソコンを出す。

「マスコミ報道だけじゃよくわからなくて困ってたんだよね……でもボンちゃん……おっと、崎田から聞いてだいぶ全容が見えてきた。」

「えっ!?!もう!?!」

やっぱりタダ者じゃないな……この人……
美鈴はまたボンちゃんにツボっている。

「『Si on』に関する事件を時系列で説明しよう。」

パソコンの画面には何か表のようなものが出てくる。

「これは今年に入ってからの変死事件を集めたものだ。」

【2008／3／10】

▼笹木智行 19才

【場所】千葉県流沢市内路上

【死因】走行中頭部打撲による事故死

【備考】塗装工

千葉県立流沢高校野球部卒

【2008／3／14】

▼香取隼人 18才

【場所】ホテル『雅』

【死因】溺死、頭部陥没

【備考】千葉県立流沢高校3年

野球部

【2008／4／9】

▼山崎貴浩 18才

【場所】埼玉県志木市

【死因】全身粉碎骨折

【備考】会社員

千葉県立流沢高校野球部卒

【2008／4／9】

▼横山瑞希 18才

〔場所〕東京都江東区

〔死因〕絞殺

〔備考〕陽星館大学1年

千葉県立流沢高校野球部卒

【2008／4／25】

清水沙江子 19才

〔場所〕武蔵野市吉祥寺

〔死因〕動物等による噛み傷

〔備考〕青山学園大学2年

【2008／4／27】

▼菊地雅哉 11才

〔場所〕新潟県長岡市自宅

〔死因〕頭部損傷（破碎）

〔備考〕新潟県長岡市立上長岡小学校6年

▼中山義久 11才

〔場所〕新潟県長岡市自宅

〔死因〕穿穴多数、臓器搾取

〔備考〕新潟県長岡市立上長岡小学校6年

中山明日香 7才

〔場所〕新潟県長岡市自宅

〔死因〕穿穴多数、臓器搾取

〔備考〕新潟県長岡市立上長岡小学校2年

▼田中太一 11才

〔場所〕新潟県長岡市自宅

〔死因〕全身損壊（バラバラ殺人）

〔備考〕新潟県長岡市立上長岡小学校6年

▼工藤直樹 12才

〔場所〕新潟県長岡市内、上記中山義久宅前

〔死因〕上半身皮膚剥離

〔備考〕新潟県長岡市立上長岡小学校6年

吉田耕一 40才

〔場所〕新潟県長岡市内、上記中山義久宅

〔死因〕全身皮膚剥離

〔備考〕長岡北警察署巡査

正木奨太 25才

〔場所〕新潟県長岡市内、上記中山義久宅

〔死因〕全身皮膚剥離

〔備考〕長岡北警察署巡査

俺と美鈴は言葉を失った。

「……ひどいな……12人も犠牲になってるのか……」

「……崎田『今年』って言っただろ……」

瑛士はページを変える。

【2003／3／21】

▼安藤洋介 14才

〔場所〕 東京都板橋区内自宅

〔死因〕 全身損壊（バラバラ殺人）

〔備考〕 東京都板橋区立大東中学校2年

・
・
・
・
・

【2003／6／12】

▼渡辺可奈 14才

〔場所〕 東京都豊島区内カラオケボックス

〔死因〕 全身損壊（バラバラ殺人）

〔備考〕 東京都板橋区立大東中学校3年

「何だ……これ……いち、にい……28人も……全部同じ学校じゃん……」

「崎田、『同じクラス』だ……」

俺と美鈴は息を飲む。瑛士はどんどんページを変えていく。さらに多くの変死リストが画面に現われていった。

「……小中高生が中心だが、下は幼稚園児から上は60才の老人まで過去5年間だけでも200人以上が犠牲になってる……」

「あまりにも多いし、場所も日本全国に散らばっている。同一犯とは思えなかった。殺し方がバラバラだったからな。でもこんな殺し方は人間には不可能だ。曲がりなりにもオレは医者^{はし}の端くれだ。そのくらいはわかる。」

「そうだな……」

「ちょっと待って。確かにバラバラだけどいくつかのパターンがあるように思えるんだけど……」

美鈴がリストを見ながら言う。瑛士がパソコンを切りながら答える。

「そう。崎田の話を聞いてオレもそこに気付いた。」

俺は『Si on』の『メニュー』を思い出した。

「あの『メニュー』……」

「そうだ。確か八つあったと言ってたな。」

「ああ、そうだ。『怨絞』『怨打』『怨虫』『怨裂』……えーと……あ何だったかな？すぐにダウンロードが始まっちゃったから焦って覚えてないや……」

「晃！大事なことなんだからちゃんと思い出しなさいよ！」

「そう言われても……」

「ちょっと待って美鈴ちゃん。どちらにせよ解決のためには一度『Si on』には行かなくちゃならない。その時に確認すればいいことだよ。」

瑛士は美鈴を制して淡々《たんたん》と言った。

「えっ!？」

俺と美鈴は同時に声をあげ、瑛士を見る。

「な、何言っただよ！それは危険過ぎる！そんなことしたら俺たちまで殺されちゃモガ……」

「晃！シッ！」

美鈴が鋭く睨み、俺の口を押さえる。さっきから『死ぬ』とか『

殺される』とか話していたため、喫茶店の店員さんや周りのお客さんたちが不審そうな目を俺たちに向けている。

「……崎田、出ようか。」

瑛士がパソコンをバックにしまいながら立ち上がる。

「ああ……そうした方がよさそうだな……」

俺たちは会計を済ませて店を出た。

「まだ話さなきゃならないことがあるが、それはお前の部屋に行つてからにしよう。」

瑛士は足早に東京駅に向かって歩く。

「その前に寄らなきゃならないところがいくつかあるが、付き合ってくれるか？」

「どこに行くんだ？」

「……秋葉原だ。」

瑛士は秋葉原電気街の路地裏の露店で部品やら何かの基盤やらを大量に買い込んだ。

「そんなもの何に使うんだ？」

「後でわかる。それよりお前の部屋にバットはあるか？」

「バット？バットって野球で使うあのバット？」

「そう。そのバットだ。」

「俺は部活とかには入ってないから持ってないな。」

「それならその代わりになるようなものはあるか？」

俺は自分の部屋の中にあるものを思い出してみたが、代わりになるようなものは思い当たらなかった。

「んゝ……たぶん、ないな……」

「わかった。」

瑛士はつかつかとスポーツ用品店に入ると金属バットを1本買った。

「そんなもの、何に使うんだ？ 犯人と戦うのか？」

瑛士はため息をついた。

「バカか、お前は。相手は怨霊だぞ。バットなんかで敵うかなよ。」

「お……怨霊！？」

俺と美鈴は顔を見合わせた。

「詳しくは崎田の部屋に行ってから話す。」

頭のいいヤツのすることはよくわからん。まあ、瑛士のことだから何か根拠があつてのことだろうと思い、俺はそれ以上は追求しなかった。

瑛士はその後上野駅に行き、チケットを三人分買った。

「瑛士……そんなの買つてどこ行くんだ？」

「明日俺たちは新潟に行かなければならない。」

「新潟？ 何で？」

「それも後で説明する。……生きてたらな。」

俺は背筋がゾクツとした。美鈴も顔が青ざめている。そうだ……俺たちは200人以上人が死んでいる事件に関わろうとしている。失敗すれば今日にも死ぬかも知れないんだ……清水さんたちのように……

大量の食料を買い込んでから俺たちは『あすなる荘』に着いた。もう日は暮れて辺りは暗くなっている。

「美鈴……今日はマジでヤバいと思う。昨日とは状況が違うし、来ない方がいいんじゃないか？」

俺は美鈴を危ない目に遭わせたくなかった。

「ああ、その方がいいかも知れないな。冗談抜きでこれから俺たちがしようとしていることは命懸けだ。何が起きるかわからない。」

瑛士も同じ考えのようだ。

「……嫌よ！ここまで来て仲間外れなんて納得できない！ここで逃げたらアタシは沙江子に顔向けできないわ！お願い！最後まで付き合わせて！アタシは本当のことが知りたいの！」

美鈴の気持ち痛みほど伝わってくる。これ以上俺は何も言えなかった。

「わかった。何があっても俺が絶対守ってやる。だから危なくなったら俺に構わず逃げろよ！」

「うん……わかった。晁、ありがとう……」

美鈴は大きな目をうるうるさせている。

やべっ！マジかわいい！

「ラブコメモードはそれまでだ。」

はっ！……瑛士の存在を一瞬忘れてしまっていた。瑛士……すまん！

「それじゃ、飯でも食いながら昼間の話の続きをしようか。」

俺たちは部屋に入り、買ってきた食料をひろげた。瑛士はまたパソコンで変死者リストを開く。

「そういえば、この▼マークは何だ？付いてる人と付いてない人がいるけど……」

俺は画面を指差しながら瑛士に聞く。

「これは『加害者』もしくは『傍観者』だ。」
傍観者ぼうかんしゃ

「つまり『いじめに関わった者たち』の印だ。」
「！」

そうか……『Sion』……『学校裏サイト』のようではあったが、ほとんどが『いじめ』に関するスレだったな……

「これを見せてくれ。」

瑛士はまた別のページを開く。

【2003／3／20】

△坂巻信人 14才

〔場所〕 東京都板橋区立大東中学校体育館内用具室

〔死因〕 首吊り自殺

〔備考〕 東京都板橋区立大東中学校2年

【2008／2／25】

△庄司明仁 18才

〔場所〕 千葉県立流沢高校野球部室

〔死因〕 頭部刺傷（スパイクによる）

〔備考〕 千葉県立流沢高校3年野球部

【2008／4／26】

△野口 孝 11才

〔場所〕 新潟県長岡市郊外山中

〔死因〕 首吊り自殺

〔備考〕 新潟県長岡市立上長岡小学校6年

「瑛士……これって……」

「ああ……『いじめられっ子』たちだ。」

「この子たちの亡くなった日付をみてみる。」

俺と美鈴は愕然とした。

「この子たちが死んでから▼マークの『いじめっ子』たちが殺されてる。」

瑛士はまた最初の変死者リストを開いた。

坂巻と野口なんて死んだ翌日に変死事件が起きている。

「この子たちが怨霊となって『復讐』しているのであれば、『Si

on』に書き込みがあるはずだ。」

俺は『S i o n』に行った時のことを思い出した。

「瑛士……確かにあったと思う。この坂巻って子の^{おおひがし}大東中……細かい日付までは覚えてないけど、うちの近くの中学校だって思った覚えがある。」

「晃……亡くなった子の遺族が書き込んだんじゃない？」

美鈴が常識的な考えを述べた。

「それに、『流沢高校野球部』……このスレッドもあった。確か、『オレは事故じゃなくて殺された』って書いてあったと思う。明仁って名で。」

美鈴はもう泣きそうだ。

「どちらにせよ、『S i o n』に行けばわかることだ。」

瑛士がそう言った時、何かが俺の記憶に引っ掛かった。

「あれっ……？　なんか大事なことを忘れてる気が……」

「どうした？」

「しっかり思い出して！」

「俺たちにも関係あることだったと思うんだけど……」

「いいさ。思い出したら言ってくれ。」

「そうね。瑛士さん、次はどうするの？」

「それだ！」

俺はやっと思いだした。

「『次はだれにしようか。』だ！」
「なによ、それ。」

美鈴が怪訝けげんそうな顔をする。瑛士の顔色は真っ青だ。

「まさか……そう書いてあったのか……？」

「ああ……『復讐は終わった。次はだれにしようか。』って書いてあった。」

「最悪だ……」

「何が最悪なの……？」

美鈴が不安そうに聞いて来る。瑛士の口から出たのはまさに最悪の状況だった。

「リストでマークのついていない人たちがいるだろ？」

瑛士はまた今年のリストを開く。

「沙江子とか7才の女の子とかね。」

美鈴はリストを目で追っている。

「そう。オレは始めこの人たちはいじめの復讐に巻き込まれたもの
と思っていた。」

「違うの……？」

「復讐が終わればそれで目的は達成されたはずだ。しかし『次』と
いうことは復讐の対象が広がったことを意味する……」

「つまり……？」

「復讐の対象は『人間全体』だ。」

「なっ……」

美鈴は言葉を無くした。

「じゃ復讐が終われば無差別に無関係の人たちを殺していくっていうこと!？」

「……そうだ。」

「そんな……」

「もう清水さんの事件解明どころじゃなくなってきたな……」

俺は瑛士たんせいの端正な顔を見る。瑛士はどうするつもりなんだろう。

「崎田のお陰でやることがだいぶ絞り込めてきたな。」

瑛士はパソコンを閉じる。

「一、庄司明仁もしくは坂巻信人の書き込みの日付の確認。二、メニューの確認、この二つに絞り込んで『S i o n』を見てみよう。あまり長い時間アクセスするとヤツらに見つかる。タイムリミットは5分だな。」

「5分……」

俺にはとてつもなく短い時間のような気がする。

「まだ解明しなければならぬ謎はあるが、今のところこれでいいだろう。」

「瑛士……謎って……」

「また後で話す。『S i o n』から無事戻れたらな……」

俺は覚悟を決めた。

「それじゃ、『Sion』に行ってみようか。」

瑛士は散歩にでも行くような感じだ。

「まず、崎田は紙と鉛筆を用意してくれ。」

「何するんだ？」

「日付やメニューなど必要なことをメモするのに決まってるじゃないか。」

「そっか！」

俺はメモ用紙の束と鉛筆を準備する。

「あと、バットは手の届くところに置いといてくれ。」

美鈴はパソコンのある机の横にバットを立て掛ける。

「次に美鈴ちゃんは時間を計ってくれないか。」

「わかったわ。5分ね。」

「そうだ。これで準備OKだな。パソコンを起動するぞ。」

瑛士は電源を入れる。

ヒューイイイイイイイン……

パソコンが起動する。

「瑛士……どうやって『Sion』に行くんだ？」

「崎田……キタローの書き込みにリンクが貼ってあったって言うってたよな。」

「ああ……」

「じゃ『2ちゃんねる』だ。」

瑛士は『2ちゃんねる』を開き、『一人暮らし』スレッドを探す。

「日付は25日だったよな……あつた……これだ……」

キタロー『楽しい掲示板を見つけました。ぜひ来てください。』

「……覚悟はいいか？」

「ああ……」

俺はメモと鉛筆を握り締める。

「うん……」

美鈴は腕時計をストップウォッチモードにして、いつでもスタートできるようにしている。

「じゃ、クリックするぞ……」

カチッ……

微かに音がして、画面が真っ白に変わる。美鈴はストップウォッチをスタートさせる。数十秒ほどすると、画面に『六芒星』ろくぼうせいが現われる。

「間違いないなさそうだな。」

じゃ、やっぱりキタローは……

俺は胸が締め付けられる思いだった。
すぐに画面が変わる。今度は真っ黒な画面だった。
しばらくすると画面に文字が浮かび上がる。

『S i o n』……

指で書きなぐったような赤い字で書いてある。

「これか……」

瑛士も緊張しているみたいだ。
……残り時間4分

「早く庄司か坂巻の書き込みを探そう。」

俺は焦った。この画面は人を不安にさせる何かがあるみたいだ。

「ちょっと待て……」

瑛士は左上のファイルメニューから『オフライン作業』をクリックした。

「無駄だとは思うが、少しは時間稼ぎになるだろう……」

瑛士は画面を下にスクロールさせた。

「イヤッ！何これ……！」

美鈴は小さく悲鳴を上げた。

……【○△中学校1年C組みんな死ね！】

……【井上課長に死を！】

「ホントに学校裏サイトみたいだな……ん？」

かなり上の方にあるスレッドタイトルを見て、瑛士の動きが止まった。

【誰か！頼む！直樹】

【なぜ明日香まで！絶対許さねえ！義久】

【もう嫌だもう嫌だもう嫌だもう嫌だ 太一】

【オレが悪かった。許してくれ！ 雅哉】

「これって……」

俺は何となく見覚えのある名前だと思った。

「『新潟県無差別大量殺人』の被害者たちだ。」

ドクン！

俺の心臓が大きく鼓動した。美鈴は口を抑え、息をのんでいる。

「瑛士！見てみよう！何かわかるかも！」

「だめだ！時間がない！美鈴ちゃん、残り時間は？」

「ハッ！……あと2分38秒よ！」

もうそれしかないのか！

瑛士は画面をさらにスクロールさせた。

【ボクの功罪 キタロー】

「瑛士！キタローだ！」

「何てことだ……キタローまで……」

瑛士はスレッドを開いた。

1..キタロー2008年4月9日

ボクは確かに明仁を見殺しにした。でも何で死ななきゃならないんだ！？

「瑛士……これ……」

「ああ……」

俺は日付をメモした。瑛士はスレッドを溯らせた。

6..瑞希2008年4月25日

ウィッシュが死んだ。

次はだれにしようか。

「清水さんだ！」

「沙江子……！」

5..瑞希2008年4月25日

俊夫が迎えに行くって。

「俊夫？……『迎えに行く』？」

俺は名前と日付をメモする。

「崎田！時間がない！庄司か坂巻を探すぞ！」

瑛士の声を聞いて俺はハツとした。……残り時間1分30秒
瑛士はさらに画面をスクロールさせていった。すると下に見覚え
のあるスレッドタイトルが現われる。

【千葉県流沢高校野球部】

「これだ。」

瑛士はスレッドを開く。

1…明仁2008年2月26日

俺は事故で死んだんじゃない！アイツらに殺されたんだ！

「やっぱり……庄司明仁だ。」

33…明仁2008年4月9日

俺の復讐は終わった。

次は誰にしようか。

32…明仁2008年4月9日

山崎のところに行くつもりが別のヤツのところに行ってしまった。

アイツは誰だ？

今度こそ山崎に復讐してやる。

31…明仁2008年4月9日

そう何もしなかった。止めなかった。同罪だ。

俺は山崎のところに行く。

お前のところには悠姫が行くそうだ。

死ね。

30..瑞希2008年4月9日

次？

次ってどういうことだ！？

俺は何もしていない！

「二人とも！あと30秒しかないわよ！」

美鈴が叫んだ。

「チッ！」

瑛士は舌打ちすると、画面をスレッドタイトル画面に戻し、一気に最下部までスクロールさせる。

『メインメニューへ』

「あった！これだ！」

瑛士は“オフライン作業”のチェックを外した。その時、瑛士の動きが止まる。

「あと10秒！」

美鈴はもう泣きそうだ。

「瑛士！どうした！？時間がないぞ！」
「チィッ！」

瑛士は“メインメニューへ”をクリックした。

怨絞 怨裂 怨噛 怨虫
怨滅 怨打 怨剥 怨搾

俺は大急ぎでメニューを書き取っていく。

「晃！急いで！もう時間よ！」

俺は焦りのためうまく字が書けない。

「も……もうちょっと……」

あと半分だ！

ちくしょう！何でこんな画数の多い漢字ばかりなんだ！
すると、勝手に画面上をポインタが動き始める。

「崎田！見つけた！急げ！」

ポインタは『怨絞』の上で止まり、

カッチッ……

勝手にクリックした。

『怨絞…ダウンロード開始 10%』

「崎田！まずい！ダウンロードが始まった！」

「あ……あと三つ……」

『怨絞…ダウンロード 20%』

「晃！」

美鈴はもう絶叫していた。俺はますます焦って、なかなか書けない。

『怨絞…ダウンロード 30%』

俺は手が震えてうまく書けない。

『怨絞…ダウンロード 40%』

あと二つ！

『怨絞…ダウンロード 50%』

「晃！もう半分終わっちゃったよ！」

美鈴は泣き出した。

『怨絞…ダウンロード 60%』

あと一つ！

『怨絞…ダウンロード 70%』

あと一文字！

『怨絞…ダウンロード 80%』

くそっ！がんばれ！俺！

『怨絞…ダウンロード 90%』

「終わった！」

瑛士は電源ボタンを押し、強制終了させようとする。

『怨絞…ダウンロード完了』

「瑛士！強制終了は無駄だ！」

俺はコンセントに飛び付き、電源コードを引き抜く。

「よし！これで大丈夫……」

「きゃあああああああ！」

ガシッ！

ディスプレイから真っ白い手が伸びて、瑛士の首を締めている！

「ぐ……がっ……！」

瑛士の顔がみるみるうちに赤くなっていく。

「くそっ！」

俺は瑛士の首を締めている手に飛び付き、引き剥が^はそうとする。

「うっ……うわっ！」

手は氷のように冷たい。それにものすごい力だ！

「ぐ……ぐ……ごふっ……」

瑛士の顔はもう紫色に近い。

その時……

ぬるう！

ディスプレイから黒髪の頭が出てきた！

「うわああああああ！」

俺は恐怖のあまり絶叫する。

「晃!! どいて!!」

ガッシャアアン!!!

美鈴がディスプレイをバットで破壊した。

「こんのおおおお!!」

ガシャン! ガシャン! バリン!

美鈴はパソコンを徹底的に破壊した。

もう真っ白い手も黒髪の頭も見えなかった。

「ハア……ハア……ハア……」

俺は腰が抜けて尻餅しりもちをついていた。

「ごほっ！ごほっ！……」

よかった……瑛士も何とか無事みたいだ。

「ハア……ハア……ハア……ヒック……ヒック……」

美鈴はまだバットを持って立っている。顔は涙でぐちゃぐちゃだ。

「美鈴……ありがとう……大丈夫か？」

「ヒック……晃……アタシ……ヒック……怖かったあゝ！」

美鈴が抱き付いてくる。

「み、美鈴……お、おい！」

「怖かったあゝ！あああああゝゝん！」

俺は美鈴の肩をそっと抱き締める。

……

美鈴はやっと落ち着いて、パソコンの残骸を片付け始めた。

「瑛士……大丈夫か？」

「ああ……あ、あ……あゝあゝ……声が変わだ……」

「あれだけ首締められればな。でも……無事でよかった……」

「爺ちゃん……」

「は？」

「爺ちゃんに会った。まだこっちに来るなって。」

「瑛士……お前の爺ちゃんって……」

「3年前に亡くなったよ。老衰ろうすいでね。」

瑛士は首をさすりながらニヤツと笑う。

「ハハッ！」

「ハハハッ！」

俺たちは『S i o n』から生還できたことを心から喜んだ。

「もう、ホントに怖かったんだから……でも、瑛士さんが無事でホント良かった……」

「美鈴ちゃんは命の恩人だな。ありがとう。」

瑛士は美鈴に頭を下げる。

「アタシ二人が殺されちゃうって思ったら、何も考えられなくて夢中でバット握ってた……」

まさかあそこでまたア○カが出るとは思わなかった……

「瑛士……バットを買ったのはこうなるのを予測してたからか。」

「ああ……バット本来の使い方ではないがな。……最終手段だと思ってた。」

「危なかったな……」

「そうだな……でも、これでかなり解明できた。片付けをしてから情報を整理しよう。」

俺たちは片付けをして飲み物で一息つく。

あゝあ……俺のパソコン……買ってもらってからまだ一ヶ月も経ってないのに……怨霊から助かって、親父に殺されるな……

「それじゃ、情報を整理しよう。」

瑛士はまたノートパソコンを開いた。それを見て美鈴はビクツとして、身を固くした。

「美鈴ちゃん、このパソコンはネットにつないでないから大丈夫だよ。」

瑛士は微笑みながら言った。

「何だかアタシ、もう一生パソコンに触れないかも……」

「何言ってるんだ？パソコンより怖いのは携帯電話だよ。携帯は電源を切らない限り常時インターネットにはつながってる状態なんだよ。」

俺たちはハッとして、慌てて携帯をOFFにした。

「そっか……沙江子は携帯からだったもんね……」

俺はさっきの黒髪の頭がディスプレイから出てきた様子を思い出して身震いした。

「崎田……メモを見せてくれ。」

俺は散らばっていたメモを集めて、テーブルに並べた。

「何よ!? これ!?!」

美鈴が大きな声を出した。

「アンタメニュー全部ご丁寧に書いてたの? こんな全部書かなくていいじゃない!?!」

「えっ……だってちゃんと書かないとダメだろ?」

「全部“怨”の字がついてるんだから、二文字目だけ書けばいいでしょ!?! それに四つは覚えてたんだから、書くのは残りの四つでも良かったし!」

俺は愕然がくぜんとした。美鈴の言う通りだ……

俺は焦ってそんなことにも気付かず、みんなの命を危険きけんに晒さらしてしまった……

「俺って何てバカなんだろう……」

俺はかなりヘコんだ。

「崎田……気にするな。始めから二人でメモするとかしておけばよかったんだ。オレの作戦ミスだ。」

「そうそう。携帯のカメラで画面の写真を撮るとかね。」

美鈴が言うと、瑛士は首を振る。

「美鈴ちゃん、それはダメだ。ヤツらのことをもっと調べてからじゃないと携帯の写真だって危険だ。」

「あっ……そうか……」

俺たちは改めて身震いした。

「よし、それじゃわかったことをまとめていこう。」

瑛士は『変死者リスト』を開き、重ねて『いじめられっ子』リストを開いた。

「犯人は怨霊だ。間違いない。」

俺と美鈴は頷いた。

「そんな非科学的なことは信じたくなかったが、もう信じざるを得ないな。」

瑛士は首をさすりながら言った。首にはくっきりと手形が残っている。

「警察に届けた方がいいんじゃない？」

美鈴はあの婦警さんを思い出しているんだろう。でも御手洗刑事のあのいかつい顔を思い出すと、絶対に信じてくれないと思った。

「……最終的には警察に動いてもらわないと、この事件は解決できない。」

瑛士がそういうからには何か考えがあるんだろうと思い、俺と美鈴は瑛士の次の言葉を待った。

「警察に動いてもらうためには、この呪いのシステムを解明して、根拠に基づいて説明しなければならぬ。証拠があればなおいいな。」

「証拠？」

俺と美鈴は声を揃えて驚いた。

「まず、状況証拠だ。」

瑛士はメモを取り上げた。

「庄司明仁の書き込みは死んだ次の日だった。」

瑛士はパソコンとメモを並べた。

庄司明仁は2月25日に野球部の部室で死んだ。

『Si on』の書き込みの日付は26日だった。確認できなかったが、坂巻信人もそうだろう。

「そして、キタローだ。」

キタロー＝横山瑞希ということもわかった。瑞希は明仁のスレッドによれば、『悠姫』に殺されたことになる。

瑞希の死因は『絞殺』だ。明仁は4月9日に山崎に復讐しに行った。山崎は『全身粉碎骨折』で殺されている。さらに笹木と香取も頭部に『打撲』を受けている。

「次に清水沙江子さんだ。」

瑞希のスレッドによれば、清水さんを殺したのは『俊夫』。清水さんの死因は『動物等による噛み傷』。

「これらの情報と崎田がメモしたメニューを合わせるとこうなる。」

瑛士は新規作成画面を開き、打ち込んでいく。

怨絞↓（ ）悠姫

怨裂↓？

怨噛↓（ ）俊夫

怨虫↓？

怨滅↓？

怨打↓庄司明仁

怨剥↓？

怨搾↓？

「ちょっと待って瑛士……曾根崎さんの話だと、清水さんは殺される直前『ゴキブリ』がどうか言ってたって……」

「そうか……ゴキブリは『虫』か……じゃ『怨虫』の可能性もあるわけだな……」

怨噛 or 怨虫↓（ ）俊夫

「ここで一つ目の謎だ。」

「謎！？　そういや『Sion』に行く前にもそんなこと言ってたな？」

「ああ、それとは別だ。」

俺は気になったが、黙って瑛士の話聞くことにした。

「一つ目の謎は『なぜメニューがあるのか』ということだ。」

「どういうこと？」

美鈴が聞く。

「怨霊ならどういう殺し方だってできるはずだ。なぜ特定の殺し方をする必要がある？」

そういえばそうだ。

怨霊ならとりついて殺すことだってできるだろうし、事故を装って殺すこともできるはずだ。

「アピール……かな？」

美鈴が答える。

「そう。これは自分が復讐したとアピールするためだろう。世間に……」

「でも、おかしいぞ。野口 孝のスレはなかったのに、被害者のスレだけがあった。」

殺し方は、

菊地雅哉が頭部損傷（破碎）……メニューの中で当てはまりそうなのは『怨滅』

『滅』は瑛士によれば、『摩滅』^{まめつ}の『滅』だろうということだ。

中山義久と妹の明日香が穿穴^{せんけつ}多数、臓器^{ぞうき}搾取^{さくしゅ}……当てはまるのは『怨搾』

田中太一は全身損壊（バラバラ殺人）……当てはまるのは『怨裂』

「そうか！『怨裂』は坂巻信人だ！大東中の2年1組は全員バラバラ殺人だった！」

「なるほど。」

瑛士はパソコンに打ち込む。

怨裂↓坂巻信人

「さらに清水さんは瑞希のスレッドに書き込んでいるにも関わらず、『俊夫』に殺された。」

そうだ……『俊夫が迎えに行く』と書いてあった。

「メニューは野口が自殺する前からあったことは崎田の話からも確実だ。明仁や信人は直接復讐している。瑞希や野口は直接手は下していない。ここから考えられるのは、『直接手を下せる怨霊と手を下せない怨霊がいる』ということと、『直接手を下せない怨霊は下せる怨霊に殺人を頼む』ということだ。」

「『手を下せる怨霊』というのが『メニュー』の怨霊か……」

俺はメニューを確認する。

「ん？それじゃ、瑞希たち他の怨霊は何をするんだ……？」

俺は嫌な予感がした。

「『仲間作り』だ。」

「つまり、『Sion』の……」

嫌な予感が当たった……

「そうだ。言ってみれば『呪いのサークル』だな。」

「そんな……じゃ沙江子は瑞希くんに誘われたっていうの？」

美鈴にはショックな話だろうな……

「『2ちゃんねる』や『Si on』にHNで書き込んでいることからも、間違いない。」

俺はまた愕然^{がくぜん}とした。だから対象が人間全体なんだ……しかしこれじゃ『マルチ商法』と同じじゃないか！『Si onサークル』のメンバーはネズミ算式^{さんしき}に増えていく……

「瑛士……このままメンバーが増えていくとどうなっちゃうんだ？」
「多少期間的な前後はあるだろうが、早くて一か月、遅くても半年で人類は滅亡するだろうな……」

俺は目眩^{めまい}がした。

人類滅亡って……いち大学生の手に負えるレベルの話じゃない！
「そんな……だってここ5年で200人以上でしょ？200人は少なくなけれど、人類滅亡って数ではないわ！」

ホント美鈴はいつも常識的なことを言ってくれる。

「環境だ……」

瑛士は静かに言った。

「インターネット環境が5年前と今では全然違う。パソコンや携帯電話などでのネットの普及率とサークルメンバーの増加率を考えればそんなところだろう。」

「瑛士……どうすればいいんだよ！」

俺は死にたくない！美鈴も死なせたくない！

「サークルを潰すにはその主催者を潰せばいい……」

「主催者って『メニュー』の怨霊たちか？」

「いや、主催者は一人だ。」

「どの『メニュー』の怨霊なんだ？」

「……たぶん『悠姫』だ。」

「どうしてそう言えるんだ？」

「ヒントはキタロー……瑞希のスレッドタイトルだ。」

【ボクの功罪 キタロー】

瑛士はパソコンに打ち出す。

「崎田、『功罪』ってどういう意味だかわかるか？」

「えっと……罪？」

国語苦手なんだよな……

「晃、『功績と罪過^{ひしつか}』よ。」

美鈴が教えてくれる。

「功績と罪過……罪過って『やっちゃった悪い事』って意味だろ？
功績は？」

「『あることを成し遂げた手柄。すぐれた働きや成果』」

やっぱり美鈴って頭いいな。

「“手柄”ということは、仲間を誘った手柄か！」

「そうだ。そして手柄が認められれば“昇格”できる。信人や明仁

のように、怨念の強いヤツは最初から“幹部”つまり『メニューメンバー』になれるが、それ以外のヤツは“功績”を立てて“昇格”するしかない。」

そうか。だから瑞希も明仁も『次は誰にしようか』と書き込みしていたのか。

人の命を何だと思ってるんだ！

「“昇格”できなきゃどうなるんだ？」

「それは聞いてみないとわからないな。」

俺はあの黒髪の頭……『悠姫』に聞きたいとは思わなかった。

「でもそれだけで『悠姫』が主催者だっていうことはわからないだろう？」

「アタシわかった！“順番”ね？」

「その通りだ。メニューは後から追加される……“昇格”してな。」

俺はメモを見る。一番最初の『メニュー』は『怨絞』……『悠姫』だ！

「なるほどね。でも主催者がわかってても警察に出す証拠にはならないだろう？」

「そうだ。そのために二つ目の謎を解く必要がある。」

「二つ目の謎……」

「『なぜダウンロードか』だ。」

「そっか、ネットを通じて殺しに行けるのに、何で時間のかかるダウンロードをするのかわからないな。」

「そうね。『Sion』とつながった時点で行けばいいのよね。」

美鈴、何気に恐ろしいこと言ってるぞ。

「この呪いのシステムを解明できれば警察を動かせる。」

「でも解明したって信じてくれるかな？」

「崎田、信じざるを得ないさ。仲間を殺した手段だからな。」

「仲間って……あっ!!」

俺は閃ひらめいた！

「新潟！」

「そう。警官が2名殺されてる。警察関係者が殺されてるのは新潟の事件だけだ。」

「なるほど、だから明日新潟に行くのか。」

「晃、“今日”よ。」

驚いた……もう日が変わっている。

「今日はこのくらいにするか？」

瑛士は女の子の美鈴に気を遣つかっているようだ。

「待って。二つ目の謎の説明がまだ終わっていないわ。」

美鈴は聞く気満々だ。

「崎田、いいのか？」

「美鈴がiiiって言うならいいさ。」

「OK続けよう。」

「この謎が解ければ『悠姫』を止める手段ができる。」

瑛士は昼間秋葉原で買った大量の部品を見る。

「解明のヒントは警官の死んだ“場所”と“死因”だ。」
「どっちももうわかってるだろう？」

俺は変死者リストを見ながら答える。

「崎田、警官の死んでいた場所はどこだ？」

「んーと、『新潟県長岡市内、上記中山義久宅』。」

「死因は？」

「『全身皮膚 剥離^{はくり}』、明らかに『怨剥^{おんはく}』だな。」

「中山義久の死因は？」

「『穿穴多数、臓器搾取』……『怨搾^{おんさく}』だ。あっそうか！同じ場所
で殺されてるのに、死因が違う！」

「同じ死因は？」

「工藤直樹……場所は中山義久宅前？」

「パトカーの運転席に座っていたそうだ。」

警官二人とは離れている。

「携帯とパソコンの違いは何だ？」

「有線と無線……」

「最近は無線でネットとつながるパソコンもあるが、基本的にはそう
だ。」

瑛士はパソコンを閉じた。

「変死している人たちの中には明らかにパソコンのない場所で殺さ
れてる人たちがいた。」

「沙江子もそうね……」

「清水さんは『Sion』に携帯からアクセスしていた。しかし、野口はスレッドを立てていなかった。工藤少年はパトカーの中で『メンバー』に殺された。警官は『Sion』にアクセスしていたとは考えられない。以上のことから考えられる有線と無線の違いとダウンロードとの関係性。この謎が解ければ『Sion』に、『悠姫』に対抗できるかも知れないんだ。」

「やっぱり直接行って調べてみないとわからないわね。」

「それに、仲間が犠牲になっている警察なら俺たちの話を少しは信じてもらえる可能性があるからな。」

そこまで予測して今日のうちに全て準備していたのか。

こいつの頭の中はどうなってるんだ？まるで『L』じゃん。

「さあ、明日は長旅になる。今日はこの辺でもう休もう。」

瑛士の声はもうだいぶ元に戻ってきていた。

「美鈴、今タクシーを呼ぶからちよつと待ってて。」

俺は携帯の電源をONにする。

？ 美鈴の様子がおかしい。

「晃……今日ここに泊まってってもいい？」

「エエッ！そ、それはヤバくないか！仮にも俺たちは男だぞ！」

「崎田、オレは構わんど。美鈴ちゃんもこんなことがあったばかりじゃ心細いだろう。」

美鈴は赤くなって小さく頷く。

「わかった。何もしないから心配するな。俺たちは床で寝るから、

美鈴は俺のベッドで寝てくれ。」

「美鈴ちゃん、崎田が何かしようとしたら、パソコンと同じ目に遭わせていいよ。」

「瑛士！」

「ハハッ、冗談だよ！」

「アハハッ。晃、ありがと。シャワー借りるね。」

美鈴は自分のバックを持って浴室に行く。

準備いいな。もしかして最初からそのつもりだったのか？

「崎田。」

瑛士が真面目な顔で話し掛けてくる。

「覗くか？」

「バ、バカ言え！」

俺は焦った。

そうだ、あのエロサイトを教えてくれたのはこいつだった。俺は美鈴のために今夜は寝ないで見張ることにした。



翌朝は昨日の最悪の出来事が嘘だと思えるようないい天気だった。

「おはよう。」

んっ？美鈴が何でいるんだ？

あれっ学校は？って……

……ああー！！寝ちまったー！

「朝ご飯できてるよ。瑛士さんはもう食べてるよ。」

瑛士……昨日の夜は遅くまで何かを作っていた。何を作っているのか聞いても『後でわかる』としか言わなかった。アイツ寝てないのか？

「アハハ！晁の頭最高ウケるー！」

どうやら寝癖ねぐせがひどいらしい。俺は顔を洗って、寝癖を直した。

時間は朝の7時。上越新幹線は10…00大宮発だった。

「いただきます！」

美鈴の作ってくれた朝食はご飯にみそ汁、目玉焼きにハムだった。黄金の組み合わせじゃないか！日本人の朝食は和食に限る！！

くうー！ちゃんとした朝食なんて一か月ぶりだ……

「冷蔵庫にあるもので適当に作っただけだから、あんまりおいしくないかも……」

美鈴は謙遜けんそんしてそう言ったが、最高にうまかった。

「とんでもない！最高だよ！……うん！うまい……最高うまい！」
「美鈴ちゃん、料理上手だね。いいお嫁さんになるよ。」

美鈴はかなり照れていた。高校時代からの美鈴からは絶対に想像できない。こんな一面もあるんだ……

俺は昨夜、泣きながら抱き付いてきた美鈴を思い出し、これから何があっても美鈴を守ろうと決意した。

「ところで瑛士……新潟には何日くらい行くことになるんだ？俺あんまり金持っていないんだけど……」

「金の心配はするな。オレに任せろ。こういう時は素直に親の脛^{すね}を齧^{かじ}るさ。」

さすがお金持ちのお坊ちゃん。

「瑛士さん……すみません。」

美鈴はすまなそうに言った。

「いいさ。崎田がいなければ今ごろはオレも瑞希に誘われて『Sion』のメンバーになってたかも知れない。美鈴ちゃんは朝飯の恩があるし、何よりも命の恩人だ。」

「瑛士……がんばろうな。」

「ああ！」

俺は『Sion』という単語を聞いて改めて身を引き締めた。



大宮から長岡までは1時間ちよつとしか掛からなかった。新潟って遠いイメージがあったけど、実家帰るより近いじゃん。しかも田舎かと思ったら結構都会だ。

俺たちはとりあえず駅前のデパートの食品街でお昼を食べることにした。

「瑛士、新潟まで来たのはいいけど、この後はどうするんだ？」

「まず今晚泊まるホテルを探す。その後長岡北警察署に行く。」

「例の事件があったところの警察署ね。」

「そうだ。」

「でもいきなり行っても相手にしてもらえないんじゃない？」

「……話のわかる人がいてくれることを期待するしかないな。」

「もしいなかったら？」

俺は瑛士には何か奥の手があるような気がしていた。

「……親父の力を借りるしかないな……」

瑛士の父親は静岡でも有力な医学者だ。人脈も半端はんぱじゃないはずだ。

「まあ、案外スミーズに話が進むかも知れないぞ。……これは今朝発売されたものた。」

そう言って瑛士は一冊の雑誌を出した。

「あらっ？それってゴシップ記事で有名な女性週刊誌じゃない？」

『週刊女性生活』

芸能人のスキャンダルから政治家の汚職まであることは誇張して、
ないことは捏造ねつぞうして報道する、かなりうさん臭い週刊誌だ。

「何でそんなもん持ってたんだ？瑛士ってそういう趣味あったんだ。」
「ゴシップ雑誌をバカにするな。意外と新聞やテレビより真実を伝えて
いる場合もあるんだぞ……この記事を見てみる。」

『新潟県無差別大量殺人事件の犯人は怨霊！？』

……事件の前日に同小学校の児童が自殺……

……被害者の遺留品はほとんど遺族に返されているのに、何故か
携帯電話だけは返却されておらず……

……現場を指揮していた元警視庁エリート刑事が「これは人間の
仕業ではない。」とコメントしていたが、翌日の新潟県警の公式発
表では一転して強盗殺人となっており、捜査方針の一本化が……

「瑛士、これ……」

「ああ……」

コメントをした刑事の写真と名前が掲載されていた。

『長岡北警察署警部補 八前信彦やまのぶひこ38才』



ふあっ……ぶあつくしよー！

「うゝ……」

「八前さん風邪ですか？季節の変わり目には気をつけてくださいね。」

「ばっかやろ！風邪なんかひいてねえよ！……誰か噂うわさしてんのか？」

おれは机の上に『週刊女性生活』を投げ出した。

全くはた迷惑な記事だ。お陰で今日は朝から署長にこっそり搾しぼられた。

「八前さん、昼飯どうしますか？」

同僚の草薙和貴くさなぎ かずきが25才が聞いてきた。去年配属されたばかりのペーペーだ。

「ああ……署長の視界に入るとまたネチネチ言われるから、外に食
いに行くか。」

「ついてっついていいですか？」

「ああ……」

草薙は高校時代柔道をやっていたわりには細身で身のこなしは軽い。すぐに課長に外出許可を取ってきた。

「何て言って来たんだ？『飯食ってくる』じゃ許可下りねえだろ？」

「はい！もちろん『聞き込みに行く』つつってきました！」

「……何だ？“もちろん”って？」

「……だって、八前さん行くつもりっすよね？工藤のところ……」

「バレてたか……おっかさんはまだ落ち着いちゃいないだろうがな……それにまだ線香もあげてねえ。」

「自分、車回してきます！」

草薙は身のこなしも軽く、出ていった。

中山家と田中家、あと菊地家に野口家か……こりゃ、今日は直帰ちよつきだな……

工藤の家は暖かな春の陽射しひかりの下でひっそりとしていた。

「ごめんください。」

「はい……あ、刑事さん……昨日はたいへんお世話になりました。」

工藤直樹の父親だ。電気工事技師をしているとかで、いつもマンホールに入ったり、電柱に登ったりしているそうだ。

「この度はご愁傷様しゆうしょうようです。直樹くんのご遺体は明日には自宅に帰って来られるようです。ご焼香だけでもさせていただいていいですか？」

「刑事さん……お忙しいのにすみません。」

おれと草薙は客間に通された。
簡単に作られた祭壇の、白木しろきの位牌いはいに向かって線香をあげた。

「ナンマンダブ……」

「刑事さん!!」

手を合わせ終わったところで、金切り声で呼ばれた。

「直ちゃんがお化けに殺されたなんて！バカにするのもいい加減にしてください!!」

あちゃー、やっぱ来たよ、この母ちゃん……

「工藤さん、あれは週刊誌が勝手に書いたガセネタです。犯人は我々が責任を持って……」

「あれっ！？八前さんでも確かに言いましたよ。“これは人間の仕業じゃない”って。」

横から草薙が余計な口出しをしてきた。

「バ、バカ！余計なこと言うな！……え、えくと、お母さん。あまりにも非人道的なため、つい口走ってしまったことであって、決して犯人を逮捕できないなどということではありません。」

工藤直樹の母親は般若はんにゃのような顔で睨にらんでいる。ここは泥沼になる前に退散した方が良さそうだ。

「えくと、お父さん、直樹くんの部屋を見せていただきたいのです。がよろしいですか？」

「ええ……どうぞ……」

「直ちゃんの物を勝手にいじらないでくださいね！」

俺は母親に敬礼した。

「ご協力感謝いたします。」

工藤直樹の部屋は、アニメのポスターやゲームソフト、パソコン、テレビ、漫画雑誌などで溢あふれていた。

「それじゃ、私は下にいますので、何かありましたらお願いします。」

父親は階下かいかへ降りて行った。

「かあ〜！贅沢ぜいたくなもんですね〜！」

草薙はゲームソフトを見ている。

「ま、あのお母ちゃんだからな。猫可愛ねこかわいがりににしていたんだろ。」

おれは机上のパソコンが気になっていた。おれはパソコンを起動させた。

「ああっ！八前さん、いいんすか？勝手に触っちゃって。あのお母さんに怒られますよ！」

「いいんだよ！捜査だよ！捜査！」

おれは履歴を見てみた。ほとんどはゲームだったが、『2ちゃんねる』にもアクセス履歴があった。

「なあ、草薙……今時の小学生って、『2ちゃんねる』見るかな？
「『2ちゃんねる』って総合掲示板サイトのですか？そのくらい見るんじゃないすか？」

「そうか……」

おれは履歴をそのままクリックして、開いてみた。画面に出て来たのは、『いじめ』に関するスレッドだった。名前のところには『ナエトル』と入っていた。

「工藤直樹のHNは『ナエトル』か……」

おれは手帳にメモした。

「刑事さん！勝手にいじらないでって言ったでしょ！！」

やべっ！おっかさんだ！

「あっ、すみません。捜査の一環でして……」

「捜査！？うちの子捜査してどうするんですか！？調べるならあの首吊った子の家を調べてください！！きつといじめの逆恨みさかうらである子の親が直ちゃんを殺したんだわ！！」

「お母さん、落ち着いて……」

「そうよ！きつとそうよ！かわいそうな直ちゃん……うつ……うつ……」

「おい、帰るぞ……お母さん失礼しました。とにかく、犯人はきつと捕まえますから……」

おれはパソコンの電源を切り、崩れ落ちている母親に一礼して部屋を出ていった。

中山家へ向かいながら、草薙が聞いてきた。

「八前さん、工藤直樹の通報で事件が発覚したのはわかるんですけど、何か隠してませんか？確か工藤の通報受けたの八前さんっすよね？」

確かにおれは工藤直樹の通報を受けた。

“人が殺されている”ということで、刑事課に電話が回されたからだ。

話の内容は驚愕すべき内容だった。そのまま伝えるわけにもいかず“強盗殺人”ということで緊急配備を敷いた。

工藤直樹の携帯電話はまだおれのロッカーの中にある。野口孝からのメールはまだ開いていない。工藤直樹の話を全て信じたわけではないが、全く嘘だとも思えない。

携帯電話……ダウンロード……



結局他の家を全て回り終わったのは夜も8時を過ぎていた。おれは署に戻る気にもなれず、そのまま帰るつもりだった。しかし、草薙が飲みに行きたいということで付き合うはめになった。

「八前さん、オレ悔しいんすよ。奨太しょうたの敵討かたきうちたいんすよ！」

草薙はかなり酔っているようだ。

同僚が異常な殺され方をした。警官になったからには危険は承知だが、仲間が死ぬのに慣れるわけじゃない。

おれだって亡くなった吉田さんにはかなり世話になった。階級こそ下だったが、人生の先輩として尊敬していた。

『八前……オレは一生ヒラでいい。オレは“お巡りさん”になりたかったんだ。お年寄りと世間話をしたり、小学校の交通教室やったり……ドラマみたいな事件はなくていい。いなくなった犬を探すのに汗水流せるような世の中になって欲しいんだ。』

吉田さんの優しい笑顔が思い出される。

草薙……おれだって悔しいさ。でもな……

「草薙……あのな……」

「……」

「草薙……」

草薙は寝てしまった。頬には涙の跡が残っている。草薙と同期だった正木巡査は殉職して上官になっちまった。

こんなんで抜かされても嬉しくないよな……草薙……

何としても犯人を見つけよう。県警の奴等よりも先に。今日の『巡礼』は決意を固めるためだ。

しかし、問題は工藤直樹からの情報だ。ダウンロードで殺人が可能なのか？ あんな殺し方が人間に可能なのか？

工藤直樹が殺された瞬間、おれは彼と話していた。現場に着いたのはその10分後。

上半身の皮膚を剥がすのにどれくらいの力が必要で、どのくらいの時間が掛かるのかはわからない。しかし、10分という短時間では絶対に無理だ。服だって着ているし、抵抗だってするだろう。ましてや、吉田さんたちを入れれば3人が一瞬のうちに皮膚を剥がされて殺されたことになる。

おれは身震いした。人間に不可能ならば『犯人』は何者なんだ？

野口 孝からのメール……返信して聞いてみれば答えがわかるのだろうか……

次の日おれは遅刻した。昨日は結局草薙と明け方まで飲んで酔いつぶれて寝てたくせに、復活してからアイツは半端なく飲んだ。

まあ、一人暮らしのおれは誰 憚ることなく朝帰りができるから構わないが……

最後の方はよく覚えていない。アイツと何話したっけ……？

「八前さんおはようございます。」

交通課の婦警がさわやかな笑顔で挨拶する。

「んあ……おあよう……」

おれはぼうっとした頭で欠伸あくびと挨拶を同時にした。

「やだ！八前さん、お酒臭い！……草薙さんから伝言です。例の携帯電話お借りしますって。あとお客さんがお待ちです……って、八前さん！八前さん！！」

おれは走り出す。

『例の携帯電話』！？おれは昨日、いや今朝アイツに何をしゃべった！？アイツは……草薙は何を聞きたがってた？

『何か隠してませんか？』

しまった……ヤバイ……

おれはロッカールームへ急いだ。

ドン！

「きゃー！」

書類を持った婦警とぶつかる。

「す、すまん！」

おれはすぐに立ち上がり、また駆け出す。ロッカールームは2階の端だ。

「もうー！八前さん！何そんなに急いでるんですか！危ない……」

婦警の怒声が遠ざかる。

頼むぞ、草薙……早まったことをしてくれるなよ！

ハア……ハア……ハア……ゼイ……ゼイ……ゼイ……

おれは昨日の深酒を悔やんだ。息が切れる……

バダン！

ロッカールームを開けるとそこには草薙が後ろを向いて立っている。

「草薙！その携帯に触るな！それは……」

草薙の前にもう一人いる！

女の子だ！

顔を見た途端^{とたん}おれは無意識のうちに叫んでいた……

「美那……！」

「美那？」

おれは自分の発した言葉に自分で驚いた。

美那がいるわけがない。

美那であるわけがない。

しかし、今草薙の前に小さく^{たたずん}佇んでいる白いワンピースの女の子は紛れもなく美那だ……^{まき}

「美那……！」

そう声を掛けた瞬間、

ズボツ！！

草薙の背中から真っ赤な手が生えた。何か赤黒いモノを掴んでい
る。それが心臓だと気付くまで数秒を有した。

「く、草薙……」

「あ、あがつ……ごつぶつ……」

草薺が口から血の塊を吐き出して、ゆっくりと崩れ落ちていく。

ズボツ！

美那が草薙の心臓を握ったまま手を抜いた。

ドサツ！

「が、がはっ！ があああ……」

俯せに倒れた草薙の口から大量の血が流れ、床に真つ赤な水溜まりが作られる。美那は掴み取った草薙の心臓を、ポタポタと血の滴を垂らしながら、自分の頬に擦り寄せた。まるで愛おしむように。

「あ……あ……」

おれは声を出せずにただ立ち尽くすことしかできない。

トクン……トクン……トクン……トクン……トクン……トクン……
…クン…………ト…………

「トクン」は、この物語の主人公である。彼は、ある日突然、世界を救う使命を負った。

草薙の心臓は美那の手の中で痙攣けいれんのような鼓動を打っていたが、やがて止まった。

ベチャ！

美那は興味を失ったように心臓を放り出し、おれをじっと見つめる。

ペタ……ペタ……ペタ……

美那が近付いてくる……

ペタ……ペタ……ペタ……ペタ……

美那がおれの前に立つ。血まみれの手がスウツと上がる。手刀しゅとうで突きの構えを取る。その指先は真っ直ぐおれの胸の中央……心臓を狙っているのがわかった。

美那が突こうとしたその瞬間、

バダン！！

誰かが部屋に入ってきた。

ザクツ！

美那の狙いそが逸れておれの左肩を切り裂いた。

「あつっ……！」

左肩に火傷をしたような痛みを感じた。

バチバチバチバチバチバチ！

眼鏡を掛けた長髪の青年が何かすると美那の身体は放電するように光り、消えてしまった。

「大丈夫ですか？」

別の青年に声を掛けられる。その横に女の子もいる。

何でバット持ってたんだ……？

おれはそこで気を失った。



美那……なんで……

……美那……草薙……和美……おれは……生きていいのか……

目が醒めると病室の白い天井が見える。隣りには見慣れない若い女が座っている。

「君……は？」

「あっ！気がつかれたんですね！よかった！先生呼んで来ますね。」

若い女は機敏な動きで出て行く。しばらくすると医者がきて、熱

や血圧を計ったりした。

「異常はないようですね。傷はしばらく痛みますが、我慢してください。」

「ありがとうございます。」

「君は……誰だい？」

「あ……すみません。アタシ吉崎美鈴と言います。東京から八前さんに会いに来たんですけど、あんなことになっちゃって……」

「そうだ！草薙は……？」

吉崎と名乗った若い女は暗い表情になる。

「お亡くなりになりました……すみません。アタシたちがもう少し早ければ助けられたのに……」

「君はいついたいなんなんだ？東京から来たって……？」

「その先はオレが説明しよう。」

男が二人病室の入口に立っている。ロッカールームでおれを助けてくれた二人だ。

「オレは新堂瑛士といいます。こっちは崎田 晃。オレたち大学生です。」

二人はベットの横に座る。

「アタシ何か飲み物買ってくるね。」

女の子が病室から出て行く。

「八前さん……俺たち変死事件について調べています。ある程度犯

人についても目星^{めぼし}がついてます。」

もう一人の青年が静かに言った。

「いったい何を……」

「八前さんはあの女の子を知ってるんですか？ 『美那^{みな}』 っていうなされてました。」

「美那は……おれの娘だ……」

第7章 八前美那

『お父さん』

杉並区立第五小学校3年2組 八前美那

うちのお父さんはけいさつかんです。悪いことをした人をつかまえます。

でも、帰りはいつもおそくて朝はみんなが起きるともういません。土よう日も日よう日もお仕事で、お買い物にはいつもお母さんと二人で行きます。

みなが「つまんない」っていうと、お母さんは、「みながしあわせにくらせるようにお父さんはがんばっているのよ」といいます。

みなはお父さんにあそんでもらった方がしあわせなのになあっておもいました。

みなはだっこしてもらうのが大好きです。とくんとくんとしんぞうの音をきくとあん心します。

お父さんお仕事がんばってね。お出かけできなくてもいいからだっこしてね。

みなはお父さんが大大大好きです。』

パチパチパチパチ……

「はい！美那さんよくできましたね。次は……」

ママ、ちゃんと聞いててくれたかなあ……あつ、笑って手を振ってる。よかった！

パパにも聞いて欲しかったなあ……

パパは明日には帰って来るってママが言ってた。『ちようきしゅつちよう』というお仕事らしい。来週の美那の誕生日には3人でお

祝いできるから、おいしいものたくさん作って待つてよっと！

キーン、コォーン、カァーン、コォーン……

「はあい、児童のみなさんは今日はおしまいです。保護者のみなさんはこの後学級懇談会がありますので、そのままお待ちください。」

「美那！美那！」

「ママ！どうだった？みな作文。」

「とってもよかったわよ！明日お父さんにも読んであげてね。」

「うん！」

「ママこの後学級懇談会があるから校庭で遊んで待つて。終わったらいっしょにお買い物に行こうね。」

「うん！わかった！」

じゃあ、ブランコに乗ってよっと！

キーンキーンキーン……

「ママ遅いなあ……」

「みくなちゃん！」

「あつ、拓也たくやくん！」

「一人で何してるの？」

「お母さん待つてるの……」

「そっか！おれも待つてろって言われたんだけど、いっしょにブランコしてていい？」

「うん……いいけど……」

「どうしたの？」

キーンキーンキーン

拓也くんはもうブランコに乗ってる。

「あんまり拓也くんと仲良くすると恵理香ちゃんたちが怒るんだ…
…」

「そんなの関係ないよ！無視しちゃえよ！ハハハ！」

キィーキィーキィー

拓也くんすつごく高くゆらしてる。男の子ってすごいなあ。

あっ！恵理香ちゃんたちだ！こっちにらんでる…

「拓也くん、みなもう行くね！ばいばい！」

「あっ！みなちゃん！」

みな、恵理香ちゃんたちきらい。いっつもいじわるするんだもの。

しょうこうぐちでまってる恵理香ちゃんたちがやってきた。恵理香ちゃんと智美ちゃんちみと桃子ちゃんももとひかりちゃんしかりは仲良しグループだ。恵理香ちゃんは拓也くんのが好きみたい。みなが拓也くんと仲良しだから、みなのこときらいみたい。

「ねえ、みなちゃん！」

「あっ！恵理香ちゃん…」

みなはたった今恵理香ちゃんたちにきづいたようにするの。そうしないと『ガンツケタ』って、けったりつねったりされるから。

「みなちゃんって拓也くんのことどう思ってるの？」

「べつにふつうのおともだちよ…」

「ふうん……そう。ぶさいくのくせに拓也くんと仲良くしないでくれる?」

「……みな、ぶさいくじゃないもん……」

恵理香ちゃんきらい!

「アハハ!ぶさいく!ぶさいく!」

みんなどうしていじわるするの?お友達と仲良くしちゃいけないの?

「アハハ……アハハ……」

恵理香ちゃんたちは笑いながらかえった。

みな……ぶさいくじゃないもん……

ほごしゃかいがおわったみたいで、お母さんたちが出てきた。

「美那!お待たせ!……どうしたの?」

「ううん!なんでもない!行こっ!」

ママには言えない……しんばいしちゃうから……

次の日も恵理香ちゃんたちには、きょうしつやろうかで『ぶさいく』って言われたり、ドンツてぶつかったりされた。

男の子たちが見て、『いじめだ!いじめだ!』っていった。でも、恵理香ちゃんたちは『いじめじゃなくてセイサイよ!』っていった。『セイサイ』ってなに?でも、みなはがまんした。だって今日はパパがかえってくるんだもん!いっぱいだっこしてもらうんだ!そうすればかなしくないもん!

「ただいまあ!」

みなはかなしかったけど元気よくごあいさつした。
だってパパに会えるんだもん！

「あっ、美那、おかえり。」

あれっ、ママ電話してたのかな？

「ママ、だから電話？」

「……パパからよ。2〜3日帰るのが延びるって……」

「えっ！せっかくおいしい卵焼き作ってあげようとおもってたのに！」

みなは卵焼きしかできない。でもパパは『おいしい！おいしい！』
っていつてたべてくれる。

はじめてパパに卵焼きを作ってあげたときのことをおもい出した。

「美那の卵焼きは銀メダルだ！」

「どうして銀メダルなの？」

「金メダルはママだ。ハッハッハッ！」

「よし！とっくんして金メダルになるぞ！」

今日は金メダルもらえらとおもったのに……
だっこしてもらえらとおもったのに……

「美那の誕生日には間に合うようにするって！だからそれまでもっ
とおいしい金メダル卵焼き作れるようにとっくんしよう！」

「……うん！」

みな……かなしいのがまんする！

それからパパがかえってくる日までみなはまい日いじわるされた。でもみなは泣かなかった。

パパに会えるから。ママがやさしくしてくれるから。

上ばきをかくされても、きょうしつで足をふまれてもがまんした。男の子たちはやっぱりさわいでるだけだった。でも拓也くんは「やめろよ！」っていつてくれた。

でもそれでまた恵理香ちゃんたちはおこっちゃったみたい。また『セイサイ』しなきゃっていつてた。みなはとってもこわかったけどがまんした。

そしてみなたんじょう日になった。今日はほんとにパパはかえられるみたい。

さようならをしていそいでかえろうとしたら、恵理香ちゃんたちがきた。みなは『さよなら』っていつてかえろうとしたけど、恵理香ちゃんはいじなお話があるからブランコのとこまできていつてた。はやくかえりたかったけど、いじわるされるのがこわかったからブランコのところについていつた。

「みなちゃん、あたしたちみなちゃんと仲直りしようとおもうの。」

「えっ？ほんとう？」

「ええそうよ。今までごめんなさい。」

「ううんいいの。これからは仲良くしてね。」

「うん。仲良くしましょうね。」

みなはとってもうれしかった。

パパには会えるし、おたんじょう日だし、恵理香ちゃんたちと仲直りできたし。

「仲直りのしるしにいつしよにブランコであそびましょう？」

みなははやくかえりたかったけど、せっかく仲直りしたからダメ

「キャハハハ！みなちゃんたのしい？もっとおしてあげる！」

キィー……キィー……！！！！キィー……！！！！

「こわいよー！こわいよー！やめてー！おちちゃうよー！」

もうお空と地めんと恵理香ちゃんたちのわらうかおしか見えない。

キィー……キィー……！！！！キィー……！！！！

「キャハハハハハ！おちろ！おちろ！制裁よ！キャハハハハハ……」

「こらあー！あなたたち！何やってるのー！！」
「あっ！」

みなはお空をとんだ。きれいなくも……
パパ……ママ……

ドサッ！ゴツッ！

「キャアアアアア！」

トクン……トクン……

パパ……また……だっこ……して……ね……



八前さんは止めどなく涙を流している。病室にいる俺も瑛士も美鈴もみんな泣いている。しばらくすると八前さんがまた話を続けた。

「おれは激怒し、そいつらと親たち、学校を相手に訴訟を起こした。」

「どうなったんですか？」

俺は八前さんにタオルを手渡す。

「……揉み消されたよ。グループのリーダーだった戸田恵理香の祖父は国会議員だ。いじめではなく『不慮の事故』……そう言われたよ。」

「ひどい！」

美鈴は怒りを露にする。

「妻は……和美は心労と絶望のうちに死んだ。怒り狂ったおれは戸田家に怒鳴り込んだ。拳銃を持ってな。」

俺たちは息を飲んだ。

「結局は何もできなかったよ。取り押さえられたおれはすぐに新潟に飛ばされた。降格させられてな。」

「普通は懲戒免職でしょう？ これも相手の……？」

瑛士が聞く。

「……そうだ。相手の弁護士が来て、慰謝料と言って分厚い封筒を置いていったよ。……おれは受け取り、家も売り払い、ここに来た。」

」
「どうして!？」

俺は納得がいかなかった。

「崎田くん……君は真っ直ぐ^すでいいな。おれに何ができた? 和美と美那のためにもおれは生きることを選んだ。もう二度とこんな思いをする人を出しちゃいけない。憎しみは憎しみしか生まない。どこかで断ち切らなきゃいけないんだ。」

「どこかで断ち切らなきゃいけない……」

俺は八前さんの言葉を心に刻んだ。

「美那は草薙の心臓を耳に当てて、鼓動を聞いていた。あの子は小學生になっても抱っこが好きだね。……きっと恨みではなく愛情を求めて『メニューメンバー』になったんだろうな。」

俺たちは八前さんには全てを話していた。

『Sion』のこと……『ダウンロード』のこと……『メニュー』のこと……

八前さんは信じてくれた。だからこそ娘さんの話をしてくれたんだろう。

「それで君たちはおれにどうしろというんだ？」

「まず、この間の『無差別大量殺人事件』のことを詳しく教えてください。」

瑛士のことだから、何か策があるんだろうなと思う。

「たぶん今のところ『メニューメンバー』は8人です。他の怨霊た

ちが『昇格』し始まったらかなりヤバいことになります。あつという間に人類滅亡です。そうなる前に悠姫を止めたいんです。」

「悠姫って横山を殺したリーダーってやつか？」

瑛士は頷く。

「『主催者』です。」

「……事件のことを一般人に話すことは守秘義務違反だ……また降格させられるな。」

「八前さん、ありがとうございます！」

俺は新潟に来て本当によかったと思った。

「ここじゃまずいだろう。屋上に行こうか。」

八前さんはベットから降りようとする。

「ちょ……大丈夫なんですか？」

美鈴が慌てて八前さんを支える。

「痛てて……！そんなことを言ってる場合じゃないだろう？ 人類の未来のためだ。ハハッ。」

俺たちは苦笑し、肩をすくめる。きっと八前さんは何があっても自分一人で責任をとるつもりなんだろう。俺には八前さんの気持ちが痛いほどわかった。だから、無理に止めることはできなかった。

屋上には洗濯物を干す年配の看護師さんが一人ただけで、その一人もすぐにいなくなった。フェンス際にはテーブルと椅子が備え付けられており、俺たちはそこに座る。

「さあ、何が聞きたいんだ。」

八前さんがそう言うと、瑛士はパソコンを開く。

「報道されていないことです。八前さんは工藤直樹の携帯を持っていたよね。何か知っているんじゃないですか？」

「……君には隠し事ができないな。その通りだ。工藤直樹は死の直前におれに全てを話した。」

「！！」

「工藤はパソコンで2ちゃんねるに書き込みをしていた。『ナエトル』というHNだね。」

「工藤がナエトルだったんだ……」

俺と瑛士は工藤とはネットを通じてつながっていたことになる。

「実はおれも『2ちゃんねらー』でな。工藤と絡んだこともある。俺ともね。」

俺は思い出した。

「えっ!？」

八前さんは記憶を探っている。

「『オタクになるぞ』。八前さんだったんですね。」

「ああ!『ボンジョルノ』!君だったのか!じゃあ『アイン』って……」

「オレです。」

瑛士が笑顔で答える。

「お前ら青少年健全育成条例違反で逮捕だぞ！」

「やべっ！イテッ！」

美鈴につねられる。

「いったいどんなこと話してんのよ。」

あれっ？何で怒るんだ？

「まあ冗談はそれくらいにして、話を続けよう。」

俺たちは八前さんの話に集中し直す。

「とにかく『ナエトル』Ⅱ工藤直樹は『Sion』にアクセスした形跡はない。」

「じゃどうやって『メニューメンバー』に見つかったんだ？」

工藤と警官2人は怨剥、中山兄妹が怨搾（八前美那）、菊地が怨滅、田中が怨裂（坂巻信人）……全員『メニューメンバー』に殺されたのは間違いない。

「……メールだ。草薙もそうだった。」

俺たちは衝撃を受けた。

「何てことだ……じゃ一人『Sionメンバー』が増えれば、その携帯のメモリにアドレスが入っている人全員狙われるってことだな……」

瑛士はそう言いながらも冷静に何かを考えているようだ。

「草薙さんは誰からのメールを開いて殺されたんですか？」

俺はあえて“誰に”の部分は言わなかった。

「……野口 孝だ。」

「やはりそうか……でも野口は『Sion』にスレッドは立てていなかった。」

瑛士がそういうと、八前さんはさらに言葉を続ける。

「それ以前に奇妙なことがある。」

俺たちは次の八前さんの言葉に驚愕きょうがくした。

「野口は携帯もパソコンも持っていなかった。」

「本当ですか!？」

俺と瑛士は同時に聞く。

俺はますますわからなくなる。携帯もパソコンもないのに、どうして『メニューメンバー』に復讐を頼めたのだろうか？

「これで全ての謎が解けた……」

頭が混乱してしまった俺とは対照的に、瑛士はすっきりとした表情だ。

「崎田……東京へ戻るぞ。」

「えっ？いきなり？」

「オレたちは武蔵野署に行かなければならない。」

八前さんも美鈴も面食らったような顔をしている。

「ちょ、ちょっと、瑛士さん、一人で先に進まないでアタシたちにもわかるように説明してよ！」

俺も美鈴に同意見だ。

「そうだよ。ちゃんと教えてくれ！」

「……わかった。まず『有線と無線の違い』からだ。」
「携帯とパソコンね。」

美鈴が確認する。

「そうだ。『無線』の怨霊には八前さんを助けた方法が使えるが、『有線』にはたぶんダメだ。」

「ちよっと待て！おれを助けてくれたあのバチバチってのは何だったんだ？」

そうか、八前さんにはまだ説明してなかった。

「あれは『干渉波』かんしょうはです。」

瑛士はスタンガンのようなものを取り出す。

「電磁波に双方向のスペクトルを掛けて……」
「待った！待った！もっと簡潔にわかりやすく説明してくれ！」

あはっ！八前さん、俺と同じリアクションだ。

「簡単に言えば『ジャマー』です。妨害電波みたいなものを怨霊にぶつけるんです。」

「怨霊がそんなに消えるのか？」

「消えたでしょう？」

『効果はやってみないとわからない』と瑛士は言っていたが、間違はなく効果はあった。

確かに美那ちゃんは消えた。

「『無線』の怨霊は一つの目的だけをインプットされたロボットのようなんですよ。」

瑛士は干渉波スタンガンをしまいながら言う。

「現に美那ちゃんは八前さんを見ても何の反応も示さなかったでしょう？」

「……確かに……そうだった。」

八前さんは苦しそうに言う。

「あれは美那ちゃんではなく、美那ちゃんの“意思の一部”なんです。“無線”の場合は“一つの意味”に限定して飛ばさないと実体化できないんです。」

「よくわからんが大砲の弾が飛んできたら、それを打ち落とせばいいってことか？」

八前さんうまい！俺にもそれならわかる。

「しかし、『有線』ではそうはいかない。怨霊そのものが来るからだ。しかし、電磁波であるネットを使っている限り足止めくらいはできるかもしれない。」

「『ダウンロード』はそのためか。」

八前さんは工藤の話を知っている分、やっぱり理解が早い。

「たぶんそうだと思います。だから『無線』は一旦繋がってしまえば、電源を切ろうが壊そうが関係ない。」

「『意思』の塊が来てしまえば『ダウンロード』するまで、つまり実体化するまで時間はかかるが、止められないってことだな。」

「でも、その怨霊は干渉波で消せます。」

「なるほど。問題はやはり『有線』だな。」

「はい。やはり大元を潰さないとおもと……」

「『Si on』か……」

八前さんは難しい顔をする。

「いえ、『Si on』はこの際気にしないでいいと思います。」
「何でだ？」

「野口は携帯もパソコンも持ってなかった。……オレは勘違いしてたんです。『Si on』が怨霊の溜まり場で、そこから怨霊が来るものだと思っていた。」

「違うのか？」

俺は思わず聞いた。

「ああ。『Si on』は仲間を集めるためのものにすぎない。大事なのは『サーバ』だ。」
「『サーバ』？」

みんな一斉に声を上げる。

「『Si on』があるのは『Webサーバ』だ。しかし、メールは『メールサーバ』から送られる。つまり違うサーバなんだ。」
「つまり？」

俺は話が掴め^{つか}なかった。

「個人の携帯やパソコンに怨念がこもってこの事件が起きているなら、野口の事件の説明がつかない。」

「野口は携帯やパソコンを持ってなかったからな。」

何となく見えてきた。

「つまり野口は『Si on』から復讐したんじゃない。『Si on』にもメールにも共通するホストコンピュータから復讐したんだ。そこが怨霊たちの『出入り口』となっている。」

「『出入り口』って何の……？」

美鈴が恐る恐る聞く。

「……あの世だ。」

俺たちは息をのむ。

「悠姫はそのホストコンピュータを支配して、あの世との出入り口を自由に開け閉めできるんだろう。」

俺は黒髪の頭を思い出した。

「つまり『昇格』っていうのは……」

「『あの世とこの世を自由に行き来できる権利』ってとこか。」

「そうだ。メニューは携帯やメールなどの無線での殺害に使うもので、パソコンの場合はメニューじゃなくてもいいんだろうな。生前の恨みが一番強く出た形なのだろう。」

そこまで言って瑛士は八前さんを見た。

「『恨み』とは限りませんが。」

八前さんは苦笑いをした。

「で？何で武蔵野署なんだ？あそこにはおれの後輩がいるから口利きしてやってもいいぞ。もっともこういう話は絶対に信じないだろうがな。」

「あつ、もしかして御手洗刑事ですか？……って後輩！？」

「そうだ。よく知ってるな。ああ、そうか。美鈴ちゃんは清水沙江子の件で取り調べ受けたんだっけな。あいつはまだ26くらいだぞ。」

どう考えても八前さんの方が若く見えるんですけど……

「できればお願いします。……武蔵野署には、ホストコンピュータに繋がる人物がいます。」

瑛士は淡々《たんたん》と言う。

「ホストコンピュータに繋がる人物……？」

俺と美鈴はすぐに気付いた。

「曾根崎さん！……じゃホストコンピュータって……」

「Dysonだ。『Si on』の掲示板の一番下にサーバ名が書いてあった。」

俺は『Si on』でメニューページに跳ぼうとした時に瑛士が一瞬止まったのを思い出した。あの切羽詰^{せっぱ}まった状況でよく冷静にそんなところまで見てたな……俺は改めて瑛士を尊敬した。

「じゃあ、俺たちのすべきことは決まったな。」

俺は最後までやり遂げる覚悟を決めた。

「Dysonのホストコンピュータを破壊する。」

命懸けだな、こりゃ。

「じゃ早速行こう。まだ新幹線はあるよな？」

あたりはもう暗くなり始めている。

「ちょっと待ってくれないか？」

八前さんが俺たちを引き止める。

「行くのは明日にしてくれないか？」

時間的な余裕はない。こうしているうちにも変死者は出ているだ

ろうし、『昇格』者が出ているかもしれない。

「俺も連れて行ってくれないか？」

そっか、八前さんは美那ちゃんのために……

「明日には何としても退院する。だからいっしょに行かせてくれ。だめなら逮捕する！」

「瑛士……どうする？」

「曾根崎さんに協力してもらうのも、Dysonに侵入するのも八前さんがいればとても助かる。何より国家権力だし。」

「じゃ決まりだ！」

俺は八前さんと握手した。

「よろしくお願いします！」

「ありがとう。ホント君は真っ直ぐなヤツだな。」

俺たちは明日の朝、八前さんに連絡をもらうことにして病院を後にした。



俺たちはホテルのレストランで食事をして、明日に備えて早めに寝ることにした。

「じゃ……、おやすみ。」

美鈴は病院では気丈に振る舞ってはいたが、病院を出てからはほとんど口をきかなかった。

人が死ぬところなんて普通の人は見慣れないもんな……シヨックを受けても当たり前か。俺だってかなりシヨックだった。

背中に開いた穴。白いものは骨だったのかな？今日は眠れないかも……

「崎田……ちょっといいか？」

美鈴を部屋に見送った後、部屋に戻ろうとしたら瑛士に呼び止められた。

「何だ？」

「話したいことがある……オレの部屋に来てもらえるか？」

「？ ああ、いいよ。」

瑛士は部屋に入ると冷蔵庫から缶ビールを2本出し、一つを俺に薦めた。^{すす}

「サンキュ！」

プシュッと小気味のよい音を立てて泡が缶の口から溢れ^{あふ}出てくる。

「崎田、これを見てくれ。」

瑛士はパソコンを開いている。

怨絞↓（ ）悠姫

怨裂↓坂巻信人 14才 いじめによる自殺？

怨囓or怨虫↓（ ） 俊夫

怨滅↓（ ） 剛

怨打↓庄司明仁 18才 いじめによる事故死

怨剥↓？

怨搾↓八前美那 8才 いじめによる事故死

以前見た時より情報が増えている。

「崎田……オレ思ったんだけどな……」

「何だ？」

「オレたちのしようとしてることは正しいことなのかな……？」

「どうしたんだ？ 瑛士らしくもない。常に自信に溢れてて状況判断も的確なお前にしては気弱だな。」

「フッ、茶化すな。……おかしいと思わないか？」

「何がだ？」

「毎年交通事故でどのくらいの人が亡くなってるか知ってるか？」

「1万人くらいだって聞いたことあるけど……」

「そうだ。じゃあ、自殺者は何人くらい知ってるか？」

「ん……五千人くらいか？」

「……年間3万人だ。」

「！ そんなにいいのか？」

「そうだ。理由は様々だが、他にも事件に巻き込まれて殺された人、思いもよらない病気や事故で亡くなった人などを合わせれば年間何万人の人間が死んでることになるのか……」

「……何が言いたいんだ？」

瑛士はもう2本目だ。

「恨みや未練を持って死んでいった人たちは数え切れないほどいる。」

なのに、何で『いじめ』なんだ？」

……そうか！瑛士は『Si on』には『いじめ』で死んだ怨霊しかいないってことを言っているんだ……

「そう言えばそうだよな……」

「人は人とながって生きている。つながらなければ生きてはいけない。『いじめ』の最悪なところは、そのつながりを利用した最低の行為だからだ。」

「おい……瑛士……」

だいぶ酔ってるな。もう3本目だ。

「……オレは昔いじめられっ子だった……」

「えっ！？瑛士が!？」

「フッ、意外か？」

「意外だ。」

「勉強ばかりしているガリ勉だったからな。親の期待に応えることが義務だと思っていた。」

エリート医大生だもんな。

「とうぜん運動は苦手で流行にも疎い。教師には気に入られるが、同級生には嫌われてたよ。」

「大人の価値観と子ども同士の価値観は違うからな。」

「ああ……上履きに小便をかけられてたり、教科書を隠されたりとかそんなことは日常茶飯事だった。」

今も昔も変わらないな……

「オレはアイツらを憎んだよ。本気で『死ね』って思った……」

「おい、瑛士……」

「庄司明仁や坂巻信人たちの気持ちは痛いほどわかる。アイツらは死ななきゃわからないんだよ！ いや、死んでもわからないかも知れない！」

『アイツら』っていじめたヤツらのことか？

瑛士にしては珍しく興奮している。

それだけ辛かったんだな……

「いっそ、悠姫にこの腐った世の中を徹底的に叩きのめして欲しいってさえ思ってしまうんだ……オレの考えは間違っているかな……？」

俺は何も言えず考え込んでしまう。瑛士は俺の答えを待っているのか、黙っている。

「瑛士……俺思うんだけど……って、瑛士？」

瑛士は眠っていた。頬には一筋の涙が光っている。

俺は瑛士のパソコンを閉じてやり、そっと毛布をかける。静かに部屋を出て、自分の部屋に戻り、シャワーを浴びた。寝ようと思っ
てベットに横になると部屋のドアを誰かがノックした。

コン、コン……

誰だ？

覗き穴から覗くと、美鈴が立っているのが見える。

「み、美鈴？」

俺は驚いてドアを急いで開ける。

「こんな時間にゴメン……ちよつといい？」

「あ、ああ。どうぞ。」

時間は深夜0時を回ったところだった。

こんな時間に何だ？

元気のなかった美鈴の様子を思い出して、俺は緊張した。

美鈴は白いEASTBOYのコットントレーナーにグレーのスウェットを履いている。いつも後ろで一つにまとめている茶色がかつた長い髪は今は下ろしていて、風呂上がりなのかしっとり濡れた感じだ。もちろんすっぴんで、裸足にホテルのスリッパを履いており、完全にプライベートスタイルだ。

俺は目のやり場に困り、思いつ切りキョドってしまった。

美鈴はソファにちょこんと座る。美鈴が横を通る時にいい匂いがして、ドキツとする。

「こんな時間にどうしたんだ？眠れないのか？何か飲むか？」

あああ！落ち着け！俺！

「ううん、いい。」

俺は開けかけた冷蔵庫の扉を閉める。

「アタシね……怖いね。」

やっぱりそうか……

「そりゃそうだよな。人が死ぬとこなんか、普通見ることないもん
な。」

俺はベットにバフツと座る。

「ううん、そうじゃなくて、これからのこと……」
「これからのこと？」

曾根崎さんに協力してもらって、Dysonに行って、ホストコンピュータを破壊する。

確かにたいへんなことだし、下手すりゃ犯罪者になってしまう。

「確かにたいへんだけど、瑛士や八前さんがいっしょだからきつと
大丈夫だよ。うまく行くよ。」

「ホントにそう思う？」
「思うよ。」

「……美那ちゃん。」

「ん？」

「美那ちゃんは八前さんを殺せなかった。失敗した……」

「俺たちが助けたからね。」

「このままで済むと思う？」

「どういうこと？」

「仕返しよ。」

「仕返し？」

「女は……執念深いだよ……それに、悠姫って怨霊……『Si on』
なんてサークル開いたりして何考えてるのかわかんないわ。」

「怨霊の考えなんて、人間にはわかんないよ。」

「でも……決してバカじゃない。黙ってやられるのを待ってるほど、
軽い恨みじゃないと思うの……」

「アタシたち、みんな殺されちゃうんじゃないかな!? 今ごろアタ

シたちのこと捜してるんじゃないかな!？」

俺は驚いた。

いつも明るく、元気一杯の美鈴が怯^{おび}えている。

いや、それが普通なんだろう。

ほんの数日前はごく普通に大学生活を送っていた。それがどんな人が死んでいって、俺たちはその事件に巻き込まれている。

不安にならない方がおかしいよな……

「美鈴……」

美鈴はトレーナーの袖^{そで}で涙を拭^ふきながら俯^{うつむ}いている。

「美鈴の夢って……なんだ？」

美鈴が驚いたように俺を見る。

「夢？」

美鈴は少し首を傾^{かし}げて微笑んだ。

「アタシは先生になりたかった。子どもたちといっしょに笑ったり泣いたりできる先生に。」

「過去形にすんなよ。」

「えっ？」

「なればいいじゃん。いや、絶対なれよ!先生に!だから美鈴は死んだりなんかしない。絶対に!」

俺が守るから!……とは言えなかった。俺にそんなことを言う資格なんかない。でも、何があっても美鈴のことは俺が守ってやる……

…そう心に誓った。

「晃……ありがとう。」

美鈴はすつと立ち上がって出口に向かった。俺は部屋まで送ろうと後について行こうとした。すると美鈴はそのまま俺のベットのバフツと俯せに倒れた。俺が驚いていると美鈴は顔だけを横に向けて微笑んだ。

「……怖いから今晚はここで寝てもいい？」

えっ！？…………ええええええええええ！！？

「なっ……」

俺が絶句していると、

「あ、もしかして今からオナニーするところだった？ごっめーん！」

「てめえ！犯すぞ！」

「キャハハハ！」

冗談を言いながらも、美鈴は動く様子がない。

「……マジでか？」

美鈴は布団に顔を埋めて小さく頷いた。

ああゝあ……今日は床の上か……

「何にもしなければ隣りで寝てもいいよ……」

おい、ここは俺の部屋だ。そして、それは俺のベットだ。『でもいいよ』っておかしくないか？

美鈴はうるうるした目で俺を見つめている。

……怖いのは本当みたいだな……

「わかったよ。何にもしないから、さっさと寝ようぜ。」

へびの生殺なまころしだよこりゃ……とほほ……

俺は美鈴の身体とくっつかないように、ベットの端はしぎりぎりに身体を横たえて布団を掛けた。

「ありがとう…晃。」

背中越しに美鈴の声が聞こえた。

「別にいいよ。さっさと寝ちまえ！」

「晃、さっきのアタシの夢の話ね？」

「何だ？」

「ホントは半分ホントで半分ウソなんだ。」

「……どういことだ？」

「先生になりたいのは本当。でも、もう一つ夢があるの。」

「もう一つ？」

「うん、もう一つ。」

「なに？」

「ふふっ！おしえな〜い！」

「なんだよ！自分で振ったときながら！」

「アハハ！」

美鈴は笑っている。

ちよっとは元気になったかな？

「お嫁さん……」

「んっ？」

「きれいなお嫁さんになりたいんだ。真っ白なウェディングドレス着て……」

その隣りにいるのは誰だろう……

想像すると、少なくとも俺ではないような気がした。あまりにも釣り合いが取れなさすぎる。

「美鈴ならきつと似合うよ。」

「……」

「美鈴？」

またこのパターンか。瑛士といい、美鈴といい、人を睡眠薬代わりにすな！

「ふうっ。」

俺はため息を一つつくと、ゆっくりと眠りに落ちていった。



……アア……

……キャアア……

ん？

「キャアアアア！！」

「なんだ！？」

誰かがドアの前を叫びながら通り過ぎた！

女の人の悲鳴？ 美鈴は隣りで静かに寝息ねいきを立てている。

「○×£\$※#!」

今度は男の人がわけのわからないことを叫びながら走って行った。
嫌な予感がした。美鈴を起こした方がいいだろう。時間は……朝
の4時を過ぎたばかりだ。

「美鈴！ 美鈴！！」

揺り起こすと美鈴はびっくりしたように目を開けた。

「なっ、なに！？」

「わかんないけど、なんかヤバそうだ……」

ドアに近付き、覗のぞき窓から廊下を覗いたが誰もいない。火事など
ではなさそうだ。

「美鈴……バット取ってくれ。」

金属バットは昨日から俺の部屋に置いてあった。

「えっ、なに？ どうしたの？」

美鈴は怯えながらも、すぐにただならぬ雰囲気^{きふ}を察^{さつ}してバットを手渡してくれた。

「……わかんない。美鈴はそこにいて。」

ついて来ようとする美鈴を手で制^{せい}してドアを開けて廊下に出た。まだ夜が明けきっていないホテルの廊下は、ひんやりとして薄暗かった。右を見るとすぐにエレベーターホールに続く通路が見えた。数人の男女が怯えた表情^{おび}でこっちを見ている。

……いや、俺の『後ろ』を見ている。俺はゆっくりと振り向いた……

………悠姫！

廊下の先、20メートルくらい前方の部屋の前に悠姫が立っていた。廊下は薄暗く、表情などはよく見えないが、部屋のドアが開け放たれているのでうっすらと様子が見える。

あの長い黒髪^{くみ}の頭には見覚えがある！全身を見たのは初めてだったが俺にはすぐわかった。

白いネグリジェのようなワンピースを着ているが左側、つまり悠姫の右手側が赤い。よく見ると右手に何か掴^{つか}んで下げている。よく目をこらすとそれは………

人間の生首だった。男性のようだ。目と口をカッと見開き、舌がべろんと垂^たれている。その表情からは恐怖と苦痛が容易^{ようい}に見てとれた。

……ゴトツ

悠姫は生首を床に落とした。

スーーーーーッ!

音もなく、足を動かす様子もなく、こっちへ近付いてきた!

「う……うわ……」

悠姫の血にまみれた両手が掴みかかるように上げられる。その時、顔が見えた。

生気のない真っ青な顔色。まぶたのない丸い目。真一文字に結んだ唇のない口。

「うわあああああ!!」

俺は心の奥底から恐怖を感じた。
俺はあまりの恐怖に後ずさった。

「きゃあああ!」

「うわあああ!」

通路の人たちも押し合ったり、ぶつかったりしながら逃げて行く。

スーーーーーッ!

悠姫は有り得ないスピードで近付いて来る。もう5メートルくらいだ。真っ直ぐ逃げても行き止まりだ。非常階段は悠姫の方にある。俺も通路の方へ逃げようとした。

「あ”あ”ああ……み”いづうげえたああ……」

地獄……まさに地獄の底からわき出てきたような低い声が聞こえた。

見ると悠姫が口を開けていた。
大きく開けた口の中には尖った歯がずらっと並び、涎が滴っている。

「う、うわあああああ！」

俺の生存本能が警報を鳴らしていた。

「キャアアア！」

悠姫が俺の部屋の前に来た時、部屋の中から悲鳴が聞こえた。

ヤバイ！美鈴だ！

覗き穴から見ていたに違いない。

「あああ……ああ？」

悠姫が止まった。ゆつくりと顔を俺の部屋へ向ける。
まずい！

部屋はオートロックで鍵は掛かっているが、そんなことは何の意味もないことが容易に想像できた。

悠姫はゆつくりと向きを変え、ドアノブに手をかけた。

マズい！美鈴が殺される！

そう思った瞬間、俺の頭の中は真っ白になり、恐怖心は吹っ飛ん

だ。

「うおあああああ！！」

俺は悠姫にバットで殴りかかった。

ブンッ！ ガツッ！

バットは空を切り、床に激しくぶつかった。目の前にいた悠姫がいない。……消えた？

「しゃがめ！ 崎田！」

俺はハッとしてドスンと尻餅をついた。

ブンッ！

今のいままで俺の頭があったところを、悠姫の白い手が横切った。悠姫は『上』にいた。天井から真っ逆さまに立っていた。

スッ！

音もなく悠姫は床に降り立った。恨みに満ちて血走った目を俺の後ろ、つまり隣の部屋に向けた。

「瑛士！」

そこには瑛士が『干涉波スタンガン』を持って立っていた。

「瑛士！ サンキュ！」

瑛士はYシャツにスラックス、昨日の服装のままだ。

「気をつけろ、崎田。こいつは『有線』かも知れん。」

「えっ!? じゃあ、その武器は効かないのか?」

俺はバットで悠姫を牽制けんせいしながら口早くちばやに聞いた。

「わからん。やってみないとな。」

「どうすればいい?」

「俺に考えがある。ゆっくりこっちに下がって来い。」

俺はゆっくり後ろ歩きに下がった。悠姫はすぐに襲ってくる様子はない。警戒しているみたいだ。

きっと美那ちゃんから瑛士の武器のことを聞いたのに違いない。口はまた真一文字に結ばれている。

「お前は通路の方へ下がれ。挟み撃ちはさみうちにしよう。」

瑛士もゆっくりと下がる。悠姫は今にでも掴み掛つかかるかのように両手を上げ、ゆっくりと近付いてくる。

「俺が合図をしたら殴りかかってくれ。」

俺は頷うなずいた。

一步……また一步と下がり、悠姫はゆっくりと瑛士を睨にらみながら近付く。ちょうど瑛士と悠姫と俺がL字形に並んだ。

「今だ!」

瑛士の合図で俺は殴り掛かった。

「うぁりゃあぁあぁ！」

悠姫がハッとしたように俺を見た。

バチバチバチバチバチバチバチ！

その瞬間、廊下が明るく明滅し、悠姫の身体も明滅めいめつした。

「あ”……あ”……逃げられると……思うな……」

またあの地獄の底からわき上がるような低い声でそう言うと、悠姫は消えていった。

「ハア……ハア……ハア……」

廊下は静けさを取り戻していた。

「大丈夫みたいだな。」

瑛士は冷静に応えた。

あっ、そうだ！美鈴！

俺は自分の部屋のドアを叩いた。

「美鈴！美鈴！もう大丈夫だぞ！」

カチャ……

ドアが開いて美鈴が恐る恐る部屋から出て来た。

「の……晃、ご、ごめんなさい……アタシ怖くて……びっくりして……うああああん！」

また抱き付かれた。しかもこの間より薄着だから、む、胸が……

「ラブシーン中すまないが……」

瑛士がコホンと咳払いせきはいらを一つした。

「悠姫の狙いはオレたちだ。早く移動した方がいい。」

「そ……そうだな……」

「えっ！？　どういうこと？」

美鈴の顔がまた曇くもった。

「……昨日の夜美鈴が言った通りだったよ……仕返しだ。」

美鈴の顔色が変わった。

「じゃあ、アタシたち『Si on』の怨霊たちに狙われてるの？」

「……そうみたいだ。」

「そんな……でも、どうしてここがわかったの？」

「そのことについては後で話す。とにかくすぐにチェックアウトだ。」

「わかった！」

俺たちは15分後フロントで待ち合わせをして、各自慌ただしく出発の準備に取り掛かった。



ウ~~~~~！ ウ~~~~~！

パトカーのサイレンが近付いてくる。きっとさっきの客たちかホテルが連絡したんだろう。チェックアウトするときにホテル側からは、警察が来るまで出ないように言われたが、それではまた迷惑が掛かる。八前さんの名前を出して、これから警察に行かなければならないことを話すと納得してチェックアウトさせてくれた。俺たちはホテルの前でタクシーを拾い、八前さんの待つ警察病院へと急いだ。

「瑛士、八前さん、何だって？」

瑛士はすでに病院に連絡を取っていた。

「ああ、無事退院できたみたいだ。左手は使えないみたいだがな。」
「まあ、その辺は俺たちがフォローしなきゃな。」

八前さんは職を懸^かけて、いや、命を懸けて俺たちに協力してくれる。警官に付いてもらおうというだけで、すごく安心できる。

「それより崎田、さっきの話だな。」

「『なぜ俺たちの居場所がわかったか』だな？」

「ああ、そうだ。」

「どうしてだ？」

「これは俺の推測なんだが……、『わかった』ではなくて『見つけた』んだと思う。」

『見つけた』……悠姫は確かにそう叫んだ。俺は大きく開けた口にずらっと並ぶ尖った歯を思い出して身震いした。

「っていうことは捜していたのか…それにしたってあまりにも早過ぎないか？」

「……あまり想像したくはないんだが……」

瑛士の表情が陰る。

「『コピー』を大量に長岡市内の宿泊施設に送り込んだんじゃないかな……」

「な……何だって!? それじゃ、昨日から今日にかけて何人が殺されたんだ？」

「おそらく百人以上だろう……」

「なんてこと……」

美鈴の顔色は真っ青だ。

「これから『干渉波スタンガン』はあまり多用しない方がいいな。こっちの居場所を教えることになる。」

「!! そうか! わかった! 『コピー』だから『有線』でも消せたのか!」

「ああ、さっき悠姫を消せたからおかしいと思っていた。」

ホントの怨霊が来ていれば俺たちは殺されていたかも知れないのか……俺は改めて身震いした。

「それにしたって、ただの仕返しにしては大規模すぎないか？」
「ただの仕返しではないかも知れない……」

瑛士は考え込む。

「もしかしたら……悠姫は計画に勘づいてるのかも知れない……」
「えっ！？じゃあ、Dysonに行ったら絶対アイツらの『本物』
が待ち構えてるのか!？」

「それはもちろんだが、その前に計画を潰そうと、つまり俺たちを
殺そうとするだろう……」

「そんな……瑛士さん、どうしたらいいの？」

美鈴は『やめる』とか『あきらめる』とかは絶対に言わない。『
怖い』というのは前に進もうとしているから『怖い』んだ。昨日の
夜俺の部屋に來たのは前に進む決意の現れだったんだなと思った。
さすが、美鈴。俺も覚悟決めなきゃな。『戦い』の覚悟を。

病院に着いたのは朝の6時過ぎだった。八前さんの病室に入ると、
八前さんはすでに出発できる状態で待っていた。

「すまなかったな。おれがわがままを言ったばかりに、お前らの命
を危険にさらしてしまつて。」

「いいえ、そんなことありません。かえって敵の動きや意図がわか
つたんで、これからの行動がしやすくなりました。あのまま東京に
帰っていたら、やられていたかも知れない……」

俺は心底運が良かったと思った。あのまま何も警戒せずにDyson
に行っていたら、間違いなく殺されていただろう。

「さ、すぐに東京に向かおう。新幹線は何時だ？」

「長岡駅7時22分発が一番時間的に近いヤツです。」

瑛士は今回はチケットを取っていなかった。まさかこうなることを予測していたわけではないだろうが、病院に来る前に買う気なら買えたはずだ。また何かあるのかな？

「そうか。御手洗には今日の午前中には行くなって連絡しておいた。曾根崎って重要参考人はまだ武蔵野署にいるみたいだぞ。」

「ああ、よかった！警視庁とかに連れて行かれてたらたいへんだもんね。」

美鈴は嬉しそうに言った。

「……ただ、本庁から捜査官が来ていて、御手洗たちも会えないみたいだな。」

「とにかく武蔵野署にはいるわけでしょう？行けばなんとかなるっしょ！」

俺はあえて樂觀的になることにした。

「だったらいいがな……とにかく今は行くしかない。」

俺たちは退院の最後の手続きをするために、一階の会計窓口に向かった。朝の病院のロビーはひっそりとしていた。受付窓口には看護師が一人と奥にパソコンで仕事をしている看護師がいるだけだ。パソコン……つい数週間前まではパソコンを見るとウキウキしていたのだが、今はとても怖いものを感じた。

「じゃ、アタシ先に出てるね。」

美鈴は外にタクシーを捕まえに行った。

「瑛士……あのパソコン、ネットに接続してるのかな？」

「ん？ ああ、どうだろうな？ しかし、病院は基本的に携帯の電源は切らなきゃいけないから、ホテルよりも安全だと思うけど……」

「あがつ！」

パソコンのディスプレイから白い手が伸びて看護師の首を締め
ている！

「瑛士！」

言ってるそばから来やがった！

「まずい！ 悠姫の『本物』かも知れない！」

「な、何だ！ あれは！」

「キャアアアアア！」

ブシュ！

看護師の喉がちぎり取られた。

「まずい！ 逃げろ！」

瑛士は八前さんの荷物を持って出口に向かった。

「お、おい！ 瑛士！ 助けないのか！」

「今は東京に帰るのが先決だ！ あれがもし『本物』なら俺たちはこ
こで皆殺しだ！」

八前さんは助けに行こうと部屋のドアに走って行く。

「八前さん！行っても無駄です！ここでオレたちがやられたら、誰も悠姫たちを止められない！今は逃げるのが最優先です！」

瑛士は入口の自動ドアの前で叫んでいる。

「くっ……しかし……」

八前さんは部屋のドアノブを握ったまま苦渋くじゅうの表情を浮かべている。

「キャアアアアアア！」

そのドアが勢いよく開かれ、看護師が飛び出して行った。

ぬるうっ！

悠姫は今まさにディスプレイから全身を出そうというところだった。

「くっ……仕方がない……」

八前さんは走って俺たちの所に来た。タクシーはすでに来ていた。

「どうしたの？」

美鈴はきよんとしている。

「悠姫だ！美鈴！急いで乗れ！」

美鈴は慌てて乗り込んだ。後に続いて瑛士と俺が飛び込むように乗り込んだ。乱暴な乗り方に運転手が顔をしかめる。

「長岡駅だ！早く！早く出せ！」

八前さんが助手席に飛び込みながら叫んだ。

「ああ……はい。」

状況を全く理解していない運転手はのんびりとサイドブレーキを下ろした。

悠姫は部屋から出て、こっちへ向かって口を大きく開けている！

「あ”あ”あ”あ” ああああ！」

入口の自動ドアをすり抜ける！

「うわあああああ！」

キュキュキュキュキュキュ！

それを見た運転手は絶叫し、タクシーを急発進させた。

悠姫は両手を前に突き出し、すごいスピードですぐ後ろからタクシーを追って来る！

「いいいたあああ！」

尖った歯の一本一本まではっきり見える。

「キャアアア！」

美鈴の叫び声が車内に響く。

「運ちゃん！俺が許す！信号も制限速度も全部無視して突っ走れ！」
「なっ、何ですかあれは……！！！」

タクシーはぐんぐんスピードを上げ、悠姫との距離を広げて行った。5分ほど走るともう悠姫の姿は見えなくなった。

「ハア、ハア、ハア……何とか逃げ切れたようだな……」

八前さんは苦しそうだ。

「八前さん、大丈夫ですか？傷痛みますか？」

「ああ、ちょっと。でも大丈夫だ……」

「刑事さん、あれ何です？凶悪犯か何かですか？」

タクシーの運転手はかなり動揺している。

「ああ、そんなようなもんだ。それより運ちゃん、よくやったな。たいした腕だ。おれたちの命の恩人だな。」

「あっしも死にたくはないですからね。」

凶悪犯が警察病院にいるわけではないのだが、説明しても理解できるわけではないので、八前さんはあえてそのままにしておくつもりのようにだった。

「しかし、悠姫は何であるそこにいてわかったんだ？」

「……たぶん、昨日八前さんに傷を負わせたので、警察病院にいる

って思ったんじゃないですか？」

瑛士が答えた。

「干渉波スタンガンは電磁波です。アイツらに使うと効果はありますが、ネットの掲示板に書き込むのと同じように居場所がわかってしまうようなんです。」

「だから日本全国からこの長岡に限定して現れたのか……」

そういった後、八前さんはハツとした。

「運ちゃん！ラジオかけてもいいか？」

「ええ、いいですよ。」

八前さんはラジオをつけた。

『……昨夜遅くから今朝未明にかけて、長岡市内の各ホテルや旅館などの宿泊施設において殺人事件が連続して発生いたしました。』

長岡市のローカル放送らしい。パーソナリティーが沈痛な声色で話していた。

『……今わかっているだけでも市内68か所で、計138名の死亡が確認されております。』

「ひゃ、138人!？」

俺たちは絶句した。

「何てこった……」

八前さんは顔をしかめた。

「……八前さん、何としても悠姫たちを止めないと、被害はもっと広がります。看護師さんは残念でしたが、ここは堪えてください。」

瑛士は暗い表情だったが、声からは強い意志が感じられた。

「ああ、わかってるさ。……138人を殺した犯人の中にはうちの娘もきつと入っているだろうから……」

俺はハッとした。そうだ、美那ちゃんは『メニューメンバー』だ。いくらコピーとはいえ、悠姫一人で、しかもこの短時間で百人以上は殺せない。『メニューメンバー』のコピーもかなりの数が来ているに違いなかった。

そんなことを話しているうちに長岡駅に着いた。

「じゃあ、運ちゃんありがとよ。」

俺たちは荷物を下ろし、駅へ向かおうとした。するとタクシーの運転手が追いかけてきた。

「あの……刑事さん、話聞いちゃってました。何だかわからねえけどたいへんなことになってるみたいですね。あっしにできることなら何でも協力しますんで、いつでも呼んでください。」

そう言って名刺を八前さんに渡した。

「……ありがとな。運ちゃん。……いや、何て読むんだ？これ。」

「『とうじ』、『十次晋也とうじしんやと申します。』それじゃ……」

十次さんは律義りちぎにお辞儀をして行ってしまった。

「……いい人だね……」

美鈴は手を振りながら俺に言った。

「そうだな。あんな目にあったら、絶対関わりたくないって思うのが普通ふつうだもんな。」

「よし！とりあえず腹はら拵しえだ！」

八前さんの言葉で今まで忘れていた空腹感が、一気に襲ってきた。

第8章 西丸 剛

「^{たけし}剛！ 早く起きなさい！」

ったく、うるさいな……もうちょつと寝かせろよ。

「剛！」

ドンドンドン！

母親が部屋のドアを激しく叩く。

「わかったよ！ 今行くよ！ 今日日は日曜なんだからもう少し寝かせてくれよ！」

「なに言ってるの！ アンタが8時半に起こせて言ったんでしょ！ 母さんもう仕事に行くからね！ 朝ご飯は勝手に食べてね！」

あつ！ そうだった！ 今日日は日曜だ！ プリキュアが始まる！！

僕は光の早さで階下こうりんに降臨した。

見逃すわけにはいかない。

30分後、僕は恍惚こうこつの極きわみにいた。

「ハァ……やっぱいいな……セーラームーンよりカタルシスを感じるよ。」

今日の秋葉散策はやっぱプリキュアメインだな。あ、でもやっぱりガンダムかなあ……悩むなあ。AKBは午後だから、午前中はゆっくり『ムセン』に行くか。

僕のオキニのホビーショップ、『ムセン』は会員特典でポイント

を貯めるとシヨップ特製のTシャツがもらえるシステムだ。

ファも捨てがたいけど、プルツーカーなあ、やっぱ。

僕は午前中『ムセン』に行ってから、『おでんの缶詰』でお昼を食べて、A k Bのライブを見た。帰り際、秋葉原駅前で中学時代の同級生に会った。

「お、西丸^{やぐまろ}じゃねーか！」

茶髪にピアス、全身にじゃらじゃらとアクセサリを付けているのは酒井公一。

「なんだよオメーまだオタクやってんのかよ！」

短髪でアゴひげを生やしているのが吉本武治。

「うわっ！だっせ！」

細目で出っ歯なのが成田亮平。

三人とも中学時代に僕のことをいじめ抜いた張本人たちだ。お陰で不登校になり、高校受験は失敗。中学浪人をする気力もなく、僕はニートになった。以来、28才になった今でも働く気にはなれず、親の脛^{すね}を嚙^{かじ}っている。

「おい、今時『タッチ』はねえだろうよ！」

このTシャツは『タッチ』の『南ちゃん』ではない。『みゆき』の『若松みゆき』だ。

間違いを訂正しようと思ったが、いきなりボディブローを食らって息ができなくなった。

ドスッ!

「うげっ!ごほっ!ごほっ!……」

「なっつかし〜!この感触!」

武治は中学時代からボクシングをやっていた。僕はよくサンドバツク代わりに殴られていた。

「おい、おれら暇だからさ、久しぶりに会ったことだし遊ぼうぜ!」
「い……いや……僕……」

帰って買ったばかりのケロロのDVDを見たかった。しかし、こいつらに目をつけられたからには、逃げるのは至難の技だ。ああ、悟空のように強くなりたい。ピッコロでもいいや。

僕は近くの公園に連れて来られ、さんざん殴る蹴るなどされた。

「何だ!?これ?『ケロロ軍曹』!?ばっかじゃねえの?」

酒井が僕の紙袋の中身を全部ぶちまけていた。

「キターーーーーー!」

吉本が僕の12,000円もするプリキュアのフィギュアを踏みつぶした。

「も、もうやめて……」

僕の目からは後から後から涙が出てくる。口の中はさっき殴られた拍子に切れたらしく血の味がした。

「おっ、いいもんみつけた！」

財布だ！　そういえば買い物をしてそのまま紙袋に入れてしまっていた。

「おっ、結構入ってんじゃない！」

「どれどれ？」

成田が覗く。

「おー！　諭吉ハッケン！」

「おっ！　続いてカードハッケン！」

父親名義で作ってもらったクレジットカードだ。酒井が僕の破れたTシャツの胸ぐらを掴んで凄んできた。

「暗証番号教えろよ。」

「い、いやだ！」

ガツツ！　バキッ！

あ……歯がぐらぐらする……

「教えろよ。」

「う……」

ドスッ！

吉本の膝がみぞおちにめり込んだ。

「う、うげー！」

「きったねー！こいつ吐きやがった！」

成田が騒いでいる。

ガシッ！

髪の毛を掴まれ、顔を上向きにされる。

「は・や・く。」

僕は暗証番号を言った。

「おい、成田、行って来いよ。」

酒井の命令で成田がATMに走って行った。しばらく酒井たちは僕を見下ろしながら、煙草を吸っていた。ほどなく成田が戻ってきた。

「いやー、一回に50万しか出せないから困ったよ。」

分厚い封筒に一万円札がぎっしり入っている。

「いくら借りてきたんだよ。」

「ざっと200万！」

「おおー！」

パチパチパチ……

僕は目の前が真っ暗になった。

この借金は働いていない僕の代わりに、両親が払うことになるんだ……

その後も酒井たちは散々殴る蹴るをした後に去って行った。

どうしよう……ニートの僕には貯金すらない……両親に迷惑をかけるということよりも、完全に生きる氣力を失ってしまった……思えばひどい人生だった……これからの人生もどうせ両親に迷惑をかけるだけで、生きていても意味がない……

「……死のう……」

僕は財布の中に残っていた小銭でビニール紐をコンビニで買った。さっきの公園に戻り、人通りのなくなるまでベンチに座って、今までの人生を振り返った。そうすると、あまりの理不尽さにふつふつと怒りが込み上げてきた。

どうして僕はっかりこんな目に遭わなきゃならないんだ。どうして他の人たちみたいに、普通に生きていけないんだ？ 今度生まれ変わったら、スーパーサイヤ人になって、アイツらに、この世の中に復讐してやる。絶対に！！

僕は午前2時、28才で首吊り自殺をした。



「ねえ……」

あれっ？

「ねえ……起きなさい。」

あれっ？ 僕死んだはずじゃ？

目を開けると周りは真っ白な、何もない空間だった。破れていたはずのTシャツは元通りになっていて、ケガも治っている。目の前には女の人が立っている。白いネグリジェみたいなワンピースを着て、長い黒髪を下ろした綺麗な女の人だ。母親とコンビニの店員とメイド喫茶以外の生の女の人と話すのは何年ぶりだろう。見とれていると、いつの間にか周りに人が集まってきた。

三人いる。一人は制服を着た男の子。中学生らしい。後の二人は小学生くらいの男の子。一人は大きな犬を連れている。もう一人は白いYシャツを着て、半ズボンを紺のサスペンダーで吊っている。しかも虫捕り網と虫かごを持っている。

「ここは……どこ？」

不思議と気分が安らいだ。

「ここは『Sion』よ。」

「君たちは……」

女の人はその問いには答えず、優しく微笑んだ。

「仕返ししましょう。」

こうして僕は彼らの仲間になった。



来る時と違って今度は自由席だった。時期的に混雑はしていないが、それなりに乗客はいる。俺たちは座席をボックス型にして座った。

新幹線に乗る前に、新聞を何紙か買い込んだ。それによると状況は比較級的に悪くなっていた。全国各地で変死事件が多発していたのである。この数日で2,000人以上の人が全国で変死しているようだ。

死因を見ると、明らかに『Sionメンバー』に殺されたと思われるのがほとんどだ。その中でも一番被害が大きいのは、言うまでもなく新潟県長岡市の138人だ。しかし、今朝殺された看護士さんはその数に入っていないし、もしかしたらあの後も悠姫たちは俺たちを捜して誰かを殺したかも知れない。そう考えるととても気が急いた。

「晃、何考え込んでんの？」

「んっ？ ああ、俺たちのせいでたくさんの人たちが殺されちゃったなあって……」

「崎田くん、それは違う。君たちのせいではないよ。」

八前さんは片手で器用に読んでいた新聞を畳んだ。

「君たちは命の危険を犯してこの変死事件……『Sion』事件を解決しようとしているだけだ。君たちがいなければいずれ人類は滅されてしまうんだからな。」

八前さんに言われると少しは気が楽になった。

「八前さん、ありがとうございます。」

「俺なんか私怨でここにいるんだからな。まさに『Sion』だ。ハハッ。」

八前さん、ギャグのセンスないな……

上越新幹線は間もなく高崎に到着しようとしていた。

ドタドタドタドタ！

ビジネスマン風の男の人が血相を変えて通り過ぎて行った。

「あぶないなあ。転んだらケガするわよ。」

何だか昨夜、夢の話を聞いたせいとか、美鈴が修学旅行の引率をしている先生のような感じがした。

俺たちが乗っているのは7号車で、この車両より前は指定席の車両だ。

「？ 何かあったのかな？」

そう思って前をのぞき込むと、何人かがまた急いでこっちに来るのが見えた。

俺は悪い予感がした。

「瑛士……」

「……わかってる。」

瑛士は鞆から干渉波スタンガンを取り出した。

新幹線はいわゆる動く密室だ。ここで襲われたら逃げ場所はない。見つかる危険性はこの際置いといて、身を守ることが先決だろう。

「キャアアアアア！」

前の車両から悲鳴が聞こえた。

「八前さん！美鈴をお願いします！」

俺と瑛士は立ち上がり、手早くそれぞれの荷物を二人に手渡した。

「瑛士さん！晃！死なないでね！」

「すまない……この手じゃ足手まといだな……無理するなよ！危なくなったら逃げろよ！」

「わかってます。」

瑛士は微笑んだ。

二人が後ろの車両に移るのと入れ替わりに大勢の人が押し合いへし合い走って来た。

「キャアアアアア！」

「うわあああああ！」

「人殺しだ！」

ドドドドドドドド！

「みなさん！落ち着いてください！落ち着いてください！」

車掌が怒鳴りながら後ろの車両から歩いて来た。空いた座席に身を避けながら、俺たちの横を通り過ぎ、前の車両に行こうとする。すると突然立ち止まり、前方へ声を掛けた。

「お、お前！何をしてるんだ！」

ガシッ！

車掌の頭が誰かに両手で挟まれた。

「あ、ああ……」

車掌は頭を挟んでいる腕に手をかけて引き剥がそうとする。しかし、相手の力が強いのか、全く剥がれそうにもない。

「が……がが！あがが……」

車掌の全身が痙攣けいれんを始めた。

「瑛士！助けに行こう！」

俺が身を乗り出すと、瑛士は俺の肩に手を掛けた。

「もう手遅れだ。この間に後ろの車両に逃げよう。たぶん後10分ぐらいで高崎駅だ。それまで時間を稼げばいい。」

「畜生……」

齒痒かった。

自分たちを狙ってきた怨霊に無関係の人が目の前で殺されていく。そして見殺しにして逃げなければならない自分の無力さに腹が立った。

車掌の両手はすでにだらんとしている。身体は持ち上げられ、足は床から数センチ浮いていた。

「か…かか…げえ！」

グチュグチュ！

車掌の頭部は左右から潰され、ゴムでできているように縦に細く縮んでいく。

グシャ！

頭部は完全に潰され、車掌の身体は床に崩れ落ちた。

怨霊は悠姫ではなく男だった。黒い長髪、細面で面長の顔。目は赤く異様な光を放っており、無表情で車掌の死体を見下ろしている。GパンにTシャツという服装は怨霊らしからぬ雰囲気だ。着ているTシャツには『あだち充』のキャラクターがプリントされている。

「瑛士……」

「ああ……たぶん『怨滅』……『剛』だ。」

状況的に『コピー』だと思われるが、他の『メンバー』と呼ばれると厄介なので見られる前に後ろの車両に逃げた。

8号車に人影はなかった。

ここで問題になってくるのは干渉波スタンガンはいいとして、バットなどの物理攻撃がヤツらに通用するかだ。悠姫の『コピー』は警察病院の自動ドアをすり抜けた。ということは物理的な攻撃は通用しないのか？しかし人を殺すためには接触しなければならない。現に車掌は持ち上げられた。

「瑛士、バットってアイツらに効くかな？」

「たぶん当たりはするだろう。それで倒せるとは思えないがな。」

俺たちは9号車に走り込んだ。この新幹線は全部で16両編成だ。

一番後ろまで逃げて行けば時間が稼げる。俺たちはどんどん後ろへ走って行った。剛はそれほど速く追って来る様子はなかった。

14号車は乗客でぎっしりだった。15号車も16号車もぎっしりらしい。こんなところに怨霊がきたらと考えると寒気がした。

「13号車で迎え撃つしかないな。」

俺たちは覚悟を決めた。

新幹線はスピードを落とし始めた。間もなく高崎駅に着くのだらう。

前の車両で何人殺されたのかわからないが、車掌が殺されるところは見た。おそらくこの新幹線は高崎で警察によって足止めをくらうだろう。

「瑛士、悠姫の時の作戦が使えないか？」

「お前が剛の気を引きつけて、その隙にオレがスタンガンで攻撃するってことだな。」

「ああ。」

「よし。それでいこう。」

俺たちは車両の真ん中で攻撃することにした。俺は左の座席、瑛士は右の座席に隠れた。

新幹線はぐんぐんスピードを落としていく。高崎駅はもう目の前だ。

プシューーーーーー

剛が13号車に入って来た。背もたれの間から覗くと、剛はゆっくりと、各座席を確認しながら歩いて来る。剛が横に来了瞬間、俺は殴りかかった。

「うおりゃ！……あれ？」

剛はこっちを向いておらず、瑛士の方を向いていた。

「瑛士！」

瑛士はまだ座席の間に身を沈めたままだ。

「みいゝつけたあゝ。」

剛が瑛士に掴みかかる。

「畜生！」

ガツツ！

剛の頭を横殴りに殴った。しかし、剛は気にすることもなく瑛士に近付く。

「くそお！こっち向けよお！」

ガン！ガン！ガン！ガン！

今度は縦にバットを振り下ろし、剛の頭や背中を殴りまくった。しかし剛は全く動じない。

「くっ！この！」

瑛士がスタンガンを突き出す。

ガシッ！

剛はスタンガンを握る瑛士の腕を掴んだ。

「うわっ！」

ガチャ！

掴まれた拍子にスタンガンは床に落ち、座席の下に入り込んでしまった。

「ヤバい！ 崎田！ 拾ってくれ！」

「ち、畜生！」

急いでしゃがみ込み、座席の下を探すが見つからない。

「うわああっ！」

剛が両手で瑛士の頭を挟んでいる。

「瑛士い！」

瑛士が殺される！ ちつくしょ！ どこにあるんだよ！

「んぐっああああ！」

瑛士の身体が徐々に持ち上げられていく。

プシューーーーーー

『14号車』のドアが開き、八前さんが飛び込んでくる。

「瑛士くん！」

その時、八前さんの後ろから小さな影が飛び出し、俺たちの方へ走って来た。そのままその小さな影は剛に体当たりした。

「あ……」

剛はポカンと口を開けたまま、その影といっしょに消えてしまった。

「うっ……！」

崩れ落ちるように瑛士が座席に座り込んだ。

「ハア……ハア……ハア……」

「瑛士！大丈夫か！？」

瑛士の隣りに座り、声を掛ける。八前さんと美鈴もすぐにやって来た。

「瑛士くん！」

「大丈夫？」

「ああ……ダメかと思ったよ……」

「ごめん、瑛士……俺がもっとしっかりしてりゃ……」

瑛士は何かを振り払うかのように頭を振った。

「……頭が痛い。」

「そりゃそうだよ。あれだけ圧迫されりゃ。でも、剛は何でバットを構えた俺じゃなくて、隠れてたお前を最初から狙ったんだ？」

瑛士はため息を一つついた。だいぶ落ち着いてきたらしい。

「答えは簡単だ。」

新幹線はゆっくりとホームに止まるところだった。

「お前がバットを構えてたからだ。」

えっ？ どういうことだ？

「怨霊にとってバットは怖くない。バットを持っているやつ逆を見れば、本当に怖い武器を持っているヤツがいるってことさ。」

「ちつきしょ！ そうか！ やり方がワンパターンだったってことか。」

「そういうことだ。すまなかった。オレの作戦ミスだ。」

瑛士は俯いた。

「よせよ、瑛士。作戦を最初に言い出したのは俺だ。今朝上手くいったもんだから調子に乗っちゃまった。」

「いや、決断したのはオレだ……」

「お二人さん、変な譲り合いは置いといて、とりあえず降りようや。面倒臭いことになる前にな。」

八前さんの言葉で窓の外を見ると、たくさんの警官や鉄道警察官が走って前の車両に乗り込むところだった。

「ははっ！そうですね。助かったんだからとりあえずOKだな！」

俺はスタンガンを座席の下から探し出し、瑛士に渡した。

「ところで八前さん、さっきの小さな影はなんだったんですか？お陰で助かりましたが……」

瑛士もわからなかったみたいだ。

「そうそう。子どもみたいだったけど消えちゃったし。」

「お前ら恩人の顔ちゃんと見なかったのか？」

八前さんは呆れ顔だ。

「だってあの状況でちゃんと見られるわけないじゃないですか。」

「そうか。あれはな、『工藤』だ。」



俺たちは高崎駅前でレンタカーを借り、東京へ向かうことにした。まだ午前中ということもあり、比較的道路は空^すいていた。

「しかし意外な援軍が現われたもんだよね。工藤か……」

俺は後部座席に美鈴と座っており、運転は瑛士、助手席に八前さんが座っていた。東京で乗り捨てるつもりだったので安い車でよか

ったのだが、新幹線が止まってしまったせいで、レンタカーも高い車しか残っていなかったのだ。

車はレンタカーにはあるまじき『シーマ』だった。ふかふかのシートに静かな車内。最新式の衛星ナビに液晶DVDテレビ。俺なんかじゃ一生乗ることもないだろうな。

「瑛士、工藤はどうして来ることができたのかな？」

「わからん……とにかく『Sion』で何かが起こっているのは間違いないさそうだな。」

「それにしたって、工藤はどこから現れたんだ？」

その質問には八前さんが答えた。

「おれの携帯だ。」

八前さんは携帯を後ろに向けて振って見せた。

「御手洗に到着が遅れそうだと連絡を入れたんだ。」

キキーーーーー！！

瑛士は急ブレーキをかけた。

「うわっ！」

「きゃあ！」

俺と美鈴はしたたか前の座席に顔をぶつけた。

「八前さん！御手洗さんに携帯で連絡したんですか！？」

瑛士には珍しく声を荒げていた。

「そ、そうだが、なんかマズかったか？」

「電話回線だって危険なんですよ！ 実際工藤が現われたんですよ！？」

「そうだ。御手洗は電話には出なくて、留守電だった。電話を切った後突然ダウンロードが始まって焦ったが、怨なんたらじゃなくて『工藤直樹』ってなってたから大丈夫と思ったんだが……」

瑛士は溜め息をつくと車を発進させた。

「八前さん、実際に助かりましたから結果オーライですが、もし工藤が『メンバー』になって『昇格』してたら？ オレたちの目的地が御手洗さんのいるところだとヤツらにバレたら？ 他にいくらでも危険は考えられますよ……」

確かに瑛士の言うとおりだ。助かったのは事実だが、それは運がよかったただけだ。

「そうか……そうだよな……すまなかったよ。軽率だったな……」

八前さんはヘコんでいた。

「まあまあ。結果的には助かったし、何事もなかったんだからいいじゃないの。」

美鈴がまとめた。

「フッ、そうだな。八前さん、とにかく電話はもうしないでください。危険過ぎますから。」

「ああ、わかった。」

八前さんが携帯の電源を切ろうとした時、八前さんの携帯の着信音が鳴った。

チャラリラリン！

「！ 御手洗さんから電話ですか？」

嫌な予感がした。

「いや……メールだ……」

「八前さん！すぐに電源を切ってください！メールは完璧にヤバい！！」

八前さんは慌てて電源を切った。

その時いきなり車が蛇行し始めた。

キキキキキキキキキキキキ！

「うわああああ！瑛士！どうした！？」

「きゃあああああ！」

見るとナビの画面から手が伸びていて、瑛士の腕を掴んでいる！

「ヤロウ！」

俺は鞆からスタンガンを出し、画面から伸びている腕に押し付けた。

バチバチバチバチバチバチバチ！

凄まじい音が車内に響き、激しく明滅した。

キキキキキキー！

車は急激にスピンし、ガードレールにぶつかった。

ガッシャーン！！

◇ ◇ ◇

……う……

痛てて……あれっ？何で目の前に瑛士がいるんだ？

「うわっ！」

俺はフロントガラスに背中を押し付ける格好で横になって寝ていた。どうも吹っ飛んだらしい。

「お、おい、瑛士、大丈夫か？」

「……ん、ああ……」

瑛士はハンドルにぶつけたらしく、額から血を流しているが、無事ようだ。

「崎田！大丈夫か！？」

八前さんはさすが修羅場を通ってきた現役刑事だけあって無傷だ。

「は、はい。たぶん……」

「いったい……」

美鈴も運転席の後ろから現われた。
よかった、みんな無事らしい。

「怨霊はどうした？」

瑛士はかなり痛そうだ。

「たぶん……消えた。あれは誰だった？」

俺の見たところ男の腕のように見えたが、小学生ほど小さくはなかった。

「わからんが、信人か剛だろう。」

やっぱりな。ナビか……盲点だった……もっと早く気がつくべきだった……

俺たちは車から降りた。

事故を見て通り掛かりの人が救急車と警察を呼んでくれたらしい。
遠くからサイレンが聞こえてきた。

「マズいな……こんなところで時間を潰すわけには……」

そういうながらも、瑛士はふらふらしていた。

「瑛士くん、おれのせいですまなかった。でも一応病院で看てもらった方がいい。ヤツらにはおれと崎田が手を出させん。」

「そうだ、瑛士。任せとけ。おっと！」

瑛士が崩れ落ちそうになるのを抱えた。
こりゃ進むのは無理だ。

「……すまん……」

瑛士はそのまま気を失った。

瑛士は救急車で運ばれ、俺たちは八前さんの計らいで、パトカーに乗ってついていった。瑛士は救急で運ばれたこともあり、優先的に脳波やらCTやら、やたら金のかかりそうな検査をたくさんこなすことができた。結果は『額の擦り傷以外異常なし』だった。

「みんな心配かけてすまない。」

頭を打っているから念の为一晩入院するように言われていたが、医大生であることと、八前さんが変死事件解決のための大事な任務があると口添えして、すぐに病院を出ることができた。

「いや、無事で何より。」

八前さんは本当にうれしそうだ。

「そういえば八前さん、御手洗さんと連絡取れたんですか？」

八前さんの表情が曇った。

「それが病院に着いてすぐにかけてみたんだが、全く応答なしだ。」
事故の原因ともなったメールは開いていなかった。いや、開くことができなかった。またいつ襲われるかわからなかったからだ。

「結局行くしかないってことだな。」

「すまない、みんな、オレのせいで無駄な時間を食わせてしまった。」

「いや、瑛士くん、おれの軽率な行動のせいだよ。本当におれは足手まといだな……」

「プッ、また瑛士さん謙遜けんそんし合ってる。」

「好きだな、瑛士。」

「フッ、確かにな。」

「ハハハ！」

俺たちはみんなで顔を見合せて笑った。

何度も危ない目に遭ってきた仲間としての連帯感がそこにはあった。

「車、ダメになっちゃたけどどうします？」

あの車は誰が弁償するんだろう。八前さんは大丈夫って言ったけど。

「パトカー借りるんですか？」

「バカね、晃は。そんな簡単にパトカーが使えるわけないでしょ。ね、八前さん。」

「そ、そうだな。」

バカ？バカって言ったな？

「じゃ、また借りるか？」

「もうドライバーがいない。」

そうか、八前さんは片手しか使えないし、瑛士は無理させられないしな。

ブーン！

タクシーが病院の玄関に横付けになった。

「いっそのことタクシーで武蔵野署まで行っちゃうか？」

俺は冗談でそう言ったが、瑛士は本気にした。

「時間を無駄にはできない。それしかないか。」

瑛士はつかつかとタクシーの方へ歩いて行く。

「ちょ、ちょっと待てよ、瑛士！東京までいくらかかると思ってるんだ？お前がいくら金持ちだと言ってもそれは無駄遣いというもの……」

するとタクシーの運転手と何やら話していた瑛士はこっちを振り向いてニヤツと笑った。

「無料でいいってさ。」

「ええっ！マジかよ！」

「嘘っ！」

俺たちが行くと、タクシーの運転手が降りて来た。

「やあ、刑事さん、みなさん、会えてうれしいですよ！」

十次晋也だった。

何で長岡のタクシーがここにいるんだ？

『長岡タクシー』

間違いない。

「今朝の運ちゃん！……何でこんなところにいるんだ？」

八前さんが聞くと十次は嬉しそうに話し出す。

「いや、聞くと涙、語るも涙の大スペクタクルドラマでしてね……」

「とりあえず、出発しよう。御手洗さんと連絡が取れないのが気にかかる。」

瑛士は大スペクタクルドラマが始まる前に制した。

「そうだな。おい、運ちゃん、無料ってのは本当だろうな。」

「もちろんですよ！あつしにできることなら何でも協力するって言ったじゃないですか。さ、乗ってくださいえ。」

俺たちは再度東京に向けて出発した。時間は午後7時を過ぎ、辺りは暗くなっている。

十次さんの話によると、俺たちが乗った新幹線で大量の変死殺人が起きたことはすでにニュースになっていたらしい。十次さんは新幹線が止まることを予測して、自分の出番とばかりに高崎に来た。

しかし、俺たちは十次さんの予想に反してレンタカーで出発してしまっていた。高崎駅前で八前さんに何度も電話をしたが、繋がらなかった。

すでにその時俺たちは事故ってたんだな。

諦めて帰ろうとしたら昔のタクシー仲間に出会って、レンタカーによる事故の話聞いた。急いで現場に行くと、車はあったものの、誰もいない。現場を処理していた警察官に病院の場所を聞いて辿り着いた。

ということらしい。世の中にはこんな人もいるんだなあ。

関越自動車道を上りながら、十次さんに今起きていることの真相を話した。十次さんは今朝悠姫に追いかけられているだけに、すぐに信じてくれた。

もう東京都に入っている。サービスエリアで御手洗さんに再度電話をかけたが、やはり繋がらなかった。武蔵野署に問い合わせると、御手洗さんはいないという。

俺は嫌な予感がしたが、あのいかつい顔を思い出し、御手洗さんが簡単にやられるはずがないと考えることにした。

「武蔵野署に着く前に作戦を話す。何か疑問や意見があったら言うてくれ。」

瑛士が珍しく先に計画を教えてくださいという。いつもは『後でわかる』と言うだけで、どんどん先に進んでしまうのに。それだけ仲間としての連帯感が深まったのかなと思うと、少し嬉しくなった。

「まず、八前さんに曾根崎さんを連れ出してもらいたいんですが、できますか？」

そうだ。俺たちだけでDysonに忍び込むのは難しいだろう。曾根崎さんはDysonの社員なんだから、何かしら侵入できる手

段を知っているはずだ。

「殺人事件の被害者の遺留品に指紋が残っているような重要参考人は、通常、本庁で取り調べられる。ただ移送されたかどうかは御手洗クラスのヤツじゃないとわからないだろうな。」

「この計画に曾根崎さんは絶対に必要です。計画を成功させるためには、まず武蔵野署に行って曾根崎さんの所在を確認するところからですね。八前さんお願いできますか？」

「ああ、任せてくれ。」

八前さんがいなければ、計画はこの段階で頓挫^{とんざ}していたかも知れない。そう考えればこの計画の困難さがよく理解できる。

「その間オレは別行動させてもらう。」

「えっ？ 瑛士はいっしょに行かないのか？」

俺は急に不安になった。考えてみれば、瑛士がいなければ俺は今朝間違いなく死んでいた。八前さんだってそうだろう。いや、ヘタをすれば美鈴を含めた新幹線の乗客全て殺されていたかも知れない。

「ああ、計画のための準備がある。同時進行でやらないと時間の無駄だ。」

「準備？ 爆弾でも用意するのか？」

「フッ、似たようなもんだ。」

「立場上おれは瑛士くんを止めなきゃならんのだが、何も聞かなかったことにしよう。」

「八前さん、ありがとうございます。」

「武蔵野署には八前さんと十次さんで行っていただけますか？」

「わかった。」

「任せといてください。」

十次さんは役割を与えてもらって嬉しそうだ。

「俺と美鈴はどうすればいいんだ？」

「崎田はバイト先に行ってくれ。」

「は？」

俺のバイト先は池袋にある漫画喫茶だ。

「そして、店長に言って明日一晩貸し切りにしてもらうんだ。金ならオレが払う。何なら八前さんに行ってもらって国家権力を行使してもらってもいい。」

「おいおい、人使いが荒いな……」

八前さんは苦笑いする。

「一晩貸し切りにしてどうするんだ？」

「陽動作戦だ。新幹線の中で工藤がオレたちを助けてくれたろ？ たぶんあれは『S i o n』に誰もいなかったから出て来られたんだ。」

「つまり、俺のバイト先である漫画喫茶に『S i o nメンバー』を呼び出すってことか？」

「そうだ。」

「なるほどね。本丸、つまり『S i o n』のあるD y s o nを空にして攻めるってわけか。」

それを聞いて美鈴が身を乗り出す。

「ちょっと待って。いくら漫画喫茶のパソコンが有線だからって、『本物』が来るとは限らないでしょ？ 『コピー』だったら陽動にならないわ。」

「さすが美鈴ちゃん、その通り。」

そうか。

漫画喫茶に『Si onメンバー』を呼び出しても、『コピー』だつたら本丸は空かないもんな。

「そのための準備だ。」

「どうやって『コピー』が来ないようにできるんだ？」

「コンピュータウィルスをDysonのホストコンピュータに流す。」

「！ そんなことできるのか？ 仮にも大企業のホストコンピュータだぞ！？」

「フツ、オレを誰だと思ってるんだ？」

さすが瑛士、頼りになるな……

「コホン……おれは何も聞こえんぞ……」

八前さんは口笛を吹いている。音程外れてますよ。

「……アタシはどうすればいい？」

美鈴は俺といっしょに来て欲しい。何かあった時、俺が守ってやりたい……

「……どうするかは美鈴ちゃんに任せるよ。」

「アタシは……」

美鈴はチラッと俺を見る。

頼む！俺と来てくれ！

「八前さんたちといっしょに行くわ。この中で曾根崎さんの顔を知ってるのは晃とアタシだけだし……」

美鈴は俺を見て悲しそうに微笑む。

「美鈴ちゃん、危険だし無理について来なくてもいいよ。曾根崎の顔は知らなくても、御手洗のことはよく知ってるんだから大丈夫だよ。」

八前さんは俺に気を遣ってくれてるみたいだ。

「ううん、無理はしていません。アタシも自分にできることをしたいんです。新潟でもアタシ何の役にも立てなかったし……」

「そんなことないよ……少なくとも病院ではとても助かった。」

「お願いします。アタシも連れて行ってください。」

「しかしなあ……」

八前さんは気まずそうに俺を見る。

俺は覚悟を決めた。

「八前さん、俺からもお願いします。美鈴を連れて行ってやってください。」

あゝあ、俺泣きそう……

「晃……ありがとう。」

美鈴も泣きそうだ。美鈴がこう言うからには何か強い思いがあるんだろう。俺にそれを邪魔する資格はない。俺は俺のすべきことを

するだけだ。キタローやウィッシュやナエトルたち……『Si on』の犠牲になった数多くの人のためにも。ここは恋よりも正義だ！

「……それじゃ美鈴ちゃん、干渉波スタンガンは美鈴ちゃんが持つてくれ。ヤツらが次に狙うとしたら、御手洗さんの近辺のはずだ。」

開いてはいないが、八前さんに御手洗さんはメールを送った。それは悠姫の知るところだろう。そう考えれば八前さんの言う通り、今一番危険なのは御手洗さんだ。

俺たちが池袋に到着したのは夜の10時過ぎだった。別れる前に用意するものがあるとかで、瑛士はどこかに行ってしまった。戻ってくるまで待つように言われ、俺たちは駅前のファーストフード店で待つことにした。

八前さんも買い物があるとかで、十次さんを連れてどこかに行ってしまった。明らかに俺たちに気を遣ってのことだとわかったが、その心遣いは嬉しかった。

店内には同年代のカップルやコンパ帰りらしいグループが楽しそうに談笑している。

俺たちだってほんの一週間前には同じように過ごしていたのに。

「あの人たち楽しそうね。」

美鈴がゲラゲラ笑っている男女数名のグループを見遣りながら呟いた。

「ああ、そうだな。」

「でも、こうしている間にも誰かが殺されている。」

「……ああ、そうだ。」

「ねえ、晃。何で自分がって考えたことない？」

「新幹線の中で思ったよ。剛が車両に入って来た時、怖くて逃げ出したくてそう思った。」

「アタシは草薙さんが殺された時かな……でも、このままなら日本中が、いえ、世界中が草薙さんや沙江子みたいに殺されちゃうのよね……」

「……今のところそうならないようにできるのは俺たちだけだ。」

「……警察とか自衛隊とかいくらでも専門知識や技術のある人たちがいるのにね。何でアタシたちなんだろうね。」

「美鈴、どうしたんだ？」

「アタシね、高校の時部活の先輩に告白されたことがあるの。」

まあ、あれだけ目立ってりゃ周りは放っておかないよな。

「でも、断ったわ。」

「好きじゃなかったんだろ？」

「うーん、どうだろ？うちの学校のエースで、周りの子たちはみんな憧れてたわ。アタシもカッコいいなって思ってた。」

「憧れの先輩か……」

俺は高校時代を思い出して胸が痛んだ。やっぱり美鈴も通過儀礼してたんだな。

「アタシね……『何でアタシ？』って思って怖くなっちゃったんだよね……。みんなが憧れるアイドルとアタシじゃ釣り合いが取れないって。」

わかる、わかる。

俺と美鈴もそうだな。こうしている間にも周りの男たちはチラチラ美鈴を見てるもんな。

「でも選んでくれたんだから感謝しなくちゃいけなかったんだよね。付き合うとかは別だけど、少なくとも『何でアタシ?』って思っちゃいけないよね。」

「相応しいかどうかは関係ないか……大事なのは自分の気持ちだよな。」

そうか。美鈴の言いたいことがわかった。

「俺、宗教とか入ってないけど、神様がもしいるとしたら、俺たちは選ばれたんだな。『Sion』に抵抗する者として。」

「アタシも宗教とか入ってないけど、選ばれたからには投げ出しちゃいけないような気がするの。たとえば自信がなくても、他に適任者がいると思えても『何でアタシ?』って思っちゃいけないかなって……」

「運命の神様か……」

死んだら恨むぞ。いや、俺は死んでも、美鈴が死んだら悠姫以上に恨んでやる。

「沙江子が最後にメールしたのがアタシって、最初は迷惑だなんて思ってた。でも、これも運命だったのかもね。沙江子は彼女の短い人生の最後にアタシを選んでくれた。彼女のためにもアタシ絶対曾根崎さんを連れて来るね。」

「美鈴……お前が死んだら俺は『Sionメンバー』になって悠姫といっしょに運命の神様に仕返ししてやるからな。」

「アハハ！ 晃じゃ無理かもね。『おまえじゃ役に立たない!』とか言われるんじゃない?」

「ったく……だからどんだけなんだよ！ 俺は！」

このままなら人類の運命の神様は悠姫ということになる。

どうせ死ぬなら最後まで抵抗してやろう。それが『選ばれた』俺たちの運命ならば。

瑛士といっしょに八前さんたちも戻ってきた。瑛士はデカイ買い物袋を提^さげている。

「待たせたな。みんなこれを持って行ってくれ。2、3日は保^もつはずだ。」

「これは……P H S か!？」

俺は玩具のように小さくて軽い携帯電話のような物を受け取った。黄緑色で小さな画面が付いている。これがP H S か……知ってはいたが、持つのは初めてだ。

「これなら悠姫に見つからずにどこからでも連絡を取り合える。少なくとも都内ではな。」

東京都内はまだP H S がガンガン入るみたいだ。しかも、地下では携帯よりも電波状態はいいそうだ。

「これを買いに行ってたのか。」

俺は改めて瑛士を尊敬した。瑛士だったら運命の神様を出し抜けるな。きっと。

「それに、これも買ってきた。」

大きな荷物を床に下ろすと、ガラガラと音がした。

「これ何だ?。」

八前さんが不思議そうな顔をした。

「金属バットです。計画を成功させるために干渉波スタンガンと同じ効果が出せる打撃系の武器は絶対に必要です。」

「スタンガンだと接近しなきゃならないからな。……全員分あるのか？」

「今晚徹夜で作ります。」

「おいおい……瑛士くんはウィルスだって用意しなくちゃならないんだろ？一人でたいへんじゃないか？」

八前さんの言う通りだ。

「瑛士、バイト先の交渉がうまくいったら俺が手伝うよ。」

「そうだな。そうしてもらおうと助かる。」

簡単に死んでたまるか！

瑛士は駅近くのビジネスホテルで作業をするそうだ。

八前さんと十次さんと美鈴は、十次さんのタクシーで武蔵野署へ。深夜の方が行動しやすいだろうと言うことだ。十次さんは『深夜にシンヤが行動するカッコワライトジカッコ』とか言っていたがわけがわからないのでみんなでスルーした。

そして俺はバイト先へ。歩いて10分くらいのところにあるが、店長が厄介だな……あのオカマ店長、一晩貸し切りなんて認めてくれるかな？

それぞれ目的を達成したら、明日瑛士の部屋に集合することにした。

またみんなに会えるだろうか。

いや、絶対会える！そして、絶対生き残る！

俺はそう心に誓った。

美鈴が別れ際にそっと耳打ちした。

「アタシに選ばれたこと、感謝しなさいよ。」

どういう意味だ？

第9章 佐伯 瞳

ハア……ハア……ハア……

タッタッタッタッ！

ハア……ハア……ハア……

タッタッタッタッ！

怖い……まだ追って来る……

タッタッタッタッタッ！

だんだん追い付かれてくる……

ハアハア……ハアハア……

もう……息が続かない……足が動かない……お母さん……お父さん……俊夫……助けて！！

わたしは追い付かれないように何度も道を折れ曲がる。

タッタッタッタッ！

後ろに足音が迫ってくる！

どうしてわたしがこんな目に遭^あわなきゃいけないの？何か悪い事……した？

「おい！いたぞ！」

左手の道から声が聞こえる。仲間に見つかってしまったらしい。

「い、いや！」

ハアハアハアハアハアハアハアハア……

タタッタッタッタッタッ！

追いかけて来る足音が増える。

もうだめ！走れない……

わたしは町外れの公園へ逃げ込んだ。田舎なので夜も9時過ぎにもなると、公園の人影は全くない。しかし、身を隠すところはある。茂みや遊具の中、とにかく隠れなきゃ捕まる！

わたしは最後の体力を振り絞ってダッシュした。

公園の中の茂みを回り込み出口へ。と見せかけて茂みの中に隠れる。四つん這いになり、音を立てないように静かに移動し、公園横の土手へ身を沈め、息を殺す。

ハア……ハア……ハア……

ダダダダダダダダ……

何人かの足音が公園の出口から道に出て行くのが聞こえる。

「ちつくしょ！見失った。おい、芳樹！お前あっち行け！和也！お前はあっちだ。俺はこっちを探す！」

ハア……ハア……ハア……

だいぶ呼吸も整ってきた。これなら逃げ切れる。

わたしは制服のスカートが太ももまで捲まくれ上がっているのに気付いたが、すぐ上にいる男たちに見つかることを恐れ、そのままじっとしていた。

そのまま10分ほどじっとしていた。公園の方からは何も聞こえない。土手下の小川から蛙かえるの鳴き声が聞こえるだけだ。

もう……大丈夫かな？

わたしはそっと土手を登り、公園の茂みに入る。隙間から公園の中や出口、さらには外の道まで覗いたが、動くものはないようだ。ほっと一息つくと、ゆっくり茂みから這はい出た。

「見いゝつけた。」

茂みの前に男たちが座っていた。

「キャアア！」

「おっと！」

再度逃げようとするわたしの背中に高之がのしかかる。

「うっ……」

息が詰づまる。

「もっと声出してもいいぜ。どうせ誰にも聞こえないからな。」

高之がわたしの背中の上で言う。わたしからは見えないが、吐き気のするニヤけ顔が目につぶ。

「や、やだ！どいて！どいてよ！だ、だれか！助けて！」

「無駄だな……」

確かに無駄なのはわかってた。この町は田舎だし、さらにここは町外れだ。一番近い民家まで500mほどある。助けは期待できなかった。

わたしは仰向けにされ、両手を押さえられた。高之の顔が目の前にあった。

「瞳ひとみちゃん。自分から誘っておいて逃げるのはずるいんじゃない？」

「……わたしはいっしょにバカやるのが楽しかっただけよ！こんなことまでする気はないわ！」

「お前にする気はなくても俺にはあるんだなあ。」

高之はわたしのブラウスを脱がしていく。

涙が出てきた。もう泣かないって決めたのに。

下着も取られ、高之と芳樹がわたしの身体をまさぐる。

俊夫……弟が死んだあの日からわたしは変わってしまった。こんな不良たちとつるむようになった。両親も変わってしまい、離婚した。

父は麻薬に手を出し、母親は気が狂って精神病院で死んだ。父親が死んだのを知ったのは最近だ。交通事故らしいが、どうせラリッてたのだろう。それまでとても幸せだった佐伯家をめっちゃめっちゃにした弟の死。

わたしは絶対に許さない。わたしたちをこんな目に遭わせたヤツらを。

弟を殺した『いじめ』を。

お父さん、お母さん、俊夫……わたしが仕返しをしてあげるから待っててね。

わたしは3人に代わるがわる犯された。その夜わたしは首を吊っ

て自殺した。これで佐伯家は全滅したことになる。



目が醒めると真っ白な空間にいた。

……何もない。ドアも、窓も、家具らしきものも……

周りを見回したが誰もいない。

わたしは高校の制服を着ていた。自殺していた時着ていたままだ。

……ん？

……自殺？

そうだ！わたし死んだはずだ。

少なくともここは病院ではない。わたしの家でもない。

ここは……どこ？

「ここは『Sion』よ。」

はっとして声のした方を振り向くと女の人が立っていた。

ほっそりとした身体に真っ白なネグリジェのようなワンピースを着ている。細面で白い肌。二重 瞼の大きく吸い込まれそうな美しい目。長い黒髪を腰まで垂らしている。

「あなたは……誰？」

「私は藤原悠姫。あなたの友達よ。」

「友達？」

「でも、わたし死んだんじゃ……」

「そう。死んだわ。首を吊ってね。」

わたしはわけがわからなかった。
死後の世界の話は生きている時にテレビとかでやってたけどこんなだったかしら？

「藤原……さん？……『Sion』ってどこ？あの世？」

悠姫と名乗った女性は微笑む。笑うと周りの空気が温くなり、やわらかく発光したように感じられる。

「悠姫でいいわ……ここは現世と黄泉との間よ。」

「間……？」

「階段の踊り場のようなものね。」

悠姫は両手を上げ、上を見上げた。まるで悠姫は光のシャワーを浴びているようだ。

「ねえ……仕返ししよう？」

悠姫がまたわたしに視線を戻して聞く。

「仕返し？」

「そう。仕返し。アイツらに。」

「アイツら……」

わたしの17年という短い人生を思い返すと、わたしの中に炎が燃え上がってくるのがわかる。

「アイツら……絶対殺してやる！アイツらだけじゃない！俊夫を殺したヤツらもみんな殺してやる！いじめをするやつはみんな殺して

やる!!」

身体に力が漲みなぎってくる。今ならアイツら全員に襲われても返り討ちにできそうな気がする。

「いいわ。そのエネルギー。『仲間』になるのに十分。」

悠姫がそう言った時、ぞろぞろと人が集まってきた。

「おねえちゃん!」

「!? 俊夫?」

驚いた。

弟の俊夫が飛び付いてきた。

「どうしてあんたがここにいるのよ?」

「ボク……ボクね、パパとママが死んじやった時、すごく悲しかったんだ。だからボクやパパやママを殺したヤツらみんな死んじやえ! っと思ったら、悠姫さんがボクをここに連れて来た。」

「そうなの……でも、また俊夫に会えてうれしいわ!」

わたしは俊夫を抱き締めた。

「お父さんとお母さんはいなかった?」

「いたよ。……でもここにはいない……」

「ここにいるのはみんな『いじめ』に殺され、恨みを持って死んだ人たちよ。」

悠姫が答える。よく見ると、同年代くらいの男の子や小学生くらいの子もいる。

「この人たちみんなそうなの？」
「そうだよ。」

高校生くらいの男の子が答える。ここにいるのは自分を入れて7人。

「ねえ、悠姫。少な過ぎない？恨みを持って死んだ人とか仕返ししたい人とかもつとたくさんいると思うんだけど……」

悠姫はまた微笑む。

「いいところに気付くわね。剛なんてそんなこと考えもしなかったわよね。」

アニメのTシャツを着た男の人が剛という人らしい。

「僕は仕返しができればいいのさ。……君の名前は？」

「みへび佐伯……佐伯 瞳。」



……この世界は変わった世界だ。

死後の世界って、生前想像していたのは地獄とか天国とかで、どこか宗教的なイメージがあった。

わたしは特に信仰はなかったので、こうありたいとの理想はなか

った。

それにしても想定外の世界だ。

まず、食事をしない。お腹が空かないので食べる必要性がない。しかし、これは考えてみれば当たり前のことだ。身体が生命維持活動をしていないのだから。

次に時間の感覚がない。この世界に來たのが何十年も前のようにも感じるし、つい先日のような気もする。ここに來た時こそ悠姫や弟たちに会ったが、その後ほとんど会わない。わたしは真っ白な部屋の中にいるだけだ。もともと何度かわたしの『意識』は『現世』へ行ったが。

そして何より一番この世界で変わっているのは、人間的な感情が消えてしまったことだ。『愛』『喜び』『悲しみ』など、全く感じない。唯一わたしの中にある感情は『憎しみ』と『寂しさ』である。弟を始め、父や母に対する血縁の情は感じるが、『友情』や『希望』など全く感じない。

高之たちにはすでに仕返しはした。父を追いつ込んだヤツらや、母が精神病になった途端とたんに冷たくなった親戚たちにも仕返しした。今は時々悠姫の手伝いをするだけだ。自分のために。

「少な過ぎない？」

ここに來た時、わたしは悠姫に聞いた。その時悠姫は温かく微笑み、わたしに付いて来るよう指示した。白い部屋はかなり広かったが、突き当たりの壁にドアがあった。

「ここはなに？」

「『現世に行けない亡者たち』が普段いる場所よ。」

悠姫はドアを開ける。ドアの向こうには荒涼とした荒れ地が広がっている。

わたしと悠姫は一步外へ出た。

その途端部屋の中から荒れ地に向かって強い風が吹き出していった。いや、風というより『気体の塊』とでも言おうか。

その風が荒れ地の向こうに消えて行くと、どこからか、たくさんの亡者たちが現われた。匂いに釣られて集まる虫かハイエナのようなだ。

振り返ると、ドアは小さな小屋の出入口だった。木できており、他には窓さえない。小屋の周りには石垣が巡っている。不思議なことに、亡者たちはその石垣から中には入って来ようとはせず、恨めしそうに呻くだけだ。亡者たちはみな一様に無表情だったが、悠姫が近付くと手を伸ばして何か呻いた。悠姫は何人かの手に触れると、わたしのところへ来た。

「少な過ぎるって言ったわよね……これでも少ない？」

見ると、先程まで何もなかった荒涼とした大地が亡者で埋め尽くされていた。

……オオオ……ウウウ……

……アアア……オオオ……

亡者たちの呻きは赤い空に渦巻き、大きな津波となって押し寄せる。

「フフフ……この人たちはね、『現世』に未練や恨みがある人たちよ。だから『Sion』に行きたいの。でも行けないのよ。私が認めない限り。せいぜい『恨みごと』を私に預けて少しでも気を紛らわすことしかできない……」

先程亡者に触れた悠姫の手は緑色に発光していた。

「この『恨みごと』は『S i o n』に載せるわ。誰か知人がアクセスしてきたら、その亡者とは直接話せる。現世ではネットだけれど。」

亡者たちは我先に悠姫に手を差し延べる。

「もしアクセスしてきたら私たちの『怨体』がそいつを殺しに行くわ。」

「何のために……？」

「……最終的にはこの亡者たち全てを現世へ行かせるため……」

「あなたにはそれができる……」

「いいえ、私ができるのは『S i o n』に来させるだけ。亡者を『現世』に行かせることはできないわ。」

「もし亡者たちが『現世』へ行けたらどうなるの？」

「簡単よ……生者は『現世』から駆逐され、『現世』と『黄泉』は一つとなる……」

「どうすれば亡者たちを現世へ行かせられるようになるの？」

「この石垣を壊せばいいのよ。」

悠姫は石垣を撫でた。

「この石垣を壊す……」

「もちろん、今の私たちには無理よ。『そういう存在』にならなければ……」

「そういう存在……？」

悠姫はゆっくりと亡者たちを見回し、わたしを見据えた。

「そう……『死怨^{しおん}』……」

更に赤味を増し、まさに血の色をした空には、数百億は超えるであろう、亡者の声が怒濤スエーのように繰り返して押し寄せていた。



……わたしは悠姫に『死怨』の話を聞いた時のことを思い出していた。

あの無数の亡者たちが現世へ行く……現世と黄泉が一つになる……人間らしさを失った今の自分には恐怖も喜びもない。そんな話を聞かされても、『ふうん、そうか。』で終わってしまう。けれどもこの落ち着きのなさは何だろう？

……その後もわたしは何度も『怨体』を『現世』へ飛ばした。いや、飛ばされた。

つい最近、小さい女の子がこの『Si on』に来た。はじめは面倒をみていたが、『パパ』や『ママ』と繰り返して泣くだけだったので、あまり関わらないようにした。

ある時その女の子、美那の手助けに行くことになった。野口とかいう亡者のたつての願いらしかった。

『怨体』は意識の一部なので、この『Si on』にいても怨体が見たもの、体験したことはよくわかる。美那が『制限時間』内に全員殺せなさそうだったので、悠姫に指示され行くことになったのである。

わたしは警官2人と小学生くらいの男の子を殺した。何の恨みもなかったが、悠姫の命令には逆らえなかった。

……美那の手助けには信人や剛も行ったようだ。

その頃から『Sion』内が慌ただしくなってきた。悠姫はひっそりなしに仲間の『怨体』を飛ばす。悠姫自身の『怨体』も、何体も飛ばしていた。何かあったのだろうか？

悠姫がわたしの『怨体』を飛ばしに來た時に聞いてみた。

「悠姫、何かあった？」

悠姫は少し焦った様子で答えた。

「ここを潰そうとしているヤツらがいるのよ。そうはさせない。」

わたしは驚いた。生者の中にそんなことをしようとする者がいるなんて。どんな人たちなのか気にはなったが、そんなことを悠姫に聞けるはずはなく、ただ『怨体』を提供するだけだった。悠姫はわたしの『怨体』を10体ほど飛ばすと、どこかへ行ってしまった。

この部屋は真っ白で、どのくらいの広さがあるのかはよくわからない。同じ部屋の中にいるとしても、お互いに何か用でもない限り会うことは滅多にない。わたしは以前悠姫に連れて行かれた『外』が気になっていた。

扉の場所はわかっている。わたしはその方向へ歩き出した。

見つかったら怒られるかも。悠姫じゃないと開けられない扉なのかも。いろいろと考えながら、わたしは自分の変化に気付き始めていた。

わたし……もう憎しみが……小学生と警官2人を殺した後も、高之たちを殺した時のような壮快感はなかった。

わたしはドアの前に立ち、ゆっくりと押した。開いた！

『外』は相変わらず真っ赤な空だったが、石垣の向こうに亡者たちはいなかった。また『風』が起こって亡者たちが集まったら嫌なので、ドアの隙間をすり抜けるように出て、すぐに閉めた。

ああ、ここは何て嫌なところなんだろう。でも何故こんなに惹かれるんだろう。

何もない荒涼とした荒れ地には草の一本も生えていない。遠くには山らしき稜線りょうせんが灰色の影となっている。ぼうっと立っていると何か音がした。

……グスン……ズズッ……グスグス……

何だろう？

「グスン……グスン……うっうっ……」

誰かの泣き声だ。その泣き声はすぐそばの石垣の向こうから聞こえる。わたしは近付き声を掛けてみた。

「だれ？」

「グスン……グス……うっ？」

泣き声が止み、石垣の向こう側に一人の少年が立ち上がった。わたしが殺した小学生だ……その亡者は工藤直樹だった。

「俺……許せない……」

わたしのことかな？わたしが殺したから？

「何で明日香ちゃんが死ななきゃならないんだ？何もしていないのに、関係ないのに……」

明日香ちゃん？だれ？

「ねえ、あんた……明日香ちゃんってだれ？わたしを覚えてる？」

工藤はわたしを見つめた。

「……知らない。」

『怨体』だったからかな。

わたしは『怨体』はあまり好きではない。『憎しみ』の意識だけを形にしたから、顔は恐ろしいまでに『憎しみ』の顔になる。わたしはまだいいが、悠姫の『怨体』はかなり怖い。まぶたのない丸い目。真一文字に結んだ唇のない口どれをとってもあの温かい笑顔の悠姫とはかけ離れていた。

「明日香ちゃんは義久の妹だよ。」

義久……わからない。

「わたしにはわからないわ。あなたはそれが悲しくて泣いていたの？」

「そう。俺が死んだのは野口に恨まれたせいだからわかるけど、明日香ちゃんは全然関係ないのに殺されちゃったんだ。」

「それであなただうしたいの？明日香ちゃんって子の敵を討ちたいの？」

「ううん、違う。『Si on』に載せてもらっただけど、誰かに止めてほしいんだ……悠姫を。」

「！ そんなこと聞かれたら消滅させられちゃうよ。」

「別にいいよ。明日香ちゃんのような子が増えなければいい。」

こんな未練もあったのか。

わたしは工藤に何か手助けしたい思った。殺したのはわたしだし。

「ねえ、『S i o n』に来てみない？」

「いいの？」

「いいわよ。」

わたしは石垣の出入り口である、木の柵を開けた。工藤は入口から入ってきた。

「こっちよ。おいで。」

幸い帰りもドアはちゃんと開いた。

工藤は部屋に入るとじっと座り込んで何か考え込んでいた。すると突然立ち上がった。

「あの刑事さんを見つけた！瞳さん、俺を飛ばして！」

「わたしはできないわ。」

「悠姫に選ばれた『S i o n』のメンバーならできるはずです。お願いします。」

わたしは悠姫の見よう見まねでやったみた。工藤の身体に触れると手が緑色に発光した。そして大砲を撃つイメージで、工藤を飛ばした。



「御手洗部長、移送関係の書類ができたのでここに置いておきます

ね。」

庶務課の婦警が曾根崎を本庁へ移送するための書類を御手洗のデスクに置いていった。曾根崎は明日の午前中本庁に移送される。清水沙江子殺害の重要参考人としてだ。私は曾根崎と話してみても、ヤツはシロだと確信していた。

被害者の携帯電話に残された指紋。目撃者なし。自分から出頭してきたのも、意地悪く捉えれば偽装ともとれる。実際、本庁では曾根崎を犯人とほぼ断定して立件するつもりのようなのだ。

しかし私の刑事としての経験と勘が曾根崎は嘘をついていないと言っている。このまま本庁に移送すれば曾根崎は確実に犯人に仕立て上げられてしまうだろう。公務員として職務に徹するか、人間として正義を貫くか……よし！ 決めた！

ラーメンを食ってから考えよう。今日はどんこつにするかな？ 昨日はみそだったしな……

私は『来来軒』から『スーパーミラクルとんこつスペシャルラーメン』を出前してもらい、早目の昼食を摂った。

その日の午後は事情聴取とプロファイリングのためのミーティングで全部潰れた。最近頻発している変死事件の捜査と犯人像を捉えるためだ。新潟では小学生や警官までも巻き込まれる大量殺人が発生した。

犯人は新潟にいるのか？ 清水沙江子の事件に関しての目撃情報はないが、全国ではいくつか目撃情報もある。それにこの雑誌だ。

『週刊女性生活』

先輩が写っている。八前先輩は私が新人の頃、刑事としての心構えを叩き込んでくれた人だ。あんな事件がなければ今ごろは本庁のエリート管理官にでもなっていただろう。相変わらず問題を起こし

ているようだ。

「署長室2時間コースだな……」

私はクスッと笑ってお茶を飲んだ。

ガタン！

大きな音がしたので見ると、婦警がお盆を床に落とし、青ざめた表情で立ち尽くしていた。

「あ……あ……あ……」

「どうした!？」

周りの刑事たちも色めき立った。すわっ、敵襲か！

「み、み……」

婦警が何か言おうとしている。

「み?」

その場にいる全員が注目する。

「み……御手洗部長が……女性週刊誌を読んで笑ってる……」

ドツと爆笑が起こった。

なんだこの扱いは……曾根崎のところにも行って来よう……チ
クシヨウ



『武蔵野ビジネスホテル』は駅前であり、何てことのない普通のビジネスホテルだ。うちの署で委託^{いたく}して、拘留^{こうりゅう}できない参考人や地方から出て来た被害者の遺族などに格安で利用してもらっている。私は人の良さそうなフロントに声を掛け、エレベーターホールに行こうとした。

「曾根崎さまなら先程出掛けられましたよ。身内の方といっしょにそれにしても毎日面会人が来られる方ですね。」

「なにっ!?! そんなの許可していないぞ!?! 身内ってだれだ?」

人の良さそうなフロントは動揺している。

「さ、昨日は妹さんと弟さん。先程は叔父さんとそのご友人とおっしゃる2人組の男性でしたが……」

しまった! まさか曾根崎が拉致されるなんて予想外だ。アイツは何か事件に関わる重大な情報でも握っているのだろうか。

私は慌てて署に連絡を入れて、曾根崎の部屋へ行った。部屋に入ると曾根崎の荷物はそのままそこにあり、電灯も点けっ放しで、すぐ戻って来るつもりで出たことが窺える。洗面所を覗いてみたが、やはり人の気配はなかった。一旦署に戻ろうとすると、ベットの脇の棚に何かあるのに気付いた。

「何だ……?」

近付いて取ってみると、それは一枚のメモ用紙だった。
間違いない。曾根崎は拉致されたようだ。こいつらに。

『曾根崎を捜すな。理由も考えるな。目をつぶれ。耳を塞げ。この
世の終わりを心静かに待て。』
死怨教団



僕は正体不明の男たちの車に乗せられている。目隠しをされて後
部座席に寝かされているので、どこを走っているのかわからないが
男たちの会話は聞こえる。

『連れて来たのはいいが、警察はすぐに追ってくるんじゃないか？
』
『大丈夫だ。武蔵野署には信人さまと剛さまが行くらしい。時間を
稼いでくれるそうだ。』

『アイツらはどうするんだ？』

『悠姫さまが死怨になれるのを邪魔しようとしているヤツらか？
』
『確か新堂とかいうヤツらだ。今新潟だっけ？』

『長岡市だ。それなら心配いらん。大量の聖戦士たちが今晚長岡に
送られる。必ず見つかるさ。』

『もし逃げられたら？』

『悠姫さまが、武蔵野署に繋がる電話は全て教団に繋がるようにし
てくださるそうだ。武蔵野署におびき寄せてみな殺しだ。』

『あの御手洗って刑事も邪魔だな。』

『署にいれば殺せるけど、逃げられたら俺たちでやっちまうか？』

『その方がつとり早いな。メンバーの方々のお手を煩わすことも
あるまい。たかがいち巡査部長。』

まずい！何とかして連絡しないと御手洗さんが殺される！もう清水さんの時のようなことはごめんだ。この命に代えても僕が助ける！

『しかし何で置き手紙なんかしてきたんだ？こいつだって悠姫さまにはすぐに殺せてご指示を受けてたろ？』

『わからんが瞳さまから変更のご指示をいただいた。置き手紙をして連れ出せ、曾根崎には手を出さずに支部で連絡を待てっな。』

『支部？本部じゃないのか？』

『ああ。』

『どうせ人類は滅亡するんだから、そんな面倒なことをしないで皆殺しにすればいいのにな。』

『バ、バカやろう！滅多なこと言うな！死にたいのか！』

『す、すまん……』

車は運転者の動揺を表すかのように大きく揺れた。

『悠姫さまは何かを待っておられる。それまでは邪魔されたくないようだ。』

車は減速し、ついには停車した。バックしたところを見ると、駐車場に停まったらしい。

二人は僕を車から降ろし歩かせる。うすら寒い場所に3人の足音が響く。足音が響くということは建物の中かな……

しばらく歩くとエレベーターに乘せられた。上昇していることは感覚でわかる。僕は時間を計った。上昇時間は10秒ほどだ。エレベーターの機種によって上昇スピードは違うが、3〜5階ってところ

か。

エレベーターを出て右に曲がり、ドアを開け部屋らしき中に入る。もう一度ドアを開け、カーペット敷の部屋に寝かされた。やっと目隠しを外され部屋の中を観察した。

窓はなく、革張りのソファセットにガラステーブルが、どこか会社
の応接室を思わせた。

『支部』ってところか……

「大人しくしてろよ。」

男たちは部屋に鍵をかけて出て行った。

さっきの話によればアイツらは今すぐ僕を殺すことはできないらしい。それならば逃げるとしても、少し経ってから隙をついた方がいいだろうな……

僕は冷静に脱出の方法を考え始めた。



時間は夜10時過ぎ。東京郊外にある武蔵野署周辺に人通りはほとんどなく、街灯の光が物寂しく駐車場を照らしている。私は車を止め、署の中に入ろうとした。署の入口には立哨りっしょうの警官が2名立っている。

?? こんなヤツらはこの署にはいなかったはずだ。

私は違和感を覚え、声を掛けた。

「い苦勞様。」

「はっ……」

警官は敬礼する。

「曾根崎は何者かに拉致された。緊急配備を敷くからお前たちも中に入れ。」

警官の顔色が急に変わった。

「は？ あ、あの……殺されたのではないのですか？」

バキッ！

私はその警官を殴り倒した。

「！ ち、ちくしょう！」

もう一人の警官が殴り掛かってきた。

ガスッ！バシッ！

私はその警官の腕を受け止め、ボディブローを食らわせた。

「うっ……うう……」

私は呻く警官を俯せにし、拳銃をこめかみに当てる。

「曾根崎のことはお前らは知らないはずなんだよ。しくじったな。正直に吐け！お前たちはだれだ？」

「し、死怨教団……」

あの置き手紙に書いてあったヤツらの仲間か。

「言え！曾根崎はどこへ連れて行っただ！」

「し、知らない……すぐに殺す予定だったはずだ。」

バキッ！

私は偽警官を殴って気絶させ、署内に入ろうとして動けなくなる。署内は地獄絵図だった。

入口付近の受付ロビーから交通課、免許課にかけて署員たちの身体が床に『散乱』している。頭部、腕、足、上半身、下半身……まるで何かに無理矢理 千切り取られたかのようなだ。

入口のドアを押し開けると、血臭が押し寄せ、吐き気が込み上げてきた。数々の現場をくぐり抜けて来た私でさえ、卒倒しそつとうような非現実的な光景だった。

「一体何があったんだ……これも死怨教団とかいうヤツらの仕業なのか……それにしても……」

人間業とは思えない。そう、全国で頻発している変死事件がまとめて発生したかのようなだ。

「変死事件はヤツらの仕業なのか……？」

私は散乱する署員の身体を避けながら、2階の刑事課へ上がって行く。

よく見ると、死体には2種類あることがわかった。一つはすごい力で身体の部位を千切り取られたような死体。中には肩から腹部まで斜めに切り裂かれた死体もある。

もう一つは潰された死体。頭のない死体がそこかしこに見られる。傾向として、一階は切り裂かれた死体、二階は潰された死体という感じだ。

刑事課もやはり同じ惨状さんじょうだった。ついさっきまでいっしょに笑い合っていた仲間が見るも無残な死体となって、床に転がっている。私は悲しみを通り越して恐怖した。

人間にこんなことが可能なのか……？すごい力で身体を千切ったり、頭部を潰したり……しかもここは警察署だ。有り得ない……そうだ！とにかく連絡しないと！本庁に応援を要請ようせいしないと対処できない。自衛隊にも出動要請が必要かも知れない……

私は電話を確認したが、どの電話も繋がらなかった。

ちっ、電話線が切られているのか？

呆然ぼうぜんとしていた時、課長のデスクのパソコンが目に入った。何かおかしい。見たことのない画面が映っている。

『S i o n』

「何だ？しおん……？」

私はマウスを握り、画面をスクロールさせた。

4 5 2 6 3 ..なぜ俺は死ななきゃならなかったのか。

4 5 2 6 2 ..わたしの人生って何だったの？

「これは……裏サイトか？」

私は画面をさらにスクロールさせた。

3 5 6 6 8 ..死怨教団

「これは……」

クリックすると、画面が切り変わった。

【定時連絡】

全教団員は直ちに武蔵野署に向かえ。ヤツらは必ず来る。明日の朝までには準備を完了させよ。

「ちっ、まずいな。」

ヤツらが集まってくる。とりあえずその前に逃げた方が良さそう
だ。

私は自分の携帯電話で本庁に連絡した。

プルルルル……プルルルル……

「はい、警視庁捜査一課です。」

「こちら武蔵野署の御手洗です。五十嵐課長はいらっしゃいますか
？」

「……………」

「もしもし!？」

「……………」

「もしもし!？」

プツッ!

……切れてしまった。

もう一度掛け直そうとしたら、携帯の液晶画面に何か動きがあっ
た。

『怨剥…ダウンロード開始 10%』

何だ？これは？

『怨剥…ダウンロード 20%』

何か危険な気がして電源を切ろうとした。しかしどんなに長押ししても電源が切れない。

『怨剥…ダウンロード 30%』

ちっ、仕方ないか。

私は携帯の液晶部分の上部と操作ボタンのある下部を両手でへし折った。

ベキッ！

真っ二つに折れた携帯をゴミ箱に投げ込み、もう一度パソコンに向き直った。すると、画面が変わっていることに気付いた。

『怨滅…ダウンロード完了』

「完了……？まずい！」

人間としての生存本能が危険を知らせている。私は逃げようと出口に向かうと、そこに『それ』はいた。

GパンにアニメのキャラクターのTシャツ。黒髪の長髪、細面で面長の男がそこに立っていた。

ニタァ……

男は不気味に笑っている。

「まあだ、いきてるやつがいたのかあ。ハハハハハ！」

男は笑いながら近付いてきた。私は拳銃を男に向け、いつでも撃てるように構えた。

「止まれ！撃つぞ！」

私は射撃訓練経験はあるが、人を撃ったことはない。しかし、この状況ならば撃たざるを得ないだろう。

男はニヤニヤしながらゆっくりと近付いてくる。恐怖で足が震えるのがわかる。

「動くな！お前が署員たちを殺したのか！？」

男はなおも近付いて来る。私はじりじりと部屋の奥へ下がっていく。

「そうだよお。ぼくとのぶとだよお。」

のぶと？

男との距離は約5m。外す距離じゃない。

私は引き金を引いた。

パンッ！

部屋に渴いた銃声が響く。

パリンッ！

男の後ろにある入口のガラス窓が割れる。
銃弾が突き抜けた……？

「ハハハハハハ……むりむりむりい！」

男はかすり傷一つついていない。

私は絶望的な気持ちになって、さらに後ずさる。

「く、来るな！……来るな！」

パンッ！パンッ！

さらに2発撃ったが、向こうの壁に銃痕銃痕を作るだけだった。

「ハハハハハハ……！ぼくはさいきょうだ！ころす！ころしてやるう！ハアハッハッハッハッ！」

男が一気に間を詰めて来る！もう目の前だ。
赤黒く光る目と両端のつり上がった口が迫り私は死を覚悟し、目をつぶった。

んっ？

襲って来ない……？

私は恐る恐る目を開けた。男は後ろを向いている。その向こうには人影があった。男と人影は向かい合っている。

「おまえは……なにしにきた。」

男からは疑惑と苛^{いらだ}立ちが感じられた。

人影は男と比べて随^{ずい}分^{ぶん}小さい。私と同じくらいか……？

私は壁に沿って静かに出口の方へ移動した。

女の子だ！ しかも制服を着ている。高校生か？

『ひとみ……おまえは新潟のほうだろ？ なんでここにいるんだ？』

男が『ひとみ』と呼んだ女の子の方へ近付いていく。あの女の子はこの化け物と知り合いなのか？

『悠姫の命令を伝えに来たのよ。……その人に手を出しちゃダメ。』

『はぁ？ おまえなに言ってんだ？』

『もう一度言うわ。その人に手をだしちゃダメよ。命令よ。』

『……りゆうは……？』

『そんなのわたしが知るわけじゃない。悠姫に聞いて。』

『チッ……つまらねえ……』

男は吐き捨てるように言う。と次第に透明になり、消えてしまった。

私がぼかんとして見ていると、女の子は私の側に来た。

寒い……女の子が近付くと、急に寒気がした。

『時間がありません。剛はすぐに戻ってくるでしょう。曾根崎さんの命も危険に晒^{さら}されています。だませるのもせいぜい明日の夜までが限界でしょう。早く助けに行つてあげてください。』

女の子は曾根崎^{かくま}の匿^{かくま}われている教団支部の場所を教えてくださいました。

『無事助け出したら池袋サンシャインホテルの533号室に行つてください。』

「な、なぜ……?」

『行けばわかります。教団支部では二人の男が見張っています。拳銃を持っているので気をつけてください。』

「き、君は……?」

女の子は悲しそうに微笑んだ。

『私は佐伯 瞳……【Sion】のメンバーです。』

女の子は急にビクツと何かに反応した。

『悠姫が戻って来る! 早くそこから逃げて!』

女の子はそう言うと言えてしまった。

私は何が何だかわからなかったが、命の恩人たる『佐伯 瞳』の言うことには間違いはないと確信した。

私はすぐに署を出て、車に飛び乗った。埼玉県和光市……佐伯が教えてくれた住所まではここから1時間にもかからない。しかし私に曾根崎を助けられるのか? 私は懐の拳銃がとても無力な物に感じられた。

途中の公衆電話で本庁に事態を告げ、私は深夜の国道を飛ばした。規則的に続く街灯を眺めながら、私は昼間見た雑誌を思い出していた。

『新潟県無差別大量殺人事件の犯人は怨霊!?』

……『これは人間の仕業ではない。』

八前先輩……信じてもらえるのは先輩だけかも知れない……
私は曾根崎を無事救出したら、新潟に電話を掛けてみることにし
た。

第10章 佐伯俊夫

「早く！おねえちゃん！」

「俊夫、待つてよ！」

山の朝は清涼な空気に包まれ、靄^{もや}でかすんだ森の道はまるで雲の中のようなのだ。

ぼくは夏休みの宿題そっちのけで、昆虫を採っていた。

昆虫ってかっこいい！ぼくのお気に入りはやっぱり昆虫の王様カブトムシとクワガタだ。ぼくの生まれ育ったここ山形県西川町は自然の豊かな田舎町だ。小さい頃から昆虫が大好きだったぼくは、小学校5年生になってもゲームより山で昆虫を採っていた。

「俊夫、足速いねえ〜！おねえちゃんついていくのがやっとなだよ。」

おねえちゃんは肩で息をしている。おねえちゃんは佐伯 瞳、隣の鶴岡市の高校の一年生だ。

おねえちゃんにはこうやって、朝の昆虫採集に付き合ってもらったのが夏休みの日課になっている。ぼくは一人でも大丈夫って言ったのに、パパがどうしてもぼく一人じゃ行っちゃいけないって。落ち込んでいるぼくに、おねえちゃんは自分がついて行くからと言って、パパを説得してくれた。さすがのパパも、おねえちゃんには敵わなかった。何かあっても姉弟2人なら大丈夫だろうからということ、許してくれた。

夏休みはいいな……学校から離れて一日中虫たちといっしょにいられる。

学校はぼくにとってはこの世で一番イヤな場所だ。

『おい！ムシ！何とか言ってみろよ！』

『へへへっ、ムシだから人間の言葉はしゃべれねえってか？』

ぼくの頭の中にアイツらの言葉と顔が渦巻く。

くそっ！

くそっ！くそっ！

昆虫が好きで何が悪い！○ケモンやモンハンを知らないからって、どうしてバカにされなきゃいけないんだ！ぼくはあんなヤツらには絶対負けない。『いじめ』なんかに絶対負けない！ぼくには虫たちがついているんだから……

おねえちゃんはおくが満足するまで待っていてくれる。

日も高くなり、身体が汗ばむ時間になってようやくぼくとおねえちゃんは家に戻る。この夏休みの毎朝の風景だった。あの日まではその日は前夜降った雨で木々は濡れそぼっていた。こういう日はカブトムシなどは見つかりにくいのが、カタツムリなどはよく見つかる。ぼくは朝靄にかすんだいつもの山道を一人で歩いていた。

「おっ？俊夫じゃねーか。」

アイツらだ。せつかくの夏休みなのに最悪だ。

「こんなところで何やってんだよ。」

譲二が聞いてくる。後ろには淳史と潤、豊がいる。いつものヤツらだ。

「む、虫を採^とってるんだよ。」

「お前ほんと虫ばっかだな……まあ、オレらも虫探してただけだな。」

「えっ？何で？」

いつもぼくのことバカにするのに……

「いや、自由研究終わなくてさ、昆虫採集が手っ取り早いからな……」

そんな理由で虫を採って欲しくはなかったが、ぼくは黙っていた。

「なあ、珍しいチョウチョでもいるところ知らないか？」

「知らない……」

そんな場所を知ってたら、自分が行ってるよ。

「それとも、珍しい花でも咲いてる場所は？この際植物採集でもいいや。」

珍しい花……そういえば崖の上に、紫色の花が咲いているのを見掛けたことがある。

「珍しい花なら知ってるけど……」

「おおー！ラッキー！そこまで案内してくれよ！」

ぼくは一刻も早く虫捕りに行きたかった。

「……じゃ、ついて来て。」

ぼくは足早に歩き出した。

そこはよく崖崩れが起るということで、立ち入り禁止になっているところだった。

「危ないから気をつけてね。」

4人はぶつぶつ文句を言いながらついて来る。

「何だよここ、ドロドロじゃねえか……服汚したら親に怒られるよ……」

ぼくたちは急で細い山道を歩いて行く。

おねえちゃんがいたら絶対許してくれなかったろうな……こんな危ないところ……おねえちゃんは今日は、友達と遊びに行く準備とかでついて来なかった。

30分ほど登ると、町がきれいに見渡せる高台に出た。

「ハア、ハア……ここだよ。」

「ハア、ハア、ハア……すんげえところだな。おっ！眺めいい！」

ここは崖崩れが起こる前によくパパに連れて来てもらった場所だ。崖の中腹に紫色の変った花が咲いている。名前は忘れたが、パパが珍しい花と言って説明してくれたことがある。虫にしか興味のなかったぼくは軽く聞き流していたが。

崖の端から身を乗り出して見ると、花は確かに咲いていた。夏のこの時期のこの時間帯にしか咲かないそうだ。

「あ、あつた。あれだよ。」

4人もぼくに習って崖から身を乗り出して見る。

「おおー！あれか！確かに珍しい花だな。でもどうやって採るんだ？」

「……崖を降りるしかないかも？でも危ないし……」

ぼくがそう言うのと、潤と豊が崖を降り始めた。

「大丈夫だよ！俺たちが採ってくるよ！」

大丈夫かな？

花まで10mくらいは降りなければならない。

豊も潤もときどきずり落ちそうになりながら、ゆっくりと降りていく。

「二人とも気をつけろよ！」

讓二がぼくの横で叫んだ。

「ヤベッ、マジ滑る。」

潤が足場を探してとまっている。豊はその横をすすると降りていく。

あんなに速く降りて大丈夫なんだろうか、心配になる。
すすると降りた豊は、紫の花を掴む。

「やった！」

みんなが喜んだ瞬間、豊が足を滑らせた。

ズリッ！

「うわっ！」

ズザザザザ……

このまま崖から落ちてしまうと思ったが、豊は何とかこらえた。

「大丈夫かあゝ！」

淳史が声を掛ける。上から見ると、豊も潤も何とか崖にへばり付いているだけといった感じだ。

「……ちくしょう。待ってろ！」

譲二が崖を降り始めた。

いくら子どもとはいえ、3人は多かった。

ガラガラガラ……

雨で弛ゆるんだ土砂が崩れ始めた。

「まずい！みんな、早く上がって来い！」

淳史が叫ぶ。譲二は慌てて登ろうとするが、一旦弛いったんんだ土砂は蟻地獄のようにどんどん譲二を下に押し流していく。

「うわああああ！」

崩れ始まった崖は次第にその範囲を広げながら潤に迫る。譲二はもう四つん這ばいの姿勢から、尻餅をついた姿勢になっている。

「わああああ！た、助けて〜！」

潤を巻き込んだ土砂崩れは、豊のところに至っては、どうしようもない大規模なものになっていた。

「うわあああああああああ……」

3人の叫び声が崖下に流れていく。

もう姿は見えない。

膨大な質量を重力に引かれて押し流した土砂崩れは、西川町の町内までその轟きを響かせた。

『西川町で土砂災害。小学生2人が死亡。1人が重体。』

『土砂崩れは人為的！？立ち入り禁止区域に入り込んだ小学生4人。』

『いじめっ子に復讐？故意に危険な場所へ連れて行き、日頃の恨みを晴らすという……』

その日から連日報道される内容は佐伯俊夫にとって、いや、佐伯家にとっては最悪のものばかりであった。

生き残った桜井淳史と高野譲二の二人は、俊夫に殺されかけたと訴えた。証拠はなかったので事件とはならなかったが、ほとんどの町民は俊夫の『復讐説』を信じた。

佐伯家は次第に追い詰められていった。

姉の瞳は親戚のいる朝日町に預けられたが、俊夫は引き取り手はなく、両親は何があっても俊夫の味方であろうとした。俊夫に対する学校でのいじめは激化し、だれも止めようとする者はいなかった。両親に対する職場や地域の嫌がらせも酷くなる一方で、俊夫の将来を考え、佐伯家では引越しを考え始めた。

そんな矢先、崖崩れのあったあの崖の上で俊夫は首を吊って自殺した。

俊夫は遺書を残していた。

『パパ、ママ、おねえちゃんごめんなさい。豊くん、潤くんごめん

なさい。2人のパパとママにも心からごめんなさい。

ぼくは死にます。それしかパパやママやおねえちゃんたちを守る方法がないみたいだから。

でもこれだけは信じてください。

ぼくは仕返しをしようとしたのではありません。花を探しに行っただけです。ぼくがいなくなったら、もうみんなをいじめないでください。

パパ、ママ、おねえちゃん今までありがとう。そしてさようなら。

佐伯俊夫』



私は埼玉県和光市のとあるビルの前にいる。

間もなく夜明けだ。

武蔵野署はどうなったのか気にはなったが、佐伯 瞳の話を信じれば、不用意に電話もかけられない。まずは曾根崎を救出するのが先決だ。

佐伯の情報が正しければ、今日の前にあるビルのどこかに曾根崎は監禁されている。

敵は2人。銃で武装しているからには軽率な行動は命取りだろう。先立つものは情報だ。曾根崎はどの部屋にいるのか。どんな状態でいるのか。

佐伯は、だませるのは今日の夜までと言っていたが、別れ際の様子ではもはや一刻の猶予ゆうよもないように思われる。

私は焦りながらも、確実に曾根崎を救出できるチャンスを待っていた。

5階建てのこのビルで、一晚中明かりのついていた部屋は2部屋。一つは5階の『諫早会計事務所』。郵便受けて名前を確認した。

もう一つは3階の『藤原現像所』。何の会社かはわからない。私はここが怪しいと睨^{にら}んでいる。後は、誰か出勤してくるのを待つだけだ。

私はコンビニで買ったカレーパンとマミーで朝食を食べながら、新聞を広げ、怪しまれないように見張りを続けた。

AM7..30、一人の女がビルに入って行った。赤いスーツを着た、薄い茶髪の年齢不詳の女だ。所持品は小さめのハンドバックが一つ。ヤツらの仲間には見えないな。

私は急いで後をつける。ビルに入るとすぐにエレベーターを確認した。

3.....4.....5.....

5階で止まった。

会計士には見えないので、どうやら会計事務所の事務員らしい。敵は2人とも男だ。

これで確定した。曾根崎は3階の『藤原現像所』にいる！後はチャンスを待つだけだ。

私はその後も根気強く張り込んだ。

正午近くになってチャンスは訪れた。食料の調達か、何か別の仕事かわからないが、男が一人ビルから出て行った。ホテルのフロントに聞いた2人のうちの一人の人相・服装とぴったりだ。というところは今は見張りは一人だけ。一対一なら何とかなる！私は脇の下の拳銃を確かめ、ビルに入った。

エレベーターに乗り、3階へ。『藤原現像所』と書かれたドアの前に立って、ノックをした。

コンコン.....

「誰だ？」

中からすぐに若い男の声が聞こえた。私は佐伯に言われた通りのことを言う。

「本部から悠姫の命令を伝えに来た。電話は盗聴される危険があるらしい。」

「何？悠姫さまの？待ってろ、今開ける。」

ガチャ……

「！ お前はだゲボッ！」

私は腹に一発食らわせた。

バキッ！ドゴッ！ドゴッ！

次いで顔に一発、倒れたところに頭に蹴り、さらにみぞおちに蹴りを一発ずつお見舞いした。

身長が小さい分、私は相手の懐に入りやすい。射撃は苦手だが、接近戦は少し自信がある。

「う……うう……」

バキィ！

まだ意識があつたので、とどめに頭にもう一発蹴りを食らわせた。

「……………」

完全に気を失ったらしい。武蔵野署の惨状を思うと、ひと思いに殺してやりたかったが、警官としての最後の理性がその衝動にブレーキをかけた。

「曾根崎！どこだ！」

部屋の中を見渡す。ごく普通のオフィスのようだ。ただ、パソコンやプリンターなどの機器が異様に多い。15m四方の割りと小さな部屋の間に業務用の机が20個ほど規則正しく並んでいるが、その全てにデスクトップのパソコンとプリンターが乗っている。パソコン教室のような印象を受けた。

「御手洗さん！こっちです！」

左手にあるドアの向こうから、曾根崎の声が聞こえる。ドアを開けると応接室のようなソファセットがあり、床にはグレーのカーペットが敷いてある部屋に出た。曾根崎はソファの陰に、手足を縛られた状態で寝かされていた。

「曾根崎、怪我はないか？」

「大丈夫です。それよりなぜここがわかったんですか？」

「詳しい話は後だ。まずは隣りの部屋でノびているヤツをここに寝かせよう。少しは時間稼ぎができるはずだ。」

「は、はい！」

私たちは曾根崎の拘束を解き、隣りから完全にノびている男を運んできた。曾根崎を縛っていた縄で手足を縛り、ハンカチを口の中に詰める。

「よし。早く逃げよう。」

私と曾根崎は急いでエレベーターホールに出た。

しまった、遅かったか！エレベーターの表示が1から2に変わった。このままここにいたのでは明らかに見つかってしまう。私は周囲を見回し、『非常口』の表示を見つけた。

「曾根崎！あそこから逃げるぞ！」

私は『非常口』を指差し、ダッシュした。扉に鍵が掛かっていたらジ・エンドだな。

鍵は……開いた！私と曾根崎は扉から出た。私が降りようとする、曾根崎が制止した。

「ちょっと待ってください。今降りるのは危険です。上に行きましよう。」

なるほど。死怨教団の規模がわからない限り、下手に動いても捕まる危険性が高まるだけだな。

灯台元暗し。

上に逃げた方が逃げ切れる可能性が高いと判断し、私たちは静かに階段を上がっていった。

4階の扉は鍵が掛かっていた。

5階は開いていた。私たちは中に滑り込むように入り、扉を静かに閉めた。

『諫早会計事務所』

昨日の夜からずっと電気がついていたところだ。

エレベーターホールにずっといてもかえって怪しまれると思い、中に入ってみることにした。

コンコン……

「……………」

あれっ？私はもう一度ノックする。

コンコン……

「……………」

やはり返事はない。

ガチャ……

ドアが開いた。鍵は掛かっていなかったようだ。

「あのーごめんください……」

「……………グ……」

？ 何か聞こえたぞ？

耳を澄ますとオフィスの右手奥、病院の診察室にあるようなキャスター付きのついたての向こう側で、何か音がした。私と曾根崎は静かについたてに近付いていく。

「グア……グア……」

いびきのように聞こえる。私と曾根崎はついたての向こう側に回り込んだ。

赤いスーツに茶髪、間違いなく今朝見掛けた女だ。やっぱり寝て

いた。

「あの～……」

曾根崎が声を掛ける。

「グガ～グガ～……グ………ん？」

「あの～すみません……」

女はまだ眠そうであったが、身体を起こして私たちを見た。

「んん……なに？……あんたたち……お客ふあ～ん……？」

ギトギトに塗りたくった真っ赤な口紅が大きくOの字を作る。

私は不法侵入と思われる危険性を考え、丁寧に礼節を持って説明しようと考えた。

「私は武蔵野署の巡査部……」

「ちよっと待った。何も言わなくていいわよ。」

女は私たちの顔を凝視^{ぎようし}する。

「……………」

そのまま1～2分が過ぎる。

「……………」

「あ、あの……」

「シャラップ！！何も言わなくていいって言ったでしょ！せっかちな刑事ね。」

私は驚き、何も言えなくなってしまった。
さらに1〜2分後やっと視線を外してくれた。

「ふう〜わかったわ。匿^{かくま}ってあげる。その代わりアタシの肩揉んで。
曾根崎慎太郎くん？」

「！ な、何で僕の名前を知っているんですか？」

「名前だけじゃないわよ。徳島県出身、24才、徳島工業高校情報
工学科卒、両親は健在で妹さんが一人。恋人はいない。高校時代に
付き合ってた彼女をまだ引きずってるのね。未練がましいわね。：
…まだ続ける？」

「いい！ いい！ もう止めてください！ な、何で……？」

「アタシね……霊能力があるの。」

「霊能力!?!」

思いつ切り怪しいが、曾根崎の慌てぶりからして、事実なんだろう。
しかし、霊能力って読心術のことか？

「アタシの名前は諫^{いさはや}早江^{えつこ}津子。『えっちゃん』って呼んで。」

「えっ……えっちゃん……あの、もしかしてここの会計士さんって
……」

「そう、アタシよ。」

「……何で会計事務所をやっているんですか？ 探偵とかうらないと
かじゃなくて……？」

曾根崎が肩を一生懸命揉みながら聞く。

「バカねえ。今のご時世、そんなので儲かるわけないでしょ。サイ
ドビジネスよ。本業は心靈関係のトラブル解消よ。」

「……ってことは私たちもお金を払わないといけないってことです

か？」

「そうねえ……匿ったことはこのボクが肩揉みしてくればタダにしてあげるけど、その悠姫とかって怨霊を退治する仕事を頼まれればタダってわけにはいかないわよね。」

ほっ……とりあえず大丈夫みたいだな……曾根崎、すまんがサー
ビスしろよ。

階下が騒がしくなってきた。死怨教団のやつらが人質に逃げられたことに気付いたのだろう。

「アンタたち肩揉みはとりあえずそんなところでいいから、奥の部屋に行つて静かにしてな。……来るよ！」

私たちは慌てて奥の部屋に逃げ込む。

ドンドン！ ドンドン！

事務所のドアを激しくノックする音が聞こえる。

「なんだい！うるさいね！ドアが壊れちまうよ！」

諫早さんが怒鳴る。

ボタン！

「おい！怪しい二人組の男がここに来なかったか！？」

「誰だい！？アンタたちは！いきなり入って来て、名乗りもしないで失礼じゃないか！しかもそれが人にものを聞く態度かい！」

「うるさい！我々は3階の『藤原現像所』の者だ！どうなんだ！見たのか！」

今にも殴りかかりそうな勢いだ。諫早さんは大丈夫か？ いざとなったらこの拳銃を使うしかない。私は脇の下の拳銃をそっと押さえる。

「……ああ、見たよ……」

なに！？ あの女に裏切られたか！？

「……今日の前にいるよ！」

「くっ……くそババア。おい！いくぞ！」

バタン！

教団員は行ってしまったようだ。

「もう大丈夫だよ。出といで。」

私たちが出て行くと、諫早さんは睨んでいた。

「アンタアタシが裏切ったって思っただろ！ 見くびるんじゃないよ！ 諫早江津子52才、今まで嘘をついたことがないのが自慢さね！」

諫早さんは私を指差している。さっき思ったことは筒抜けだったようだ。

「す……すみません、諫早さん、私はてつきり……」

「えっちゃん！！」

そ、そうか……

「すみません、え……えっちゃん。」

「……わかればいいのよ。それじゃ『あっくん』！、紅茶を淹いれて。今後のことを話しましょう。」

「あ……あっくん……」

私は唾あぜん然とした。

「ププッ！」

曾根崎は吹き出している。私は力が抜けていくのがわかった。

「んっ！やっぱり紅茶はアールグレイよね！」

えっちゃんはおいしそうに私の淹れた紅茶を飲んでいる。頭の中でも『えっちゃん』と呼ばないとすぐに怒られるので、この人の名前は『えっちゃん』だと自己暗示させるようにした。

しかしやりづらい。思想の自由はどこへ行った？

「さて、ビジネスの話といきましょうか？」

私たちは先程隠れていた部屋にいる。中央にガラステーブルがあり、革張りのふかふかのソファ。バカでかい液晶ハイビジョンテレビにアンティークなサイドボード。会計士ってそんなに儲かるのか？脱税でもしてるんじゃないか？

「脱税なんかするわけじゃないじゃないか！」

いけない！またやってしまった！

「す、すみません……」

「いい加減慣れてくださいよ御手洗さん。えっちゃんには全部お見通しなんですから。」

「さすが、しんちゃん。わかってるわね。」

えっちゃんはニコニコだ。

疲れる……

「アンタたち、この後はどうするつもり？」

「落ち着くのを待って池袋に行こうかと思っています。」

私がそう答えると、えっちゃんはフンツと鼻で笑った。

「アンタたち、どうやって行くつもりなんだい？きつと電車もタクシーもみいんな見張られてるよ。のこのこ捕まりに行くようなもんさね。」

まだ武蔵野署のことは報道されていない。ということは、死怨教団によって情報が封鎖されているということか？

「フンツ！違うよ！」

えっちゃんはまた鼻で笑った。

「『なかったこと』になってるんさね。」

なかったこと？

「そう。つまり、『武蔵野署では何もなかった』ってことさ。」

「しかし、私は見たんだ！署員は皆殺しにされていた……あれをな

かったことになんてできるものなのか？」

「はっ！簡単さね！なりすませばいいんだよ。署員に。」

「そんなことができるもんなのか？200人以上の署員がいたのに……」

本庁、外勤の警官、出入りの業者、それぞれの家族など、バレる可能性は計り知れない。いつまでも謀^{たばか}れるわけがない。

「フンッ……いつまでも謀る必要がないってことだろうね。せいぜい今日一日ってところじゃないかい？」

「今日一日？たった一日のためにこれだけの大規模な隠蔽^{いんぺい}工作をする意味があるのか？」

私にはわからない。

「ヤツら何かを待ってるんだね。いや、『誰か』かも知れない。」

「誰か……誰だ？」

「さあ？アンタは真実を目撃してるんだから、アンタたちじゃないことは確かだね。」

そうだ。私は見た。そして剛という化け物に殺されるところを佐伯という幽霊に助けられた。剛は私が見たことも生きていることも知っている……つまり、私たちのために隠蔽^{いんぺい}工作をする必要はない。それなら、これは罠か？

仮に罠だとして、誰を罠にハメようとしてるんだ？

「あ、あの……たぶん僕 誰だかわかります。」

今まで黙っていた曾根崎が話し始めた。

「僕が拉致されて車に乗せられている時に、男たちが話しているのを聞いたんです。『悠姫さまが死怨になられるのを邪魔するヤツらがいる。そいつらは今新潟にいて、逃げられたら武蔵野署におびき寄せて皆殺しだ』って……」

そう言えば曾根崎に詳しく話を聞いていなかった。こいつはなぜ狙われたんだ？

「『悠姫が死怨になるのを邪魔するヤツら』？」

私は何だかSFの世界に紛れ込んでしまった気がした。

「はい……『シンドウ』って言っていました。」

「『シンドウ』……誰だ？ そいつは？」

「まあ、誰にせよ、『敵の敵』には違いなさいね。」

いさ……いや、えっちゃんは何か楽しそうに見える。

「はい、そこでビジネス。そいつらを助けに行くなら手助けをしてやってもいいよ。100万でね。」

「ひゃ、百万!!」

ぼったくりだ！

「高過ぎるかい？ でも、人類を救う値段だと思えば破格だと思うけどね。」

「人類？ いきなり何ですか？」

私が聞くと、えっちゃんは曾根崎を見てまたニコニコしている。

「御手洗さん……ヤツらが言っていたんです。『どうせ人類は滅亡するんだから、皆殺しにすればいい』って。」

曾根崎は真剣そのものだ。

人類滅亡……武蔵野署の惨状は尋常ではなかったが、それでも少し大袈裟おおげさな気はするが……100万か……定期を解約すれば何とかなるか……

武蔵野署の仲間たちはいいい人たちだった。そのことを思えば確かに100万でも足りないくらい許せない。

「わかりました。私が払います。ただし、この事件が解決したらです。」

そう言うのと、えっちゃん満面の笑顔で応える。

「じゃ商談成立だね！頼んだよ。ま、出来高払ってことかね。」

「それにしても、読心術でどこまで対抗できるんですか？相手は200人からの警察官を一瞬で皆殺しにするようなヤツらなんですよ？」

「はっ！読心術？」

また鼻で笑われた。もう慣れてきてしまった。

「アンタ、そんないかつい顔してドMかい？」

また読まれてしまった。

「アタシは『霊能力』って言っただろ？アンタの心を読んでるんじゃないよ！」

「えっ！？それじゃあ、なんでわかるんですか？」

「『霊』に聞いているのに決まってるじゃないのさ！」
「『霊』？」

私は寒気がした。

「言い換えれば『魂』さね。アンタの魂はおしゃべりだね。しんちやんの魂は個人情報守ってるけど、アンタのは垂れ流しだよ。」

ハッハッハッとえっちゃんが笑い、曾根崎も腹を抱えている。そう言えば曾根崎はほとんど突っ込まれていない！不公平だ！

「さ、それじゃ早速武蔵野署に行こうじゃないか？」

えっちゃんはやる気満々で腕まくりをしている。

「ちょ、ちょっと待ってください。どうやって行くんですか？今電車もタクシーも見張られてるって言ったばかりじゃないですか。」

私はこの人に振り回されてばかりだな。

「ああ、電車もタクシーもバスも、公共の交通機関は全部見張られてると思っていいだろうね。」

「じゃ、どうやって行くんですか？」

「あっくん、アンタはかだねえ！……しんちゃん、アンタはわかるだろう？」

曾根崎はニコニコしている。

「はい！えっちゃんの自家用車ですね？」

「はい！よくできました！」

ガックシ！

何なんだ……このノリは……

「アタシが偵察がてら、ちよつくら車を持ってくるから、アンタたちはここで静かに待ってな。」

そう言ってえっちゃんはさっさと出て行ってしまった。

それから2時間後、このビルの地下駐車場からえっちゃんの車で出発した。教団員には見つからずに済んだようだ。

えっちゃんの車はフェラーリだった。私にはやっぱり脱税していると思えなかった。また怒られたが。



武蔵野署に着いたのは午前0時近くだった。

「八前さん、曾根崎さんは本当にここにいますか？」

十次がタクシーを駐車場に停め、降りようとした時、美鈴ちゃんが聞いてきた。

武蔵野署の周りには人気は全くなく、前の道路を通る車も深夜のため時折トラックが通るくらいだ。

均等に並ぶ街灯はオレンジ色の淡い光でアスファルトを照らしている。それとは対照的に、武蔵野署は深夜にも関わらず煌々（こう

こう)と電気がついており、建物の長い影が街灯のオレンジと重なって、その存在を自己主張しているように見える。

「朝電話した時には、いるようなことを言っていたが、御手洗も会えないみたいだったからな……移送されてないといいが。」

もし本庁に移送されていたら厄介だ。いち警部補では簡単に面会の許可さえ降りない。ましてや、外に連れ出すなんて不可能だ。

「しかし美鈴ちゃん、どうしてそんなことを聞くんだい？」

美鈴ちゃんはためらっている。

「あの……一つ気になってたことがあるんですが、聞いてもいいですか？」

「？ 何だい？」

「八前さんは御手洗さんと直接話をしましたか？」

「えっ？……朝連絡した時は、受付の婦警だったよ。御手洗は別の捜査で出ているが、午後には戻って話だったな。まあ、忙しいヤツだからな。」

話の途中から、美鈴ちゃんの顔色が変わっていくのがわかった。どうしたんだろう？

「あの……私たち結局御手洗さんと直接コンタクトが取れないままここに来たことになるんです……サービスエリアで晁が電話した時も、『御手洗は捜査に出ていていない』って冷たい対応をされたって言ってたし……」

そう言えばそうだ。おれは御手洗とは直接話していない。しかし、

開いてはいないが、御手洗からはメールが来た。警察ということが無警戒だったが、悠姫がおれたちを捜しているとすれば、御手洗のいるここで待ち伏せを食らう確率が高いかも知れない。

「そうか、ありがとう美鈴ちゃん。それでも行かなければ何も始まらない。瑛士くんが言ってたろ？『計画を成功させるためには曾根崎の所在を確認することからだ』って。」

「はい。だから罫は必ずあると考えて行った方がよいかと……」

美鈴ちゃん、やるな。

「わかった。スタンガンは美鈴ちゃんが持っていてくれ。」

おれたちは駐車場に降り立った。

初夏なのだが、深夜のせいかな少し肌寒い。ひんやりとした夜の空気の中、おれは身震いした。そしてこれは武者震いだと自分に言い聞かせた。

入口を入ると右側にカウンターがあり、手前から受付、免許課、交通課と続く。東京にいた頃は何度か来たことはあったが、今では知り合いの警官は御手洗しかない。とりあえず受付の婦警に聞いてみることにした。

「長岡北署の八前信彦警部補だ。御手洗巡査部長に変死事件の重要な情報を伝えに来たんだが、ヤツに会えるか？」

「長岡北署の八前警部補ですね。少々お待ちください。」

婦警はにこやかにそう言ってから、奥の電話でどこかに連絡をしている。ほんの数分後戻って来た。

「お待ちせいたしました。御手洗はあと30分ほどで帰って来るそ

うです。2階の刑事課でお待ちください。」

「わかった。ご苦労様。」

敬礼すると婦警も返礼した。

「大丈夫みたいです。」

十次が小さな声で話し掛ける。

「いや、何かおかしい。気をつけろ。」

通常、受付では市民感情を考慮して、敬礼はしないことになっている。おれはカマを掛けてみたのだ。しかし、相手の素姓や目的がはっきりしないままでは対処しづらい。ここは素直に従って、様子をみた方がよさそうだ。

おれたちは奥へ進み、階段を上った。

刑事課には5人ほどの刑事がおり、おれたちが入ると不審そうな視線を向ける。

しかし、やはり怪しい。深夜0時過ぎで、何か事件があったようすもないのに、5人も刑事が残っている。受付には婦警が残っている。さらに敬礼を返した。

「八前警部補ですか？夜遅くご苦労様です。御手洗はまもなく帰ってきますので、奥の応接室でお待ちください。」

坊主頭のごつい刑事がそう言っておれたちを奥の扉へ案内した。

「ご苦労様です。」

若い警官がお茶を3つガラステーブルに置いて行った。

「さて、どうするかな。」

まずは時間まで待ってみる。それでものらりくらり言い訳をするようなら、やはり美鈴ちゃんの言う通り御手洗と直接コンタクトを取るべきだろう。

「あの、八前さん……八前さん。」

考えに没頭していたので、美鈴ちゃんに呼ばれているのに気がつかなかった。

「ああ、ごめん、ごめん。なんだい？」

「たいしたことじゃないんですけど……入口に銃痕じゅうこんがありました。」

「なに!？」

「いくら警察署だからって、おかしいですよね？」

「確かにおかしい。ここで何かがあったのは間違いなさそうだな。」

そして30分が過ぎた。誰も入って来ない。部屋の中は重苦しい沈黙に満たされている。さらに10分が経過した。

「おかしいな……御手洗が遅れているにせよ、何も言って来ない。」
「八前さん……」

美鈴ちゃんは不安顔だ。

「あつしが様子を見て来ますか？」

十次が言う。

「いや、おれが行こう。ちょっと電話を借りて、御手洗に直接連絡してみる。」

ガチャ！ガチャ！

応接室のドアを開けようとすると、ドアには鍵が掛かっていた。

「八前さん、どうしたんですか？」

美鈴ちゃんが駆け寄って来る。

「開かない……おれたちは閉じ込められたようだ。」
「ええっ!？」

その時、

♪

♪

オルゴールのような音楽が部屋のどこからか聞こえてきた。おれたちはびっくりして、各々の携帯をチェックする。しかし誰の携帯も電源を切つてあるままだった。さっき聞こえたオルゴールはもう聞こえない。

「さっきのは何だったんだ？」

おれたちは部屋の中を探した。

「あ！ありました！」

十次がソファの下に落ちていた携帯を見つけた。

その携帯の液晶画面を見て、全員 きょうがく 驚愕した。

『怨虫…ダウンロード 70%』

「や、八前さん！」

美鈴ちゃんの顔は蒼白そうはくになっている。おれも混乱していた。

なぜ……ここに携帯があって『Si onメンバー』がダウンロードされているんだ？

導かれる答えは一つ……『罨』だ。

「十次、携帯をなるべく遠くに投げろ！」

「はい！」

十次は応接室の奥の角に尚もダウンロードを続ける携帯を放り投げる。

『怨虫…ダウンロード 90%』

ガタン！

携帯が床に落ちる音がする。どこに落ちたのかは、ソファの陰になっ
ていて見えない。

「美鈴ちゃん……スタンガンを出しておいてくれ。」

「もう準備してあります。」

見ると美鈴ちゃんはすでにスタンガンを構えている。

「よし。おれが囧になって引きつけるから、その隙に美鈴ちゃんは攻撃してくれ。」

「わかりました。」

「八前の旦那！あっしはどうすればいいんで？」

「……美鈴ちゃんを守ってくれ。がっせん」

「合点だ！」

さあ！いつでも来い！怨霊め！

おれたちは壁を背にして身構える。おれは十次が携帯を投げたあたりに意識を集中した。

1ゝ2分がとても長く感じた。

ドクン……ドクン……

鼓動がやけに大きく聞こえる。

「ゴクッ！」

十次が唾を飲み込むのが聞こえた。

その時、部屋の対角線の反対側に小さい影がむくつと立ち上がった。

小学生くらいの男の子だ。

白いYシャツに半ズボンを紺のサスペンダーで吊り、手には虫捕り網と虫かごを持っている。

「こ、こんな子も『メンバー』になっているのか……」

おれは美那が草薙を殺した時のことを思い出した。美那は草薙の心臓を取り出し、その鼓動を聞いていた。それは、生前抱っこが好

きだった美那が、心音を聞くことで心の平安を得ていたためだ。

この子はきつと生前、昆虫採集が好きだったんだろう。自然の中を舞う蝶や蜻蛉とんぼを無邪気に追いかけていたのだろう。そう考えると胸が締め付けられる思いがした。

「八前の旦那！」

十次に声を掛けられはっと気がつく、男の子はソファを回り込み、近付いて来ていた。

「美鈴ちゃん、準備はいいかい？」

「は、はい！」

大丈夫だ。携帯から出現したことから考えて『コピー』であることは間違いない。こっちには武器がある。数も1人対3人で有利だ。やられはしない！

男の子はゆっくり歩いてくる。そしておれたちから3mほど離れたところで立ち止まった。

「ど、どうするつもりだ……？」

誰にともなくおれが呟つぶやいた瞬間、男の子が泣き出した。

「ウェーン……ウェーン……」

意外な行動におれは固まってしまった。

「ウエエエエエ！ウエエエエエ！ウ”エ”エ”エ”エ”エ”エ”オオオオオオオオゴボボボボボボ……」

十次が美鈴ちゃんをテーブルの上へ乗せ、自分は飛び回る虫たちを手で叩き落としている。

「痛っ！」

踝^{くるぶし}辺りに痛みが走る。見るとゴキブリやら蜘蛛やらがおれの足に取り付き囓^{かじ}っている。

「うわあああ！ちくしょう！」

バンバンバンバン！

おれは夢中で足を動かして虫を振り落とし、踏みつぶす。踏みつぶしても踏みつぶしてもその足に虫が取り付く。頭にも虫が取り付き始め、何ヶ所か囓られ、その度に手で払い落とす。その手にまた虫が取り付く……

もうだめだ……おれたちはここで殺される……

美鈴ちゃんの足や頭にも虫が取り付き始めている。十次が必死に美鈴ちゃんの虫を払い落としているが、時間の問題だろう。

おれは死を覚悟した。

男の子の姿はもうなかった。

ちくしょう……美那……和美……

その時、風が吹いた。室内にも関わらず、暖かい春風のような風が室内を通り過ぎた。髪が風になびき、ここが室内であることも、今何が起こっていたのかも一瞬忘れてしまった。

気がつくとも虫たちは消えていた。美鈴ちゃんと十次もテーブルの上できょとんとしている。

「八前さん、な、何があったんですか？む、虫は？」

美鈴ちゃんがテーブルから降りながら、不思議そうに辺りを見回す。

「わからん……いったい何があったんだ？しかし、助かったことは違う……」

『アンタたち、罨だって気付кинаがらのこのこやって来るなんてバカドMかい？』

突然声がした。窓際に女性が立っている。真っ赤なスーツにカールのかかった薄い茶髪の年齢不詳の女性だ。身体全体が薄ぼんやりと光っている。

「あ、あなたは誰ですか？」

おれは『メンバー』の一員かと思い、後ずさった。

『逃げなくてもいいよ！のぶくん。アタシや味方だよ！』

の、のぶくん……

「あ、あの！助けていただいてありがとうございます。もうダメかと思いました。」

美鈴ちゃんが深々とお辞儀する。それに合わせておれと十次も頭を下げた。

『ああ、ああ！いいんだよ。あつくんに頼まれただけだから。それにまだ終わってないよ。この警察署にいるのは人間だけで50人、さらにさっきみたいなの『怨体』がいくつも飛ばされてくる。『武蔵野署の戦い』はこれからさ。』

あつくん？……だれだ？

50人……さらに『コピー』である『怨体』まで加わる……逃げられるのか？

『詳しくは無事に脱出できたらゆっくり話してあげるよ。とりあえず逃げるのが先決さね。』

「そ、そうですね。」

おれは拳銃を構える。

美鈴ちゃんと十次は民間人だ。危険に晒すわけにはいかない。おれが命を懸けて守り抜く！

崎田くんは『美鈴をよろしく』とおれに託した。崎田くんの約束は、おれが命を懸けて守る！

『準備はいいかい？ドアの鍵を開けるよ。まあ、心配しなさんな。人間たちはアンタたちに任せるが、『怨体』はアタシとその子の武器で何とかするよ。』

人間相手なら少しは安心できる。問題は数だ。

おれは左手が使えない。十次はいち民間人でタクシードライバーだ。

拳銃の弾は予備を入れても20発ぐらいしかない。

『倒す』ことよりも『逃げる』ことを優先させた方が利口だな。

「八前の旦那……人間の方はあつしに任せてもらいやせんか？旦那は美鈴ちゃんを守ってやってくだせえ。」

「十次……そういうわけにはいかない。お前は民間人でただの運ちゃんだ。」

『……のぶくん、この人の言う通りにしな。』

この女性は人間ではなくしかも命の恩人（恩霊？）だ。その人がそういうからには、何か確かな根拠があるんだろう。

「わかりました。十次……死ぬなよ。」

「へへっ、旦那こそ。」

『アタシのことは【えっちゃん】って呼んでね。』

え、えっちゃん……

『まずは隣りの部屋の【人間5人】だ。2人が拳銃を持ってるから気をつけな！じゃ、鍵を開けるよ！』

第11章 十次晋也

俺はドアを開けた。

「ちわあゝっす！」

「あらあ！ 晃ちゃん！ 何だか久し振りねえ。2日間も休んでどうしちゃったのお？ 心配しちゃったわよう。」

「いや、いろいろたいへんで……すいませんでした。」

このオカマは樺島遼次郎^{かばしまりようじろう}30才♂。俺のバイト先、漫画喫茶『オアシス』の店長だ。

やり手で人もいいから俺は尊敬している。オカマということと、語尾が伸びるしゃべり方以外は。

断っておくが、俺はオカマに偏見はない。しかし興味もない。

この店長の問題は、俺をオカマにしたがっているということだ。どうやら俺は『そっち系』に向いている顔立ちらしい。この間など、メイド服で仕事をさせられそうになった。

「今日はどうしたのお？ とうとうアタシに身を委ねる^{ゆだ}気になったあ？」

「それは福田内閣が復活するより有り得ません。」

「あらあ、残念ねえ。」

全然残念そうに見えない。この一か月拒否し続けているが、諦め^{あきら}る気はないらしい。

「店長にちよっと相談……っていうかお願いがあるんですけど、いいですか？」

「あら、なあにい？ 後ろならいつでも貸したげるわよん！」

「金 貰^{もら}ってもいりません。あの、明日一日この店貸し切りにできませんか？」

「ええっ！全部う！？」

俺は頷^{うなず}いた。

「一日い！？」

また頷く。

「……いいわよ。」

ガクッ！

軽っ！ 激軽っ！

可能ならありがたいけど、店長たるものそんなでいいのか！？

「……ただし条件があるわよん。」

キターーーーーー！

「な、なんすか？……じ、条件って……」

俺は身構えた。

「アタシを一晚抱いて。」

ガーーーーン！

やっぱりそうきたか……

「そ、それは……無理っす……」

「じゃ、ダメねえ。」

「そこを何とかお願いします!」

俺は土下座して頼んだ。ドリンクを取りに来た若い男がじろじろ見ている。

「ちょ、ちょっと、よしなさいよ! みつともない! とりあえずこっちにおいで!」

俺は店長に連れられて事務室に行った。

「ふう……びっくりしちゃったわよう。いきなり土下座なんてするんだもん……いったいどういうわけ? ちゃんと話してちょうだい。」

それから1時間、今までのことを店長に包み隠さず話した。

「ふうん……なるほどねえ……つまり、人類を救うために、ここに怨霊をたくさん呼び寄せるってことね。」

「ま、まあ、そういうことになります……」

店長は思案顔だ。しあんがお やっぱり経営者としては迷惑だよな……

「最近世の中がおかしいと思ってたのよねえ、うちのお店でも最近おかしいことが頻発してるし。」

「お客さんか誰か殺されたんですか?」

「お店で死人は出てないわよ。でも、入った人数と出て行った人数が合わないことが最近多いのよねえ……」

「えっ!? 減っちゃうんですか?」

「ううん、逆。増えるの。きっと、その『Si onメンバー』の『コピー』ってのをダウンロードして連れて帰っちゃうのね。」

俺は想像してぞっとした。

店のパソコンで『Si on』を何気なく、偶然に開く。エロサイトから跳ぶやつもいるだろうし、他の掲示板サイトから跳ぶやつもいるだろう。そして、知らず知らずのうちに取り憑かれ、帰り道のどこかで殺される。店内で殺さないのは需要があるからだろう。

殺人事件が起こり、店が閉鎖されるよりは、普通に営業させておいた方がより多く殺せる……

店長はぽんっと手を叩く。

「わかったわ。貸してあげる。」

「ほ、ほんとですか!？」

「ええ、ほんとよ。ただし、やっぱり条件があるわ。」

ガクッ!

結局それか……

「アタシもその計画に入れて頂戴。ちようだい」

「ええ〜っ! て、店長を!？」

「そうよ! アタシだって何かしたいわよ。ただ黙って晃ちゃんを危険に晒さらすなんて、オカマとして我慢できないわ。」

「ちょ、ちょっと待ってもらえますか? え、瑛士に聞いてみます。」

俺は瑛士にPHSでこの次第を連絡した。

瑛士は、信用できるなら、今は一人でも味方はいた方がいい。ぜひ協力してもらえ、ということだった。

でも、俺が言うのもなんだけど、このオカマ店長役に立つのかな?

「店長、ぜひよろしくお願いします。瑛士は一人でも味方はほしいって言ってます。」

「そう！よかった！その瑛士くんには後でたっぷりサービスしてあげなくっちゃねえ。」

瑛士、お前、悠姫より恐ろしいヤツに狙われたかも知れないぞ…



おれの前には男が5人立っている。みな屈強そうだ。

特に、さっきおれたちを案内した大柄な坊主頭の男はプロレスラー顔負けだ。さらに、そのうち二人は拳銃を構え、こちらに銃口を向けている。

こっちは3人。

拳銃はあるが片腕しか使えない中年男性と、タクシードライバー、女子大生。えっちゃんは『危なくなったらまた来るよ』と言って消えてしまっていた。

勝負は明らかだった。

相手もそう考えたのか、すぐに撃ってくる気配はない。ニヤニヤと笑って、どう料理しようかと思案顔である。

「お前らよく無事だったな……『俊夫さま』が来られたんじゃないのか？」

「『俊夫さま』？」

さっきの虫少年の怨霊か？それにしても『さま』呼ばわりとは……

「お前たちは何者だ？少なくとも警察じゃないな？」

「……オレたちは『死怨教団』だ。悠姫さまの作り出す新世界の選ばれた民となる。」

「はあ！？　ばっかじゃないの？　アンタたち！　みんな殺されるのがわかんないの？」

美鈴ちゃんが応接室のドアの前で声を上げる。

天井から『えっちゃん』がすうっと降りて来た。口に人指し指を当て、ウィンクしている。おれはヤツらの気をそらせるために話し掛けた。

「『死怨教団』とは何なんだ？　おれたちはどうせここで死ぬんだ。冥土めいどの土産におしえてくれ。あの世に行ったら悠姫にお前らが使命を忠実に果たしたと言っというてやるよ。」

「ほ、ほんとか？」

坊主頭は喜色きしよく顔で言う。

「よ、よし。そんなに知りたいなら教えてやろう。」

坊主頭は勿体もったいぶった様子をしているが、話したくてしょうがないという感じだ。

こいつ、あまりお利口さんじゃないな……

「わが『死怨教団』は一つの悲劇によって生まれたのだ。」
「悲劇？」

美鈴ちゃんが聞く。

「そう。あれは約1ヶ月前、一組の若いカップルがいた。2人は愛し合っていた。しかしある夜、男が殺された。あるホテルのバスルームで殺されたのだ。女は隣りの部屋にいたが、全く気付かなかった。警察に通報したのは女だったが、疑われたのも女だった。女は間違いなく男を愛していたから、そのショックは計り知れなかっただろう。」

坊主頭は涙を流している。

「女はその後警察の厳しい取り調べを2週間以上に渡って受け続けた。

告白を強要する脅迫まがいのことまでされたらしい。結局証拠不十分で仮釈放されたが、警察で受けた心の傷は大きかった……」

どこかで聞いたような話だな……

記憶の片隅に引っ掛かっている感覚があるのだが、明確な形にならないもどかしさを感じる。

「ア、アタシわかったかも……」

美鈴ちゃんが後ろで囁いた。坊主頭はまだ熱弁を奮っている。

「そこに現われたのが悠姫さまだ。」

坊主頭の顔が恍惚としてきた。

『えっちゃん』は拳銃を持っている男の一人の背後に降り、後ろから男の拳銃に手を伸ばして触れた。男は全く気付いていないようだ。

「悠姫さまは女に全てを話した。男を殺したのは明仁さまだったこと。男の本当の姿。男は何人もの女と関係があり、付き合いは完全に遊びだったこと。そして決定的だったのは、女の親友と実は付き合っており、陰では女を笑い者にしていたという事実だった。」

おれにもその男女が誰だかわかった。

香取隼人……庄司明仁を高校時代いじめて、事故とはいえ殺した男だ。

「女は男を呪った。親友も呪った。そして世の中全てを呪った。そこで、悠姫さまのお考えに賛同し、そのお手伝いをする事となったのだ。女の名は黒田玲花^{くろだれいか}。悠姫さまが『死怨』になられるために玲花は『教祖』となり、『教団』を作った。それが『死怨教団』だ！」

『えっちゃん』は拳銃を持っているもう一人の背後に移動し、同じように拳銃に触れた。そして片目をつむり、OKサインを出して、また天井に消えてしまった。

悠姫が『死怨』になるために？ ということだ？ 悠姫の目的は人類滅亡じゃないのか？

「さあ、これで満足だろう？ ……死ね。」

坊主頭は拳銃を持っている男に顎^{あご}で合図をした。

「ま、待て！ 待ってくれ！ あと2つ教えてくれ！」

もういつでも攻撃を開始して構わなかったが、おれは最大限この

あまりお利口さんではない男から情報を聞き出すつもりでいた。

「なんだ往生おうじょうぎわ際の悪いヤツだな。……フン、いいだろう。悠姫さまにはちゃんと伝えろよ。」

「ああ、確かに伝えるよ。まず『死怨』って何だ？」

「『死怨』とは『あの世とこの世を繋つなぐ者』だ。」

あの世とこの世を繋ぐ？

「もう一つ。『死怨教団』の目的は何だ？」

「悠姫さまが『死怨』になられるためにより多くの魂を集め、邪魔者から悠姫さまをお守りすることだ。」

「なるほどね……」

これ以上は粘れないな……

おれは拳銃を握り締めた。

左側にいる拳銃を持った男が一步前へ出る。拳銃を持ち上げ、おれに狙いを定める。

おれもその男に狙いを定めるが、撃てるかどうか自信はない。人を撃つということはとても勇気があることだ。普通の人だったら理性が邪魔をして撃てるものではない。その人の人生を自分が終わらせてしまうのだから。

「や、やめて！ あなたたちは悠姫に騙だまされているのよ！」

美鈴ちゃんが叫ぶと、男の狙いが美鈴ちゃんに変わった。

「うるさい女だな。最後にやっから殺すつもりだったが、最初に殺してやる。」

「い、いやっ！」

おれはとっさに美鈴ちゃんを庇^{かば}うが、同時に十次が拳銃を構えて
いる男の前に進み出た。

「何だ！？お前は？先に殺されたいのか？」

坊主頭がせせら笑う。

「てめえら、人間の風上にもおけねえ。お仕置きしてやらねえとな。
」

十次は不敵に笑う。十次の身体からは今まで感じたことのない殺
気を感じられる。

「へっ！死ね！」

カチッ……

弾は出ない。

「なっ、なんだ！？」

カチッ！ カチッ！

何度引き金を引いても弾は出ない。

「くっ！」

ガンッ！

男は拳銃を床に投げ捨てる。

「ばっ！何やってんだ！」

右側の拳銃を持った男が十次に銃口を向ける。

カチッ……

やはり弾は出ない。

カチッ、カチッ、カチッ……

何度やっても同じことであつた。『えっちゃん』が何かして、拳銃を壊してくれたらしい。

おれは左側の男に拳銃を向けたが、十次に制された。

「八前の旦那、ここはあつしに任せてくだせえ。」

「ち、ちくしょう！」

坊主頭と左側の拳銃を持っていた男が十次に殴り掛かってくる。

「十次さん！」

美鈴ちゃんが叫ぶ。

ひゅっ！

一瞬風が吹いたように感じた。

十次は坊主頭たちとすれ違った形で立っている。男たちは殴り掛かる格好のまま固まっている。一瞬時間が止まったように感じた。

……ドサッ！

坊主頭と左側の男が同時に崩れ落ちた。

「な、何しやがった！？てめえ！」

右側の男が殴り掛かってきた。

ひゅっ！

一瞬、十次が軽くジャンプしたかと思うと、右側の男の動きが止まった。

「う……うげ……」

右側の男は悶絶もんぜつしながら崩れ落ちた。

す、すごい……何をしたのか全然わからなかった……十次ってこんなに強かったんだ……

「ひよおおおお……」

十次は長く息を吐き、呆然ぼうぜんとしている後ろの若い二人の男たちの頭上に跳んだ。

「ひゅう！」

空中で倒立の形になると、手を身体の前でクロスさせる。

トンッ！

十次は同時に男たちの頸動脈けいどうみやく しゅどうに手刀を打った。

ドサドサッ！

どう見ても軽く叩いたようにしか見えなかったが、若い男たちは気を失って倒れてしまった。

「ひゅうううう……」

十次は呼吸を整えている。

「すごい……十次さん……どうやったの？」

美鈴ちゃんが感動している。

「十次……お前何者だ……？」

おれが聞くと十次はへへと照れくさそうに笑う。

「いや、通信教育で習ったんでさあ。」

『バカ言うんじゃないよ。』

『えっちゃん』がまた天井から現われた。

『やっぱりタダ者じゃなかったね……その動き……呼吸法……アンタ……【カゲ】だね……？』

「『カゲ』？」

美鈴ちゃんがえっちゃんに聞く。

『わかりやすく言えば【忍者】だよ。』

「忍者！？この現代社会に！？」

とても信じられない話だが、目の前で見た十次の動きは素人の動きではない。

『しかもその呼吸法は伝説の【第三の家系】だね？』

「へへっ……姐あねさんには叶かなわねえなあ……そうであ。あっしの本当の名は『御影十次』みかげじゅうじ。『御影流』まっえいの末裔です。」

『伊賀、甲賀に続く、越後の隠れ人【御影】の子孫がまだ生きていたとはね。驚いたよ。』

おれと美鈴ちゃんは啞然あぜんとして言葉がなかった。

『八代將軍吉宗候に仕え、その後も歴史の表舞台には決して姿は現わさなかった幻の家系さね。』

十次が忍者？

しかし、それならさっきの動きにも納得がいくし、携帯やパソコンから怨霊が出て来るよりも現実的な気はする。

「それなら心強い味方だな。十次、人間の相手は頼んだぞ。おれは援護がってんに回ろう。」

「合点がってんでさあ！」

時代がかったしゃべり方するのは道理だな。

『さ、急いで脱出しな。さすがに【影の者】でも怨霊相手じゃ敵^{かな}わないからね。』

「そうです。さっさとずらかりましょう。」

十次は部屋を出て行こうとする。

「ちょ、ちよつと待ってくれ。」

おれはこの部屋に『武器』がある可能性を思い出した。

「武蔵野署は機動隊上が多い。おれが東京にいた時の記憶が正しければ、いい『武器』がここにあるはずだ。」

「『武器』？……あ、アタシも行きます！」

おれが応接室とは反対側に走って行くと、美鈴ちゃんもついて来る。

「もしかしてアタシが事情聴取されてた部屋の隣りがそうかも知れません。何か嚴重に守られた物置って感じの部屋でした。」

おれと美鈴ちゃんがドアを開けると、十次とえっちゃんもついて来た。

『早くしなよ。【メンバー】が来たら厄介だよ。』

何でえっちゃんが『メンバー』のことを知っているのか気になっ

たが、後回しにすることにした。

美鈴ちゃんの言った部屋には鍵が掛かっていたが、えっちゃんが壁をすり抜けて中から開けてくれた。中にはいろいろな危険そうな物がたくさんあった。催涙弾、盾、対テロ用捕獲弾、ショットガン……おれはそういった物には目もくれず、壁に掛かった黒い小さな革のケースを十個、全て外した。

「それはなんですか？」

十次が不思議そうにのぞき込む。

「十次、お前の戦闘力なら『メンバー』にも対抗できる。だから、『これ』は絶対に必要だ。」

それは『電磁警棒』だった。

「『電磁警棒』って『怨体』に通用しますかね？」

十次が電磁警棒をケースから出しながら聞く。

「わからん。しかし、『電磁』というからには効くと思うがな……」

そう言われると自信がなくなってきた。

「え、えっちゃんさん……どうですかね……？」

『アタシに聞かれてもわかんないよ！それに【さん】づけはやめな！【えっちゃん】でいいんだよ！』

うーん……瑛士くんに聞ければ……ってPHSがあるじゃないか！

早速瑛士くんに聞いてみようとPHSを上着の内ポケットから取り出す。ところがすでに美鈴ちゃんが連絡していた。

「はい……はい……わかりました。」

美鈴ちゃんはPHSを切り、電磁警棒を一つ取り上げた。

「『怨体』にダメージを与えることはできるということです。ただし『干渉波スタンガン』のように完全に消し去ることはできないだろうから、時間稼ぎに使うようにとのことです。」

『ほう！なかなかキレるやつがいるみたいだね。』

「はい、瑛士くんは医大生で、今まで何度も命を救ってもらいました。」

科学的知識の瑛士くん。

心霊的知識と能力のえっちゃんと佐伯 瞳。

格闘では十次。

国家権力のおれと御手洗。そして『Sion』と悠姫潰滅の鍵を握る曾根崎。

それぞれ重要な役割があり、崎田くと美鈴ちゃんによってみんなが繋がっている。

みんなが力を合わせて協力すれば悠姫の野望を阻止することは絶対できるはずだ。

『……次の敵が来たよ！【怨体2人＋人間10人】がまとまって来るよ！』

第2ラウンド開始か！

おれたちはさっきの部屋に戻った。

『2人の【怨体】はこの署員を皆殺しにしたヤツらだよ。かなり凶暴なヤツらだから気をつけな！アタシはまた後で来るからね！それまでがんばるんだよ！』

えっちゃんはそういうと壁をすり抜けて外へ出て行ってしまった。幽霊なのになんでいちいちなくなるんだろう？そう思ったが、迫り来る危機に意識を集中するのが先だと思い、疑念を頭から振り払う。

廊下をバタバタと走って来る足音が聞こえて来る。おれは拳銃を握り直し、腰に電磁警棒を差した。十次は両手に電磁警棒を持っている。二刀流だ。

「あっしが切り込みますんで、取り逃がしたヤツをお願いします。」
十次はそう言うのと、入口の影に身を寄せて気配を消してしまう。

ボタン！

入口の扉を開けて男たちがなだれ込んでくる。

1……2……部屋の中には8人。廊下に2人残っている。『怨体』はどこだ……？

「おい！お前ら！どうやってこいつらを倒したんだ？」

真ん中にあるスーツ姿の男が床にのびている教団員たちを見て、おれと美鈴ちゃんに凄む^{すこ}。

「さあ？『悠姫さま』のお怒りを買ったんじゃないのか？」

おれが挑発するとスーツ姿の男は顔を真っ赤にして怒り出した。

「このっ……悠姫さまをバカにするな！」

左右の男たちがさっさと拳銃を上げる。

「ひょおおおおおお！」

十次の呼吸が聞こえる。

ドサドサドサッ！

入口近くに立っていた5人が次々と倒れていく。

「な、何だ！？」

前の3人が後ろを振り向くとそこには十次はすでにいない。

「ひょう！」

トンツと体重を感じさせない身のこなしで十次はおれと美鈴ちゃんの前に降り立つ。

「くっ、くそっ！」

スーツ姿の左右の男が振り向きざま拳銃を構える。

「あたあ！」

バシバシッ！

おれには全く見えない速度で十次は電磁警棒を振るい、拳銃を払い落とす。

「おあたあ！」

十次は開脚ジャンプの要領で両脇の男の顎あごを蹴り上げる。

「う、うわ……」

怯ひるむスーツ姿の男は後ずさる。

「ひょう！」

十次はバック転し、スーツ姿の男を蹴り上げた。

「あ、あぐっ……」

ドサッ！

8人を倒すのに30秒もかかっていない。なんて強さだ……

「すごい！十次さん！」

パチパチと美鈴ちゃんが拍手をしたその時、入口に『怨体』が現われた。

「くっくっく……おもしろいやつがいるみたいだな……オレがころしてやる……」

アニメキャラクターのTシャツ……『剛』だ！

バチッ！

十次は電磁警棒のスイッチを入れたようだ。

おれも電磁警棒を出し、伸ばして柄の一番上にあるスイッチを入れる。

カチッ！ ブー——ン——ン……

微かな振動が伝わってきて、微妙に温かくなってくる。

バチッ！

かなりの電流が流れているようだ。

「くっくくく……そんなものがおれにつうようすりゅ」

ざくっ！

剛の顔が横殴りに削り取られた。

「にゃ、にゃにを……」

「てめえはここのお巡りさんたちを皆殺しにした……絶対許せねえ！」

十次の殺気は燃え上がった。

「あああたたたたたたたたたたたたたたたたたたたた！！」

十次は2本の電磁警棒を目に見えない速度で左右になぎ払うように剛に打ちつける。

まるで台風のようなだ。

あまりの速さのため、剛の『怨体』は上半身の前面が削り取られ、歪んだ画像のようになっていた。

「あゝたたたたた……」

剛は勢いに押され、廊下の方へ下がって行く。

おれと美鈴ちゃんも十次について行こうとした。すると横の壁からもう一人の『怨体』が壁をすり抜けて現われた。

「剛はあいつとあそんでるから、おれはおまえらとあそぼうかな……」

学生服を着た、中学生くらいの男の子……『信人』だ！

ずいっ！

信人は一気に間合いを詰めて来る。

信人は『怨裂』……おれは田中太一の殺され方を思い出した。

田中太一は確か全身バラバラに引き裂かれていた。ということはこいつの武器は素手……接近戦だ！

「くっ！」

おれは咄嗟に電磁警棒を横にして前に突き出す。

バチバチッ！

信人が電磁警棒を掴む。

「ぐっ……なんだこれは？こんなものにまけるか……」

信人は力任せに押してくる。とても中学生の男の子の力ではない。おれは尻餅をついて、仰向けに倒れてしまう。右手しか使えないこの状況では、押し切られるのは目に見えている。

ぐぐぐっ！

信人は左手で電磁警棒を掴み、右手をおれの首に伸ばしてくる。くっ……ダメか！

バチバチバチバチバチイイ！

「ぐあああ！」

おれに気を取られている隙に、美鈴ちゃんが信人に背後から『干渉波スタンガン』を押し当てた。

「ああああああ……！」

信人は明滅しながら消滅した。

「ハア、ハア、ハア……美鈴ちゃん、ありがとう。」

「八前さん、大丈夫ですか？」

「ああ、何とかね……」

立ち上がって入口を見る。すると、ガラス張りになっている入口

の向こうで十次が残り2人の人間を蹴り倒すのが見えた。

「八前さん！電磁警棒じゃ『怨体』には勝てません！十次さんを助けに行かないと！」

美鈴ちゃんは立ち上がり、部屋の入口へ走り出す。

「美鈴ちゃん、気をつけろ！」

おれも電磁警棒を握り直し、美鈴ちゃんの後を追う。

「ああたたたたたたたた……」

十次が剛に攻撃する声が聞こえる。

やはり瑛士くんの言った通り、電磁警棒ではダメージは与えられるが、消し去るまでには至らないようだ。

廊下ではやはり十次が剛に電磁警棒を激しく叩き付けていた。美鈴ちゃんは十次の脇をすり抜け、攻撃の激しさに棒立ちになっている剛に横からスタンガンを押し当てた。

バチバチバチバチバチバチバチバチイ！

薄暗い廊下が激しく明滅する。

音が止み、廊下に元の明るさが戻ると剛の姿はもうそこにはなかった。

「美鈴ちゃん、ありがとう。」

十次が笑顔を向ける。

あれだけの激しい戦闘にも関わらず、息の一つも乱れていない。

忍者の末裔ってのはやっぱり本当みたいだな。

『いやゝおみごと。アタシがいない間よく頑張ったね。』

えっちゃんが壁からまた現われた。

『次が来るよ！【怨体4人＋人間8人】だ。【怨体】は2人がさっきの虫のヤツ。2人がバットを持ったヤツだ。虫のヤツはアタシに任せな。』

息つく間もなく第3ラウンドか！

1階への階段を見ると、今度は『怨体』が先頭に立って現われた。

「そおんなほそいものでおれのこうげきをふせげるかなあゝ？」

バットを構えた学ラン姿が2人、廊下を進んでくる。『明仁』だ！確かにいくら効果があろうと、バットを思い切り振られたら電磁警棒では防ぎようがない。ましてやおれは片腕だ。

「ひょうっ！」

十次が明仁たちの前に立ちふさがり、電磁警棒を左右に振り払う。

バチッ！バチッ！

電磁警棒が数度振られると、明仁のバットはまるでバナナのように千切れてしまった。

「な……なんだとう！？」

明仁たちが怯んだその隙に、十次は一気に間合いを詰める。

「しゃあああああ！」

ズバズバッと十次は電磁警棒を振るい、明仁たちの頭、両腕を分断してしまう。人間ではないから血は出ないが、明仁たちは一瞬画像が揺らぐように姿が乱れた。

「今だ！美鈴ちゃん！」

「はいっ！」

美鈴ちゃんはスライディングをするように、右側の明仁にスタングンを押し当てる。

バチバチバチバチバチバチィ！

明仁が1人消えた。

続けてもう一人の明仁も消そうと、美鈴ちゃんは立ち上がろうとする。しかし、すでもう一人の明仁は元の姿に戻っていた。

「けっ！」

明仁は十次を目掛けてバットを横殴りに振り回す。

「ひゅっ！」

呼吸 一閃、^{いっせん}十次は簡単にジャンプして避けてしまう。ところが、明仁はニヤツと笑う。

「ばあか。てめえをねらったんじゃないやねえよ。」

明仁の目が赤くざらりと光ったかと思うと、まだ廊下に中腰にな
っている美鈴ちゃんに向けてバットを振り下ろす。

「しねえ！」

「きゃ、きゃあああああ！」

美鈴ちゃんが殺される！

おれは夢中で明仁に飛び付いた。

ガシッ！

氷のように冷たい身体に抱き付き、タックルの要領で明仁を美鈴
ちゃんから遠ざける。

「うおおおおお！」

ガンッ！

背中にもものすごい衝撃を受けて、おれは床に叩き付けられた。
あまりの衝撃に息ができない。

「か、かはっ……」

「てめえ、じゃましやがって……てめえからころしてやりゆ？」

ざくっ！

明仁の上顎うわあごから上が無くなった。

「旦那、すまねえ。不覚をとった。」

十次はそう言うのと電磁警棒を振るう。

ざくっ！　ざくっ！

またもや明仁の両腕が飛んだ。

バチバチバチバチバチバチィ！

すかさず美鈴ちゃんがスタンガンを使い、消滅させた。

「十次、ありがと……」

ザアアアアアアアアアツ！

十次にお礼を言いかけると『上』から物音が迫ってくる。

無数の虫が天井を真っ黒に染めて降り注いできた。

「うわあああああ！」

「きゃあああああ！」

おれは動かせる右手で顔を覆う。美鈴ちゃんと十次も床に伏せる。

ジュワアアアアアアアアア！

オレンジ色の暖かい風が吹くと、無数の虫たちが一気に蒸発していく。

『【カゲ】　ぱっかりにいい格好させられないからね。』

見るとえっちゃんがおれたちの真ん中に立っている。

しかし、何て波状攻撃だ……十次とえっちゃんがいなければおれと美鈴ちゃんは何度死んでたことか……

パンッ！ ビシッ！

階段の陰から教団員が発砲してきた。おれたちはとっさに横の部屋に飛び込む。

どうやら小さめの会議室のようだ。

「えっちゃん、アイツら何とかしてくれませんか？」

おれは頼んだ。

「……アンタ警官だろ？ 人にばっかり頼ってないで、自分でできることは自分でしな！……アタシは『生霊』だから人は殺せない。『悪霊』になっちゃうからね。拳銃を壊してあげるから、後は自分達で何とかしな！ アタシはもう一人の虫のヤツを何とかするよ。』

そう言うといっちゃんは壁をすり抜けて行ってしまった。

パン！ パン！

教団員は続けざまに撃ってくる。おれは部屋から顔も出せない。ちくしょう……えっちゃんの言う通りだ。おれは無力だ。いっそのまま盾になって、教団員たちと刺し違えてやろうかと思った。すると十次が全て察したようにおれの肩に手を置いて言う。

「旦那、早まったことをしてはいけません。あっしにはあっしのすべきことがあって、美鈴ちゃんには美鈴ちゃんの。旦那には旦那の

『役割』 ってのが必ずありやす。それまで命は大切にしてください。」

……『役割』。こんなすごい十次にも、えっちゃんにもできないおれだけの『役割』が果たしてあるのだろうか？

しかし、考える間もなく銃声が止んだ。えっちゃんの妨害工作が効を制したのだろう。おれと十次は『人間ども』に向かって飛び出した。

「うおりやあああ！」

「ひよおおう！」

パンッ！ パンッ！

おれは威嚇いかくのために階段の壁に向けて発砲する。教団員たちが驚いて首を竦すくめた隙に十次が真上から攻撃する。

「ひゅううううう！」

タタタタタタタン！

十次は狭い階段の中腹で、次々と教団員たちの頸動脈けいどうみやくを打ち据すえる。

ドサドサドサッ！

8人の教団員たちは、重なるように階段の中ほどに崩れ落ちていった。ところが、間髪入れずに階段の踊り場に大量の虫あふが溢れ出す。

ザザザアアアアアア!

『はっ!懲りないヤツだね!』

えっちゃんはオレンジ色に発光したかと思うと、光の津波となつて黒い虫の濁流だくりゅうを包み込む。

ジュワアアアアアア!

無数の虫たちがオレンジ色の光に触れるや否いなや蒸発していった。

『ふう……しかし、これはきりがないね。あと何人残ってんだい?』

「最初に5人、次に10人、そして今ので8人なので23人倒しました。全部で50人だからあと27人残っていることになります。」

美鈴ちゃんが即座に答える。

まだ半分も倒してないのか……しかし、十次とえっちゃんが味方にいる限り何人教団員がいても、何とかなるような気がする。そう、ここでは十次とえっちゃんが自分の『役割』を果たす場面なんだろう。

『【カゲ】!どうだい?まだがんばれるかい?』

「へっ!準備運動にもなりやしねえっす。」

『ふっ、さすがだね。アタシは1階を見て来るよ。』

えっちゃんは階段をふわふわと降りて行ってしまふ。

階段を下りると確か交通課のカウンターがあつて、その先に免許課、受付、そして出口となっている。

ここに来た時、1階には20人ほどの偽警官がいた。今はどうなってる？

おれたちはゆっくりと様子を伺いながら階段を下りて行く。すると下にひょっこりえっちゃんが現われた。

『下には誰もいないよ。みいんな逃げちまったようだね。この隙にさっさとずらかった方がよさそうだね。』

それなら確かにこれはチャンスだ。

「よし！急いで脱出だ。」

おれたちは階段を駆け下りた。

1階には確かに誰もいず、がらんとした中に煌々《こうこう》と蛍光灯がついている。

免許課のカウンターの前を通り過ぎようとした時、右手の通路からバタバタと足音が聞こえてきた。

『まずい！教団員だよ！10人以上いるよ！』

「まずい！美鈴ちゃん、カウンターの陰に隠れるんだ！」

おれと美鈴ちゃんはカウンターを飛び越え、陰に身を隠した。十次は通路の出口脇の壁に背中をつけて、奇襲を狙っている。しかしその時えっちゃんの叫び声がした。

『何てこったい！【怨体】が大量に来たよ！2階だ！20～30人はいるよ！しかも全部虫のヤツだ！』

虫少年はえっちゃんしか対抗できない。たった3回の戦闘でこっちの手を読まれてしまった。

「はああああああ！」

十次が気を吐く。

ドガン！

先頭の男が十次の蹴りを食らって出口の方まで吹っ飛んだ。

「このやろう！」

パンッ！パンッ！

教団員たちは次々と発砲する。

十次はバック転、バック宙を繰り返し、受付のカウンターの陰へ隠れた。

飛び道具を持っているのはおれだけだ。このままじゃ十次があぶない。おれは援護射撃を始めた。

パンッ！パンッ！パンッ！

『ものすごい数の虫だよ！アタシでも防ぎきれるかどうか……』

えっちゃんが珍しく弱気な発言をする。

『とにかくなるべく防ぐから、アンタたちは早く脱出しな！』

「わ、わかりました。」

言い終わるか終わらないかのうちに警察署全体が震動し始めた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

震動は地震ではない。2階から響いてくる。

たった一人の虫少年の『怨体』で一つの部屋が虫でいっぱいになった。それが20～30人ともなるとどのくらいの数になるのか見当もつかない。

震動は徐々に近付いてくる。

パンッ！パンッ！パパンッ！

ビシッ！

2階の階段の方によそ見をしていると、教団員たちに発砲され、頭の近くの机に着弾した。

「うわっ！」

おれは慌てて頭を引っ込め、狙いも定めずに闇雲に教団員たちの方へ向けて発砲した。

パンッ！パンッ！

「ぐわっ！」

叫び声がした。

偶然当たったのか？

「ひょう！」

その隙について、十次は一気にジャンプし、通路の出口付近に固まっている教団員たちのご真ん中へ着地した。

「うわっ！何だこのやろう！」

教団員たちは混乱している。

「ありやあああああ！」

顔面、脇腹、足払いの上中下段と攻撃に変化を加えて、5人あまりをあつという間に倒してしまった。

パンッ！ ビシッ！

さらに通路の奥から教団員たちが発砲してくる。

「ひょっ！」

十次はまた受付カウンターの陰へ身を隠した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

震動はますます強くなる。

『も、ものすごい数の虫だよ……アタシの力じゃ5分保^もたせられるかどうか……アンタたち早く脱出してくれ！』

えっちゃんが天井から頭だけを出して叫ぶ。

5分以内って……

チュイン！ ビシッ！

教団員たちからはひっきりなしに銃撃を受ける。とてもじゃないが強行突破して出口まで行ける状態ではない。

「八前さん……どうしましょう……」

パンッ！ パンッ！

美鈴ちゃんが泣きそうな顔で聞く。その間にもおれは威嚇^{いかく}射撃をする。

どうする？

こうなったらおれが囨^{おとり}になって……

「だめですよ、旦那。」

十次がいつの間にか隣りのカウンターに来ていた。

「さっき言ったじゃないですか。旦那には旦那の『役割』があるって。ここでの旦那の役割は美鈴ちゃんを無事逃がして、教団員から聞いた大事な情報を瑛士さんに伝えることです。」

「し、しかし、この状況で脱出するのは……」

「わかっておりやす。」

おれの言葉は十次の強い口調^{くちう}で遮^{さへぎ}られた。

「あっしがアイツらを引きつけます。その隙に旦那と美鈴ちゃんは逃げてください。……短い間でしたが世話になりました。必ずこの

世を救ってください。」

そういう放つや否や、十次はカウンターを飛び越え、教団員たちの真っ只中へ再び突っ込んで行った。

「御影十次、一世一代の大暴れ！てめえら受けて立てい！！」
「うわあああああ！」

十次は一人でさらに増えた教団員10人以上と渡り合っている。

「くっ、美鈴ちゃん！行こう！」

おれは美鈴ちゃんを連れ立ってカウンターを飛び越え、出口へ向かって走り出す。

シュン！

チュイン！

銃弾が掠めるが、十次がその都度射撃者を打ちのめすので当たる心配はない。

おれは美鈴ちゃんを庇いながら出口に向けて走った。

——その時、

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

武蔵野署全体が鳴動した。

振り向くと先程下りて来た階段の出口にオレンジ色の巨大な“瘤”ができていた。瘤の中には無数の黒い虫たちが蠢いている。オレンジ色の膜に見えるモノはえっちゃんだ！

「まずい！美鈴ちゃん！急げ！！」

おれは美鈴ちゃんを庇いながら、出口の扉を押し開けた。その瞬間、十次が銃撃を受け、床に仰向けに倒れるのが目に入った。

「十次いいい！」

「八前さん！早く！」

美鈴ちゃんに言われ、込み上げるものを感じながら、おれは外に飛び出した。十次の姿は重なり合って倒れ込む教団員たちに遮られ、見えなくなってしまった。

ハア、ハア、ハア……

十次……すまない……おれが頼りないばかりに……

「や、八前さん……あれ……」

おれが落ち込んでいると、美鈴ちゃんが怯えた声おびで署の中を指差す。

見ると階段から溢れた虫の黒い津波が一階のフロアを埋め尽くし、こちらに押し寄せてくる。

「美鈴ちゃん！車は無理だ！走って逃げよう！」

十次のタクシーが停めてある駐車場には行き着けそうもなかった
ので、おれたちは真っ直ぐ署の前の通りに向かって走り出した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

地面から震動がつつたわってきて、さらに強くなる。

ゴゴゴゴ……

一瞬静かになると……

ドガン！

大音響と共に、武蔵野署のあらゆる窓から虫が外に溢れ出した。それはまるで武蔵野署が黒く爆発したようだった。

「うわあああああ！」

「ぎゃあああああ！」

溢れ出た虫の洪水は怒濤どとうのように押し寄せてくる。おれと美鈴ちゃんは通りに走り出た。

「先輩！こっちです！」

少し先の路肩に真っ赤なフェラーリが停まっている。呼び掛ける声の主は後部座席から顔を出している。……御手洗だ！

「早く！」

美鈴ちゃんは助手席に乗り、おれは後部座席に飛び込んだ。

キキキキキキ！

タイヤを鳴らし、後部をふらつかせながらフェラーリは急発進した。

後ろを見ると黒い津波が迫ってくる。

ドドドドドドド……

ブアーアーンン！

フェラーリはさらに加速し、黒い津波を引き離していった。

「ふう……御手洗、助かったよ。それに……」

おれが運転席に話し掛けると運転手は振り向かずに明るいい声で応える。

「はじめまして。曾根崎慎太郎です。吉崎さんは2回目だね……つて吉崎さん、どうしたの？」

美鈴ちゃんは声を殺して泣いていた。

「ヒッ……ヒック……ヒック……と、十次さんが……アタシ……また救えなかった……」

車内に重苦しい空気が流れる。

十次……えっちゃん……この犠牲はあまりにも大き過ぎる……

「十次……えっちゃん……」

おれも溢^{あふ}れるものを抑えることはできなかった。

「えっちゃん？先輩、えっちゃんならここにいますよ。」
「なに？」

見ると後部座席のさらに後ろに、小さいながらも一人分程度のサイドシートがあり、生身のえっちゃんが眠っていた。

遙か遠くからパトカーや救急車の音が迫ってくる。ようやく本庁が異変に気付いたらしい。

東の空には明け始めの白々とした光が広がりつつある。

おれたちを乗せたフェラーリは池袋へと向かう。

そこには仲間がいて、『敵』がいた。

第12章 藤原悠姫 I

ウ———……ウ———……

真夜中の東京に不気味な警報が鳴り響く。

1945年3月10日 午前0時8分 連合軍による史上空前の大空襲がここトウキョウで始まった。

ガガン！ ドガン！

軍事施設を狙う通常の空襲と違い、完全破壊、完全虐殺を目的とした高密度な絨毯爆撃。

ヒュウウウ……ドガン！

犠牲になっていくのは民間人ばかりである。

ドーン！

「きゃあああ！」

「わあああ！」

「助けてくれえ！」

「だれか！うちの子見ませんでしたか！？……みっちゃん！……みっちゃん！……」

そんな地獄絵図の中、防空頭巾を被り逃げ惑う人々の中にその家族はいた。

父親らしき年配の男性。威厳のある顔には髭を蓄えており、その髭は白髪になっている。

母親らしき年配の女性。煤すすで汚れてはいるが、上品な顔立ちをしている。年配ではあるが、若く見えるのはいいところの出で、あまり苦勞をしていなかった現れであろう。

そして、その母親の腕に抱かれている生後間もない乳児……それが藤原大悟ふじわら だいごであった。

一面焼け野原になった東京で大悟の父、藤原庄三郎ふじらわ しょうざぶろうは必死に復興ふっくに努めた。

廃藩置県はいはんちけんによって行政の通信システムが全国的に整備される中、早くに無線通信業務に取り組んできた『藤原通 通信株式会社』は、庄三郎の代になり、戦後混乱した世の中で確実に需要を伸ばしていた。

藤原庄三郎の特筆すべき点は、この時点で衛星通信システムを構想していた点である。月のように地球の周りを回る人工の衛星を打ち上げ、それを通信に使う理論をすでに確立しつつあったのである。足りなかったのは、『資金』と『技術力』である。

戦後復興期に全国通信網を整備する中で利益を上げ、いち早く欧米のIT企業と提携し、技術力を吸収し、日本初の気象観測衛星『ひまわり』と時を同じくして通信衛星『はるか』を打ち上げ、地球軌道上に乗せることに成功した。

その時庄三郎は77歳の喜寿を迎えていた。

『藤原通通信株式会社』はバブル期に絶頂を迎える。

庄三郎の『国民の豊かさは余暇よかから』の方針のもと、個人用端末、つまりパーソナルコンピュータ（パソコン）と家庭用ゲーム機のハード・ソフト両面の製造・販売に業務内容をシフトし、民営化を見越して利益の伸びない通信業務ていしんからも手を引くことによって、さら

に業績を上げ続けた。

社名も頭文字を合わせて『FTC』とし、日本のIT業界をリードし続けた。

そんな絶頂期の1985年の冬、庄三郎が脳梗塞^{のうこうそく}で倒れた。その時庄三郎は85歳であった。

一命は取り留め^とたものの、第一線で戦うのは無理と判断した庄三郎は、社長に、副社長でもある息子の太悟を就任させる。これが『FTC』にとっては致命的な出来事になる。

太悟はこの時40歳で、未だ独身であったのだが、それには理由があった。太悟はサディストであり、ロリータコンプレックスだったのである。

日本の誇る大企業である『FTC』の社長が、『変態で結婚できない』という風評被害^{ふうひょうがい}を避ける^さために、太悟は無理矢理結婚させられる。相手は、華族出身^{かぞく}の母親のつてで、業界二番手の会社『ポニー』の社長令嬢があてがわれた。

1986年6月、盛大に結婚式が帝国ホテルにて執り行われた。太悟41歳、妻の佳代子は37歳であった。

佳代子は美しい女性とは言い難く、太悟は不自由はさせなかったものの、夫婦の営みは一切なかったという。それなのに佳代子はその年妊娠した。

翌年、佳代子は女の子を出産したが、高齢出産が祟^{たた}り命を落とした。そのため、父親が誰なのかは不明のままであり、公式的に父親は太悟である。

女の子には『悠姫^{ゆうぎ}』と名付けられ、藤原家の乳母^{うは}が悠姫を育てることになる。母親の愛情がなく育った悠姫は、それでもすすくすく育っていた。

子どもが生まれ、家庭的にも充実したはずなのだが、『FTC』の業績は目に見えて衰えていった。大悟の経営者としての才覚は無に等しかったからである。周りには当たり散らし、浪費癖もあった。意見を述べる幹部もいたが、みな切り捨てられ、次第に意見を言う者は誰もいなくなった。

経営は悪化していったが、庄三郎時代からの叩き上げの社員はまだまだ多数残っており、業務内容をインターネットプロバイダ業務やゲームソフト開発に縮小することによって、何とかやっていけるようになっていた。

社名も『FTC』から『Dyson』に変え、新規一転立て直すことになった。

『Dyson』は会社のパトロンであるアメリカ人の名前から取られたと言われているが、社長が『尊大』そんだいなため、『尊大』を逆にして皮肉ひにくってつけられたとも言われている。

優秀なブレインにも助けられ、業界では5本指に辛うじて入る業績を維持できるようになったのは、90年代に入ってからである。悠姫は素直で優しい子どもに育っていた。

父親は家庭を顧みず、母親もいないことで愛情に飢えていたが、1995年秋、9歳の誕生日を迎えた夜、悠姫は父親の歪ゆがんだ愛情を知ることとなる。



.....

『……さん。』

……ん？

『……きたさん。』

……んっ？

『崎田さん。』

誰かが呼んでいる。

目を開けると女子高生が立っている。

なぜ女子高生とわかるかというと、制服を着ているからだ。

……納得。

……って、なぜだ！？

俺は勢いよく布団をはねのける。

ここはホテルの俺の部屋で、俺一人で寝ていたはずだ！制服姿の女子高生がいるはずがない！……それとも俺はやっちゃまった、いや、やっちゃったのか！？

『崎田さん……お休みのところすみません。』

「わあ！やってない！いや！やってない！俺は何にもやってないぞ！」

『崎田さん、驚かせてすみません。でも時間がないんです。大切なことをお知らせに来ました。』

「へっ!?!……君は……だれ?」

『わたしは佐伯 瞳。【Si on】メンバー……でした。』

「『Si on』メンバー!?!」

『今は違います。それより大切なことをお伝えしますのでよく聞いてください。』

俺は頷く。
うなずく

『諫早江津子さんは【Si on】内に囚とらわれています。』

「『えっちゃん』か!?!」

『今は無理ですが、チャンスを見てお救いしたいのです。』

「うん、うん。」

『しかし、その前にあなた方の【計画】が成功してしまうと諫早さんは死ぬことになります。』

そうか……『Si on』と現世の繋つながりだが、えっちゃんの精神と肉体の繋がりがってわけか……

「でも、チャンスを待ってる間に俺たちが悠姫に殺されちゃうよ。」

『はい。ですからチャンスを作っていただけなのです。』

「どういうこと？」

『【死怨教団】を攻撃してください。そうすれば【メンバー】の意識がそちらに向きます。』

「なるほど。でも、それには問題が2つあるんだよね……1つは、俺たちは教団本部の場所を知らない。2つめは、『怨虫』……俊夫に襲われたら俺たちに防ぐ手立てがないんだ……えっちゃん以外には。」

佐伯は微笑んだ。

……怨霊が微笑むのか……？

『教団本部は【(株)ポニー】の東京支社が所有するビルにあります。表向きは

【ポニーエンターテイメント】という企画会社です。場所は新宿です。2つめは心配いりません。俊夫はわたしが何とかします。』

「何とかって……何とかできるの？」

『俊夫は……佐伯俊夫……わたしの弟です。』

佐伯は先ほどとは違い、悲しそうに微笑む。

弟……姉弟で『Sion』のメンバーになっていたのか……

俺は佐伯姉弟の境遇を思い、絶句した。

『それにもう一つ……【怨体】の制限時間は15分です。きっと新堂さんが知りたがっていたでしょう？』

「ハハッ、確かに。教えてくれてありがとう。でもこんなこととして大丈夫なの？悠姫にバレたら……」

『……御手洗さんと新堂さんを助けたことでわたしは【メンバー】を外されました。ただ悠姫は知らないのです。現時点ではわたしも【柵】を開けられるということを……』

「『柵』？どういうこと？」

佐伯の姿が薄れた。

『いずれわかります。諫早さんと【現世】を救ってください……【しおん】……』

佐伯は消えてしまった。

謎は多く残ったが、新たにわかったこともある。とりあえず店長に貸し切りの予約の変更をしなくっちゃ。

時計を見ると、午後3時を回ったところだ。



午後4時、俺たちは瑛士が借りてくれたホテルの会議室で作戦会議をすることになっていた。今朝、明け方に美鈴たちが帰ってきて、武蔵野署であったことを話してくれた。

テーブルについているのは、瑛士、俺、美鈴、八前さん、曾根崎

さん、御手洗さん、遅れて来た樺島店長の7人。ここにいるべき十次さんと今も眠り続けている『えっちゃん』こと諫早江津子さんはいない。

「みんなそろったみたいだな。じゃ始めようか。」

瑛士が口火を切る。

「ちょっと待ってくれ。会議の前にみんなに話があるんだ。」

俺は先程部屋であったことをみんなに話した。みな驚愕きょうがくしていたが、御手洗さんは自分も一度経験しているだけあって驚かなかった。ただし、えっちゃんが『S i o n』に囚われているということに関しては動揺していた。

瑛士は俺が話し終わってもしばらく黙って何か考えていた。そしておもむろに口を開いた。

「作戦は変更せざるを得ない。」

瑛士は全ての情報をまとめ、分析した結果、作戦は変更するとの結論を出した。

「オレは間違ってた。瑞希の言ってた『功罪』とは自分の『昇格』ではなく、悠姫の『死怨』への『昇格』だった。悠姫への『功罪』だったんだ。」

瑛士は言葉を続ける。

「悠姫の狙いは『あの世』（黄泉）と『この世』（現世）をつなぐことだった。そしてそれができる存在……『死怨』になるために大

量の人の魂が必要だった。つまり『Si on』メンバーは回収係だった。実行部隊は死者たち……今まで死んだ人たちだ。」

「今まで死んだ人たちって……いったい何人いるんだ……？」

人類の歴史が始まってから今まで亡くなった人の数など想像もつかない。何億？ 何十億？ アウストラ・ロピテクスや北京原人も蘇よみがえるのかな？ いかりや長介もヒトラーも？

俺があまりのスケールの大きな想像にボーンとしていると、瑛士の言葉が頭に割り込んできた。

「死んだ人間全てではないだろう。恨みなどのこの世に未練みれんのある死者……亡者が蘇るんだ。」

「どうしてそう言い切れるんだ？」

俺には瑛士の断定的な推理の根拠がわからない。

「だって『死怨』だぞ。」

瑛士はなぜ当たり前のことを聞くのか、といった顔だ。

「『死怨』という単語はこの世にはない。どんな辞書にも載っていない。これは『造語ぞうご』か『略語りゃくご』だ。つまり『“死”者の“怨”念』もしくは『“怨”念のある“死”者』……『死怨』だ。」

「『死者の怨念』……『怨念のある死者』……」

曾根崎さんの顔色が白くなっている。

きっとゾンビか何かを想像してるんだな。

悠姫の目的ははっきりした。問題はこれからどうやって阻止するかだ。

『抵抗する者』として。

「悠姫の野望を阻止するためには諫早さん……『えっちゃん』の力は絶対に必要だろう。」

直接見たわけではないが、美鈴や八前さんの話が本当ならば、絶対味方になってほしい人だ。

「また、これはたぶん間違いないが、ヤツらはネットを通じて『本物』が移動することはできない。つまり、『オアシス』におびき出す作戦は無意味だ。」

佐伯に聞いてみたかったことの一つだ。

確かにこれまで『本物』が現れなくてはならない場面で現れていない。何か事情があったにせよ、あまりにも不自然だ。そう考えるのが自然かもな。

「以上を踏まえた上で、作戦を立て直す。」

ゴクッ！

俺は何か役に立てるかな……？

「まずは、『死怨教団』に攻撃を仕掛ける。」

「えっちゃんを助けるんだな。」

八前さんが確認する。

「教団を攻撃する理由は2つあります。」

瑛士は八前さんを見ながら全員に語りかける。

「一つは晃の話から、佐伯 瞳に諫早さん……『えっちゃん』を助け出してもらうため。」

それはわかる。もう一つは……？

「もう一つの理由は『ファイアウォール』攻略のためだ。」
「『ファイアウォール』？」

美鈴の目が点になっている。

「美鈴は頭いいのに、コンピュータ関係の知識は全然ダメだな。」

俺が言うと美鈴はぷーっとほったを膨らませた。

……よかった。少し休んで元気が出てきたみたいだな。帰って来た時はずうっと泣いてたもんな……

「吉崎さん、『ファイアウォール』って言うのは直訳すると『防火壁^{へき}』だけど、コンピュータウイルスを火事に例えているんだよ。」

曾根崎さんが説明すると美鈴は目を輝かせる。

「なるほどお！つまりウイルス感染を防ぐセキュリティプログラムってことですね。」

美鈴ってホント理解早いよな……

「『Dyson』の『ホストコンピュータ』には『ファイアウォール』が三重に掛けてある。しかもその制御システムは『Dyson』

にはなかった。」

瑛士の言わんとすることがわかった気がする。

「そうか！その制御システムのあるのが……」

「『ポニーエンターテイメント』か！」

俺の言葉を引き継いで八前さんが話す。

いいところ持ってくれた！

「……聞いたことがあります。『ポニー』とは昔何らかの繋がり^{つな}があつて、業務提携以外の付き合いがあるらしいって……」

社員の曾根崎さんにも秘密の関係って何だろうか？

「ということは、俺たちのやるべきことも2つに絞^{しぼ}られるな。『制御システム』を破壊、もしくは解除すること。もう一つは派手に暴れること。」

俺が言う^{うなず}と瑛士は頷く。

「そうだ。『ポニーエンターテイメント』の見取り図はもう手に入れている。……これだ。」

瑛士はテーブルの上に見取り図を広げる。

「瑛士、こんなものどうやって手に入れたんだ？」

俺が聞くと瑛士は無邪気に笑う。

「清掃会社の端末にハッキングした。」

「ははっ、なるほど！直接はガードが固いが、清掃会社のセキュリティならアクセスしやすいよな！」

俺は改めて瑛士が敵でなくてよかったと思う。

瑛士は見取り図の説明を始めた。

「『ポニーエンターテイメント』は地上3階、地下2階の五層構造になっている。地上部分は主に通常業務を取り扱うごく普通の中小企業だ。しかし地下部分は、地下1階が『死怨教団』の本部で、地下2階が『ファイアウォール』制御室のあるフロアだ。」

「地下か……たいへんだな……」

八前さんが呟く。

「2つの目的を同時に達成させるには、“制御システム”を爆破するのが一番だ。」

瑛士ってクールに見えるけどやっぱり過激だな。

「そんなことが見つからずにできるのか？」

御手洗さんが聞くと瑛士の表情は曇る。

「……見つかったら『えっちゃん』救出を最優先にします。彼女がいれば『制御システム』の解除は容易にできると思うので。」

「瑛士、それって見つかったらなるべく派手に暴れろってことか？」

「……そうなる。」

「教団員は拳銃を持ってた……見つかったらまず殺されるぞ。」

八前さんが言うのと会議室には重苦しい空気が流れた。

確かに悠姫の野望を阻止しなければ人類は滅亡してしまうだろう。だからといって、ここにいる人たちの誰かが死ぬのだって絶対に阻止したい。もう誰かが犠牲になるのは見たくない。

「……瑛士……この仕事、俺にやらせてもらえないか？」

「晃……」

美鈴が息を飲むのがわかる。

「そんなのダメよ！晃はただの大学生よ！十次さんみたいに戦いのプロじゃないし、えっちゃんみたいに霊能力もないし……」

「美鈴……二人とも今はいないんだよ……俺たちでやらなくちゃならないんだ。」

「……そうだな。崎田くん、私もいつしよに行こう。」

「御手洗さん……ありがとうございます。」

「じゃ、アタシも……」

「美鈴は来るな！……お前は……足手まといなんだよ……」

「崎田くん！」

八前さんが真っ青になり、立ち上がる。

「美鈴ちゃんは立派に役に立つぞ！武蔵野署では『怨体』も倒した！」

「晃……ひどい！もういいわよ！」

美鈴はバンツとテーブルを叩くと、会議室から出て行ってしまった。

「崎田くん！どうしたんだ！？崎田くんらしくないぞ！」

八前さんはかなり怒っている。
当たり前だよな。

「崎田……エゴだよそれは。」

瑛士には全てお見通しのようだ。

「お前が失敗して死んでも、えっちゃんに戻る。そうすれば『Dyson』を攻略できる。美鈴ちゃんには生き残ってもらいたいんだろ？」

俺は肯定も否定もしなかった。ただ、決心が揺らがないのはみんなわかったようだ。

「くぅぅ！泣けるわねえ、晃ちゃん！この仕事、アタシも参加させてもらおうよ。ええ、止めても無駄よ！」

樺島店長も立ち上がる。

「……樺島さんにはもともとお願いするつもりでした。地上でヤツらの注意を引くには、樺島さんが適任です。」

ガクッ！

店長はズッコケている。

「なによ……ちょっとくらい止めてくれたっていいじゃないのよ……ブツブツ」

店長はまだブツブツ言っていたが、全員スルーした。

瑛士と曾根崎さんは絶対にダメだ。『Dyson』攻略には絶対必要だからだ。

八前さんは怪我人だから無理はさせられない。そうすると、確かに俺と御手洗さんと樺島店長、美鈴が残ることになる。

美鈴にはもう危険な目に遭わせたくない。これは確かに瑛士の言う通り俺のエゴだ。でも、命を懸けて世の中を救うんだから、ちょっとくらいのエゴは許してもらえないかな？

好きな子には生きて幸せになってほしい。瑛士……俺のわがままを受け入れてくれてありがとうな。

照れ臭くて言葉にはできないけど、瑛士には伝わっているような気がした。

作戦開始は夜10時。俺たちはその後作戦の細部の検討に移った。



午後7時……作戦開始まであと3時間。俺はホテルの最上階にある水族館にいた。

入口を入ると目の前には熱帯魚の水槽が広がっている。碧く、淡く光る水槽の間を歩くと、まるで南の海に迷い込んでしまったような錯覚に陥る。グッピー、エンゼルフィッシュ、カクレクマノミ……名前を知っている魚たちだけでも数百匹はいるだろう。

小型の熱帯魚ブースを抜けると大型の魚たちのいる大水槽が現れる。中にはカツオやエイ、海亀たちが人工の潮の流れに身を任せて

悠然と回遊している。厚さ数cmの強化ガラスにも関わらず、水槽からは淡い青光が、くすんだりノリウムの床に魚たちの影を揺らめかせている。

大水槽の淡い光を浴びながらゆっくりと歩いて行くと美鈴が立っていた。手を水槽に当て、じっと青い世界を見つめている。俺は美鈴の隣りに静かに寄り添い、揺らめく光を映し出す大きな目に見入っていた。

手を加えていない、長く、ナチュラルなカーブを描く睫毛には青い涙の滴がアクアマリンのように光り、今まで泣いていたことが一目でわかる。

「ここ……一度来てみたかったのよね……」

美鈴は横切っていくアイナメを目で追いながら呟く。

「美鈴……ゴメン。」

俺がそう言うと美鈴は目を伏せる。

「十次さんは言ってたわ。……人には『役割』があるって……アタシの『役割』ってなんだろう……」

美鈴は清水さんのことを考えているのだろうか。

「……俺にはわからない。でも、これだけは言える。美鈴は絶対に死んじゃいけないんだ。」

美鈴は顔を上げ、俺の顔を見つめる。

「あなたは……晃は死んでもいいの？」

美鈴の大きな目に魚たちの銀色のきらめきが映し出される。

「俺は……俺は死なない。俺の『役割』はここで死ぬことじゃない。」

美鈴の右手が俺の左腕にそっと触れる。

ひんやりとした掌てのひらの感触が今はとても心地よい。

「だったら……逃げて。……無理することないじゃない。『制御システム』ならえっちゃんが何とかしてくれるんでしょ？『メンバー』の気を逸そらせばそれでいいんでしょ？」

俺は美鈴の手を握る。俺の体温が美鈴の手を温めていく。

「美鈴なら気付いてるだろ？それは瑛士が気を遣つかってくれたんだ。……仮にえっちゃんが復活しても、『制御システム』を破壊することができるとは限らない。高性能なコンピュータシステムは簡単な構造の拳銃とは訳わけが違うんだ。しかも『ポニーエンターテイメント』の地下は核シェルターになっている。えっちゃんがすり抜けられるとは思えない。」

俺は一言一言噛み締めるように話した。

「……ケーブルは？電話線を遮断して、『Dyson』とのネットワークを切っちゃえばいいでしょ？」

そのことは俺がすでに瑛士に聞いていた。

「……それも無理だ。『制御システム』は衛星経由でも繋がってるみたいだ。ケーブルを切断した時点でセキュリティは変更・強化される。それに……その方法は爆破するより被害は大きい……だろ？」

今の世の中はネットワーク社会だ。一つのビルの爆破よりも、一本のケーブルを切断する被害の方が大きいことは美鈴でもよくわかるだろう。

美鈴は手を離し、後ろを向いた。その肩が小さく震えている。抱き締めたかったが、俺にはできなかった。そうすることは、お別れを決定的なものにしてしまう気がしたから。

「美鈴は待っていてくれ……俺は絶対に戻ってくる。必ず。」
「……約束よ。」

美鈴は後ろを向いたまま、左手を差し出した。俺は小指を美鈴の小指に絡からませる。

「……約束する。」

周りではカップルが身を寄せ合いながら楽しそうに通り過ぎて行く。隣りの水槽では畳たたみ二畳分ほどの大きなマンボウが俺たちを見ていた。

マンボウは口をパクパクさせ、まるで「があゝんばあゝれよお」と言っているようだった。

そう言うと美鈴は笑った。それは武蔵野署から帰って来て初めて見せる、美鈴らしい笑顔だった。



午後9時、俺と御手洗さん、樺島店長は新宿に向けて出発した。車は『ポニーエンターテイメント』出入りの清掃会社から借り受けた。どうして借りることができたのか瑛士は言いたがらなかったが、俺にはわかる。瑛士はきつと父親の手を借りたんだと思う。

御手洗さんでは足がクラッチに届かないので、運転は樺島店長がしている。荷台には大型の清掃コンテナが積んであり、中にはダイナマイトと『武器』が入っている。

『武器』と言っても、人間相手の武器ではない。対怨体用の武器『銘鉄丸』だ。……つと言ってもただのバットなのだが。

命名者は美鈴だ。

『バットはボールを打つ道具で、殴るために使うものじゃないわ！だからこれはバットじゃなくてアタシたちの武器【銘鉄丸】よ！』

ただし、『干渉波スタンガン』と同じ効果が得られるように、瑛士が徹夜で改造してくれた。

八前さんの持ってきた『電磁警棒』は怨体にダメージを与えるだけだったが、『銘鉄丸』は触れた瞬間、怨体を完全に消し去ることができる。『怨虫』以外なら、怖いものなしだ。

それを一人1本ずつ。

怨体はそれでいいとして、問題は教団員だ。怨霊より人間の方が厄介だ。

御手洗さんと八前さんの拳銃2丁と弾丸200発、各自『電磁警棒』を1本ずつ持っている。これで何とかなればいいが……見つからないことを祈るしかないな……

……午後9時30分過ぎには『ポニーエンターテイメント』の前に着いた。決行まで30分弱、午後10時には、いつも清掃が入るらしい。清掃会社には話がついているので、『本物』が来る心配はない。俺はPHSで瑛士に連絡をとった。

「……瑛士、所定の位置についた。そっちの準備はどうだ？」

瑛士たちは当初の予定通り『オアシス』にいる。おびき寄せる作戦は白紙に戻ったが、『ホストコンピュータ』にウイルス感染させる作戦は続行中だ。所在がバレて怨体に襲われても、迎え撃つのにホテルよりはいいだろうという瑛士の判断だ。

『こっちもOKだ。』

瑛士によると、もし作戦が成功して『制御システム』を破壊できても、ウイルス感染させられるチャンスはその後1〜2時間以内だろうということだ。すぐに復旧してしまうからだ。さらにウイルス作戦がうまくいっても、『Dyson』攻略は24時間以内に行なわなければならない。つまり、時間との戦いでもある。

瑛士との連絡を切ったあと、美鈴にかけた。

「……美鈴？ 今から始まるよ。そっちもがんばれよ。」

『……晃。生きて帰って来てね。』

俺は親指を立てた。

「楽勝！」

『ふふっ！ そうね。晃はいつだって【楽勝】だったよね。高校の時から……』

「えっ？」

『ううん、ゴメン何でもない！がんばってね！晃！』

通話は切れた。

ううん、気になるけど今は『死怨教団』と『制御システム』破壊に集中しよう。

午後10時……作戦が開始された。時間が時間なのでビルには人氣が全くない。真っ暗な窓の向こうに、いつほの白く怨霊の影が映るかドキドキする。

俺たちは『ポニーエンターテイメント』の裏手の駐車場に車を停め、社員通用口に向かう。

最初の関門は守衛だ。最近のセキュリティは機械警備が増えてきているが、『ポニーエンターテイメント』は昼夜交替で守衛がいる。明らかに教団員であろう。

ここでバテてしまったら、何もできない。樺島店長はオカマ言葉で怪しまれるので、御手洗さんが先輩社員、俺が見習いの新入社員という設定で、交渉はもっぱら御手洗さんが行うことになっている。

とにかく、爆薬を仕掛けるまでは派手に戦うことはできない。瑛士には、即効性の麻酔銃と麻酔弾10発をもらっている。

「こんばんは、いつもお世話になっています。『サテライトクリーン』です。」

守衛は1人だ。守衛室の奥には監視カメラからの映像が映っているテレビがたくさん並んでいる。

「……ああ、ご苦労さん。……今日は1人多いな？」

20代後半くらいの警備員が俺に視線を送る。

「ああ、こいつやっと研修が終わって今日から現場での研修になったんですよ。ほれ、挨拶しろ！」

「お、お願いします。」

俺は気の弱い新入社員をイメージして挨拶した。俺こんなばっかだな……

「ああ、しつかりな。」

警備員が後ろを向いた瞬間、御手洗さんは麻醉銃を撃つ。

ビシュ！

サイレンサーを取り付けているのでほとんど音はしない。

「うっ！……ううう……」

そのままだらんと背もたれにもたれかかった警備員を、俺と店長とで縛り、守衛室の奥にある休憩室のような部屋に寝かせた。

『なるべく死人が出ないようにしたい。』

瑛士が昼間会議室で言っていた。その方針には八前さんを始め、みんな満場一致で賛成した。しかし、どこまでその方針を守れるかはわからない。自分の命だって危険に晒^{さら}されているからだ。

俺たちはエレベーターホールに向かった。幸い誰にも遭わなかった。

エレベーターが着き、中に乗り込む。『B2』を押し扉が閉まる。第二関門は、『制御システム』の部屋に侵入するまでだ。

御手洗さんと樺島店長は麻醉銃を懷に隠している。俺は爆薬と『銘鉄丸』の入ったコンテナを押す役だ。相手が撃ってきたら、このコンテナが盾になる。

……ウウーン……ゴウン！

エレベーターが止まった。いよいよだ！

扉が開くと薄暗い廊下が真っ直ぐ伸びている。会議室で確認した見取り図の通りだ。『制御システム』のある『コンピュータールーム』は突き当たりを右に曲って、左側奥から2番目にある。ところどころに設置してある監視カメラの赤いランプが気になる。

あれは守衛室だけに繋がっているのか？もし、一つ上の『教団本部』に繋がっていたら？不安要素はいくらでも出てくる。

実は待ち伏せされてたら？

実は『本物』が移動できたら？

爆薬が爆発しなかったら？

コツコツと廊下に3人の足音だけが響く。あまりにも静かだ。

突き当たりに着いた。右に行くと『コンピュータールーム』。左に行けば階段がある。途中の部屋には、『資料室』『電源室』『研究室』などがある。

そしてここでも、誰にも遭うことなく『コンピュータールーム』のプレートのついたドアの前に着いた。

「ここか……」

御手洗さんが眩く。そしてドアノブに手をかけると鍵が掛かっていた。『コンピュータールーム』のドアは鉄製の重そうなドアだ。鍵は普通の鍵ではなく、テンキーの並ぶ番号入力式のやつだ。上に赤い小さなランプが点いている。暗証番号は一週間ごとに変えられる。俺は瑛士に聞いていた番号を入力した。

「400310……っと。」

ピー……

赤いランプが緑に変わり、鍵が解除されたことがわかる。

ガチャ……

金属製の冷たいドアノブを回すと、今度はドアが開いた。中には何やらいろいろな計器類の並んだ机があり、前は壁ではなく代わりに水槽のような大きなガラスになっている。ガラスの向こうには、薄いグリーンの、金属でできたタンスのようなものが何台も規則正しく並んでいた。

「これが『制御システム』ですね……」

俺は御手洗さんに眩く。

「ああ、そのようだ。……さっさとダイナマイトを仕掛けよう。長居は無用だ。」

コンテナは大き過ぎて部屋の中には入らないので、ダイナマイトだけ持ってきていた。

瑛士の作った起爆装置は時限式にもリモコン式にもどちらでもで

きるようになっていた。シェルターになっているこの地下では電波は届かないだろうということで時限式にした。

時限式のデメリットは、セットしたら制限時間内に脱出しないと、爆発に巻き込まれてしまうということだ。

『制御システム』のある部屋のドアを開けると、ブーーンという低い音が、軽い震動と共に聞こえてきた。

御手洗さんがダイナマイトをコンピュータの下に並べ、樺島店長が起爆装置をセットしていく。俺の仕事はセッティングが終わったら起爆時間をセットすることだ。御手洗さんとはとくに並べ終わったのに、樺島店長はまだ半分も終わっていない。

「店長！急いで！」

俺は今にも見つかるんじゃないかと焦っていた。

「わかってるわよ、うるさいわね！」

樺島店長は、ホテルで練習した時にはかなり手際がよかった。

『遅いわねえ、オカマ掘っちゃうわよ！』

なんてこと半分マジで言って、御手洗さんをイラッとさせてたのに。

結局練習時より倍近い時間を掛けて起爆装置のセットが終わった。

「ふう、終わったわよ。晃ちゃん、後はアンタの仕事よ。」

俺は時間のセッティングに取り掛かった。爆破時刻は午前0時3

0分。今から約1時間後だ。

「……これでよし、っと。」

全ての時限装置をセットし終わった時には、残り時間はあと50分ほどになっていた。

「これだけ時間があれば間違いなく脱出できるだろう。」

御手洗さんはそういつてニヤリと笑う。

「さあ、あとは守衛を逃がして、入口でこいつをぶっ放そう。」

ダイナマイトは残り2本。出口で爆発させて『死怨教団』の注意を引き付け、佐伯 瞳にえっちゃんを救出してもらう。その隙に時間が来て『制御システム』は破壊されるというわけだ。

……今までは順調に進んでいる。きっと上手くいく。俺は少し樂觀的に考えていた。

『コンピュータルーム』を出て、さっき来た通路を戻ろうとし時、寒気がした。

「何、これ？……冷房が入るには少し早いんじゃないか？」

樺島店長がそう言った時、角から白い影が現われた。『怨体』だ！

「くっくくく……にげられないよ……」

アニメキャラクターのTシャツ……『剛』だ！

ダダダダダダ……

後ろから大勢の男たちが現われる。教団員だ！10人以上はいる！

「いたぞ！おい、お前ら！もう袋のネズミだぞ！」

「しまった……見つかったか……」

御手洗さんと樺島店長は拳銃をコンテナから取り出した。

パンッ！　パンッ！

御手洗さんが威嚇^{いかく}射撃をすると、教団員たちも撃ってくる。

パンッ！　パンッ！　ビシッ！　ギンッ！

「うわっ！」

壁やコンテナに着弾し、俺は慌ててコンテナの陰に隠れる。

銃撃を受けるなんて、普通の大学生には有り得ないことだ。俺は恐怖のあまり何もできない。

パンッ！　パパンッ！　パンッ！　パンッ！　ビシッ！　チュン！

御手洗さんと樺島店長は全くびびった様子もなく、応戦している。

「晃くん！『剛』が来る！『銘鉄丸』を！」

御手洗さんに言われ、はっとして『銘鉄丸』を握る。コンテナの横からそうっと覗き見ると、剛が真っ赤な目でこっちに走ってくる。

「はあゝはっはっはあゝゝ！無駄無駄無駄あゝ！」

剛がコンテナを乗り越えてきた！

「うわゝゝっ！」

俺は無我夢中で『銘鉄丸』を振り回した。

ガッツ！

剛が『銘鉄丸』を受け止める。

バチバチバチバチバチィ！

『銘鉄丸』を握った剛の左手から激しいスパークが起こったかと思ふと、剛の全身が青白く明滅する。そして、数秒の後には消滅してしまった。

「うほゝすごいわね、それ！晃ちゃんやるじゃないの！」

樺島店長は拳銃を撃ちながら喜んでいる。

「あいつら、やっぱり聖戦士さまを倒す武器を持ってやがる。あの女と同じだ！」

教団員が叫ぶのが聞こえる。『あの女』とはたぶん美鈴のことだろう。

そうだ。美鈴だってこういう修羅場をくぐり抜けてきたんだ。俺がびびってどうする！拳銃は怖いけど、『怨体』との戦いには慣れている。

「御手洗さん！店長！『怨体』は俺に任せてください！教団員は任せます！」

御手洗さんは頷く。うなず。店長は親指を立てる。

そうだ。死んでたまるか！

俺が気合いを入れ直すと急に銃撃が止んだ。

「？　どうしたんですか？」

コンテナに背中をつけている俺からは様子が見えない。

「……わからん。」

御手洗さんが答える。

「あんたたち！無駄な抵抗はやめな！」

突然若い女の声が出た。コンテナの陰から顔を出して教団員の方を見ると、ゴスロリ系の黒い服を着た若い女が立っている。

「教祖……『黒田玲花』だ。」

御手洗さんが呟く。ささや。

あれが八前さんが言っていた『死怨教団』の教祖か。確か明仁をいじめて殺された香取の彼女だったよな……っということは18才くらいのはずだ。しかし、ゴスロリとは……マニアックだ。

「あんたたちまさかこっちに来るとはね……裏をかかれたよ。あたしはてっきり直接悠姫様を倒しに来るもんだとばかり思ってたよ。」

」

なるほど。玲花たちは『Dyson』で罠を張っていたのか。

「お前たち、どうして私たちが侵入したのがわかったんだ？」

御手洗さんが聞くと、玲花はにやっと笑う。

「そのコンピュータ室はね。開けると自動的にダウンロードが始まるんだよ。『ポニーエンターテイメント』専属の『怨体』、『剛』様をね。」

さっきの剛はそれか！

「でも、そのバットはただのバットじゃなさそうだね。」

玲花は『銘鉄丸』を指して言う。

「でも人数はこっちの方が多いし、弾もいっぱいある。時間の問題だよ！」

玲花がそう言った時、玲花の背後に背の高い白い女性が現われた。
……悠姫だ！

『……あのおとこがない。』

瑛土のことか？

「おい！悠姫！お前たち『怨体』はもう俺たちに通用しないぞ！おとなしく成仏しろ！」

そう言うと、悠姫はまぶたのない目を俺に向けた。

『……なぜここがわかった？』

「俺たちの情報網をナメるな！」

『……なぜここににいる？あいつはここにいないのに。』

『あいつ』ってだれだ？

「悠姫さま。後はわたしたちにお任せください。まずはこいつらを皆殺しにします。」

玲花が悠姫を制するように言う。

「あのバットが厄介ですから、『孝』さまに来ていただいでいいですか？」

『……すきにしろ。』

「ありがとうございます！さあ、あんたたちもう終わりよぉー！」

『孝』って野口 孝か！？新潟の？『メンバー』になったのか？通路の奥から小学生くらいの陰気な男の子が現われる。

あいつが『孝』か！佐伯 瞳が『メンバー』から外れたことで『昇格』したのだったら『怨剥』なのか？

「黒田玲花！『孝』は『怨剥』なのか？」

「晃くん！」

御手洗さんが叫ぶ。すると玲花の顔色が変わる。

「お前ら……瞳さまが『メンバー』から外れたのをなぜ知っている

「……？」

しまった！余計な情報を敵に与えてしまった……
俺が黙っていると玲花は心得たとばかりににやつと笑う。

「……なるほどな。だからここに来られたのか。『あいつ』を助けていいのか？」

「『あいつ』って誰なんだ！？悠姫も言っていた。」

「あんたと違ってあたしは余計な情報を敵に与えたりしない。自分で考えるんだね。……まあ、『孝』さまのことは教えてやろう。『孝』さまは『怨憑』おんひょうさ。後は自分の目で確かめるんだね！」

玲花が言い放つと、『孝』が一気に近付いてきた。

「晃くん、今度は私が戦おう。」

御手洗さんが『銘鉄丸』を構え、『孝』にたいじ対峙する。

「ぼおくにはきいかなあいよお……」

妙に間延びした、緊張感のない話し方に余計不気味さが増す。

ブンッ！

御手洗さんの『銘鉄丸』は確かに当たったはずなのに、『孝』の身体はすり抜けてしまった。

『銘鉄丸』が効かない……

「おおわりいいだよお……」

『孝』の手が御手洗さんに伸びる。

「御手洗さん！」

俺と店長の絶叫が寒々《さむざむ》とした廊下に響いた。

第13章 野口 孝

……あれ？

……ここはどこだ？

確かぼくは山の中で自殺をしたはずなんだけど……

ぼくは地面に座っていた。草などの植物は一切生えていない見渡す限りの荒れ地だ。夜だったはずなのに、空は赤く染まっている。朝とも夕方とも違う。背中には固い、ゴツゴツとした感触……見ると形も大きさもバラバラな石垣にもたれている。高さはぼくの胸くらいで、たいして高くはない。

石垣の中には粗末な小屋がある。不思議なことに窓はなく、木製の扉があるだけだ。

ここは何なんだろう。ぼくは何をしていたんだろう。

……ああ、何も考え……られない……

しばらくそのままぼうっと立っていると、扉が開いて中からきれいな女の人が出てきた。女の人は何も言わず微笑ほほえんでいる。何だかわかんないけどその笑顔を見ていると安心する。女の人はいかに右手を顔の高さに挙げて、掌をぼくに見せるように近づいてきた。ぼくは自然に左手を女の人と同じように挙げる。

ぼくは女の人と手を合わせた。何となくそうしなきゃいけない気がした。

手を合わせた瞬間、ぼくの中でどす黒い思いが湧わき上がった。憎しみ……殺意……今まで感じたことのないような怒りに、ぼくは思わず呻うめく。

「ああ……」

声が言葉にならない！話そうとしても「あゝ」とか「うゝ」にし

かならない。それでも頭の中にはどんどん生前の記憶が蘇^{よみがえ}る。

工藤直樹…中山義久…菊地雅哉…田中太一…家族の顔…
『お兄ちゃん!』……

「ふふっ……あなた、いい素質をもってるわね。……チャンスをあ
げるわ……」

女の人は手を下ろす。すると、すうっと左の方へ歩いて行く。

石垣を回り込むようにして歩いていくと、これもまた粗末な作り
の木製の柵^{さく}があった。女の人は優雅^{ゆうが}な動作で柵を開けた。

ぼくは迷うことなく中に入る。石垣の中に入った途端^{とたん}、ちゃんと
言葉が出るのがわかった。

「あ、あの……あなたは誰ですか?それにここはどこですか?」

「ふふふっ……私は藤原悠姫。あなたの友達よ。」

「友達か。いい響きだな。ぼく、友達いなかったから……」

友達……

ともだち……

トモダチ……

……アイツらのぼくを見る顔。……毎日のいじめ……

「し、仕返ししたい!アイツらにも同じ苦しみを……いや、何倍も
の苦しみを!……」

「ふふふ……いいわよ。こっちへいらっしゃい。」

悠姫さんは小屋の中へ入って行く。ぼくもあとについて行った。
小屋の中は何もない、真っ白な空間だった。外から見ると小さい

小屋なのに、中は果てが見えないほど広い。

ぼくが見とれていると、悠姫さんが手招きてまねをした。

「……こっちょよ。」

悠姫さんは右の方へ歩いていく。ぼくは頷うなずいてあとについていった。

……どのくらい歩いただろう。しばらく歩くと、前に薄緑色のドアが見えてきた。悠姫さんは扉を開け、中に入って行った。ぼくも慌てて薄緑色の扉を開ける。

中はがらんとして何もない。広さは四畳半くらいの大きさで、天井も壁も薄緑色だ。

「そこに座って。」

悠姫さんが部屋の中央を指差す。ぼくは悠姫さんに言われた通り、部屋の中央に座る。

「この部屋は『現世』の人とネットを通じて会話することができるのよ。恨みを持っていくヤツにあなたがどれだけ憎んでいるか教えてあげなさい。」

『現世』にいるヤツ……そんなの決まっている。……『ヤツら』だ！

「そしたら私たちが『仕返し』しに行つてあげるわ。」

……『私たち』？

ふと気が付くと悠姫さんの後ろには何人かの人と大きめの黒い犬が1匹いる。みんな若い。ぼくより小さい子もいる。みんないじめ

にあった人たちらしい。

一人ひとり自己紹介をしてくれた。ただし、一番小さい女の子だけはずうっと泣いていて、悠姫さんが『美那ちゃんっていうのよ』と教えてくれた。

みんな口をそろえてぼくのことを『トモダチ』だと言ってくれた。ぼくは嬉しくな^{うれ}って、復讐^{ふくしゅう}する4人には、なるべく別々の人に頼むことにした。

リーダー格の直樹には悠姫さんをお願いした。義久は、泣きやませたくて『美那』ちゃんにした。雅哉には何だか飄々（ひょうひょう）としておもしろいお兄さん、『剛』さん。太一には目付きの鋭い中学生『信人』くん、をお願いした。

もう一人高校生の女の子がいるとのことだったが、最近調子が悪いらしい。この世界にも風邪とかあるのかなと、ふと疑問に思った。

「じゃ、『仕返し』を始めましょう。……あ、そうそう、私たちのことは呼び捨てでいいわよ。もうトモダチでしょ?」

悠姫さんはにこっと微笑む。

「うん、そうする。」

ぼくは素直に受け入れた。

「それに……もし邪魔するヤツがいたら、そいつらにも『仕返し』するわよ。……たとえあなたの親でも……」

ぼくはぞくつとした。この人には逆らえない……いや、逆らっちゃいけない気がする。

「うん……わかった……わかったよ。」

ぼくは目を閉じてアイツらのことを考えた。ふつふつと煮えたぎる恨みがこみ上げてきた。

……よし、最初は雅哉にしよう。親がPTA役員とかで、いつも気取っていた。直樹たちの金魚のフンのくせに！

『雅哉、お前を絶対許さない。剛が仕返しに行く。覚悟をしておけ。』

剛は悠姫に飛ばされる。次は義久だ！

『義久、お前を絶対許さない。美那が代わりに仕返しに行く。』

今度は美那が飛ばされた。次は太一だ。

『太一、お前も絶対に許さない。ぼくの苦しみを知れ！』

信人が飛ばされる。

さあ、最後は直樹だ！

「悠姫、お願いするよ。」

今まで悠姫の立っていたところを見ると悠姫はいない。ぼくは部屋から先ほどの真っ白い空間へ出て悠姫を捜した。

いよいよ最後のリーダー格、直樹に復讐できる時になって悠姫がいなくなってしまったらあまりにも中途半端じゃないか！

ぼくが歩き出そうとするとずっと向こうから悠姫が歩いて来るのがわかった。ぼくは安心して薄緑色の扉の前で待つ。

でも、一瞬のうちに悠姫はどうやってあんな遠くまで移動したんだろう？

「……途中で悪かったわね。ちよつと他に用事ができたから私は行かなければならないの。それに、美那ちゃんが手間取ってるわ。代わりに『瞳』をお願いしておいたから、そいつにメッセージを送りなさい。いっしょに『瞳』を送るわ。」

ぼくはその『瞳』という人は知らなかったが、悠姫が任せるのだから大丈夫だろうと思った。

「わかりました。それで、あの……用事って……」

ぼくは恐る恐る聞く。

「人間を生かしたまま利用するのも一つの方法なのよね。まあ、最終的には殺すけど。『黒田』っておもしろい娘がいるから会いにくのよ。それじゃ。」

そう言うとう悠姫は元来た方へ去ってしまった。ぼくはすぐに部屋へ戻り真ん中に座る。不思議なことに、部屋の中は誰もいなくなっていた。

「みんなどこへ行ってしまったんだろう……トモダチなのに……」

少し不安になったが、まずは直樹に『仕返し』するのが先だと思いい、意識を集中させた。

『直樹、お前を絶対許さない。死ね。』

するとすぐに部屋の中にアイツの声が響いた。

（剛とか美那とかだれだ？太一はだれがやったんだ？）

直樹のヤツだ！もう三人とも『仕返し』してくれたらしい。

『太一に仕返しをしたのは信人だよ。みんなぼくのようにいじめで死んだ人たちさ。』

ぼくもすぐに答えてやった。

（明日香ちゃんは関係ないだろう？どうして殺した！？）

明日香ちゃん？……ああ、義久の妹か。確か小学校低学年くらいだったはず。だから美那ちゃんは手間取ってたんだな。

ぼくはさっきの悠姫の言葉を思い出した。

『もし邪魔するヤツがいたら、そいつらにも【仕返し】するわよ。……たとえあなたの親でも……』

ぼくはすぐに答えてやった。

『悠姫には誰も逆らえない。』

「いいこと言うじゃないか。」

はっとして声のした方を見ると、剛が立っていた。

「そう。悠姫には逆らえない……って言うより逆らう必要がない。どうせ人間どもは皆殺しだ。」

ぼくは何か引っ掛かりを感じた。

人間が皆殺し……ぼくの家族……弟や妹も？

「さあ、終わったんなら外に出な。まだ『メンバー』じゃないから、ここにはいられないんだよ。」

そう言われ、ぼくは来る時と同じように、柵のところまで戻って来た。すると石垣の内側に美那ちゃんがいた。膝を抱えて泣いている。

「グスン……スン……パパ……ママ……」

ぼくは美那ちゃんに近付いて行く。

「……ねえ……」

声を掛けて見るが、反応はない。参ったな……

一応『メンバー』なんだからぼくより位は上だよな……見捨てて行くわけにはいかないし……

「ねえ、美那ちゃん。パパとかママってどこにいるの？」

そう聞くと美那ちゃんは初めて顔を上げてくれた。

「パパは……パパはおまわりさんだよ……にいがたにいるみたい……ママは……ママはしんじやった……」

そう言うともた泣き出す。

「新潟？それぼくが生きてる時にいたところだよ。」

そしてぼくは閃いた。^{ひらめ}

新潟の警察官ならこの『仕返し』殺人事件にはたぶん関わりが出るだろう。それにぼくは被害者の携帯にアクセスできる。

「ねえ、美那ちゃん。パパに会いたい？」

美那ちゃんは頷く。^{うなず}ぼくは美那ちゃんを連れてまた小屋に戻った。

ぼくは悠姫を捜した。しかし、小屋の中の空間は真っ白で全く距離感がない。

しばらくウロウロ歩いたあと途方に暮れていると、悠姫が現われた。

「孝、どうしたの？復讐はもう終わったんでしょ？」

悠姫は微笑みながら聞く。

「うん、そうしようと思ったんだけど、美那ちゃんが泣いてて……」

ぼくがそう言うと、悠姫は美那ちゃんの頭に手を置いた。

「この子はいつもそうなのよ。」

悠姫の美那ちゃんを見つめる目は優しい。この人が怨霊だなんて本当に信じられない……

「あ、あの……それで、美那ちゃんのお父さんが新潟の警察官みたいだから、会いに行かせてあげたくて……あの……で、できますか？」

「どうやってこの子のパパに会わせるつもり？」

「はい、ぼくの『仕返し』したヤツの携帯に飛ばせば、きっと警察署にあるから会えるかなって……」

ぼくの提案を聞くと悠姫は目を見張った。

「この子を警察署に飛ばすの？」

悠姫は俯く。

やっぱだめかな？ 怒られる！？

俯いた悠姫の肩が震えている。

やっぱり出過ぎた真似をするなって怒られる！

「クツ……クククツ……アハハハ！」

悠姫は突然笑い出した。

「孝……あなたやるわね。亡者にしておくのはもったいないわ。……いいわ。美那を飛ばしてあげる。フッフツ。」

ほめられた？ なんで？ でも怒られなくてよかった……

悠姫は美那ちゃんを飛ばすと、ぼくを石垣の柵まで送ってくれた。

「今『玲花』という子がおもしろいことを始めてるの。あなたはその時また協力してもらおうわ。それまでちゃんとしてたらね。」

悠姫はできの悪い弟に言い聞かせるようにそう言うと、柵を開けた。

ぼくはまた石垣に背中を預けて座っている。また言葉はしゃべれなくなってしまった。でも考えることはできる。

ぼくは決めていた。悠姫に気に入られるように、何でも協力しよう。そしてできれば家族や弟妹は助けてもらおう。自殺して迷惑をかけたんだから、それくらいはしてあげたい。ぼくの頭は出て来ない言葉とは裏腹に、すっきりと冴えていた。



御手洗さんが殺される！そう思った瞬間、『孝』の姿は消えていた。

「あれ？ どこいったの？」

店長が間拔けな声を出す。

こうしている時にも銃撃されるかも知れないので、教団員たちや玲花からは目を離さないでいる。ヤツらはニヤニヤ笑っている。

「御手洗さん！無事ですか？ 御手洗さん！？」

いくら呼び掛けても反応がない。

カラン！

御手洗さんの持っていた『銘鉄丸』が床に落ちる。しかし御手洗さんは倒れることもなく、コンテナの脇に立っている。殺されたわけではなさそうだ。

すると御手洗さんは拳銃を取り出した。

「御手洗さん…よかつ……！」

すうっと銃口が俺に向けられる。

「み、御手洗さん危ない！」

そう叫んでしゃがむと御手洗さんの顔が目に入る。目が紅く光を帯びている。

そうか！『孝』は御手洗さんに乗り移ったんだ！『孝』は『憑依』
する怨霊なんだ！

「くくく……しいねえ〜！」

御手洗さんの顔が歪む^{ゆが}。

「待ちなさい！」

樺島店長が玲花の方へ向かって一步前へ踏み出す。

「コンピュータルームに爆弾を仕掛けてあるわ。爆破されなくなかったら今すぐアタシたちを自由にしなさい！」

玲花たちは息を飲み、御手洗さんの動きは止まった。

「なるほど……その部屋に何をしに来たのかと思えば、そんなことをしていたのかい。」

玲花が低い声を出す。

「で……自由にしたら爆発しないのかい？」

俺は打ち合わせにない店長の行動に動揺しており、現状を打破^{だは}するいい考えはなにも浮かばない。

「起爆装置は時限式よ。……あと15分ほどで爆発するわよ。」

店長はリストウォッチを見る。

「ちっ……わかったわ。『孝』さま。悠姫さまのため、ここはお引き下がってください。」

玲花が御手洗さんに恭しく申し出る。すると御手洗さんの紅い目からみるみるうちに光が引いていく。数秒ののち、元の御手洗さんに戻った。

「あれっ？ 私はどうしていたんだ……？」

憑依^{ひようい}されると記憶はなくなるらしい。

「アンタはあの怨霊に取り憑^つかれてたのよ。」

店長が言うと御手洗さんは顔色が真っ青になる。

「なにっ！？ それで私は何をしたんだ？」

「何も。何かする前に取引をしたからもう大丈夫よ。」

店長は御手洗さんに優しく言った。

「取引？ 一体何を取引したんだ？」

「爆弾の時限装置を外す代わりに、アタシたちを自由にするつてことよ。」

「なっ……ダメだ!」

「うっさいわね! こうでもしないとアタシたちアンタに殺されてたのよ!」

店長はそう言いながら俺のそばに来た。

(晃ちゃん、アンタはコンテナに隠れてなさい。)

店長は御手洗さんにも聞こえないくらい小さい声で俺に耳打ちした。

「!? それって……」

(しいっ!)

うひゃ! 店長の息が耳にかかった!

「ほら! さっさと爆弾を解除しなさいよ!」

玲花はイラついた様子だ。

「樺島くん! ダメだ! こいつらは私たちを自由になんかしない! 解除した時点で皆殺しにされるぞ!」

御手洗さんもちかなり焦っている。

「いいから! ここはアタシに任せなさい! チビは黙ってて!」
「ち……」

御手洗さんは真っ赤になって黙ってしまった。店長……無敵だな……

「さあ、解除するわよ。もう時間がないから、さっさとコンピュータールの扉を開けて!」

コンピュータールの扉は俺たちが出て来た時、再施錠さいせじょうされている。一人の教団員が進み出て、拳銃を床に置いた。

「この男が開けるわ。妙な真似をしたら速攻殺すわよ!」

玲花が叫ぶのに合わせて、教団員が近付いて来る。教団員は暗証番号を押してコンピュータールの扉を開ける。店長と教団員が中に入っていく。

しばらくすると二人とも戻って来た。

「どうだった?」

玲花が教団員に聞く。

「はい、確かに時限装置は解除されました。」

教団員の手にはダイナマイトに付けられていた時限装置がある。

外した証拠として持って来たらしい。

これで作戦は終わった……ファイアウォールは解除できない……つまり、悠姫の思い通りになってしまうということだ。

樺島店長は開け放たれたコンピュータールの扉の前に立ち、玲花たちを睨にらみつける。

「これでいいでしょ。それじゃ帰らせてもらうわ。残ったダイナマ

イトは自由にしたらいいわ。」

店長がそういうと、御手洗さんは何か言いたげにしていたが、ため息を一つついて拳銃を取り出す。

「はあ、どうしようもないヤツだな。おまえは。」

そういうと御手洗さんは拳銃を店長に向ける。

「み、御手洗さん！何やってるんですか？」

俺が叫ぶと玲花は笑い出す。

「キャハハハ……アタシは約束したけど、『孝』さまは許さないってさ！……死にな！」

「きっ、汚いぞ！お前ら！」

俺は怒りと口惜^{くちお}しさで涙が出てきた。

なんてことだ！『孝』は消えたわけじゃなかったんだ！

「晃ちゃん……コンテナに隠れていなさい。」

この絶体絶命の状況において、店長はいたって冷静だ。俺はコンテナに身を隠す。

「バカはアンタたちよ。」

店長はそういうとポケットから小さいコントローラーを取り出した。

「アタシだって約束守る気はないわよ！」

ドーーーーー！

もの凄い震動と音がしたかと思うと、コンピュータールームが爆発した。俺はコンテナごと廊下の壁に叩き付けられる。

「うわああああ！！」

壁や天井からコンクリート片が崩れ落ち、辺りは真っ白い煙で全く見えない。

ゴン！ ギン！

しばらくコンテナに破片が当たる音がしていたが、次第に小さくなる。

音が止んだのでコンテナから出ると、辺りはひどい惨状だった。

手足の千切れた教団員がそこかしこに倒れている。コンクリート片に頭を潰された死体や崩れた壁の下敷きになっている死体。生きて動いている人は一人もない。

ここは地下2階だ。早く脱出しないと生き埋めになってしまう！まだ辛うじて保ってはいるようだが、コンピュータールームは木っ端みじん。通路も崩れ落ちた壁や天井のコンクリート片でほぼ埋まっている。しかし通路の先、さっき玲花たち死怨教団のヤツらがいたところの先に階段が見える。あそこまで行けば何とか脱出できそうだ。

起爆装置を設置していた時、樺島店長はこの細工をしていたから遅かったんだな……

俺は店長と御手洗さんを捜した。たとえ死んでしまっていたとし

ても、せめてお別れを言ってから脱出したい。

そう思ってコンテナから這い出すと、店長がコンテナの陰に倒れているのを見つけた。

「店長！」

「ううっ……」

声をかけると微かに動いた！生きてる！

「店長！店長！」

俺は店長のそばに屈んで怪我がないか確かめる。店長の両腕はひどい火傷を負っていて、左足には飛んできた破片にでも切られたのか、大きな切り傷ができています。しかし、骨折などはしていないようだ。

「店長！てんちよおー！大丈夫ですか？」

「……だ……大丈夫なわけ……ないでしょ……」

そう言うが、店長の顔は笑っている。しかし、何とか脱出はできそう。俺は店長に肩を貸し、立ち上がらせた。

「さあ、これで作戦成功よ……さっさと帰りましょ。」

階段の方へ一歩踏み出すと、瓦礫を押し退けて誰かが立ち上がった。

ガラガラ……

スーツ姿の小さい影……御手洗さんだ！

「御手洗さん！」

俺が喜んで近付こうとすると、店長に腕を掴つかまれた。

「待ちなさい。本当に御手洗くんなの？『孝』じゃない？」

そうだ……爆発する直前は御手洗さんではなく『孝』だった。

御手洗さんは立ち上がり何やら首を振っている。頭から血が流れているところを見ると、破片か何かがあたったのだろう。

「み……御手洗さん……？」

俺が恐る恐る声を掛けると、御手洗さんはゆっくり顔を上げる。

目は……普通だ。

「さ、崎田くん……いったい何があったんだ？」

ほっ……いつもの御手洗さんだ。あとは『孝』が憑依ひょういしていないかどうかだ。

俺はコンテナのそばに転がっている『銘鉄丸』を拾い、御手洗さんに差し出す。

「御手洗さん、これ握ってください。」

「崎田くん？……そうか、わかったよ。」

御手洗さんは銘鉄丸を握る。

何の反応もない。『孝』は憑依ひょういしていない！

「御手洗さん……よかった……」

「昔から悪運だけは強くてね。」

そういうと御手洗さんは照れ笑いをした。

「アンタが変なのにとり憑^つかれたりするからこんな方法しかとれなかったのよ！反省しなさい！」

そう言いながらも店長は嬉しそうだ。

ガラガラ……

どんどん壁や天井が崩れてくる。早く脱出しないと！

辛うじて消えないでいる『非常口』の緑色の光で薄暗い通路に、瓦礫^{がれき}が積み重なって歩きにくい。俺は店長に肩を貸しながらできるだけ急いで階段に向かう。御手洗さんは警戒しながら後ろを守ってくれている。

よろよろとおぼつかない足取りで階段の上り口に到着した時、乾いた銃声が聞こえた。

パン！

ドサッ！

振り向くと御手洗さんが倒れている。

「御手洗さん！」

絶叫に近い叫び声を上げて、俺は御手洗さんに飛び付く。

「うっ……崎田くん……早く……行け……」

弾は貫通かんつうしていない。御手洗さんの右脇腹の後ろには次第に赤い染みが広がってくる。

「御手洗さん！大丈夫です！助かります！！がんばって立ってください！いっしょに逃げましょう！」

俺は頬ほほに涙が流れるのを感じながら御手洗さんを肩かたに担ぐ。

ガラッ……

瓦礫の崩れる音がして、見ると玲花が頭から血を流して立っている。

「はっ！生きてたかい！ちゃんと身体の真ん中を狙って撃ったんだけどねえ……」

「貴様……黒田玲花！」

俺は腹にどす黒い感情が湧わき上がるのを感じた。

これが……『憎しみ』……？

「今度はすぐ楽にしてあげるからねえ。」

玲花は拳銃を構える。俺は玲花には構わず御手洗さんを担かつぐ。

「御手洗さん！大丈夫です！俺が助けます！」

「二人まとめて殺してやるよ！」

「うおおおおお！」

玲花が引き金を引こうとした時、樺島店長が玲花に突っ込んだ。

「店長！」

ガラガラガラガラ！

店長と玲花は絡み合いながら瓦礫から転げ落ちる。

「うわぁ！何だ！？貴様あ！」

店長は焼け焦げた両腕で玲花をがっちりと抱きかかえている。

「晃ちゃん！今のうちに逃げなさい！」

階段はもう目の前にある。

「で、でも……店長お！」

「早く！」

パンッ！　ビシッ！

玲花が店長の身体の下で発砲し、店長の身体を貫通し、天井に弾痕を作る。

「う……ごぼっ……は、早く……にげ……」

店長が血の塊を吐きながら叫ぶ。

「くっ……ちくしょう！店長おお！」

俺は御手洗さんを担ぎ階段を登る。

パンッ！　パンッ！　パンッ！

店長の背中には次々と赤黒い染みができていく。

「ぐっ……ごぼっ……こ、これで……こ……このくそったれ教団も
終わりよ……」

玲花の身体の下から白い煙が立ち上り、シューっという微かな
音が聞こえる。店長が最後の2本のダイナマイトに火をつけたらし
い。

「き……貴様……何を……」

玲花は店長の身体の下でもがくが、店長は最後の力を振り絞って
離さない。

「晃ちゃん……世の中を……救ってね……」

最後に見た店長は微笑んでいた。

「店長　おお！」

ドガー……ン！！

轟音と衝撃が襲い、俺と御手洗さんは階段を2、3段吹き飛ばさ
れた。

「うわあああああ！」

さらに壁や天井が崩れ落ちる。

ガラガラガラガラ！

白い煙がもうもと立ち込め、辺りは真っ白で何も見えなくなっ
てしまった。生き埋めになるのも時間の問題だ。俺はいっしょに投
げ出された御手洗さんを再度担ぎ上げ、階段を一步一步確実に上が
っていく。壁にはどんどん亀裂が広がっていく。

「くっ……くっ……樺島くん……私が不甲斐ないばかりに……」

御手洗さんは泣いているようだ。俺も涙が止まらない。でも今は
一刻も早く脱出しなければならない。俺は伝い落ちる涙をそのまま
に、階段をしっかりと上っていった。

一つ上の階は死怨教団の本部だ。下の階と同じ作りになってはい
るものの、壁やドアなど、至るところに『六芒星』ろくぼうせいが書いてある。
全員逃げたのか、下で死んだヤツらで全員なのか、全く人気はな
い。俺は御手洗さんを担いでさらに階段を上がった。

1階もところどころ崩れ、瓦礫が落ちている。壁や天井の亀裂も
不気味なほど広がっている。窓も半分以上は割れ、辛うじて割れず
に残っているガラスも全て蜘蛛の巣の^{くも}ようにヒビが入っている。俺
は御手洗さんを肩に担いだまま裏口に向かい、守衛室の前を通過
外に出た。

新宿とはいえ深夜は人気がない。俺は来る時に乗って来たワゴン
車に向かう。

「さ……崎田くん！」

御手洗さんが突然叫ぶ。

「どうしたんですか？」

「あ……あれ……」

御手洗さんが今出て来たばかりの出口を指差す。振り向くとそこにはほの白く光る陰気な子どもが立っていた。

……『孝』！

「あれは……『孝』！ どうして……」

俺は絶望的な気持ちになった。『銘鉄丸』はない。下に置いてきてしまった。いや、仮にあったとしてもアイツには効果がない。どうすればいいんだ……

俺が固まっていると、孝はすうっと近付いてきた。

「うわああ！」

俺は後退る。あとずさ

孝は一気に距離を詰めると、すうっと俺の前で止まった。

「くっくくく……にがさないよ……」

「くっ……どうして……玲花は死んだのに……」

俺が呟くと孝はにいつと笑う。つぶや

「玲花だよ。アイツはしぬまえにぼくをダウンロードしてたのさ。もってたけたいはこなごなになったけどね。」

なんてことだ！

俺が呆然^{ぼうぜん}としてしていると、御手洗さんが動き始めた。

「崎田くん……降ろしてくれないか。」

俺は素直に御手洗さんを降ろす。

「さあ、どっちに憑依^{ひょうい}しようかな？……きめた！」

孝は御手洗さんに近付いたかと思うと、重なるようにして消えた。

「……み、御手洗さん？」

御手洗さんは俯^{うつむ}いている。すると低い笑い声が聞こえてきた。

「くっくくくくくくくくく……」

御手洗さんの全身から冷気が放射される。低い笑い声とともに次第に顔が上げられると、その目は爛々《らんらん》と紅い光を帯^おびている。口元は奇妙に歪^{ゆが}められ、三日月形に吊^つり上がっていた。

「み……御手洗さん……」

せっかく店長が命を懸^かけて逃がしてくれたのに……俺も御手洗さんもここで殺^{ころ}されてしまうのか……

俺は無力感に苛^{さい}まれながらも、最後の抵抗をしようと『電磁警棒』を取り出しスイッチを入れた。

ブウーンと低い振動が掌^{てのひら}に伝わってくる。それは風前の灯^{かぜのとう}となった自分の命の鼓動^{こどう}のように感じた。

「くっくくく……そんなものでなにをしようっていうんだい？」

御手洗さんは歪ゆがんだ口で笑い、拳銃を取り出し銃口を俺に向けた。

「お前が生前にいじめられていたのは知ってる。……辛かったろうな。怨霊になっちまうくらいだもんな……でも、だからと言って悠姫に荷担かたんしてどうなるんだ？アイツはこの世を滅ぼそうとしているんだぞ！」

「くっくくく……なにをいまさら……いのちごいか？」

銃口は俺に向けられたままだが、不思議と恐怖心は消えていた。俺の中には怒りとも憎しみともつかないどす黒い思いが溢あふれていた。

「お前には弟と妹がいたよな。それに共働きの両親も。」

孝の笑顔が凍り付く。

「お前が自殺して弟や妹はどう思った？両親は？……悠姫の野望が実現したらみんな死んでしまうんだぞ！お前は弟や妹が亡者たちに殺される姿を見たいのか？」

すでに『孝』御手洗さん』は笑ってはいない。恨めしそうに紅い目を俺に向けている。

俺は孝に一步近付く。

「お前が本当にすべきは悠姫を止めることなんじゃないか？憎しみの連鎖れんさを止め、自分のような奴を二度と出さないようにするべきなんじゃないか？」

「ぐっ……ぐあああああ！」

孝が頭を抱え^{かか}苦しみ出す。

「御手洗さん！」

「ぐああああ……さ……崎田くん……」

御手洗さんの目が普通に戻っている。しかしかなり苦しそうだ。きっと御手洗さんの中では^{そうぜつ}壮絶な主導権争いが行われているんだろう。

「……に、逃げてくれ……今のうちに……こいつは今迷っている……今なら私でも対抗できる……」

御手洗さんは^{ひざまず}跪き、頭を抱えたまま全身ぶるぶる震えている。俺は逃げるか止まるべきか判断がつかないまま、御手洗さんから数歩離れた。

「ぐあああああああ！」

御手洗さんがまた苦しみ出した。目は紅と黒で目まぐるしく変わる。

「ぐあああああああ……」

しばらく頭を抱えて苦しむと、御手洗さんは何事もなかったようにすくつと立ち上がる。

「くくくく……お、奥に押し込んでやった……さあ！死ね！」

御手洗さん……いや、孝は拳銃を俺の頭に狙いを定める。

「孝！工藤は反省して俺たちに味方してくれた！変わったんだ！お前は変わらないのか？お前はそんなに弱いヤツなのか！？」

孝の拳銃を持つ手がぶるぶる震え始める。

「くっ……こいつ……」

「崎田くん！こいつは一度 憑依ひょういすると消えるまで外には出られない！……みんなに……みんなにがんばれて伝えてくれ！」

「こいつ……殺してやる！殺してやる！」

孝と御手洗さんが目まぐるしく変わる。御手洗さんの脇腹ちだの傷からは大量の血が流れ出て、地面には真っ赤な血溜まりちだができています。

「死んだら……いや、死んでもあの世から『S i o n』をぶっ潰してやるさ。」

御手洗さんも、店長と同じく微笑む。

「くっ……この……」

御手洗さんの目は真っ赤に輝いていて、顔は歪ゆがんでいる。しかし苦しみのためか憎しみのためかは、判断がつかない。

御手洗さんの拳銃を持った右手がぶるぶる震えながら上がっている。そうかと思うとまた俺の頭に向く。

「崎田くん！今のうちに……今のうちに逃げてくれ！」

ぐぐぐと御手洗さんの右手が上がり、拳銃が御手洗さん自身のこめかみに当てられる。ここで拳銃を取り上げようとしたら、電磁

警棒で気絶させようとしたらすぐに俺が撃たれるだろう。それがいわかる。だからといって今すぐ走って逃げるなんて、御手洗さんを見捨てるようなこともできない。

「御手洗さん……俺……俺、どうすれば……」

俺は涙を流してそこに止まることしかできない。

「崎田くん……野口を……悠姫を恨んじやだめだぞ。」

御手洗さんは初めて会った時のようないかつい顔でそう言う、引き金を引いた。

パン！……

……ドサツ。

深夜の新宿に乾いた音が響き、その余韻よゐんに御手洗さんの倒れる音が重なった。

「み、御手洗さー！ーん！ー！」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！

さらに、俺の絶叫に重なるように『ポニーエンターテイメント』ビルが崩れ落ちる音が辺りに響いた。

俺は御手洗さんの亡骸なきがらを安全なところまで引きずっていく。

ウー――――！　　ウー――――！

遠くから消防車やパトカーのサイレンが近付いてくる。その音は俺の中に安心感ではなく、空虚感くうきょかんと無力感を呼び起こすだけでしかなかった。

「御手洗さん……店長お……俺……どうすればいいんだよ……」

涙が後から後から流れ出てくる。

つい一か月前までとは全く違う自分の状況。

『晃ちゃん……世の中を……救ってね……』

店長……俺にそんなことできるわけないじゃん！

『崎田くん……野口を……悠姫を恨んじやだめだぞ。』

御手洗さん……無理だよ……アイツら……絶対許せないよ……

俺はだんだん冷たくなっていく御手洗さんの亡骸なきがらに取りすがり、声を上げて泣いた。

ピーポーピーポー……

救急車が到着し、『ポニーエンターテイメント』の中に救急隊員が入っていく。

ウーーーーー……

消防車やレスキュー車も到着し、瓦礫がれきの撤去作業てつきよや生存者の搜索が始まる。警察がビルの敷地ふだに黄色いテープを張り巡らし、『立ち入り禁止』の札ふだを手際よく提さげていく。

すると警官が一人、俺と御手洗さんに気付き近寄ってきた。

「おい、君！どうした？その人は怪我人か？」

若い、二十代くらいの警官だ。

「……この人は武蔵野署の御手洗巡査部長です。俺を助けて拳銃で撃たれました……」

若い警官は驚き、たぶん上官を呼びに走って行ってしまった。ここを動かないように俺に言いつけて。

俺は警官が来る前にそこを離れた。身分がわかれば、後は警察で何とかしてくれるだろう。御手洗さんの家族に連絡とか……

……連絡……？

「そうだ！瑛士に連絡しなくっちゃ！」

俺は後ろのポケットからPHSを取り出した。しかしPHSはボディと液晶画面は割れ、完全に壊れていた。

「ちくしょう、『コンピュータルーム』が爆発した時だな……」

今さら御手洗さんのPHSを取りに戻るわけにもいかない。

「ちくしょう……でも、瑛士ならすぐに気付いてウィルスを流したはずだ。」

俺は呟き、美鈴の顔を思い浮かべた。

『……晃。生きて帰って来てね。』

『……約束よ。』

美鈴との約束。

……そうだ！ 美鈴は悠姫と戦おうとしている。瑛士、八前さん、曾根崎さんも……

俺は行かなければならない……『Dyson』へ……悠姫のところへ……

始発電車が動き始めるまで待つてなんかられない。あと24時間しかないんだから。

……走れ！

俺は元陸上部だ。新宿から池袋なんて始発が動き出す前にたどり着ける。

走れ！ みんなのところへ！

東の空が白々とするころ、俺は北へ向かって走り出す。心の中のもやもやを吹き飛ばすかのように、俺は全速力で走り続けた。

第14章 藤原悠姫 I I

「悠姫、誕生日おめでとう。」

「パパ、ありがとう。」

藤原大悟は娘の悠姫にそうお祝いを述べ、微笑む。

悠姫は9歳になった。

普段は仕事や愛人宅へ通うことに忙しい大悟が家にいるのは珍しい。悠姫の乳母うばの『キヨ』や、6人のメイドたちはいつにない藤原家の空気に、緊張の色が隠せないでいる。それでも悠姫は、父親に誕生日を祝ってもらえる嬉しさで、ニコニコしながら夕食のテーブルについた。テーブルの上には豪華な食事が並べてある。

七面鳥やフカヒレスープ。キャビアにフォアグラなど、高級食材をふんだんに使った壮観な食卓の真ん中には大きな誕生ケーキがその存在感を際立きわたせている。

ケーキの真ん中には『悠姫 おたんじょうび おめでとう』と書かれたチョコプレートプレートの大きなプレートが乗っている。その周りには色とりどりの9本のロウソクが、鮮やかなオレンジ色に煌きらめいている。

「悠姫、大きくなったな。ママにも見せてあげたかったよ。」

「ママ……」

悠姫の母親は、悠姫の出産に耐え切れず亡くなっている。

二人だけの誕生祝いの夕餉ゆうげはとても静かであった。カチャカチャとフォークやスプーンが磁器じきの器に触れる音しか聞こえない。それでも悠姫は父親と夕食を共にできるだけで幸せだった。

「悠姫。 お前にプレゼントを用意してある。後でわたしの書斎に

来なさい。」

「えっ！？　ほんとう？　うれしい！　パパ、ありがとう！」

食後のコーヒーの香りを楽しみながら、大悟は無邪気に喜ぶ悠姫をじっと見つめていた。

お風呂に入り、翌日の宿題を済ませた後、悠姫はパジャマ姿で父の書斎を訪れた。いつもならばキヨにお話をしてもらうのが日課だったが、今夜は特別だった。

悠姫は父の書斎に入ったことはなかった。いや、まともに話をすることさえまれであった。その父に書斎へ誘われ、あまつさえプレゼントがもらえるという。悠姫はまさに天にも上る^{のぼ}気持ちで、書斎へ向かう足取りも弾む^{はず}ようであった。

「パパ？　悠姫よ。入ってもよろしい？」

「ああ、お入り。」

悠姫は重々しい扉を開け、薄暗い大悟の書斎へ入って行った。

父はマホガニーでできたイタリア製の大きな机に座り仕事をしているようだ。机上にあるコンピュータの画面に何やら映っている。

ギイツと黒光りする本革張りの椅子が回り、父がこちらを向く。

眼鏡を掛けたその顔は、今まで見たことのないような微笑みを湛^{たた}えていた。

「こっちへおいで。」

父が机の横に立て掛けてあった大きな箱を取り上げる。真っ赤な包装紙に水色のきれいなリボンが掛けてある。

「パパ、ありがとう。」

悠姫は満面の笑みで大きな箱を受け取る。意外と大きさに比べて軽く、悠姫でも簡単に持つことができた。

「開けてごらん？」

父が静かに言う。

「開けてもいいの？」

悠姫はそう言うのとプレゼントを床に置き、丁寧にリボンを解き始めた。

赤い包み紙の下からは『伊勢丹』のロゴの入った厚紙の箱が現われた。

「うわあ、何でしょう？」

悠姫は目をキラキラさせながら蓋を開けた。中には真っ赤なワンピースのドレスが入っていた。

「うわああ！ すてき！ パパ！ ありがとう！」

悠姫はドレスを身体に当て、くるくると回る。

大悟はそんな悠姫の様子を、目を細めて眺めていたが、おもむろに口を開いた。

「悠姫、着てみなさい。」

「はい。パパ、ちょっと待っててね。」

悠姫は自分の部屋へ戻ろうとする。

「待ちなさい。……ここで着替えなさい。」
「えっ……？」

悠姫は自分の耳を疑った。普段周りは乳母のキヨを筆頭に女性だけの中で生活している。しかも9歳ともなれば異性を意識し始める時期でもあるので、たとえ父親でも目の前で肌を晒すのは恥ずかしい。

さらに、普段は家におらず、悠姫に父親らしいことをしたこともない大悟は、悠姫にとっては知らないおじさんにも等しい存在である。

「パパ……それは……恥ずかしいからできないわ……」

悠姫は頬を薔薇色に染め、俯く。

大悟はそんな悠姫をじっと見つめる。

「ここで着替えなさい。悠姫。」

その声には決して逆らえない響きがあった。

「パパ、わかったわ。」

悠姫はあきらめ、パジャマを脱いだ。下着姿になった悠姫は父親の舐めるような視線に晒され、恥ずかしさのあまり涙ぐむ。それでもパパが喜んでくれるならと、手早くドレスを身に着けた。

「悠姫、とても可愛らしいよ。」

父親が椅子から立ち上がり、近付いてくる。

「ああ、悠姫……何て可愛らしいんだ……」

大悟は悠姫を抱き締める。異性にこんな風に触れられたことのない悠姫は身を固くする。

大悟は拒絶されないのを肯定と捉えたのか、手を膨らみかけている胸へと滑らせる。

「パ、パパ！」

悠姫は驚いて後退ろうとするが、強引に引き寄せられる。

「逃げてはいかん。」

大悟の手はスカートの中に入ってきた。悠姫は羞恥心のあまり目を瞑り、両手で顔を覆った。

「ああ、悠姫……可愛い……可愛いよ。」

悠姫の全身には鳥肌が立ち、緊張と恥ずかしさで身体は硬直している。

大悟はついに悠姫の下着に手をかけ、足首まで一気にずりさげしまった。

「ああああ……パパ……」

大悟は悠姫のスカートの中へ頭を入れ、直接秘部の匂いを嗅いでいる。

「悠姫……いい香りだ……」

大悟の舌がソコへ触れた時、悠姫は幸せが崩れていくのを感じた。その夜、悠姫は父親によって強制的に『女』にさせられた。大悟はその日から毎日帰宅するようになる。

『あの夜』から大悟は毎晩、悠姫を部屋へ呼んだ。何が行われていたか、悠姫は決して他人に漏らすことはなかった。しかし、生後間もないころから悠姫を育ててきたキヨだけは、うっすらと二人の間に漂う微妙な空気を感じ取っていた。

キヨは何も言わず、聞かず、悠姫にただ優しくあり続けた。

大悟の『行為』は次第にエスカレートし、本性が現われるようになった。藤原家の地下室にそれ専用の部屋を作り、ありとあらゆる道具を揃えた。悠姫は縛られ、叩かれ、恥ずかしい姿の写真を撮られた。

悠姫は辛かったが、父親なりの愛情表現だということで自分を納得させ耐えていた。

父親の悠姫へのこのような凌辱行為は、悠姫が中学に入学してからも続けられた。そして、悠姫は15才になった時、父親の子を身籠もった。

大悟は、悠姫が本当は自分の子ではないことを知っていたので、その事実を知った時大いに慌てた。そして側近の一人、当時専務取締役だった『鬼島常晴』に相談したのである。

この鬼島という男は『Dyson』の表立って行えない仕事を請負っていた男である。広域暴力団の幹部も兼任している、いわゆるインテリやくざであった。

大悟に悠姫の相談を受けた鬼島は、大悟を失脚させる好機ととらえ、始めは親身になって相談に乗っていた。愚かな大悟は悠姫の凌辱写真までも鬼島に見せてしまっていた。

機は熟したと見るや、鬼島は悠姫の懷妊を取締役会で暴露し、無

数の凌辱写真もインターネットに流出させた。

大悟は失脚し、行方不明となったのはそのすぐ後である。

悠姫は鬼島によって墮胎させられ妾とされた。失意のうちに過ごした悠姫であったが、17歳になった時自ら命を絶った。

『Dyson』の社長には鬼島が就任した。時を同じくして、静岡で藤原庄三郎が何者かに殺された。庄三郎は静岡にある別荘で静養中であつた。古くからの友人の勤める大学病院に通院しながら、余生を楽しんでいたのである。

藤原家の別荘に数人の賊が押し入り、庄三郎と身の回りの世話をしていた者数名とともに銃撃されたのである。別荘には火が放たれ一夜にして全焼した。

藤原家の血筋が途絶え、『Dyson』は鬼島の天下と思われた。しかし、そうはならなかった。

鬼島が変死したのである。

2003年5月、鬼島が自宅の書齋で死んでいるのを家人が発見した。死体は頭部が千切られていた。書齋は完全な密室で、荒らされた形跡も争った形跡もなく、隣室で休んでいた妻は何の物音も聞こえなかったという。そのため当時は鬼島の妻が疑われたが、その容疑もすぐに立ち消えになった。

鬼島の頭部は人間では不可能な力で千切られたことが検死の結果、判明したからである。

その日を境に、鬼島の家族を始めとして、『Dyson』に関わる者、特に幹部に変死者が続出する。『Dyson』の後任の社長はその後次々と変死し、庄三郎の祟りとの噂が立つまでになり、誰も社長職に就かなくなってしまう。

『Dyson』の経営陣はとうとう庄三郎の祟り説を受け入れ、左遷させられていた庄三郎の腹心であつた福留泰正を呼び寄せ、社長に就任させた。福留は現在も健在で、その手腕を振るっている。

庄三郎の祟り説は『Dyson』経営陣にとっては当然の常識となっている。



「御手洗さんたちと連絡が取れない。」

瑛士くんは冷静に事実だけを淡々《たんたん》と述べる。おれより若いのに本当に頼りになる。

「八前さん、新宿の様子は何かわかりましたか？」

瑛士くんがおれに話を振ると、美鈴ちゃんと曾根崎もこっちを見る。

「いや……警視庁の友人に聞いてみたんだが混乱しているようで、まだよくわからない。」

『ポニーエンターテイメント』で爆発事故があり、ビルが崩壊したところまでは情報として入ってきている。しかし、その後は一向に情報は入って来ないため、みな不安を隠せない。

まもなく夜明けだ。深夜の臨時ニュースではビルが何らかの事故で崩壊したとしか報道されていなかった。

ウィルスは無事流すことはできた。午前2時頃、三重に張り巡らされたファイアウォールは完全に消滅したのである。

しかし、えっちゃんはまだ眠り続けている。崎田くんのところへ

現われたという佐伯 瞳も現われない。最もそれはウィルスが成功したという証拠でもある。

三人はどんどん進んでいく時間に焦りを覚え始めていた。残り時間はもう20時間を切っている。

「仕方ない。オレたちで作戦を始めよう。」

瑛士くんが決断した時、おれの携帯に着信があった。

携帯電話はウィルスが成功した時点で使っていると瑛士くんが許可を出している。

「ああ、おれだ。……なに!? 御手洗が……青年……崎田くんか。

……そうか、わかった。おれの方で何とかするから構わないでくれ。連絡ありがとう。」

携帯を切るとみんながおれの言葉を待っていた。

「……御手洗が……死んだ。」

「!」

みんなが息を飲む。

「撃たれたらしい。」

「そんな……御手洗さん!」

曾根崎は今にも泣き出しそうだ。

「しかし、そばに崎田くんがいたらしい。警官がちょっと目を離れた隙に^{すき}いなくなってしまうたらしいが。」

「あいつのことだ。きつと面倒に巻き込まれたくなくて、こっちにさっさと向かって来ているんだろう。」

「晃……でも、樺島店長さんは？」

美鈴ちゃんも不安そうだ。

「彼はまだ確認が取れていない。……が恐らく……」

おれが言っていると瑛士くんが後を継ぐ。

「いっしょにいなかったというところらに殺された可能性が高い……な。」

「そんな……一気に2人もいなくなってしまうなんて……」

美鈴ちゃんも泣きそうだ。

「美鈴ちゃん……『Si on』の事件が始まってからもう千人以上の人たちが犠牲になっている。二人だけではないんだよ。」

「瑛士くんの言う通りだ。仲間が犠牲になるのは辛いがここで悲しんでいて無駄に時間を費やしてしまうと、さらに犠牲者は増えてしまう。今は……行動しよう。」

御手洗や草薙たちの死を無駄にしないためにも。

「よし。『Dyson』に行こう。」

瑛士くんの一言でみんなが動き出す。

「あ、アタシ諫早さんの様子見て来るね。」

美鈴ちゃんが店を出ていった。

「しかし、どうして崎田くんは連絡して来ないんだろう。」

おれも瑛士くんも何度か崎田くんのPHSには連絡を入れていた。

「わかりませんが、故障がなくなりましたかしらんでしょう。今は生きていたことがわかっただけでもよかったと思います。」

「……そうだな。」

顔には出さないが美鈴ちゃんは嬉しそうだった。どんな結果になろうとも、こういう若者たちの未来をおれたち大人は守らなきゃならない。おれの命を懸けてでも必ず成功させよう。

瑛士くんはどこかに電話をしている。曾根崎は社内の協力者に会うために先に出発した。おれは持って行く道具の確認をする。

ダイナマイト10本、銘鉄丸4本、干渉波スタンガン一つ、拳銃一丁、弾倉三つ、ノートパソコンは瑛士くんが自分で持っていく。全てを大きめのバックに入れ、チャックを締めた時美鈴ちゃんから着信があった。

『八前さん！諫早さんが起きていました！それに、晃が……晃が帰って来ました！』

おれと瑛士くんは顔を見合わすと、曾根崎に連絡を入れて急いで『オアシス』を出た。

おれと瑛士くんがホテルに着いた時、崎田くんはルームサービスで頼んだおにぎりを会議室で食べていた。崎田くんはおれと瑛士くんの顔を見ると安堵あんどの表情を浮かべたが、すぐに悲しげに笑うだけで何も話さなかった。

「崎田……よく生きて帰ってきたな。」

瑛士くんが話しかけると崎田くんは食べる手を止め、俯うつむいた。

「店長と御手洗さんは俺をかばって殺されたんだ。俺……何にもしてない……できなかった……」

そうして崎田くんは昨夜あったことを一つ一つ丁寧に話した。

野口 孝……あの新潟の自殺したいじめられっ子……本来は悪のはずのいじめっ子である工藤がおれたちを助けてくれ、被害者であるはずの野口が敵に回る……何て皮肉なんだ！

いや、野口だけではない。『Sion』のメンバーは全てそうだし、きつと悠姫も……

崎田くんが全て話し終わった時、美鈴ちゃんがえっちゃんを連れて部屋に入ってきた。

「全く頭が痛くてかなわないよ。お嬢ちゃん、何か食べ物を頼んでおくれ。あ、それと飲み物は紅茶にしてくれよ。コーヒーなんて泥臭いものなんていくら空きっ腹でも飲む気がしない！」

重苦しく沈んでいた会議室が俄にわかに賑にぎやかになる。

「ああ、アンタたち。ありがとね。……それに、新堂ってのはアンタかい？」

えっちゃんはテーブルにある崎田くんのお茶を勝手に飲みながら、瑛士くんの前に座る。

「そうです。はじめまして。」

瑛士くんは丁寧にお辞儀する。

「あっくんの言ってた通りいい男だねえ。……あっくんは残念だったよ。」

……あっくん？ ああ、御手洗のことか。

みんなも始めは訝しげだったが合点がいったようだ。

「あの……武蔵野署ではありがとうございました。」

おれはみんなを代表するような形でお礼を言った。聞きたいことは山程あるが、まずはお礼を言うのが先だと思ったからだ。

「別にいいさ。仕事だからさ。でも依頼人が死んじゃって、稼げなくなっちゃったさ。」

えっちゃんが言うのと崎田くんが立ち上がる。

「み、御手洗さんはアンタを助けるために犠牲になったんだ！ て、店長だって……」

「わかってるさ！ うるさい子だね！ 食事は静かにするもんさね！ ……あっくんとその人には感謝してるさ。命の恩人だからね。瞳っていう霊にもね。」

「……『Sion』内でのこと、話していただけないですか？」

「もちろんさ。……ただし、これ食べてからでいいかい？」

えっちゃんの前には和風朝食セットが届けられている。



「武蔵野署では危なかったよ……俊夫って言ったかね。あの膨大な
怨念はアタシを飲み込んだしまった。……気がつくとアタシは周りが
真っ白の広い部屋の中にいたのさ。」

えっちゃんは食後の紅茶を美味しそうに啜りながらぽつりぽつりと話し始める。

「ぼうつとしていると悠姫が現われた。」

『悠姫』の名が出ると部屋の空気が一瞬で緊張した。目の前にえっちゃんがいるのに、まるでそのまま悠姫に殺されるのではないかという錯覚にさえ陥る。

「悠姫はとてもきれいだったよ。アンタたちの見た姿はあの娘の怨念の塊に過ぎない。」

えっちゃんはまるでかわいい孫の話をするかのような、温かい笑顔を浮かべている。『Sion』内での壮絶な戦いを想像していただけに、かなり意外な気がした。

「悠姫はアタシに来て欲しいと言った。無理強いはしなかったよ。ただし、『現世』に帰すわけにもいかないということではあったがね。」

おれたちは明らかに戸惑った。これは一体どういうことだ？

「諫早さん……いや、えっちゃんは拘束こうそくされていたんじゃないんですか？」

瑛士くんも意外そうだ。おれも混乱していた。悠姫は怨霊ではなかったのか？

見たわけではないが、横山瑞希を絞め殺し、新潟のホテルでは男性の生首を手に提さげていたと聞いた。

瑛士くんも殺されかけたはず。怨霊と怨体では性質が変わるのか？

「アタシは拘束はされなかったよ。軟禁なんきんはされてたけどね。」

軟禁……ある程度の自由が許されてたというのか……？

「『現世』に戻ることは許されなかったが、『S i o n』内は自由に歩き回れたね。」

「『S i o n』とはどんなところなんですか？」

瑛士くんが聞く。

「さっきも言ったけど、真っ白で何にもないところだよ。……ただ、幾いくつか薄緑色の扉があったよ。」

「薄緑色の扉……」

美鈴ちゃんが呟つぶやく。

「中には入れてもらえなかったけど、どこからか連れて来られた亡者が何人か中に入れられてたね。」

「それは……処刑でもされていたんですか？」

曾根崎が青い顔をして聞く。ほんとにこいつはそういう想像が得意だな。

「いや、しばらくするとまたどこかへ連れて行かれたよ。処刑って雰囲気じゃなかったね。」

これじゃまるで『保養所』^{ほようじょ}のようじゃないか!?

「しばらくうろうろと歩き回っていると、女の子に会った。それが佐伯 瞳さね。」

「佐伯はあなたを助けに行ったはずだ。」

瑛士くんは確認するように崎田くんを見て頷く。^{うなず}崎田くんも間違いないというように頷いている。^{うなず}

「確かにあの娘はそう言ってアタシを『現世』^{げんせ}に帰してくれたさ。」
「どうやって戻って来たんですか?」

曾根崎が興味深そうに身を乗り出す。

「別に……大したことじゃなかったね。あの娘がアタシの背中に手を触れたと思ったらこのホテルのベッドの上さ。」

えっちゃんはここまで話すと残りの紅茶を飲み干し、おかわりを美鈴ちゃんに言いつけた。

「……佐伯 瞳は他に何か言っていますでしたか? 例えば我々のことなど……」

おれはあまりにもあっけない『S i o n』でのえっちゃんの話に、

何か裏があるような気がした。

「アンタたちのことは言ってなかったけど、悠姫のことは言っていたよ。」

「どんなことですか？」

「『もう時間がない。急がないと悠姫が石垣を壊してしまう。』ってね。」

「石垣……？何のことだ？瑛士くん、何だと思う？」

瑛士くんは眼鏡を中指で押し上げ考え込んでいる。

「八前さん、美鈴ちゃん。」

瑛士くんは顔を上げる。

「『死怨教団』のヤツは、『死怨』とは『あの世とこの世を繋ぐ者』だって言っていたんですね？」

おれと美鈴ちゃんは頷く。

「そこから考えれば、その『石垣』とは『あの世とこの世を隔てる物』と考えるのが妥当ではないでしょうか。」

「アタシもそう思うね。」

えっちゃんが二杯目の紅茶の香りにご満悦だ。

「『Sion』内を歩き回っていた時、薄緑色ではない扉を何か所か見掛けたよ。もしかしたらそのうちのどれかが、その『石垣』とやらに通じてたのかも知れないね。」

「佐伯 瞳と話せば何かわかるんじゃない？」

美鈴ちゃんが崎田くんに同意を求めるように言う。

「美鈴、それは無理だよ。ウィルスが有効なうちはね。」

「あ、そうか……」

『怨体』は無理でも『怨霊』は出て来られないかな？

やはり性急に『Dyson』に向かうのは止めた方が良さそうだ。もう少しえっちゃんの情報を元に作戦を煮詰めなければ。

「瑛士くん……」

「八前さん、言いたいことはわかります。……みんな、作戦を練り直そう。まだ19時間以上ある。『Dyson』はここから目と鼻の先だ。」

「その方がいいよ。どうやら『ホストコンピュータ』をぶっ壊せばそれでおしまいって簡単にはいかなそうさね。」

えっちゃんはこのなることを予測していたかのように悠然と紅茶を飲んでいた。

「しかし、作戦を立て直すって具体的にどうするんだ？」

「そうだよ、瑛士。実際『ホストコンピュータ』を破壊する以外に、俺たちにできることがあるのか？」

おれが聞くと崎田くんが合わせる。瑛士くんは眼鏡の奥の目を鋭く光らせる。

「……ある。キヨさんだ。」

「？」

「だれ？それ？」

美鈴ちゃんはきょとんとしている。突然聞いたことのない古風な名前が出て来て、一同は目が点になっている。

「……オレが昨日の夜、銘鉄丸とウィルスしか作ってなかったと思ってるのか？」

瑛士くんはノートパソコンを取り出す。

「『敵』のことを知らなければ戦いはできない。オレは昨日悠姫について調べた。」

おれははっとした。そうだ。おれたちは悠姫について何も知らない。

生前はこのだれなのか、年は？なぜ死んだのか、何に恨みをもつて『Si on』を作ったのか……信人や明仁などと同じように、いじめによる自殺なのか？

おれたちは何も知らない。

「……悠姫が何を望んで『死怨』になろうとしているのか、おれたちは知らなければならぬ。悠姫の怨念を解かなければ作戦は成功しないんだ。」

瑛士くんはノートパソコンにまとめられた文章をみんなに見えるようにする。文章には『Dyson^{えんかつし}沿革史』と題されている。



瑛士くんの調べた『Dyson』と藤原家との関係から、悠姫の悲しい人生や『ポニー』との関係など新たな事実がわかった。しかし、わからないのは悠姫の自殺の原因と大悟の行方だ。

庄三郎の死因は明らかに鬼島の暗殺だろう。鬼島は怨霊と化した悠姫に殺されたのも明白だ。

悠姫は失脚させられた父や殺された祖父の恨みで死怨となり、恨みを晴らそうとしているのだろうか？

「悠姫はなぜ自殺したのか、どんな怨念があるのか。また元社長で父親の大悟の消息……鍵を握っているのは乳母の『キヨ』だ。」
「なるほど。そのキヨさんに話が聞ければ何かわかるかも知れないな。」

おれは感心したが、ふと不安を感じた。

「しかし、当のキヨの所在はわかっているのか？」

おれの質問に、瑛士くんは携帯電話を取り出して答える。

「キヨは悠姫の死後、行方不明です。しかし、庄三郎の古い友人だったことはわかっています。」

「ということは？」

今度は崎田くんが聞く。

「藤原庄三郎は静岡出身です。そして医学者の新堂圭一と親交があった。」

「ま、まさかそれって……」

崎田くんは声が震えている。おれにもその気持ちは十分に理解できる。まさかこんな偶然があるなんて……

「新堂圭一……藤原庄三郎の主治医でオレの……父親だ。」

「ってことは、藤原庄三郎が通院していた大学病院って……」

崎田くんが聞くと、瑛士くんは苦々《にがにが》しく答える。

「ああ、『静岡医科大学』……当時オレの父親は内科部長だったが、今は院長だ。」

ってことは、瑛士くんは父親の大学病院の学生なのか……

瑛士くんが父親のことをよく思っていないのは以前から感じていたが、そういうわけがあったのか……

「なあ、瑛士……嫌なのはわかるが、今はそれどころじゃない。キヨさんの行方を親父さんに聞いてもらえないか？」

崎田くんは申し訳なさそうに瑛士くんを見る。

「瑛士くん、おれからもお願いする。頼む。」

おれは瑛士くんの気持ちを考えた上で、頭を下げて頼んだ。

「みんな、ちょっと待ってくれ。別に親父に聞くのが嫌だとはオレは言っていないぞ。確かに親父に頼るのは避けたいところだが、今はそれどころじゃないこともよくわかってる。……ちょっと待っててくれ。」

瑛士くんは電話をかけに会議室を出て行った。

「……しかし、仮に所在がわかったとして時間的に間に合うかな……?」

おれが聞くと、今まで黙って聞いていたえっちゃんがここぞとばかりに答える。

「その時はアタシが車で迎えに行くさ。」

えっちゃんがフェラーリで迎えに行く……

「えっちゃんが迎えに行ったら、キヨさんには別なお迎えが来ちゃうかもね。」

崎田くんは美鈴ちゃんにボコボコにされてしまった。

崎田くんと美鈴ちゃんの夫婦漫才を見ると、瑛士くんが戻ってくる。

「キヨさんは静岡にいるらしい。ちょっと今から連れてくるのは時間的に難しいな。」

「じゃあ、電話で話すしかないよね。」

美鈴ちゃんが言う。確かにそれしかないな……

「もう少ししたら連絡先がわかる。それまではテレビでも見ていよう。」

瑛士くんがテレビをつけると、ニュースが映った。『ポニーエンターテイメント』ビル爆破テロについてのニュースだ。瓦礫^{がれき}はかな

り撤去^{てつきよ}されている。いまだにビルからは遺体が運び出されている。全て『死怨教団』の死体のようだ。

「もし、遺体が見つからなかったらそれはイコール生きているという事にならないか？」

崎田くんは御手洗と樺島店長のことがどうしても気になるようだ。

「ちょっと気になるんだけど……」

美鈴ちゃんが言いづらそうに話を切り出す。

「なんだい？」

瑛士くんが聞く。

「武蔵野署のことは報道されていないのかな……」

一夜にして署員全員がいなくなってしまったのだ。確かに美鈴ちゃんの言う通り大事件だと思うのだが何故^{なぜ}か報道されていない。新聞は誰かチェックしてるのか？

「崎田……すまないがフロントから新聞をもらってきてくれないか？できれば全紙。」

？ 内線で頼めば済むはずなのに。瑛士くんは意図的に崎田くんに持って来させようとしている気がする……

なんとなく気になって瑛士くんを見ると、瑛士くんは意味あり気な視線をおれに送る。おれは口まで出かかった疑問を飲み込む。

「……ああ、わかった。」

崎田くんは会議室を出て行った。

崎田くんが出て行ってしばらくは誰も口を開かず、ニュースの音声だけが部屋に流れていた。

「……美鈴ちゃん。」

唐突に瑛士くんが口を開く。

「なに？」

美鈴ちゃんは突然呼ばれ、びくつとする。

「……崎田のことなんだが……どう思う？」

突然瑛士くんは何を言い出すんだ？

「どうって……御手洗さんや樺島店長がいなくなって落ち込んでるように見えるけど……」

「3人中1人だけ生き残ってしまったって、責任感の強い崎田くんが落ち込むのは無理もないよ。」

曾根崎が崎田くんを弁護するように瑛士くんに言う。確かにおれもそう思うが……おれにはそれだけには感じられない。何というか……先ほどからおれには崎田くんが殺人を犯して隠している凶悪犯のように感じていた。

「……瑛士さんにはお見通しね。確かにちょっとおかしいかなって思う。『ポニーエンターテイメント』に行く前とでは別人のように

感じられるわ。」

「も、もしかして野口が取り憑いてるんじゃない……」

曾根崎がまた真っ青になる。

「ばかだね！ しんちゃんは！ そんなわけないだろう！？ そんなのアタシがすぐに見破るよ！」

えっちゃんが曾根崎を叱り付ける。

そうだ。確かに何かに取り憑かれているわけではないと思う。刑事としての勘がそういつている。ということは崎田くんの内面……心の変化なのだろうか。

「……美鈴ちゃん、とにかく崎田を信じて、支えてやってくれ……何があっても。」

「瑛士さん……」

「美鈴ちゃん、おれからも頼むよ。たぶん、おれや瑛士くんじゃダメだ。」

「八前さん……」

「僕も手伝います！ 任せてください！」

曾根崎が気合いを入れている。

「またアンタは！ 余計なことしないで、『ホストコンピュータ』に無事たどり着けるように情報でも集めな！」

曾根崎はまたえっちゃんに叱られ、しゅんとしてしまった。その時ちょうど崎田くんが戻ってきた。

「瑛士、とりあえず六紙もらってきたぞ。」

崎田くんは新聞を一紙ずつテーブルに置いていく。

「見てみたけど武蔵野署の記事はなかったな。」

みんなで手分けして一紙ずつ調べたが、やはりなかった。

「瑛士、これってどういうことだ？」

「たぶん、もみ消されたんだ。それなりの力のあるやつに。」

「政治家とか？」

美鈴ちゃんが聞く。

「そうだ。警察庁の幹部とかね。」

「なんで もみ消すの？ 『死怨教団』 はほとんど壊滅したし、教祖の黒田玲花だって死んだんでしょ？」

美鈴ちゃんの言うことはもつともだ。

「そういう立場にある者の中に教団員がいるのか、野口などにより操られているのか……とにかく、行政は信用できないな……」

「やっぱり俺たちでやらなきゃだめみたいだな。」

崎田くんは悲しそうだ。やる気がないというわけではなさそうだが……

みんなで考え込んでいると、瑛士くんの携帯に着信があった。

「……ああ、オレです。……はい、そうか。わかった、行ってみる。」

瑛士くんは携帯を切り、みんなに告げた。

「キヨは横浜にいる。作戦に参加してもらおう。」

「横浜？静岡じゃなかったのか？」

おれが聞くと瑛士くんは新聞をまとめながら答える。

「ヘルパーの派遣で今は横浜で働いているらしいです。ここからならそんなに時間はかからない。……えっちゃん、車を出してもらえますか？」

「ああ、いいともさ。」

キヨのところに行くのは瑛士くん、美鈴ちゃん、えっちゃんということになった。それまでおれと崎田くんと曾根崎は『Dyson』に下見に行くことにした。

出掛けに瑛士くんはおれに一つ注意した。

「崎田を注意して見ててください。決して単独行動はさせないてください。」

「……わかった。」

残り時間は17時間ほどになっていた。

瑛士くんたちが戻って来たのは夕方4時過ぎだった。

おれと曾根崎と崎田くんは『Dyson』に行つて来た。曾根崎の案内で、地下の『ホストコンピュータ』へ至るルートも確認できた。

さすがに『ホストコンピュータ』を直接見ることはできなかったが。

キヨさんはある程度話は聞いていたようで、この状況にも落ち着

いている。えっちゃんとは意気投合したようで、えっちゃんは『キヨちゃん』とか呼んでいる。

午後4時半、おれたちはまた会議室に集まり、作戦の最終的な話をするようになる。

作戦の最終的な打ち合わせといっても、『Dyson』に潜入して『ホストコンピュータ』を破壊する基本線に変更はない。

問題は悠姫対策だ。そのキーパーソンとなるキヨさんに話を聞くと、この会議の一番の目的であったのだが、口火を切った瑛士くんの話は驚愕すべきものだった。

「福留社長に作戦の話をした。」

その場にいる一同は驚き、何も言えなかった。これから潜入して破壊しようとする会社の社長に作戦をバラした!?

「福留社長は親父の知り合いだからな。協力を頼んでみた。」

瑛士くんの大胆さにはいつも感心させられる。しかし、この場合この判断は正しいのだろうか。

「それでどうだったんだ?」

崎田くんが聞くと、瑛士くんは自嘲気味に笑う。

「無論断られたよ。」

「社長は利権主義じゃないけど、会社を愛してるからなあ。」

曾根崎はため息をつく。

「しかし、『ホストコンピュータ』を一時システムダウンしてくれるそうだ。」

「えっ！？それってどういうこと？」

美鈴ちゃんが聞く。

「『ホストコンピュータ』を一時的に止めてくれるってことだよ。」

瑛士くんの代わりに曾根崎が答える。

「なあんだ。じゃ作戦は簡単ね。」

美鈴ちゃんが言うと、瑛士くんは難しい顔をする。

「いや、美鈴ちゃん。話はそう簡単じゃないんだ。」

「どういうこと？」

美鈴ちゃんは怪訝な顔で聞く。

「……システムダウンすることによって確かに『ホストコンピュータ』の機能は一時的に止まるが、『S i o n』が閉鎖されるわけじゃないんだ……」

おれにも瑛士くんの言わんとすることが少しはわかる。

『ホストコンピュータ』のシステムダウンは、怨体の実体化は防げても、悠姫の怒りを余計に買ってしまうのではないか？怨体ではなく、怨霊本体が出てくるのを助長してしまうのではないか、ということだ。

「『ホストコンピュータ』の破壊はできても、『S i o n』の潰滅^{かいめつ}

にはならないかも知れない。……やはり、キヨさんの助けが必要だ。」

瑛士くんがそういうと、一同の視線はキヨさんに向けられる。キヨさんは緊張した面持ち^{おもも}で座っている。

「キヨちゃん、心配なくていいからね。アタシがついてるさ。とりあえず、悠姫について話しておくれよ。」

えっちゃんがそう言うときヨさんは少し楽になったようで、表情^{やわ}を和らげて話し始める。

「オラ……オラは須藤キヨといいます。悠姫お嬢様の乳母をやつとりました。新堂ぼっちゃま……瑛士さんに話は聞きました。オラが協力できることなら何でも話しますだ。だから……だからお嬢様を救ってやってくださいえ。」

キヨは頭を下げた。悠姫を救う？

「悠姫を救うってどういうことですか？アイツは世の中を……人類を滅亡させようとしてるんですよ！？」

崎田くんの強い口調にキヨさんは気圧^{けお}され、顔色を失っていく。

「崎田くん！」

「晃！」

おれと美鈴ちゃんが同時にたしなめる。崎田くんははっとしたようにおれたちを見回すと、黙って部屋を出て行ってしまった。

「美鈴ちゃん……」

瑛士くんが目配せすると、美鈴ちゃんは心得たとばかりに頷き、
崎田くんの後を追って部屋を出て行った。

「キヨさん、お騒がせしてすみません。」

瑛士くんが一同を代表するように、キヨさんに頭を下げる。

「や、やめてくだせえ。頭を上げてくだせえ。さっきのぼっちゃま
が怒るのも無理ねえです。悠姫お嬢様は怒られるようなことをした
んですから。」

キヨさんは慌てて瑛士くんに近寄る。

「オレたちが知りたいのは悠姫についてなんです。そして悠姫を止
めたい。成仏じょうぶつさせたい。それが結局はわれわれ自身を救うことにも
なるんです。」

瑛士くんがそう言うと、キヨさんはうんうん頷うなずいている。

「お嬢様のお母様は、お嬢様をお産みになられると亡くなられまし
た。お母様と父親の大悟様は愛し合っておりませんでした……」

その後続くキヨの話は驚愕きょうがくすべき話だった。

大悟の性癖せいへき……悠姫がどんな思いをして成長してきたのか……そ
してどんなに虐しいたげられてきたのか……

「大悟様の行方はわかりません。はじめしばらくは諸外国を点々と

してりましたが、出入国管理から、かえって見つかりやすいと考えられたんでしょう、日本に戻って来られたようなのですが、その先の行方がわからんのです。」

キヨはかなり疲れた様子だ。時間はもう夜七時を過ぎている。

「キヨさん、お疲れでしょうが、われわれにはもう時間が残されていません。もう少し頑張ってください。」

瑛士くんが言うとキヨはお茶を一口飲んで頷く。

「ぼっちゃん、お気遣い^{きづか}ありがとうございます。あたしゃ大丈夫ですよ。……鬼島の妾^{めかけ}にされてからのお嬢様はもう見るに忍びない様子でした。あんなに可愛らしかった笑顔は消え、日々沈んでくらししておりました。しかしお嬢様は一人の時には何かに没頭^{ぼっとう}して勉強^{のぞ}なさっていました。あたしは気になって、お嬢様が留守の時に覗き^{のぞ}ました。見るとホラー・オカルト関係の文献^{ぶんけん}や宗教の本、果ては中世の魔法やアフリカ先住民の呪術の本までありました。……そしてお嬢様はお亡くなりになりました。ある朝、ベットの上で冷たくなっているのを見つけたんです。死因はわかりません。外傷も薬物反応もなく、とてもきれいな死に顔でした……まるで魂だけが抜けてしまったようでした。」

瑛士くんとおれははっとして顔を見合わせる。『怨体』……その言葉が頭に浮かぶ。

悠姫は何か目的があって、自ら怨体となったのではないか。鬼島に対する復讐なのかどうかわからないが……

急に会議室のドアが乱暴に開かれ、美鈴ちゃんが真っ青な顔で飛び込んできた。

「た、たいへんよ！そ、外が……」

窓から見下ろすと、街は死者であふれていた。

第15章 曾根崎慎太郎

オオオ……オオオオ……

暮れかけた藍色あいいろの空に亡者たちの声が響いている。

池袋の高層ビルにこだまして、どこから声が響いているのかわからないが、広い幹線道路からも細い路地からも亡者たちがあふれ出している。

亡者たちは決して速い動きとは言えない。しかし、ゆっくり確実に生者たちを追い詰めていく。

「うわっ！うわあああ！」

一人の男性が十数人の死者たちに捕まり、その身を引き裂かれる。死者たちは『生』あるものを羨むうらやように見えた。

走って逃げれば十分逃げられるのだが、その数の多さに一人、また一人と殺されていく。

「うわあ！た、助けてくれ！」

見ると一台のタクシードライバーが3、4人の死者に車から引きずり出されている。タクシードライバーの叫び声も死者たちの声にかき消され、車の陰にその姿も見えなくなってしまった。

阿鼻叫喚あびきょうかん……池袋の街はまさに地獄絵図じじくえずと化していた。

あまりの状況にホテルを飛び出した方がいいが、丸腰では危険だと判断し、俺はまたホテルのロビーに飛び込んだ。ドアマンがドアを閉め、鍵を掛ける。

「大丈夫ですか？」

心配そうにドアマンが話しかけてくるも、その顔は恐怖に引きつり、外を凝視^{ぎょうし}し続けている。

「崎田！」

呼び掛けられ、エレベーターホールの方を見ると、瑛士、美鈴、曾根崎さん、八前さんが走ってくるのが見えた。

「え、瑛士……これは……」

「……ああ、ついに悠姫が『死怨』となり『石垣』とやらを壊したんだな……」

ホテルのガラスには数人の死者たちが中に入ろうとへばり付いている。ゾンビとは違いその姿はきれいだが、目には生気が全く感じられない。

「ど、どうしよう……」

曾根崎さんが顔色を真っ青にしながら歩き回っている。

「曾根崎！落ち着け！この状況を何とかできるのはおれたちだけなんだ！そのおれたちが取り乱してどうする！」

八前さんが一喝^{いっかつ}すると、曾根崎さんはびくっとして、恥ずかしそうに俺たちのところへ戻ってくる。

「八前さん、すみませんでした……僕より年下の崎田くんたちが落ち着いてるのに、取り乱したりして……」

「こういうのは年じゃないよ。肝^{きも}っ玉^{たま}の問題さね。」

いつの間にか えっちゃんとキヨさんが俺たちの後ろに来ていた。

ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！

ホテル入口の大きなガラスを死者たちが叩く。

「瑛士さん、あ、アイツらに『銘鉄丸』は効^きくかしら？」

美鈴がおずおずと『銘鉄丸』を持ってくる。

八前さんが確認してくれていた荷物は、すでにロビーに持ってきていた。

「よし。オレが試してみる。」

瑛士は銘鉄丸を握り、正面脇にある手動のドアに向かう。

「ま、待て、瑛士くん！俺がやろう。」

八前さんが瑛士の後を追う。

「八前さん、もし効^きかなかったらどうするんです？片腕じゃ戦うのにキツイですよ。」

瑛士は笑って八前さんを押し戻す。

「それに『コイツ』を作ったのはオレだ。オレは『コイツ』の威力を信じてる。」

動き出そうとする俺と曾根崎さんけんせいを牽制するようにそう言くと、瑛士はさっさとドアの鍵を開け、外に出て行ってしまう。俺たちは慌ててドアまで走り寄る。

「全く……若いヤツはせっかちだねえ。アタシやついてくので精一杯だよ。」

えっちゃんとキヨが孫の遊び相手でもするかのようについて来る。

「瑛士！思いっきりやってみな！万が一ヤバそうならアタシがアンタを守ってやるさ！」

えっちゃんは この絶望的な状況下においても なお落ち着いている。その雰囲気は俺たちをとっても安心させる。瑛士は親指を立て、ウィンクし、『楽勝！』と言って出ていく。

ちえっ、俺のパクリじゃん！

でも何だか嬉しくて、暖かくて……絶対そんなことしなさそうなヤツなのに……俺の心の中に温かい何かの流れ込んでくるのがわかる。昨日の夜から通して冷え固まった俺の心が、温められたように感じる。

俺も思わず『楽勝！』って返す。美鈴と八前さんがなぜかニコニコして俺を見ていた。

瑛士は『銘鉄丸』を構え、手近てぢかな亡者に近付く。

始めはガラスをガンガン叩いていたが、バットを構えて近付く瑛士に気付き、何か言いながら襲いかかる。

バチッ！

一瞬青白く光ったかと思うと、次の瞬間には亡者の姿は消えてい

た。瑛士は『銘鉄丸』を見つめ、その後 俺たちを見つめて笑う。

「うおおー！すげえ！一瞬じゃん！」

俺は思わず叫ぶ。

「うおおお！」

「すげえ！」

みんなも口々に叫ぶ。気がつけば周りにたくさんの人達が集まっていた。

「おお！すごい！何ですか？あのバットは？」

さっき俺を中に入れてくれたドアマンが俺たちに話しかける。

「銘鉄丸です。あの人が……瑛士さんが作りました。」

美鈴が嬉しそうに言う。

「助かるかも知れないぞ……」

「あの人たちといれば助かるぞ……」

周りの人たちがザワザワとし始め、俺たちの周りに集まり始める。まずいな……今はここにどまっているわけにはいかない。俺たちは『Dyson』に行かなければならないんだ。世界を救うために……

『世界を救う』……はつきり言って実感はない。一昨日の夜 美鈴と話した時も、運命の神様選ばれた者として、やれるだけ抵抗しようとは決意したが、『世界を救う』なんて大仰な^{おおきよう}気持ちはなか

った。

しかし、今のこの現状……目の前でたくさんの人たちが亡者たちに殺され、たくさんの人たちが俺たちの助けを必要としている……御手洗さんは……樺島店長は最後に何て言った？俺に何を託した？

『みんなにがんばれって伝えてくれ！』

『晃ちゃん……世の中を……救ってね……』

瑛士はわらわらと寄ってくる亡者たちを、片^{かた}端^{はし}から消している。今では曾根崎さんも銘鉄丸を持って外で瑛士に加勢^{かせい}している。

そうだ……俺たちはがんばらなきゃいけないんだ。できることを最大限やらなきゃいけないんだ。

「八前さん……」

「ん？どうした？崎田くん。」

「行きましょう。『Dyson』へ……悠姫のところへ……八前さん言ったじゃないですか。『憎しみはどこかで断ち切らなきゃいけない』って。」

「……ああ、おれはそのため東京へ来た。そのために生きてきた。」

「今がその時です。行きましょう！……瑛士！」

俺は外の瑛士を呼ぶ。瑛士は俺に気付き、曾根崎さんに援護^{えんご}してもらいながらロビーの中に戻って来る。

「崎田、どうした？」

瑛士は少し息が切れている。もう数十体は消しただろう。

「『Dyson』へ行こう。どうすればいいと思う？」

「『Dyson』へは歩いて10分くらいだが、銘鉄丸は4本、しかもキヨさんも連れて行かなければならないことも考えれば歩いて行くのは得策とくさくじゃないな。この状況では。」

外では曾根崎さんが頑張がんばっている。しかし、亡者の数はますます増えるばかりだ。

「得策ではないが、選択肢せんたくしはない。」

俺が言うと瑛士はニヤツと笑う。

「その通り。わかってきたじゃないか、ボンちゃん。」
「ハハッ！」

つい数日前のことなのに、とても久し振りに呼ばれた気がして笑ってしまう。

俺は銘鉄丸を手にし、ロビーの端にある自動ドアではないドアに向かって歩き始める。後ろからは八前さんが美鈴を従えて付いて来る。その後に、えっちゃんとキヨさんが瑛士に守られて付いて来ていた。先頭は俺と曾根崎さんが務めることになる。

「崎田！道はわかってるな？」

瑛士が聞いてくる。

俺は先程瑛士けいしがしたように、親指を立て「楽勝！」と返した。ドアを開けるとそこは地獄だった。

オオオオ……アアアア……
ウオアアア……ウオアアア……

ビルに反響して、亡者たちの声が充満している。もはや、生者はいなくなってしまったように感じる。それでも遠くにパトカーのサイレンやヘリコプターの飛ぶ音も聞こえると少し安心した。

「オオオオオ！」

早速道路の向かい側から亡者が近付いて来る。

「うわああああああっ！」

急に後ろから数人の叫び声がして振り向くと、ロビーにいた人たちが俺たちのあとを付いて来ているのに気付いた。

「ばっ、なに外に出て来てんだよ！」

その人たちに一人の亡者が近付いている。

「オレに任せろ。^{まか}」

瑛士が走って亡者の前に立ちはだかる。
亡者は二十代くらいの若い男だ。

バチッ！

青白く光ったかと思うとその亡者は消える。

「晃！後ろ！」

美鈴に言われ振り向くと、若い女性の亡者がすぐ目の前まで迫っ

ている。青白い顔には生気は全く感じられない。上目遣い^{うわめづか}に俺を睨^{にら}みながら両手を挙げてつかみ掛かる。

バチッ！

銘鉄丸を構えるより早く曾根崎さんがその亡者を消してくれた。

「崎田くん、大丈夫かい？」

「……はい。ありがとうございました。」

俺は曾根崎さんにお礼を言うのと、あとに付いてきた人たちと押し問答^{もんどう}している瑛士のところへ行った。

「あんたたちが行っちゃったら私たちは殺されてしまう！」

「そうよ！どこかに逃げるならあたしたちも連れてって！」

十人ほどのその集団は必死に瑛士に訴える。

「自分たちだけそんない物を持って逃げるつもりか！」

仕立^{した}てのいいスーツを着たビジネスマン風の中年男性が目を血走らせて瑛士に取りすがろうとする。俺が止めに入ろうとすると、八前さんが先に動いた。

「ちょっと待ってください。おれたちは逃げるんじゃないんです。この状況を止めに行くんです。」

八前さんは警察手帳を見せる。

「この通り、おれは刑事です。あいつらは……亡者たちは見たところ

る複雑な機械の操作はできません。ホテルの部屋に入って鍵を閉めていけば大丈夫です。あとはしばらく待ってください。必ず……必ずおれたちが何とかします。」

見捨てられると思い込み興奮していた人たちは、警察手帳を見せられ動揺し始めた。

「そんなこと言っただって、どんどん人が殺されてるじゃないか……隠れてたっていつかは……」

ビジネスマンはまだ不満^{ふまんげ}気だ。

「朝まで……朝まで頑張ってもらえますか？それまでにはオレたちが何とかします。どの道こんな大勢守り切れません。不安な気持ちわかりますがお願いします。オレたちがこれから行こうとしているところはホテルの部屋よりもずっと危険なところなんです。」

瑛士が言うと同時にさっきのドアマンがホテルの中から出て来て叫んだ。

「豊島区が閉鎖されました！みなさんどこにも逃げられませんよ！ホテルには食料もたくさんあります。みなさんお戻りください！」

「何だって!？」

みんなザワザワ話し始める。

「さあ、早く部屋に入って鍵を閉めてください。できるだけ上の階の方が安全です！」

八前さんの呼び掛けをきっかけに、その集団はぞろぞろとホテル

に戻っていく。

辺りには亡者の姿は見えないが、声はまだまだたくさん響いている。揉^もめているところに亡者が集団で襲^もって来ていたらかなり危険だったろう。

集団が全員ロビーに戻ったところで、八前さんがドアマンを呼び止めた。

「ありがとう。君のお陰でみんな助かる。」

ドアマンは微笑み、一礼する。

「みなさん大事なお客様ですから。でもこのロビーは確かに長くは保^もちません。なるべく早く助けてくださいね。」

「ああ。ありがとう。」

八前さんはドアマンと握手する。

プロってこういう人を言うんだなって思った。

「晃！」

美鈴の叫び声にまた振り向くと、前から亡者の集団が角を曲がってくるのが見える。

「瑛士！曾根崎さん！」

俺たちは頷^{うなず}くとその集団めがけて走り出した。
待ってろよ！ 悠姫！



夜の都会に浮かぶ光の柱。

池袋に立つ一際高い高層ビル。

広い敷地に綺麗なイルミネーションが付いたアーチがたくさん並び、トンネルを形作っている。

イルミネーションのトンネルを潜って行くと、ビルの正面玄関が見えてくる。玄関前は車が横付けできるように左右にスロープが伸びている。

普段ならまだたくさんのビジネスマンたちが行き交っているであろうが、今は死体が累累《るいり》と横たわっている。

今ここに生者は自分たちしかないなかった。

玄関の大きな観音開きのガラスのドアは、今は破壊され、大小の破片がイルミネーションの光を受けて七色に輝いている。

次々と亡者たちが出て来る入口からはとても入れそうにない。しかし、俺たちは躊躇せずに進んで行く。

こちらに気付いた亡者たちが近付こうとするが、目の前で急に立ち止まり、左右に分かれ亡者らしからぬ怯えた様子を見せる。

左右の亡者たちを牽制しながら俺たちはビルに入る。

広いロビーは亡者で埋め尽くされていたが、俺たちが近付くとおろおろと左右に下がっていく。すると床に赤くペイントされた文字が見えた。

……『Dyson』

俺たちは百人以上はいると思われる亡者たちに取り囲まれている。俺たちから5mほど離れて丸く取り囲んでいるが、一向に襲ってく

る様子はない。ホテルを出てからずっとこの調子だ。
なぜだ？

襲われないのは願ったり叶ったりなのだが、不気味で仕方がない。
ホテル前では瑛士と曾根崎さんにあんなに襲ってきていたのに……

「瑛士くん……気味が悪いが今は理由を考えるより、この状況を利
用しよう。」

八前さんが小声で提案する。瑛士は周りを取り囲んでいる亡者た
ちを油断なく観察している。

「……そうですね。今は先を急ぎましょう。」

俺たちは正面左手奥のエレベーターホールに向かう。進行方向の
亡者たちがササッと左右に分かれる。すると、エレベーターホール
の前にだれかが立っているのに気付く。亡者とは明らかに纏う霧囲
気が違う。

学生服に金属バット。高校生くらいの坊主頭の男……『庄司明仁』
だ！

「こいつは……かなりヤバイね……」

えっちゃんが呟く。

何百人もの亡者に取り囲まれても平然として顔色一つ変えなかつ
たえっちゃんが怯えている。

「こいつは正真正銘の『本物』の怨霊だよ。怨体なんか比べ物にな
らないくらい強力な怨念を感じる……」

「ほう……お前が剛や信人の言っていた霊能力者か。『S i o n』

に囚とらわれていたらしいが、会えて光栄だよ。」

明仁が不気味に笑う。その目は爛々《らんらん》と紅あかく輝きらいている。

「八前さん、喋しゃべり方が……」

美鈴みすずが囁ささく。

「ああ、ちゃんとした喋しゃべり方だ。間違いなく『本物』らしいな。」

明仁は一步前へ進み出るとバットを構える。

「お前らのバットとおれのバット。どっちが強いかな？ ハアハッハッハッ……」

一声笑ひとこえうと明仁は上目遣うわめづかいに俺たちを睨にらみ、一気に襲いかかって来る！

「みんな先に行ってくれ！ここは僕が何とかする！」

曾根崎さんはそう言うと、明仁に向かって行く。

「そ、曾根崎さん！」

俺と美鈴が同時に叫ぶ。

ガンッ！

しかし俺たちの叫び声も明仁のバットと曾根崎さんの銘鉄丸がぶ

つかりあう音にかき消される。

バチバチバチィー！

明仁と曾根崎さんとの間に青白い火花が飛び散る。

「ぐああ！」

ものすごい力に押され、曾根崎さんが後退る。あとずさ曾根崎さんは1、2歩下がったが銘鉄丸を両手で支え、その場に踏みとどまる。

怨霊にとっては持ち物も身体の一部だ。その持ち物に銘鉄丸が触れても消えないということは、やはり『本物』だ。

「早く！早く行ってくれ！」

くっ！

俺は走り出し、曾根崎さんと明仁の横をすり抜ける。

「晃！」

美鈴が後に続き、瑛士がえっちゃんとキヨさんをかばいながら続いて来た。最後に八前さんが来て全員エレベーターの前にたどり着く。

「晃！助けに行かなくちゃ！曾根崎さん殺されちゃうよ！」

美鈴の気持ちはよくわかるが、俺には曾根崎さんの気持ちは痛いほどわかる。

「美鈴ちゃん、怨霊は悠姫を入れてあと七人いる。約束通り俊夫を

佐伯 瞳が抑えてくれているとしても、あと六人いるんだ。ここで足止めを食っているのは結局みんな死んでしまうんだよ。」

瑛士が俺の言いたいことを言ってくれる。 エレベーターが到着し、扉が開く。

「くっ……」

先にキヨさんを乗せ、美鈴、瑛士、俺、八前さんが乗り込む。『B5』のボタンを押そうとするが、えっちゃんがまだ乗っていないことに気付く。

「えっちゃん！早く！」

俺が叫ぶとえっちゃんはその場に座り込む。

「えっちゃん！？」

俺たちは慌てて駆け寄ると頭の上から声がする。

『アンタたちアタシの身体をエレベーターで乗せてってちょうだい。ちよっとしんちゃんに加勢してくるよ。』

そう言うときまだバットを打ちつけ合っている曾根崎さんの方へ飛んで行く。俺と瑛士はえっちゃんのかなり『軽い』身体をエレベーターに運び込んだ。

「キヨさんありがとうございます。」

瑛士がお礼を言う。キヨさんはエレベーターのドアが閉まらない

ように『開』ボタンを押してくれていた。

「えっちゃん……どうしたんだい？寝てるのかえ？」

キヨさんは俺や瑛士と同じく、えっちゃんの『能力』を見たのは初めてだった。しかも俺たちと違って何の予備知識もなかったんだから、不思議に思うのも無理はない。

「えっちゃんはですね……」

美鈴が説明を始めるとエレベーターのドアが閉まる。閉まる直前見たものは、オレンジ色の光が明仁を取り囲む光景だった。



エレベーターの扉が閉まるとロビーにいる数百人の亡者たちは急に動きが活発になった。

「やはり、仲間の誰かを恐れていたんだな……少なくとも僕とえっちゃん以外の誰か……」

曾根崎は閉じたエレベーターのドアを見てそう呟く。つぶや

明仁は少し離れたところで、オレンジ色の光に包まれて身動きが取れないでいる。

曾根崎はその隙に明仁を攻撃しようとするが、周囲の亡者たちが襲いかかってきた。

オオオオ……アアアア……

亡者一人ひとりは銘鉄丸で何とかなるが、あまりにも数が多過ぎる。

「ちくしょう！このお！」

バチッ！バチッ！バチッ！

近付く亡者を次々と消していくが、このままでは捕まって殺されるのは時間の問題のように思われた。

『やれやれ、手のかかるヤツだね。』

ふいに頭上でえっちゃんの声がして見上げると、えっちゃんがオレンジ色に光りながら浮いていた。

『まずはこのうるさいヤツらを何とかしなくちゃね。しんちゃん、それまでの怨霊を何とか食い止めておいとくれ。』

そう言うといっちゃん光の波になり、亡者たちを飲み込んでいった。

シューウウウウウ！

ロビーに大きなオレンジ色の渦巻うずまききが現れ、数百人の亡者たちを飲み込んでいく。

曾根崎はその隙に明仁に銘鉄丸で殴りかかっていった。

「うおおお！」

明仁もえっちゃんの束縛そくばくがなくなり、バットを構えて待ち構えている。

「へっ！殺してやる！殺してやる！殺してやる！」

ガキン！ガッツ！

銘鉄丸の干渉波で何とか打撃は受けられるものの、明仁のパワーは人間のものではない。曾根崎のバットが普通のバットならば、とつくにはね飛ばされ撲殺ぼくさつされていただろう。

ガキン！ガキン！ガキン！

何合も打ち合う内に、次第に曾根崎は押し切られてくる。

ガキッ、ガキン！

「うわっ！」

曾根崎はロビーの壁に押し込まれ、尻餅いままをついてしまう。

ロビー中央では未だにオレンジ色の大渦巻きが席巻せっけんしており、亡者の数ももう最初の三分の一ほどにまで減っていた。

ガキンッ！ガンッ！カランカラン……

銘鉄丸が弾き飛ばされ、5mほど先へ転がっていつてしまう。

「しまった！」

曾根崎は慌てて取りに走る。

ガンッ！

「ぐああああっ！」

曾根崎の右足に激痛が走る。明仁が曾根崎の右足をバットで打ち砕いた。

「ぐっ……ああああ……」

曾根崎は骨の砕けた右足を引きずり銘鉄丸を拾おうとするが、明仁はすぐに追いつがる。

「はっはあ！これで終わりだ！死ねえ！」

明仁はバットを頭上高く持ち上げ、曾根崎の頭を狙って打ち下ろそうとする。

「くっ！くそっ！」

曾根崎は両手で頭をかばうがそれは無駄なことだと悟さとっていた。曾根崎は死を覚悟して両目を閉じた。

ガシッ！

「うわあっ……ん？」

確実に来るはずの衝撃が来ない。

恐る恐る目を開けると目の前10cmのところに明仁の青白く光るバットが止まっている。

「く、くそっ！こいつら……」

明仁の苦しそうな声がする。見ると明仁は三人の亡者に両手と胴体を掴つかまれている。

「お、お前ら……亡者のくせに……何で俺の邪魔をする……ぐああ！」

一人の亡者が明仁の右脇腹に手を刺した。

ズブブ……

亡者の手はどんどん深く刺さっていき、もう肘ひじまで埋まっている。

『ど、どうだ！仕返ししは返しの仕返しだ……は、はは……』

一人の亡者が歪ゆがんだ笑顔を引きつらせる。

『おい！香取かとり！お前もやれ！』

ズブッ！

もう一人の亡者が左脇腹に手を刺す。

「ぐあああああああ！」

明仁の絶叫がロビーに響き渡る。

「か、香取？じゃあお前はもしかして……」

右にいる亡者を明仁は見る。

「うぐぐ……やっぱりお前は笹木！じゃあ、後ろにいるのは山崎か……！」

『よう、明仁。また遊ぼうぜ。』

明仁の背後にいる山崎は両手を明仁の背中に差し込む。

「ぐあ！ぐああああアアアアアアアア！」

一段と大きな明仁の絶叫がロビーに響く。

『明仁……お前を苦しめ、殺したのは俺たちだ。しかし、お前のしてきたことは俺たちよりもひどいことだ。』

笹木が言うと、香取が続ける。

『しかし、そこまで強い恨みを持たせたのも俺たちのせいだ。だから、俺たちはその責任を取らせてもらおう。』

『……いっしょに地獄に行こうぜ。』

ズボッ！ズズズ……

武骨な顔をした山崎は無表情にそう言うと、差し込んだ両手を一気に貫通させた。

「ぎゃああああアアア……」

三人の亡者たちの手が刺さったところから白い煙が立ち上り始め、焦げ臭い匂いが辺りに充満する。

「くっ……い、今のうちに……」

曾根崎は尻餅をついたまま後退り、銘鉄丸を掴んだ。

『俺たちの贖罪だ！自分の魂を犠牲にして俺たちに力をくれたのは瑞希だ！先に地獄で待ってるってさ！』

「ぐあああ……なに……瑞希……あいつは……確か悠姫に殺されたはず……なんで……あがあ！！」

三人は一気に明仁の中に入っていく、同化した。

バシィッ！

青白い火花が飛び散ったかと思うと、次の瞬間には三人の姿はなかった。明仁がただ一人立ち尽くしている。しかし、身体中からは青白い煙が吹き出していた。

「ぐ……あ……あ……」

大きく開いた目と口からも青白い煙が立ち上り、まるで明仁の魂が抜け出ているように見える。明仁の身体は小刻みにブルブル震え、立っているのがやつのようだ。

「い、今だ……」

銘鉄丸を杖代つえがわりにしてよろよろと立ち上がる。曾根崎は今なら明仁を消せると確信していた。

ロビーではえっちゃんのオレンジ色の渦巻きがようやく沈静化ちんせい化しつつあった。周りに亡者の姿はなく、階段からも新たな亡者が上がってくる気配はない。曾根崎にとって今は千才一遇せんさいいちぐうのチャンスだった。

「くっ……」

コツツ……コツツ……

「ぐ……ぐあっ！……」

コツツ……コツツ……

一歩ごとに右足に激痛が走る。曾根崎はあぶら汗まみれになりながら、死力を尽くして明仁のところへ進んだ。

「こ、これで……し、清水さんに顔向けでき……る……と、俊夫じや……ないけど……清水さんは……許してくれる……よね……ぐあっ！」

あと2mほどのところで滑って転んでしまう。

「くっ……」

曾根崎は立ち上がろうとするが、激痛のため力が入らない。明仁の身体から立ち上ぼる煙も次第に少なくなってきたように思える。

「ま、まずい……せっかく彼らが魂を犠牲にしてまで明仁を弱めて

くれたのに……」

曾根崎は死力を尽くして立ち上がろうとする。

「ぐっ、ぐああああああ!!」

それでも完全には立ち上がれない。

「だ……だめか……」

意識を失いかけ、崩れ落ちそうになると誰かに支えられる。

『だ、大丈夫ですか？頑張ってください……』

失いかけた意識がはつきりしてくる。その声には聞き覚えがあった。

吉祥寺の公園で聞いた声。自分が家まできちんと送って行かなかったため、次の日には変死体として発見された女性……清水沙江子さん……

曾根崎はたくさんの思いがあふれ出して来たが、何も言えなかった。今はやらなければいけないことがある。もう二度とあんな思いはしたくなかった。

「あ、ありがとう、清水さん……少しの間だけ支えてもらえますか？」

『……はい。』

曾根崎は沙江子に支えられ、動けずに震えている明仁の前に立った。

明仁は全身から青白い煙を吹き出しながら、苦悶くもんの表情で曾根崎

と沙江子を睨みつける。

「が……あ……あ……ころ……す……ころ……して……や……る……
…あがつ……があ！」

「僕にはお前の苦しみは理解してやることはできない。でも、お前のしてきたことの責任を取らせることはできる！ 今度こそ迷わず成仏しろ！」

曾根崎は銘鉄丸を両手で振り上げ、力一杯明仁の頭上に振り下ろす。

バチバチバチバチバチバチバチィッ！！

ものすごい音が響き、青白い火花がロビー全体を明るく照らす。
えっちゃんはずでに元の姿に戻り、オレンジ色に淡く光りながら
少し離れた空中に浮いている。

『やれやれ、何とか片付きそうだね……』

銘鉄丸は明仁を真っ二つに切り裂いていた。頭からお腹まで左右
対称に切り裂かれ、切断面からはさらに激しく青白い煙が立ち上
がる。

「が……ガッ……ア……アアア……」

明仁が消滅するのは確実に見えた。曾根崎は最後の力を振り絞り、
完全に真っ二つにしようと銘鉄丸を握る両手に力を込める。

ガッッ！

その時、明仁が自分のお腹にある銘鉄丸を両手で掴んだ。

「ガ……ががが……こ……このまま……消えて……たまるか……消える時は……お前も……道連れだ！」

明仁が叫ぶのと同時に、曾根崎と沙江子も叫んだ。

「う、うわあああああ！」

『きゃあああああ！』

明仁は銘鉄丸を通して怨念を曾根崎に流し込む。明仁の怨念は凄まじかった。

『こ、こりやまずいよ！』

慌ててえっちゃんは銘鉄丸を掴んでいる明仁の両手を引きはがそうとする。

バチイッ！

『うわあああああ！』

えっちゃんは明仁に触れた瞬間、煙のように消滅する。

「がが……がががが！俺の……憎しみを……苦しみを……お前に送り込んで……や、やる！」

「うわあああああ！」

曾根崎の身体は小刻みに震え出す。明仁も全身青白い煙に包まれている。

『きゃあああああ!』

沙江子は明仁の怨念の強さに弾かれ、曾根崎から離れてしまう。

ドサッ!

支えを失った曾根崎はその場に尻餅をつく。明仁の左右に千切れ掛けた上半身が、さらに大きく分かれていく。

「俺は……いじめられ続けていた……まだ殺し足りない……死ね! 死ねえ!」

「ぐ、ぐあああああああ!」

曾根崎はさらに激しく震える。銘鉄丸を握った両手はまるでくっついてるように離れない。明仁の身体は崩れ始まっていた。

じゅうううう……

明仁の怨念は、そのあまりの凄まじさのためか、曾根崎の手のひらを焦がし始める。

「あああ……あああ……!」

曾根崎の手のひらからは白い煙が立ち上り始め、皮膚の焼ける嫌な匂いがした。

『う、うう……アタシ……』

亡者である限り痛みは感じないが、沙江子は明仁の強い怨念のた

めに、全身に強い精神的な痛みを感じている。

しかし、皮肉にも亡者の感じるはずのない痛みのお陰で、沙江子には自分の置かれた状況やなすべきことが明瞭に理解することができた。

『あ、あの人は……！』

沙江子にはこの名も知らない青年が、吉祥寺の公園で他人である自分のために助けに来てくれたこと、自分が殺された後、彼はずっと良心の呵責に苛まれていたことなどが、一気を感じ取れた。

『ア、アタシ……』

沙江子はふらふらと立ち上がり、二人に近付いていく。

沙江子は全て理解した。自分が亡者となり、現世へ来た理由。それは、何となく気になり助け起こしたこの生者が今、死に瀕している原因は自分にあるということであった。

『だからあの女の人はアタシに行くように言ったのね……』

沙江子はそう呟くと、曾根崎の両手を銘鉄丸から引き剥がした。

『あああああゝゝっ！』

沙江子は両手から流れ込んで来る明仁の凄まじい怨念をその体内に吸収していく。

沙江子は明仁の怨念を受け入れ続けた。

沙江子にはわかっていて、このままこの怨霊の怨念を受け入れ続けたら、自分は消滅してしまうだろうということを。しかし、この青年を死なせるわけにはいかなかった。

『自分がこの青年の身代わりになって消滅する』

それが、自分がこの世で人生を送った『意味』であったのだ。

沙江子は男運もなく、ただ何となく生きて突然終わってしまった自分の人生が、初めて意味のある、輝かしいものに思えてきて微笑む。

『ふふふ……付き合ってもいない男のために消えるってのも、アタシらしくていいかも……ね……』

シュウウウウウウウ……

明仁の身体が崩れ落ち、青白い気体となって空气中に四散^{しさん}していく。沙江子の身体も青白く透き通っていく。

「あああっ！さ、沙江子さん！僕のせいでまた……」

曾根崎は泣き崩れる。

『……名前を呼んでくれてありがとう。あなたのせいではないわ。気にしないで……』

消えゆく沙江子が微笑んでいる。

『自分のためなの。あなたに会えてよかった。できればデートとかしたかったな……さよなら……』

沙江子は微笑みながら消えていった。曾根崎には、彼女の悲しいはずの最後の笑顔が、とても幸せそうに見えた。

「くっ……うわああ……沙江子さん……ありがとう……僕は……僕は曾根崎慎太郎といひます……彼女と別れて落ち込んでました……あなたのことがずっと気になってました……よければ……つ、付き合ってもらえませんか……?」

静寂を取り戻したロビーには返ってくるはずのない返事を待つ、曾根崎のすすり泣きの声だけが響いていた。

第16章 萩野祥太

「おじいちゃん！遊ぼう！」

「おうおう、祥太しょうたか。いいよ。おいで。」

ぼくはおじいさん家の大きな玄関から出ていつも遊んでもらっている広い庭に回り込む。玄関先に出て来た時はおじいさん一人だったのに、テラスには田中さんが車イスを準備して待っていた。

「田中さんこんにちは！」

「はい、こんにちは。」

田中さんは看護婦さんなので、いつも真っ白いナース服を着ている。おじいさんは元気だけどまだ治っていないみたいだ。

「車イス……おじいさん具合よくないの？」

田中さんは優しい笑顔でぼくの頭をなでてくれる。

「大丈夫。今日は朝から調子いいみたいよ。『祥太はまだ来ないのかな』って、首を長くしてたわよ。」

「本当！？よかった！な！ペス！？」

「わん！」

ペスは嬉しそうに尻尾を振る。ペスもおじいさんが好きなんだな。やっぱり。

ペスの頭や背中をなでていると、おじいさんが銀の皿にドッグフードを山盛りにして持って来てくれる。

「はい、ペス。おまちどうさま。」

ペスは利口な犬だから、おじいさんが皿を置いて『食べてよし』の合図が出されるまで絶対にがついたりしない。

ぼくがおじいさんを見上げると、おじいさんはパンツと手を叩く。それがぼくとおじいさんで決めた『食べてよし』の合図だった。

おじいちゃんは何の病気かわからないけど、ぼくがまだ小さい時にここに家を建てて時々遊びに来てた。このお家はほんとの家じゃなくて別荘なんだって。

お母さんは、あのおじいちゃんは東京の大きな会社の偉い人だって言ってた。ぼくが「社長？」って聞くと「社長さんじゃなくて会長さんよ」って教えてくれた。ぼくはよくわかんなかったけど、優しくしているんなことを教えてくれるおじいちゃんが大好きで、よく遊んでもらってる。

おじいちゃんは町の大きな病院に行く時以外はほとんど別荘から出かけない。ぼくにはよくわからない『研究』っていうのをしているみたい。「教えて」って言うてもおじいちゃんは「できたら教えてあげる」と言っただけだった。何を作っているのかわからないけど、時々白衣を着た人たちが来ているのを見かける。

ペスはぼくが飼っている犬だ。雑種だけど秋田犬の血が混じっているらしい。大きくて黒いから友達はみんな怖がるけど、ほんとはとっても優しい。ぼくやおじいちゃんの言うことはちゃんと聞き、絶対に人を噛んだりしない。ほんとうに利口なんだ。

桜が咲き始めるころ、一人の男の人がおじいちゃんのところへ来た。でっかい車がおじいちゃんの家駐車場にあった。

いつものように玄関へ行こうとすると、庭の方から大きな声が聞

こえてきた。ぼくは驚いて、ペスに『伏せ』をさせてからそおつと庭に回った。おじいちゃん家の庭に面したりビングルームで、男の人が大声を出しているみたいだった。

「頼む！藤原さん！私はアイツに会いたいんだ！」

男の人は何かを頼んでるみたいだ。

「ちょっと落ち着いて冷静になりなさい、坂巻^{さかまき}さん。あれはまだ未完成だ。実験だってしちゃいない。」

「それはわかってる……しかし、私は許せないんだ……息子は殺されたんだ！自殺なんかじゃない！私は息子に会って真相を聞かなければならないんだ！」

『殺された』？『自殺』？

ぼくは怖くなって静かにそこを離れると、ペスを連れて全速力で家に帰った。

そんなことがあってからは、おじいちゃんに会うのが怖くなってしばらく会いに行けなかった。おじいちゃん家には白衣の人たちがひっきりなしに出入りしていた。

それから一週間後ぼくはおじいちゃん家に久々に遊びに行ったんだけど、おじいちゃん家は留守だった。次の日もまた次の日もおじいちゃんはいない。

「おじいちゃんどうしちゃったんだろうな……ペス。」

「くうくん……」

ペスも寂しそうだ。

ぼくがおじいちゃん家の前でペスと座っていると、きれいなおねえちゃんが歩いてきた。この辺りでは見たことがなかったから不思議に思った。

「こんにちは。」

おねえちゃんの笑顔はとても優しく、何だか安心する笑顔だ。

「こんにちは。」

「わん！」

「こら！ペス！静かにしろ！おねえちゃんがびっくりしちゃうだろ！」

「ふふふ……かわいいわね。ペスって言うの？」

おねえちゃんが頭をなでるとペスは気持ち良さそうに目をつむる。

「……おじいちゃんを待ってるの？」

おねえちゃんがふいにまじめな顔で聞いてくるからぼくは何だか悪いことをしたみたいにドキドキする。

「う、うん……おねえちゃん、おじいちゃんを知ってるの？」

「もちろん知ってるわよ。私のおじいちゃんだもの。」

びっくり！おじいちゃんにお孫さんがいたなんて。そんなこと一度も聞いたことない。

「あ、はじめまして。ぼく荻野祥太です。おぎのこの近くに住んでおじいちゃんにはよく遊んでもらってます。」

「ふふふ……ちゃんとご挨拶できるなんてえらいわね。私は藤原悠姫。おじいちゃんに会いに来ただけけど留守みたいね。」

「うん……もう一週間以上帰って来てないんだ……」

「そう……じゃ、しょうがないわね。私は帰るわ。おじいちゃんが帰って来たら悠姫が来たって伝えてもらえる？」

「うん。いいよ。」

おねえちゃんは優しい笑顔を残して帰って行った。

おじいちゃんが帰って来たのはその三日後だった。

「おじいちゃん！」

夕方、ペスの散歩に出た時におじいちゃん家に寄ったら、ちょうどおじいちゃんが田中さんに付き添われて家に入るところだった。

「おうおう祥太、元気だったか？」

「おじいちゃんどこ行ってたの？ぼく心配したんだからね！」

「それはすまなかったなあ。さあ、お入り。」

雨が降りそうな天気だったから、今日は中に入れてもらった。ペスは玄関にいる。ぼくん家のリビングぐらい広い玄関だから、ペス一匹ぐらいいても大丈夫だ。田中さんが紅茶を用意する間、ぼくはおじいちゃんにこの間のことを話すことにした。

「おじいちゃん、この間おじいちゃんのお孫さんに会ったよ。」

「んっ？悠姫が来たのか？」

「うん。ぼくがおじいちゃんの家の前で座ってたら『こんにちは』って……」

「そうか……悠姫が来たか……」

おじいちゃんはそれからじっと考え事をして、田中さんに声を掛けられるまで何も話さなかった。

ザー……… ザー………

帰ろうとしたら外はすごい雨だった。走って帰れば帰れなくもないけど、かなり濡れるだろうな。

「こりゃひどい。祥太、家に電話してあげるから、家で雨宿りあまやどして行きなさい。」

「うん。ペス、わかったか？お前もいい子にしてるんだぞ。」
「わんわん！」

ペスはわかったって言うようにくるりと一回りする。

雨は夜になってもまだやまない。田中さんが帰る時にいっしょに送ってくれることになって、ぼくはおじいちゃん家で夕ご飯を食べさせてもらうことになった。

「祥太くんがいっしょに食べることになるんだったら、もっとちゃんとしたものにするんだったよ。」

田中さんがカレーライスを作ってくれた。ぼくはおじいちゃんたちと楽しく夕ご飯を食べた。

田中さんが片付けをしている間、おじいちゃんは仕事があると言って書斎に行っちゃった。ぼくはTVを見ていたんだけど、いつの間にか寝ちゃったみたい。気がつくときベットに寝かされていた。入ったことはなかったけど、確か二階のお客さんの泊まる部屋だ。

時計を見たら午後9時を過ぎている。雨はもう止んだみたいだ。

その部屋はおじいちゃんの寝室の隣りで、二階にあった。ぼくは帰らなくちゃと思って階段を降りようとした。すると下から激しく言い争う声が聞こえてきたので、ぼくは思わず階段の途中で止まってしまった。

「お前はなんてことをしてくれたんだ！この大馬鹿者が！」

おじいちゃんだ……あんなに怒ったおじいちゃん初めてだ……

「まさかアイツが裏切るなんて思ってもみなかったんだ！ちくしよ！殺してやる！」

相手は誰だろう？この間来ていた人とは違うみたい。

「とにかくアイツは私を捜している。見つかったらきつと殺される！父さん、私を匿^{かくま}ってくださいませんか？」

「ここは……る。部下のふ……」

声が落ち着いてくると何を話しているのかよく聞えない。ぼくはそうっと降りていって話が聞こえるリビングの入口近くに隠れる。

「アレはどうなったんですか？」

「まだ未完成だ。怨念の強い霊としか話せん。しかも長時間通話をする逆^{さか}にこちらの精神が引き込まれそうになる。アレはかなり危険だ。」

霊？通話？おじいちゃんは何の話をしているんだろう？

「早く完成させてください。アイツに……鬼島に対抗するには『子^{おん}音』が必要だ。」

「……わしゃ権力闘争に『子音』を使うつもりはない。人々の心の安定に寄与きよしたいだけだ。」

「とにかく早く完成させてください。いつぐらいにできますか？」

「わからん。出力を今以上上げるのにはどうしたってもっと電力が必要だし、実験だって……しかも、鬼島がそれをさせてくれんかも知れん。」

「父さん、私は海外に飛びます。完成したら連絡をください。それに……悠姫をよろしくお願いします。」

リビングから人が出て来る気配を感じてぼくは慌あわてた。

ぼくは階段の裏に隠れた。おじいちゃんの息子さんはバタバタと慌ただしく出て行ってしまう。

ぼくはしばらく経たってからリビングに、今起きたばかりという風を装よそおって入って行った。

「おじいちゃん誰かお客さん？」

ぼくを見ておじいちゃんは動揺しているみたいだった。

「あ、ああ、祥太か。まだいたんだったな。お母さんには電話をしておいたから、田中さんに送って行ってもらおう。すっかり遅くなっってしまったって悪かったな。」

「ううん、いいよ。おじいちゃんまた遊びに来てもいい？」

「あ……ああ、いいとも。いいともさ。」

その夜は田中さんの車でペスといっしょに送ってもらった。

それからの一週間は、おじいちゃんはずっと家に引きこもっていて、結局会えなかった。

5月の連休が終わってぼくが久しぶりにおじいちゃんの家に行く
と、田中さんだけだった看護師さんが三人に増えていた。おじい
ちゃん具合がよくないのかな？

ぼくはおじいちゃんとリビングで話していたんだけど、スーツ姿
の男の人達は何人もやってきた。

「坂巻長官が殺された。お前の仕業しわざか。」

男の人たちは怒っているみたいだ。

「ちょっと待て……祥太、今日はもう帰りなさい。」

ぼくは怖かったけどおじいちゃんが気になって、看護師さんたち
に見つからないようにまた階段の陰に隠れた。

「殺されたって誰に殺されたんだ？」

何だか怖い話をしてる……

「坂巻長官はご自宅の自室で亡くなられていた……バラバラにされ
てな。」

「な、何だと!？」

「自室のデスクにはパソコンが付けっ放しになっていた……画面に
は何も映ってはいなかったが、履歴では最後にアクセスしたのがお
前の会社のホストコンピュータということがわかっている。」

「なんという……なんというバカなことをしたんだ……」

リビングからは物音一つしない。キッチンに近いゲストルームか
らは、看護師さんたちがお喋りしゃべりする声が漏れ聞こえてくる。

「……しかし『子音』のアクセスコードはわしか息子の^{だうい}大悟しか知らんはず……」

次の瞬間おじいちゃんの息をのむ声が聞こえた。

「あの馬鹿息子……まさか鬼島にそこまで教えておったんじゃ……」
「何の話かわからんが、坂巻長官とお前の会社の社長とはここ数日よく密会していたようだ。」

「くっ……やっぱり……」

「坂巻長官を殺したのはおそらく……息子の信人くんだ……」

おじいちゃんの声はだんだん小さくなっていく。

「ありえない！ご子息は一か月以上も前に亡くなっている……首を吊って自殺してな。」

「だからだ！……『子音』は死者との交信を可能にするシステムだ……しかし、出力が安定せず、死者の怨念のみが抽出^{ちゅうしゅつ}されてしまうのだ……」

よくわからない言葉が多いけど、だいたいはわかる。おじいちゃんは死んだ人とお話するコンピュータを発明したんだ……

「信じられん……」

男の人たちが驚く様子が伝わってくる。

「坂巻長官は信人くんを愛しておられた……きつと恨みを晴らしてやりたかったんだろう……」

ブーン……キキィィ！

また誰か来たみたいだ。車の停まる音がした。

ドンドンドン！

呼び鈴を鳴らさずに乱暴にドアが叩かれる。

「はいはい！誰でしょうねえそんな乱暴に叩かなくてもいいじゃない……」

パタパタとスリッパの音を鳴らしながら田中さんが玄関に向かう。ぼくは見つかりそうになったから、階段下の物置に隠れる。中は埃^{ほこり}っぽかったが、ぼく一人は隠れる隙間^{すきま}はあった。

「はいはい、どちらさ……」

パアン！……ドサツ！

田中さんが倒れた。額^{ひたい}からは血がどくどく出てて、顔は驚いた表情のまま。続いて拳銃を持ったスーツ姿の人たちが入って来る。

ドカドカドカドカ！！

「な、何だ！？キサマらは！」

パンツ！パンツ！タタタタタタタタ！

拳銃やマシンガンのようなものを撃つ音がする。

ガチャン！パリン！

ガラスや部屋の中のものが壊れる音がする。

今のうちに逃げなきゃ！

銃を持った男たちはおじいちゃんたちのいる部屋と看護師さんたちの部屋にいるから、玄関先には誰もいない。外に繋い^{つな}でいるペスは大丈夫かな？銃声や物が壊れる音でペスが鳴いてるかどうかかわからない。

ぼくは男たちがいないのを確認して物置から飛び出す。玄関を出るとペスはまだ無事だった！

「くうくん……」

「ペス！よかった！無事で！早く逃げよう！」

家の中からはまだ時々拳銃の音がする。

「ペス、鳴いちゃダメだぞ。見つかったら殺されちゃうからな。」

ぼくはペスのリードを結んでいた門扉^{もんび}から外して駆け出した。

ドオン！

おじいちゃんの家から少し離れた時、おじいちゃんの家からものすごい音がして、一気に火が燃え上がる。すっかり暗くなった空に花火のように火の粉が舞い上がり、灰となって周囲に広がっていく。

「あそこだ！誰か逃げたぞ！」

おじいちゃんの家から数人の男の人たちが、ぼくたちを見つけて追いかけて来る。

「ペス、まずい！見つかった！走れ！」

ぼくとペスは全速力で走って逃げた。でも大人の男の人には敵^{かな}わない。あつという間に追い付かれる。

「止まれ！止まらなと撃つぞ！」

嘘だ。止まっても撃つくせに。おじいちゃんたちを、走って逃げたわけじゃないのに撃つたくせに。
撃たれる！

「ガルルルル！」

そう思った瞬間、ペスが先頭の男に飛びかかった。

「ペス！」

「うわあ！何だ！この犬は！」

男たちは突然の出来事に驚いている。
ペスに飛びかかれた男はペスといっしょに道路を転げ回っている。

「ガルルルル……ガウツ！」

ペスは絶対に人には噛^かみつかない犬だ。そのペスが人に飛びかかるなんて……

「このゝ離れろ！クソ犬！」

周りの男たちはペスが男と絡^{から}み合っている状態なので、拳銃は使

えないみたいだ。逃げるなら今のうちなんだけど、ペスを置いて逃げるなんてできない！後少しでぼくん家だけど、あいつらはぼくの両親まで撃つかも知れない。

ぼくがぐずぐずしていると、ペスが「早く逃げろ」と言うようにひとこえ一声吠える。

「わん！」

ペスは怒っているようにも見える。

逃げなきゃ。ペスはぼくなんかよりずっと強いし、足も速い。きっとぼくが逃げても、すぐ追いついて来てくれる。

「ペス！先に行くよ！すぐにおいでね！」

走り出すぼくの目には、ペスが「さよなら」を言っているように見えた。

ぼくには逃げるあてなんてなかったけど、とにかく遠くに逃げて隠れるつもりだった。

ペスが心配だったから、散歩でよく行く公園へ逃げればきっとペスが後から来てくれると思いついた。

おじいちゃんの家はもう完全に炎に包まれている。走りながら涙が出て来てふと立ち止まるとまぶしい光に包まれる。

ブウウーーン！

ドガッ！

気がつくともぼくは空中に浮いていた。

不思議と時間がゆっくり流れているように感じる。車にはおじい

ちゃんの家を襲った男たちが乗っている。そしてどこかでペスの鳴き声が聞こえる。

「わん！わん！」

一瞬目の前が暗くなって全身に激しい衝撃が走ると、次の瞬間にはぼくは固い道路に横たわっていた。

誰かの叫び声が聞こえる。

救急車のサイレン……ペスの声……おじいちゃんの声……

何も聞こえない……

ぼく……しぬの？

目は見えないけど、ペスがそばにいるのはわかった。



エレベータのドアが開くと、通路には亡者がひしめいていた。コンピュータルームへ至る通路はかなり広いのだが、床は全く見えな
い。

亡者……亡者……亡者……

しかし彼らが襲ってくることはなさそうだった。

「やっぱりヘンよね。まるで誰かを恐れてるみたい。」

美鈴は銘鉄丸を構えながら、キヨさんの隣で警戒しながら眩く。
えっちゃんがない間キヨさんを守るつもりみたいだ。

オオオオオ……

亡者たちは後ずさりながら、俺たちから離れて行く。

俺たちを見て一瞬動きを止めた亡者たちだったが、階段近くのヤツらは、上の階へ上がり始めている。

「曾根崎……大丈夫かな？」

ぞろぞろと列をなして階段の方へ歩く亡者たちを見つめながら、八前さんが^{つひ}呟く。まるで俺たちがいないかのように亡者たちは歩いているのだが、声をひそめてしまうのはしょうがないだろう。

「えっちゃんが付いてるから大丈夫よ……きっと。」

『大丈夫』と言いながらも美鈴は^{ふあんげ}不安気だ。

俺にもその気持ちはよくわかる。

こうやって一人ずついなくなっていつてしまうんじゃないか。

俺だってそんな不安を感じているからだ。

尽きることのないように思えた亡者の列が途切れたのは、それから数十分過ぎてからだ。現在午後9時を回ったところだから、残り時間は5時間を切ったことになる。

コンピュータルームはここからさほど遠くはないが、明仁のように怨霊が襲ってくる可能性を考えれば残り時間などさしたる意味はないように感じられる。

せっかく俺たちを避けて^さくれている亡者を刺激しないようにエレベータホールの隅^{すみ}っこに固まっていた俺たちだったが、亡者の列が切れたのを見計らって動き出す。

「もう誰もいないようだな。」

八前さんが安堵あんどすると、瑛士は急に立ち止まる。

「……」

「どうした？ 瑛士？」

俺は瑛士の顔を覗き込む。瑛士は緊張した面持ちで、通路の奥を凝視ぎょうししていた。

俺は不思議に思って瑛士の視線を追うが、薄暗がりの通路はリノリウムの冷たい光を放っているだけだ。

「瑛士……いったいどうし……」
「しっ！」

瑛士は口到人差し指を当て、耳を澄ましている。

「聞こえないか……？」

……ウ……ウ……

「……何かいる！」

美鈴は小さく悲鳴を上げる。

……ウ……ユウ……

……ヒユウウ……ヒユウウ……

細く息を吐き出すような音が聞こえる。

チッ……ヒユウウ……チッ……ヒユウウ……

何か小さくて固い物が床に触れる音も交じる。

「瑛士くん……この音は……」

八前さんは拳銃を構え、美鈴とキヨさんを庇うようにしている。
えっちゃんの身体は危険を避けるためにホールの隅に座らせてある。

チツ……チツ……チツ……

ヒュウウ……ヒュウウ……ヒュウウ……

青白い非常灯の光の向こうから、何か大きなものが近付いてくる。
次第に全容が見えてくると、俺たちは息をのんだ。

「きゃあああああ！」

『その姿』が見えると美鈴が耐え切れず悲鳴を上げる。

仮にその声を聞きつけて亡者が戻って来たとしても俺たちはきつと今 目の前に現われた『コイツ』に対してほど、恐怖は感じないだろう。

それは……

体長5mはあろうかという、巨大な『黒犬』だった。
目は燃えるように紅く輝き、温度さえも感じさせる。
大人の頭でさえひと飲みにできそうなくらい大きな口からは、数十センチ以上の乱杭歯が突き出ている。

「ヒュウウ……ヒュウウ……」

黒犬は細く長い呼吸音を出しながら俺たちから5 mほど離れたところで静止した。

「え、瑛士……あれって……」

震えてうまくしゃべれない。黒犬の放つ凶暴さが容易に想像できるからだ。

「ああ……最後の『Si on』メンバー、『怨^{おん}噛』だ。」
「バオオオン!!」

ビリビリと空気を震わせ、黒犬が一声吠える。今にも襲って来そうな気がして、俺は身を固くする。

「待て! ペス!」

犬の脇から小さな影が出て来る。小学生くらいの男の子だ。顔は青白いものの、今まで会った『Si on』のメンバーよりは怖い感じはしなかった。

「おにちゃんたち、ここから先には行かせないよ。」

その男の子の怨霊は、微笑みを浮かべている。

「お、お前は誰だ?」

俺は震えながら聞いた。

「ボク？ボクは祥太。この犬はペスだよ。悠姫おねえちゃんには手を出させないからね。」

先に進みたくても、ペスというらしい黒犬の怨霊が通路を塞いでいる形になっているので進めそうにもない。

「瑛士……どうする？」

俺は小声で瑛士に聞く。状況を考えればこの場で戦えるのは俺と瑛士だけだろう。

八前さんは片腕しか使えない。キヨさんは高齢で、美鈴は女の子だ。常識的に考えれば俺と瑛士の二人で戦うべきだろう。

しかし、まだ信人、剛、孝、美那の四人の怨霊が待ち構えていることが予想される。ここに俺たち二人が残り、先に三人を進ませる方が非常識だろう。ここはみんなで協力して戦った方がいいかも知れない。

「崎田。」

唐突に瑛士が呼ぶ。

「な、なんだ？」

「ここは俺が残る。何とか隙を作って突破口を開くから、お前はみんなを守って先に行け。」

「そ……そんな……」

隣りで聞いていた美鈴も息をのむ。

「そんな……瑛士さん……ここまでいっしょに来たのに……」

瑛士はいつものように、眼鏡の奥できらりと目を光らせる。

「美鈴ちゃん、心配いらないよ。俺には取っておきの勝算があるんだ。」

俺は即座にその嘘を見破った。そんな勝算などあるはずがなかった。

しかし俺はその事に突っ込まなかった。現実問題としてこれが一番いい形だと思ったからだ。

俺は悠姫と対峙したかった。悠姫を倒せるならば、差し違えてもいいと思っている。

「瑛士……わかったよ。お前がそういうなら信じるよ。」

俺はあえて瑛士に騙された。

美鈴と八前さんは何か言いたそうだったが、止めても無駄だという空気を察し何も言わなかった。

「それにしたって瑛士、どうやって隙を作る？」

瑛士は黒犬ペスと祥太を注意深く観察している。

「おかしいと思わないか？ 今までの怨霊や怨体は問答無用で襲いかかってきたのに、アイツらはじっとして動かない。」

瑛士が怨霊を見据えながら言う。

「……瑛士、たぶんなんだけど……」
「何だ？」

「あの『祥太』って怨霊が言ってた、『悠姫おねえちゃんには手を出させない』っていうのはあくまでも『攻撃に対する防御』ってことかも……」

「そうなるオレが悠姫にとって危険な存在だと思わせればチャンスができるな。」

瑛士はにやっと笑い、カバンからダイナマイト1本を取り出す。銘鉄丸を両手に握り、ダイナマイトはわざわざ見えるように上着の胸ポケットに差し込んだ。

「みんなはさっきの場所にいてくれ。オレがあいつらをおびき寄せる。」

瑛士の顔は緊張した笑顔がぎこちない。

「瑛士……死ぬなよ。またエロサイト教えてもらわなくちゃならないからな。」

俺は親指を立てる。

「ああ……どぎつい教えてやる。」

瑛士も親指を立てる。

「楽勝！」

俺たちはそのままこぶしを突き当てる。

こうしている間にも外では亡者たちが好き放題暴れている。俺たちには感傷に浸^{ひた}ってる暇はなかった。

「瑛士さん……絶対……絶対生き延びてね。」

美鈴は目に涙を浮かべながら瑛士と握手する。

「瑛士くん……後はおれたちに任せろ。絶対に終わらせる。」

八前さんが右手を差し出す。瑛士は黙って握手する。瑛士の笑顔はもう緊張していなかった。

俺たちが無事ホストコンピュータを破壊できればそれだけ瑛士の生存率が高くなる。先に進むことが瑛士への援護射撃になる。

離れていても俺たちは共に戦っているんだ。

瑛士はゆっくりと祥太たちの前に進む。それに合わせるように俺たちは後ろに下がる。俺と八前さんは銘鉄丸をそれぞれ構え、美鈴は干渉波スタンガンを構え、キヨさんを守るようにしている。タイミングが大事だ。

「おい！これが見えるか！」

瑛士はじっとして相変わらずひゅうひゅう細く息を吐き出している黒犬と少年の前に進み出ながら、ダイナマイトを見せつける。

「ダイナマイトだ。お前の大事な悠姫のいる『Sion』をこれで爆破する。邪魔するならしてみろ！」

その瞬間は速かった。ペスは数メートルはあった瑛士との距離を一気に詰め、瑛士に真っ直ぐ飛びかかった。

「うわっ！」

間一髪瑛士は壁に身を寄せ、ペスの攻撃を避けた。

全く動きが見えなかった……あの図体でなんて速さだ。

瑛士……

俺は瑛士を一人にしたことをすでに後悔し始めていた。

ペスはエレベータホールの反対側まで行ってから向き直る。ちょうど瑛士を祥太とペスで数メートルの間隔で挟んでいる状態だ。

今はまだだめだ。このまま飛び出しても祥太が待ち構えている。どんな力を持っている怨霊かわからないが、迂闊に飛び出して結局みんなやられては意味がない。

瑛士はペスを凝視していたが、いきなりくると向き直り、祥太に向かって走り出す。

「うあああああ！」

ぶんっ！

瑛士が思いっきり銘鉄丸を横殴りに振り払う。しかし、空を切るだけだった。

祥太は瑛士に攻撃を加えるでもなく、軽く空中を跳んでペスの隣りまで移動する。

チャンスだ！

「今だ！」

俺は小さく叫び、美鈴とキヨさんを先に行かせる。

続いて八前さん。一番後ろは俺が守る形になる。

「うわあああああ！」

瑛士は銘鉄丸をブンブン振り回し、ペスと祥太が俺たちを追って来られないようにしている。

俺の目には涙が浮かんでいた。あのクールでいつも余裕のあった瑛士が必死の表情で銘鉄丸を振り回している。

そうだな。どんなにクールで頭がよくたって、所詮まだ俺や美鈴と同じ大学生だもんな。きっと怖くって仕方ないんだろうな……

俺が悠姫や剛、野口を前にした時はあんなに勇気を出せなかった。怖くて怖くて……でも俺のそばには仲間がいた。瑛士……御手洗さん……今 瑛士は一人ぼっちだ。あのバカでかい犬と不気味な少年の怨霊を相手に、一人ぼっちで戦っている。俺たちのために。

瑛士……絶対俺が助ける！それまでがんばれよ！絶対やられるな！俺は走りながら涙を拭く。十メートルほども走ると、曲がり角にたどり着く。

キキキキキ……

曲がり角を右に曲がり、数m走ると後ろでシャッターの下りる音がした。

「あ……瑛士！」

「崎田くん！だめだ！」

俺が瑛士のところに戻ろうとすると、八前さんに後ろから腕を掴まれた。

「瑛士くんがどんな思いで残ったと思うんだ！今 君が戻って瑛士くんは喜ぶと思うか！？」

八前さんの言葉が胸に突き刺さる。

八前さんの言う通りだ……

「くっ……瑛士……」

キキキキキキ……

金属の擦れる嫌な音をさせて鉛色のシャッターが下りる。

キキキキキキ……ガシャン……

扉が完全に閉まると、俺はその場にへたりこんでしまった。

ガンッ！

「瑛士……ううっ！」

ガンッ！

静まり返った薄暗い廊下に、俺がシャッターを叩く音が響く。

……グズッ……グズッ……

「うううっ……」

そして美鈴のすすり泣く声が重なる。

「崎田くん……行こう……ぐずぐずしていたら……」

「感動の別れだな。」

八前さんの言葉に聞いたことのある高い声が重なる。俺たちがは

っとして振り向くと、そこには“ヤツ”が立っていた。



「ハア、ハア、ハア……無事進めたようだな……」

瑛士の前にはペスがおり、そのすぐ後ろには祥太が立っている。まるで祥太を守っているように見える。瑛士は時間を稼ぐ方法を考えていた。

エレベータで上に逃げるか？……いや、だめだ。それでは崎田たちが追いかけてしまう。

それにエレベータのそばにはえっちゃんの身体がある……今は死体と変わらない状態だから大丈夫だと思うが、ヤツらを近付けさせない方がいい。

それでは戦うか？数分間なら時間は稼げるが、すぐに殺されてしまうだろう。結果は同じだ。

とすれば、両方選択すればいい。

殺されずに時間を稼げて、崎田たちが追いかけれない方法……

『逃げながら戦う』……これだ。

瑛士は銘鉄丸を構え、じりじりと階段の方へ移動する。先ほど無数の亡者が上がって行った階段である。

瑛士が階段をチラッと見た瞬間ペスが飛び掛かってきた。

「ガアアアアッ！」

「くっ！」

瑛士は横っ飛びし、階段のところまで滑り込む。

「くっ……っっ！」

瑛士の右肩にはペスの爪によって切り裂かれた傷が一本、赤い線
を引いていた。

瑛士が肩の痛みに顔をしかめると、ペスは猛烈な勢いで瑛士に飛
び掛かる。

「うあっ！」

瑛士は『死』を覚悟し、左手で顔を覆う。

……襲って来ない？

不思議に思い、恐る恐る目を開けるとペスの牙の並んだ口腔が、
目の前数cmのところであつと開いたまま静止している。

「う、うわあああああ！」

瑛士は尻餅をついたまま階段を数段上がる。

「グ……グルルル……」

動きの止まったペスは苦しそうに見える。

わけがわからないまま瑛士が階段の手摺につかまりながらよろよ
ろと立ち上がると、ペスの横腹に『腕』が生えていた。

いや、生えていたのではなく刺さっている。その腕の持ち主は女
子高生だった。

「さ……佐伯 瞳……か？」

「はじめまして……よね？新堂瑛士さん。」

ズボッ！

瞳はさらにもう一方の左手もペスの横腹に突き刺す。

「ガアッ！カハッ！」

怨霊であるためか、血が出たりはしないがペスはかなり苦しそうだ。

ドンッ！

「ぐっ！」

ドガッ！

すると突然 瞳に小さな影がぶつかって、瞳は階段下の踊り場まで突き飛ばされる。

「ペスをいじめるな！」

祥太だった。

祥太はよろよろしているペスと共にエレベータホールへ出て行く。瑛士もふらふらと壁で身体を支えながら後を追う。

疲れと緊張、そして腕の痛みと出血により、たった数mをやったことで歩き瑛士はエレベータホールに出る。

同じように今にも倒れそうなペスを支えた祥太がエレベータを挟んだ反対側の壁際に立って、瑛士を睨^{にら}んでいる。

「瞳おねえちゃんは何で邪魔をするんだ？同じ『S i o n』の怨霊なのに！同じ悠姫おねえちゃんの友達なのに！」

祥太は怒りに震えている。ペスは隣りで弱々しく“お預け”^{あず}状態で座っている。

「オ、オレにもわからない……し、しかし、ただ一つ言えることは悠姫は間違っているということだ……」

瑛士は苦しそうに言う。

「そんなことない！悠姫おねえちゃんは間違っ
てなんかない！おねえちゃんはお父さんのために……」

「そ、そうよ……悠姫は悪くない。ただ、きつかけを作ってしまっただけ……」

階段から瞳が出て来る。

「悪くない？お父さんのため？きつかけ？……」

瑛士は瞳と祥太を交互に見た。

「祥太くん……ペス……だからこの人達を助けてあげて……悠姫を救えるのはこの人達だけよ。」

「救う？」

瑛士は混乱し始めていた。

「ちよっ……ちよっと待ってくれ、瞳。どういうことだ？説明してくれ……」

瑛士は聞きたかった。

悠姫はこの世に恨みを持って死に、怨霊となった。そして『Si on』を作り、人間に復讐をしようとしていたのではないのか？現に御手洗さんや崎田からの話では、佐伯 瞳は悠姫に敵対する立場であつたはずだ。

「イヤだ！この人達は悠姫おねえちゃんをいじめようとしている！そんなことはさせない！」

祥太の目が紅く輝きだした。瑛士は、これは危険信号だと感じていた。

パンツ！

祥太が手を叩くと微動びどうだにしていなかった。ペスが急に瑛士に向かって動き出す。

ガンッ！

ペスの動きに合わせて瞳がペスの前にすばやく回り込み、強烈な力でペスを殴り飛ばす。ペスは通路の壁に激突する。

「ペス！このお……次は僕だ！」

祥太は瞳に攻撃するように見せかけくると向きを変え、瑛士に襲いかかる。

「うわぁぁぁぁぁ！」

瑛士が叫んだ時、突然小さい影が祥太との間に現われる。

「祥太、君はぼくが相手だよ。」

「俊夫！間に合ったのね！」

瞳は瑛士を守るようにして立っている小さな影を見て、嬉しそうに声を掛ける。

「くっ！」

祥太は急停止し、俊夫を睨みつける。ホール横の通路ではペスが瞳に飛び掛かるところだった。

「ガオウッ！」

一気に数mを跳躍したペスは瞳を組み伏せようとするが、瞳は素早く身をかかわす。

ペスの着地と同時に横に回り込んだ瞳は、先ほどとは反対側の横腹に左手を突き刺す。

「グアッ……カハア……」

ペスの口から白い煙が立ち上る。瑛士には人間でいうところの血液のように感じられた。

「ああっ！ペス！」

祥太はそう叫ぶと、俊夫に体当たりを仕掛ける。

ドガッ！

俊夫は受け止めるが、あまりの勢いに瑛士の方へ吹き飛ばされる。

「ぐあっ……っ……」

瑛士は俊夫の冷たい身体を受け止めるが、左手の傷のため支え切れず俊夫とともに後ろへ崩れ落ちる。祥太はその隙に瞳に向かって瞬間的に移動する。

ザグッ！

隙を突かれた瞳の背中に祥太の両手が突き刺さる。

「きゃあああああ！」

冷たい通路に瞳の絶叫が響く。

ペスは一度奥に下がり、体勢を立て直してから瞳に襲いかかる。

「ガ、ガオオオオッ！」

「瞳！」

瑛士がよろよろと走り出す。

「おねえちゃん！」

俊夫は走らず空中に飛び上がり、一気に『広がった』。

狭くはないエレベータホール天井は虫で埋め尽くされる。

カブトムシ、クワガタ、セミ、トンボ……

俊夫が生前好んで採取していたであろう虫たちがホールいっぱい

に飛び立ち、瑛士は耳鳴りがするほどであった。

ブーンブーンブーンブーン……

黒い雲霞^{うんか}が津波のように祥太に襲いかかる。その時大きな影が虫たちと祥太の前にすばやく割り込む。

ペスだった。

祥太の攻撃により瞳の腕が抜け、消滅しそうになりながらも飼い主である祥太を守るために最後の力を振り絞っているように見える。

ザアアアアアア……

無数の虫たちが、ペスの巨大な体躯^{たいく}をさらに巨大な塊へと変貌^{へんぼう}させる。わずかに見えるペスの身体からはすでに白い煙が大量に噴き出しているのが見えた。

瑛士は力を振り絞り、ペスに氣を取られている祥太に銘鉄丸を振り下ろす。

「うわあああああ！」

ザシュツ！

祥太の右肩に銘鉄丸は食い込み、上半身の半分まで大きく切り裂く。

「ぐあああああ！」

祥太は叫び、瑛士の方を振り向く。

ザシュツ！

さらに、口から白い煙を大量に吐き出しながら瞳が祥太を攻撃し、瞳の両腕が祥太の背中に肘まで突き出す。

「がっ！がはあ……う……う……」

祥太の口から出る白煙の量が倍増する。

「うあああああああ！」

瑛士は最後の力を振り絞り、銘鉄丸を両手で押し下げた。

ザクウ！

祥太の身体は二分にぶんされ、左右に分かれる。祥太の左右それぞれの身体は床に倒れる前に白い気体になって四散しさんしていく。

シュウウウウウ……

瑛士が音のする方を見ると、虫たちが次々とペスの巨大な身体に潜り込んでいく。そして次々と白い気体となって蒸発していく。それに合わせてペスの身体もまだらのように穴が開いていく。

「と……俊夫……」

瞳が口から白煙を上げながら呼びかける。

「おねえちゃん……先に……いつてるね……ペスも……祥太も……
今度は仲良く……遊べるかな……」

俊夫の微かな声^{かす}がペスの断末魔^{だんまつま}の叫び^まに混じって聞こえてくる。

ジュウウウウウウ……

まるで温度を感じない白い大量の煙が沸^わき起こり、ペスと虫たちの姿を覆い隠す。

煙が晴れるとそこには何もない空間があるだけだった。

「ハア……ハア……ハア……」

ガラッ！

瑛士は銘鉄丸を取り落とし、両膝から床に崩れ落ちる。

「ひ……瞳さん……ありがとう……」

肩で息をしながら瑛士は瞳を見やる。瞳はかろうじて立ってはいたが、その姿はすでに透き通り、消滅するのは時間の問題のように思われる。

「し……新堂さん……悠姫は……いえ、悠姫も……被害者なの……
『真実は裏側にある』わ……崎田さんを……止めて……そうすれば
……」

瞳はそういうと静かに目を閉じ、瑛士と同じように崩れ落ちる。

「なにっ……裏側？……崎田がどうしたというんだ!？」

瑛士の叫びもむなしく、瞳は静かに消えていった。

第17章 諫早江津子

「っっ！」

折れた右足の激痛をこらえ、僕は玄関ホールからエレベータに向かう。清水さんの死、いや、魂の消滅か、を無駄にしないためにも僕は行かなければならない。

きっと下でも怨霊は待ち構えている。崎田くんたちに少しでも協力することが、清水さんのためになるはずだ。

ズ……ズ……

左足で少しずつ前に進む。進むたびに右足に激痛が走る。銘鉄丸を支えにするが、高さに支えとしては低いいため、固い床で滑ってしまう。

ズ……ズ……カツッ！

「あっ！」

ガランガランガラガラ……

転んだ拍子に銘鉄丸がエレベータの方へ転がっていつてしまう。

「くそっ！」

汗でまとわりつく前髪を乱暴にかきあげてエレベータの方を見据^{みす}えると、階数を示すランプが点滅していることに気がつく。

「なんだ……？だれか下りてくるのか？」

エレベータのランプは30階、29階……とだんだん下りて来ている。

この建物は亡者が最初に出てきた場所のはず。まだ逃げ遅れて残っていた人がいるのか？それとも、怨霊か？怨霊がエレベータを使うのか？

どきどきしながらランプの点滅を見ると、とうとう1階にエレベータが到着した。

チンッ！

場にそぐわない軽い音がしてエレベータが止まる。ゆっくりと扉が開くと、『その人物』は銘鉄丸を拾い上げ、僕に笑顔を向ける。

「へへっ、曾根崎さん、大丈夫ですか？」

「き、君は！？」



「お、お前は！？」

俺は銘鉄丸を構えたままシャッターの方へ下がる。隣りでは八前さんが銘鉄丸を構え、俺の後ろに美鈴、美鈴の後ろにはキヨさんがいる。

「崎田くん……こいつは……」

「はい……最悪のヤツです……」

黒い長髪に面長の細面、『あだち充』のキャラクターTシャツにGパン。

上越新幹線で“怨体”に会っただけだが、武蔵野署署員200名以上を殺したのはこいつと信人だ。

「西丸 剛……」

俺が呟くと剛は口をにやあっと開き、その凶悪な微笑みをさらに歪ませる。

「はあ〜はっはっはっ！あいつはいないのか？」

新幹線の時と違って目は紅くはない。しかし、全身から放出される鬼気と言おうか、靈気のような雰囲気は“怨体”の比ではない。

「シンドウとかいうイケメン野郎は俺が殺したかったんだがなあ！……しょうがない、みんな殺してやるよ！」

以前のようなたどたどしい話し方ではなく、はつきりとした話し方が“怨体”ではなく“本体”だと証明している。

「崎田くん、剛は……」

「はい、わかってます。剛は『怨滅』……頭を狙ってきます。」

「後ろの二人は武蔵野署で殺しそびれたからなあ！んっ？そのババアは誰だ？」

「アンタには関係ないでしょ！このオタク野郎！」

美鈴……強いな……

「くっくくく……相変わらず元気のいい女だな。今度はあの変な……」

キキキキキキ……

剛の言葉を遮る^{おさへど}ように、閉まったばかりのシャッターが再び開き始める。

キキキキキキイイイイイイ……

「ん？なんだ？折角^{せっかく}俺が閉めたシャッターを誰が開けてるんだ？」

やはりこいつが閉めたのか……さしずめ退路を絶^たって皆殺^{みな}しにで
もしようとしたんだろう……

「ハア……ハア……ハア……」

シャッターの向こう側に立っていたのは瑛士だった。

「瑛士！」

「瑛士くん！」

「瑛士さん！」

俺と八前さんと美鈴がそれぞれ叫ぶ。見ると瑛士の右肩は血だらけだ。

「大丈夫？無事だったのね……」

美鈴が辛うじて壁に寄り掛かって立っている瑛士を支える。

「あ、ああ……何とかね……佐伯 瞳と俊夫が助けてくれた……自分を犠牲にして……」

瑛士が悲痛な声で言うと、剛が笑い出す。

「はあゝはっはっはっ……何だ、あの犬っころやられたのか! 『僕は悠姫おねちゃんの親衛隊だ』とかほざいてた割りには存外だしねえな。裏切り者の姉弟にやられるとはな!」

剛は笑顔をさらに醜悪に歪めて近付いてくる。

「笑っていられるのも今のうちだ……次はお前の番だ!」

俺は銘鉄丸を構えるが剛は意に介さず近付く。

「はあ!?! 次は誰だって?」

剛は俺の目の前までずんずん近付いて来ると、むんずと銘鉄丸を掴む。

シューウウウウウ……

剛の銘鉄丸を掴んでいる右の手のひらから白煙が立ち上る。

メキメキメキイ!

嫌な音をさせて銘鉄丸が握りつぶされる。

「こいつ銘鉄丸が効^きかない！」

俺の銘鉄丸はもうただの『バット』になり果てている。

「き、効かなくはない……その証拠に白煙が上がっているだろ？それは怨霊の血のようなものらしい……祥太やペスがそうだった……」

瑛士は銘鉄丸を美鈴に渡す。

「はぁっはっはっ……イケメン野郎め、だからどうだっていうんだ！？こんなバットで1発や2発つつかれたところで俺はやられはせんぞ〜！」

剛の高笑いが通路に響く。

状況はかなりよくない。確かに銘鉄丸の干渉波は効きはするのだけれうが、満足に戦えるのは俺だけ。片腕の八前さんやふらふらの瑛士、女の子に老婆では勝ち目はない。

「状況が飲み込めたようだなぁ……じゃあだれから……」

「てめえこそ状況が飲み込めねえみてえだな。」

後ろから急に声がする。

「この声は!？」

美鈴の嬉しそうな声が響く。

コツコツコツコツ……

通路の薄暗がりから現れたのは十次晋也だった。

「十次！」

八前さんが嬉しそうに叫ぶ。

「い、生きてたの！？」

続いて美鈴。手にしている銘鉄丸を十次さんに渡そうとするが、すでに持っている。

「それは……」

美鈴が不思議そうに聞く。

「へへっ曾根崎くんのでさあ。」

十次さんは鼻をこすっている。

「曾根崎さん！？じゃあ曾根崎さんは……」

俺の頭を最悪の予想が駆け巡る。

「おっと、心配しなさんな。彼は足を骨折してますが、元気ですぜ。歩くのがキツそうだったんで上に置いて来やした。」

十次さんは上を指差す。

「なに……」

不機嫌そうな声で全員剛の方を振り向く。

「明仁もやられたのか……？てめえら……殺してやる！」

剛の全身から鬼気としかいいようのない圧力が放出される。

それは大勢の人の前にいきなり出された緊張感を数十倍に増幅したような物理的圧力だった。

「くっ……」

あまりの圧力に俺と八前さんは後ずさる。

「……ここはあつしに任せて、崎田^{まか}さんたちは先に進んでくたせえ。」

この時代がかった言い方も普段ならば笑ってしまうのだが、今は心の底から頼もしく感じられる。

いったいあの武蔵野署からどうやって助かったのか気にはなったが、今はこの危急^{ききゆう}をどうすべきかが先決だった。

「崎田！ここは十次さんにまかせよう。」

俺は美鈴から銘鉄丸を受けとり、十次さんの後ろまで下がった。



十次さん間に合ったかな……僕は自分の電磁警棒で添え木^{そぎ}された右足を見つめた。

「崎田くんたちのことはあつしに任せてくだせえ。」

十次さんはそう言って僕の脚を応急処置してくれた。
今ごろ怨霊と戦っているかも知れない。

えっちゃんも行ってくれてるはずだから、きっと大丈夫だよな。

いや、みんなが命を懸けて戦っているのに、足が折れたくらいで休んでちゃダメだ！何か手伝えることがあるはずだ。十次さんにはじっとしているよう言われたけど、やっぱり追いかけよう。

そう思って僕は壁を支えにしてよろよろと立ち上がる。

「うっ、まぶしい！何だ！？」

ふいに玄関先に何台もの車のライトが現れる。

キキイ！キキイ！

ダダダダダダ……

見ると軍事用のトラックが何台も玄関先に横付けされ、中からたくさんの自衛隊員が変わった形の銃を構えてホールになだれ込んで来る。

「これはどういうことだ！？外は亡者でいっぱいのはずなのに……」

ザザザザザザザ……

僕はたくさんの自衛隊員に囲まれる。

「動くな！」

一人の隊員から鋭く、押し殺した声で命令される。
僕はわけもわからず、両手をあげる。

「どういうことだ？あの青年以外のヤツが生きているとは……」

しゃが 唳れた声が近付いてくる。その姿は車のライトで逆光となりよく見えない。

ザッ！

自衛隊員たちは一斉に敬礼する。



「へへっ、お前とは縁があるなあ。」

十次さんは銘鉄丸を斜に構^{はす}える。

「そうだな。今度はちゃんと殺してやるから心配するな。」

剛は両手を肩の高さまで上げる。

まさに今、戦いが始まろうとした時に後ろから声が聞こえた。

「アタシも加勢するよ。」

「え、えっちゃん！」

美鈴と八前さんが同時に声を上げる。

「へへっ、こいつはありがてえ！」

えっちゃんは生霊いきりようたる霊体ではなく、生身の身体だった。

荻野祥太とペスの襲撃により、えっちゃんの身体はエレベーターホールの置き去りになっていたはずだ。

上が片付いたから来てくれたんだな！

「無事でよかった！」

俺は安堵あんどした。

『抵抗する者たち』最強の二人が揃そろった！これなら勝てる！

俺は確信していた。しかし、美鈴はえっちゃんをじいっと見つめている。そして一歩えっちゃんに近付き、にこつと笑いかける。

「諫早いそはらさん”無事でよかったわ！早く悠姫を倒して大好きな“コーヒー”を飲みましょう！」

まさか！？俺は固唾かたずを飲んで反応を待った。すると、

「……ああ、そうさね。さっさと片付けようか。」

バチィ！

美鈴がスタンガンを押し当てようとする。

「こいつ、偽者よ！」

俺にも正体がわかった。

えっちゃんはスタンガンを避けてすうっと空中を滑るように後ろに下がる。よく見ると床から数cm浮いている。

「チッ！なんでわかったんだ！？」

えっちゃんの目と口は吊り上がり、目には異様な紅い輝きあかを帯びている。

……『怨憑』……野口 孝だ！

「ふん！騙だますつもりだったんならその人のことをもつとよく調べておくんだったわね！えっちゃんは“えっちゃん”って呼ばないと怒るのよ。それにえっちゃんはコーヒー嫌いよ！」

美鈴は一目見て違和感を覚え、孝にカマをかけたんだな！

「やるな！美鈴ちゃん！」

瑛士が美鈴の隣りに銘鉄丸を持って並ぶ。美鈴が見破ったとしても、状況がよくなったわけではない。

前門の剛、後門の孝か：

御手洗さんの時と違って孝は拳銃を持っていない。ちょっと怪力なぐらいなら俺たちで何とかなるかも知れない。

『何とかならないよ。……やれやれ、空巢狙あきすいもいいところさね。ちよっと留守にすると置き去りにしたり、勝手に使ったり、アタシの身体を何だと思ってんだい。』

本物のえっちゃんが天井から俺たちと孝の間に降りてくる。

「バ……ごめんなさい……えっちゃんなら大丈夫だと思って……」

美鈴は泣きそうだ。

「ただの憎まれ口に過剰に反応するんじゃないよ、この子は。冗談だよ。アンタが亡者たちからアタシの身体を守ろうとしたのはよくわかってるさ。ありがとね。」

「えっちゃん……」

美鈴の頬には大粒の涙が光っている。

そうだ。俺たちが亡者や怨霊に気を取られていた時に美鈴はキヨさんといっちゃんの身体を必死に守っていた。

「さて、お仕置タイムさね。アンタたち。」

えっちゃんは剛と孝を睨む。怨霊たちは明らかに怯んだ。

「く……くそっ！こ、殺してやる！殺してやる！」

剛は十次さんに掴みかかろうとする。

「へっ！やけっぱちじゃあ、あっしには勝てねえぜ！」

ゴギン！

十次さんは銘鉄丸を横に振り、剛の頭を殴ったようだ。

“ようだ”というのは、速過ぎて見えなかったからだ。

ダンッ！

剛は激しく壁に叩きつけられる。

「このやろう！」

孝はすうつと俺たちの方へ近づいてくる。

「はい、アンタの相手はアタシだよ。」

えっちゃんは孝の前で両手を開いて通せんぼをする。

「よし！今だ！」

八前さんの合図で俺たちは十次さんの横を走り抜ける。おぼつかない足取りのキヨさんも何とか逃げられた。

えっちゃん……諫早さん……ありがとう……そして……
さようなら……

俺は知っていた。気づいていた。しかし、あえて口にはしなかった。
た。

えっちゃんは孝と共に消滅するしか選択肢せんたくしがないことを……

「ふふっあの坊や……なかなかやるじゃないか。泣きわめかれたら仕事がいづらくなってしょうがない。」

『孝は一度取り憑いたら、死ぬまで離れられない』

御手洗さんが命を懸けて教えてくれたこと……

「一つの身体に魂は一つでいいのさ！それに、半世紀以上付き合ってきた、一応それなりに気に入ってる身体なんでね……返してもらおうよ！」

えっちゃんは“えっちゃん”の身体に入ってた。

「うがっ！……がっ……がっ……」

えっちゃんの身体が小さく、小刻みに痙攣する。

「えっちゃん！」

ただならぬ様子に気が付き、美鈴が駆け戻ろうとする。

「美鈴！ダメだ！」

俺は美鈴の肩を掴み制止する。

「……俺たちは進まなければならない。もう時間がない……ここはえっちゃんと十次さんに任せよう。」

「う……うん……」

俺たちは『コンピューターターム』とプレートのついた大きな両開きドアの前に立ち、思いっきりドアを開けた。

「へへっ、無事進めたようだな……それじゃ、野口は姐さんに任せて、あっしはこいつをさっさと片付けるとするか。」

剛は十次の前にふらふらと立ち上がる。見ると殴られたところが

黒く焼け焦げ、白煙を上げている。

「なあ、剛……お前が生前どんな苦しみを受けて怨霊になったかあつしは知らねえ。さぞかし辛かったろうな。でもだからといってめえのやつてゐることは許せねえ！」

「お前に何がわかる！」

剛のあまりの勢いに十次は怯む。

「俺の何がわかる！俺は……俺はスーパーサイヤ人になりたかったんだ！」

「スーパー……何だって？」

十次はわけがわからない。

「あいつらに……あいつらにいいようにやられて……親にまで……俺は最強になる！みんな……みんな見返してやるんだ！」

剛の目はまた強く紅光で燃え立つ。

「くっ……こいつは……ヤバイぞ！」

えっちゃんの方をちらつと見ると、えっちゃんは全身から白煙を上げている。えっちゃんの様子がおかしい。えっちゃんなら軽く野口を倒せると思っていた十次は焦りを覚える。

「があああああ！」

剛は両手で十次の頭を掴もうとする。そのスピードとプレッシャーは先ほどとは次元が違う。

「くっ！」

十次は辛^{から}うじて銘鉄丸を上げて剛の左手は受け止める。しかし左肩付近の武蔵野署で受けた傷のため、左手を上げるのが遅れる。

ガシッ！

「うあっ……くっ！」

剛の右手が十次の頭を掴^{つか}む。

「う、うああああああ……」

剛の怨念が十次に流れ込む。そして十次は知った。

剛の痛みを。

辛^{つら}さや憎^{にく}しみを。

そして悲しみを……

「うわっ！ち、ちくしょおおこのままじゃやべえ……」

銘鉄丸を掴^{つか}む剛の左手はもうもうと白煙を上げている。十次は冷たい剛の右手を剥^はがそうとするが、あまりの力に剥^はがすことができない。

バシユ！

その時金色に輝^ひく一条の光が剛を貫^{つらぬ}く。

「あがっ！」

剛は光の出所を探すように顔を右に向ける。……つまり、エレベーターホールにつながる通路である。

バシュ！ バシュ！ バシュ！

さらに3本の光条が剛の頭や身体を貫く。

「あぐっ！……ぐっ……ぐっ……」

光条に貫かれる度に剛の身体は痙攣し、青白く輝く。そして、貫かれた穴からは白煙が立ち上り、ジュウジュウと音が出ている。

「こいつら……存外使えんヤツらだったな。所詮、社会生活適応能力に劣る落ちこぼれ共ということか。」

声のする方を見ると、スーツ姿の老人が変わった形の銃を構えた自衛隊員に囲まれて立っている。

「だ……だれだ……？」

十次は突然の出来事に絶句する。

「ぎゃっ……ぐっ……ぐうううう……」

えっちゃんは未だに苦しそうに全身から白煙を上げている。

「……ふんっ……こいつも欠陥品だ。改良を加えねばならん。……消せ。目障りだ。」

老人の命令が下りると再度数条の黄色い光が走り、えっちゃん

の身体にいくつもの黒い穴を穿^{うが}つ。

「な……なにすんだ……い……この……お……」

えっちゃんの苦しそうな声を聞き、十次ははっと我に返る。

「や、やめろ！な、何しやる！」

十次は自衛隊員の方へ行こうと振り向く。

ガツツ！

すると十次はいきなり後ろから剛に肩を掴^{つか}まれる。剛は全身白煙まみれだ。

「お……お前に……は……やらせ……ん。あいつは……俺が……」

剛が老人の方へ一步一步ふらふらと歩いて行く。

「ええい！どいつもこいつも煩^{わづら}わしいやつらだ！おいっ！早く消してしまえ！おっと、あの男は生かしておけ。」

バシユシユシユシユシユシユシユ！

数十人の自衛隊員から数十^{すうじゅうじゅうじゅうじゅう}条の光条が走り、剛とえっちゃんの身体は全身穴だらけになる。

ドサツ！

えっちゃんの亡骸^{なきがら}が糸の切れた人形のように床に崩れ落ちる。

「あ、姐さん！」あね

十次の悲痛な叫びが通路に響く。

「があああああああ！」

剛は最後の力を振り絞り、自衛隊員に突っ込む。

「俺たちは……てめえらの玩具じゃねえんだ！俺たちは、俺たちの意志で“死怨”を作り上げる！きさまらなんか……」

「だまれ、カス。」

老人の冷たい一言を合図にさらに数十条が光り、光条の途絶えた後に剛の姿はなかった。

「あ……姐さん……」あね

十次はえっちゃんの亡骸に取りすがっている。

「て、てめえら！何者なんだ！なんで姐さんを……」あね

「なんだ貴様その口の利き方は！貴様が生きていられるのは我々のお陰なんだぞ！」

自衛隊員のリーダーらしき一人の隊員が十次の言葉を遮る。

「な、なに……？」

十次は色を失う。

「あの小僧」をおびき寄せる餌になると思ってお前を生かしておいたんだ！さもなければ貴様なんぞ武蔵野署で虫に喰われて死んでおったわい！」

老人が一喝する。

十次はこのビルの一室で目が覚めていた。起きた時は教団員に銃撃を受けた時の傷のため高熱に悩まされ、丸二日寝込んでいた。

病院ではなく、医務室のようだったが看護師がおり、適切な処置を施された。

黒田玲花と名乗る変な少女が『もうすぐお前らの仲間が来るから皆殺しにしてやる』と言いに来た時にはかなり焦った。しかし、まだ高熱にうなされていた十次には成す術がなかった。

結局黒田はその後現れなかった。

熱も下がり部屋を出ると廊下には人気がない。不思議に思い、窓から外を見るとこの世のものは思えない地獄絵図が眼下に広がっていた。

無数の亡者……散らばる人間の四肢……

開閉できない窓のため音は聞こえなかったが、人々の叫び声や苦しみが虚空に渦巻いているような気がした。

エレベータで降りようとする階下から叫び声がする。階下では数人の亡者が生者を追いかけていた。

十次の一人きりの戦いは壮絶を極めた。

亡者一人ひとりは何とかなった。しかし数で来られると素手の十次にはどうしようもない。当然のごとく持っていた電磁警棒は取り上げられている。

はじめは十数人いた人達も一人また一人と亡者に殺され、30階まで降りて来た時には生存者は十次を含め5人にまで減っていた。

『やれやれえらい目に遭ったよ。“下”はもう大丈夫みたいだから

アンタを助けに来たよ。』

そこに現れたのがえっちゃんだった。

ロビーでの出来事を聞き、生存者をえっちゃんに任せて降りて来た……ということであつた。

「つまり、てめえが新堂さんたちをおびき寄せるためにあつしを生かしてたっていうのかい？」

十次の瞳は怒りに燃え立っている。

冷酷非情で人の命や思いをゴミくずのように扱い、尊大で傲慢で

……

十次ははっと気付く。

「て、てめえまさか!？」

「いいからさっさとこっちに来い!“あの小僧”にいうことを聞かせるには人質が必要だからな。……こいつのように。」

「ううー!ううー!」

自衛隊員に後ろから押し出されて来たのは、ロビーにいるはずだった曾根崎だった。

「そ、曾根崎くん……くっ!」

曾根崎は猿轡さるぐつわをかまされ、銃を突き付けられている。顔は抵抗した際殴られたのか、青黒い痣あざだらけだ。

「こいつを殺されなくなったら黙ってこっちに来い。」

老人は冷たく言い放つ。

十次は“負け”を認めざるを得なかった。

「くっ……」

十次は下唇を噛み締める。

「し、“死怨教団”もてめえが作ったのか……」

「はぁはっはっはっ！」

老人の嗔れ声しゃがが通路に響く。

「あれは“傀儡”だよ！“傀儡”！あんな子ども騙しの組織は捨て駒だ！“死怨”完成には数多くの『魂』と『怨念』が必要だな。『第一段階』は成功した。どうせ皆殺しにするつもりだったが、お前らのお陰で手間が省けたよ。」

「くそっ！」

十次は齒ぎしりする。

あの武蔵野署の戦いは何だったのか。この老人の手のひらの上で踊っていただけだったのか？

今は悠姫をはじめ『Sion』の怨霊たちにも十次は憐憫を感じ始めていた。

教団員もあの怨霊たちもこの老人に利用されていた……人の命も怨念さえもこの老人にとっては道具に過ぎなかった……

「許せねえ……」

「はっ？何だって？」

老人はおどけて耳に手を当てる。

ジャキッ！

自営隊員たちは十次に銃を向け構える。

「てめえっ！許せねえ！てめえが誰だろうと関係ねえ！あつしが人質になって瑛士さんたちが困るなら、あつしはここでてめえを道連れにして死んでやる！」

十次の身体からは目に見えるほどの殺気が立ち上ぼる。それはまるで消滅した剛が乗り移ったかのような殺気だった。

『ちよつと待ちな。』

突然えっちゃんの声がする。その場にいる者たちは辺りを見回すが、誰もいない。

「あ、姐さん……姐さんですよね？」

十次に嬉しさと安堵が込み上げる。

『ああ、そうさ。アタシが簡単にやられてたまるかい。』

声のする方を見ると、えっちゃんの亡骸がある。

えっちゃんの身体には黒い穴がいくつも開いていて、とても生きているようには見えない。

「なんだと？この『バスターガン』は我が社で開発した対怨霊・亡霊消滅用では最強の兵器のはず。なぜ……」

老人や自衛隊員は目に見えて狼狽し始める。

『ばかだね、アンタたちは。』

えっちゃんの亡骸なきがらから『えっちゃん』がむくつと起き上がる。

『アタシは生霊いきりょうだったのさ！』

えっちゃんはオレンジ色の風になって一気に自衛隊員たちに押し寄せた。

ザアアアアアア……

オレンジ色の風となったえっちゃんは通路いっぱいになり吹き抜ける。

バタッ！ バタバタッ！

隊員たちは銃を構えたまま虚きょを突かれバタバタと倒れていく。

「あ、姐さん！だめだ！殺人をすると姉さんが……」

人を殺すと悪霊になる。十次はそれを心配していた。

確かに老人たちは許せない。しかし、十次はえっちゃんに怨霊になって欲しくなかった。例えそれが味方であっても。

『怒り』と『憎しみ』は違うものだ。十次は信じている。えっちゃんにも崎田たちにも『憎しみ』は持って欲しくなかった。

エレベーターホールまで吹き抜け、戻ってきたオレンジ色の風はえっちゃんの亡骸なきがらの傍そばで『えっちゃん』の姿に戻る。

『大丈夫さね。アタシは怨霊になったりしないさ。……もう生霊で

もないけどね。』

えっちゃんは自分の亡骸なきがらを見て悲しそうに笑う。

「う……うう……」

倒れていた自衛隊員たちが頭を振りながらふらふらと立ち上がる。

「ふう……焦らせやがって……おい！あいつを消せ！また変なことをされる前にな！」

老人が唾つばを飛ばしながら命令する。

「い……いやです……」

さっきのリーダーらしき隊員が頭を振る。

「なんだと？」

「じ、自分は……間違っております……いくら“先生”のご命令でも、もうこれ以上は……」

リーダーらしき自衛隊員は涙を流している。

ガチャ！ ガチャガチャ！

リーダーに習うように、数人の隊員たちが“バスターガン”を床に投げ捨てる。

「き、貴様ら……」

えっちゃんのオレンジ色の風を受けた前後20人ほどの自衛隊員は次々と戦意喪失し、30人ほどいた自衛隊員は老人の周囲10人ほどになってしまった。

「あ、姐さん……これは……」

十次は事の成り行きを呆然として見ていた。

『例え何があろうとも【罪を憎んで人を憎まず】。アタシは最後まで他人のためにこの授かった力を使うさ。アタシの心は他人を憎むようにはできちゃいないのさ。』

えっちゃんはわかっていた。

彼らの心の中にあつた逡巡を。

見えていた。

彼らの苦しみや葛藤が。

『覚えとくんだよ坊やたち。【人は生まれながらにして善人】なんだよ。だれも死んだ方がいいヤツなんかいやしない。……たとえばアタミみたいなやつでもね。』

えっちゃんは老人を指差す。

十次も曾根崎も涙を流している。

『アタシの【役割】はここまでだ。カゲ……後は頼んだよ。』
「口上はそれで終わりか？では死ね。」

老人は静かに命令を出す。

バシユ！

バシユシユシユシユシユシユシユシユシユシユ!

バスターガンの黄色い光条が幾重にも輝き、えっちゃんの霊体に無数の穴を穿つ。

消えゆく直前えっちゃんが目をつぶり、静かに微笑むのを十次と曾根崎は確かに見た。

「くっ！」

十次は目をつぶる。曾根崎は声を出せずにただ涙を流している。

「ふうっ！ やっと片付いたか。……おい、早くそいつを縛り上げろ！ さっさと追いかけるぞ！」

老人は残った隊員たちに命令し、十次を曾根崎と同じように拘束する。

十次は考えていた。

えっちゃんの思いを。

ここでむやみに戦っても無駄死にだ。

『あとは頼んだよ。』

えっちゃんはそう言い残した。

自分の『役割』は武蔵野署で終わったかと思っていたが、まだ運命の神様は自分に何か使命を与えてあるらしい。その時まで自分の『怒り』は沈めておこうと固く心に決めていた。

「おい！ お前ら何突っ立ってるんだ？ 腑抜けはさっさと消えるんだな。」

老人は銃を投げ捨てた隊員たちにそう言い残して先に進む。

「自分らは間違っていた……『死怨』なんか作り出してはいけ
ないんだ……憎しみと悲しみしか生み出さない存在を……」

リーダーであった隊員はそうつぶやき、ため息を一つつき、エレベーターホールの方へ力なく歩いていく。残りの隊員たちも深い眠りから覚めたように、力なく歩いていった。

……残り時間あと1時間。

第18章 黒田玲花

コンピュータルームに入るとそこにはまた通路があった。さほど長くはないが、左右に三部屋づつ扉が並んでいる。プレートには『制御室』『電源室』などが並び、一番奥の右側に『Dyson ホストコンピュータ』と書いてあるプレートがつけられていた。

扉の取っ手に当たる部分にテンキーとカードリーダーのような縦の細長い溝がある装置がある。

「瑛士……いよいよだな。」

「ああ……」

俺は事前に曾根崎さんからもらっていた社員証と暗証番号をメモした紙を取り出す。

「瑛士……俺、『ポニー』を思い出すよ……」

俺は社員証を通し、暗証番号を押しながら、昨晚のことを思い出していた。

御手洗さん……樺島店長……かたき仇は絶対取ります……

ピーーーーー

赤いランプが緑に変わり、ドアが開く。

プシュ!

空気の抜けるような音がして、ドアが少しだけ手前に動いた。

「ねえ、晃……おかしくない……?」

美鈴が俺を引き止める。

「あの亡者たちはここから出て行ったんじゃないの? 何でドアが閉まってるの? 亡者たちがドアを開けて、またご丁寧に閉めていくつておかしいよね……」

確かにそうだ……

「ねえ、瑛士さん……もしかして……」

「ああ、間違いなく『罨』だ……」

さっきのシャッターのことを思い出してもわかる。

亡者に機械は扱えないが、怨霊にはできる。

「ドアを閉めておくということは、『開けさせる』ために閉めたのだろう。だから亡者が出て来なくなったんだ。」

瑛士は厳しい顔をしている。それは肩の痛みだけではないだろう。悠姫は何を意図しているんだ?

「それでも俺たちは行かなければならない……“毒を食らわば皿まで”……だな。」

そう言いながら八前さんはドアのへこみに手をかけ、ゆっくりとドアを引く。

重々しいドアを開けると、小さなパネルが並ぶコントロール室のような部屋があった。

「すごい設備だな……明らかにインターネットサイトだけの設備じゃない。」

瑛士が感嘆する。

「おい！瑛士、見てみるよ！」

正面の少し大きなパネルにはインターネットの画面が映っている。そこには『あの画面』が映っていた。……『Sion』

「ここで誰かがこの掲示板を管理していたんだな……」

八前さんが俺の隣で画面を見上げている。

プシューーーーーー

後ろでドアが閉まる音がする。

「あっ！」

一番最後にキヨさんが入ってきた美鈴が慌てて押さえに行くが、重いドアは簡単に閉まってしまう。

プシュー！

最後にまた空気の抜けるような音がして、ドアは完全に閉まる。美鈴がいろいろがちやがちやと開けようとするが当然のごとくびくともしない。これで俺たちは閉じ込められてしまったと言うわけだ。

「瑛士くん、君は何とかしてこのドアを開けてくれ。怨霊が襲って

来たときにはおれが何とかする。」

八前さんは『S i o n』の画面を見上げる。

「いや、八前さん。その心配は要りませんよ。時間になれば福留社長ふくじゅめが開けてくれると思います。……僕たちの意図はとつくにバレてますから。」

あと1時間半くらいで午前二時だ。ウィルスの効果が切れると同時に、福留社長がホストコンピュータのシステムを落としてくれる手はずになっている。もちろん、亡者や怨霊に襲われていなければならないが……

「みんな、ちょっと来てくれ。」

キーボードを操作していた瑛士が押し殺したような声を上げる。

「どうした？」

俺が瑛士のところへ行くと、みんなも緊張した顔で集まってくる。

「これを見てくれ。」

瑛士は『S i o n』の画面を下にスクロールさせていく。

「こ……これは……」

俺は絶句した。

『S i o n』に誰もいない。あれだけ大量にあった書き込みが全て消えている。

「これ……どういうこと？」

美鈴は口を押さえている。

「誰かが消したのか？」

八前さんが瑛士に聞く。

「いや、たぶんこれは純粹に“いなくなった”んです。
“いなくなった”？」

八前さんはもう一度画面を見上げる。

「ウィルスによってネットワーク接続が遮断しやだんされたから、“怨体”
が飛ばせなくなった。だから、“あの世”にいる亡者たちではなく、
『Sion』にとどまっていた亡者たちを出したんだ。」
「どういうことだ？」

俺は瑛士が何を言いたいのかわからなかった。

「つまり“石垣は壊されていない”……悠姫は『死怨』になっては
いない。」

瑛士の言うことは間違いないだろう。だったらなぜ……

「じゃ何のために『Sion』の亡者たちを出したんだ？」

俺は瑛士に向き直る。

「やっぱり“罨”だ。」

瑛士の顔色はあまりよくない。出血もあるが、荻野祥太、ペスとの激しい戦いと緊張の連続のためだろう。

「瑛士……罨でもいい。早く『ホストコンピュータ』へ行こう。」

俺は部屋の左手にある金属製のドアに向かう。

「待て！ 崎田！ お前はここにいた方がいい！」

瑛士の鋭い声が俺の後ろから飛ぶ。

「えっ!？」

珍しい瑛士の鋭い言い方に俺は思わず怯む。^{ひる}

「どうして？」

俺はドアの前で振り向く。八前さんと美鈴は俺たちを交互に心配そうに見ている。

「ここに来る時の亡者たちの様子……覚えているか？」

「もちろん覚えてるよ。何かに怯えた^{おび}ように、恐れているようにして襲って来なかった。」

「そうだ。でもそれだけじゃない。」

瑛士は座っていたイスから立ち上がり、俺に近付く。

「この『死怨』に関わる出来事全てを通して……崎田だけは“明ら

かな殺意”を持った攻撃を受けていない。」

俺の頭に今までの出来事が電光のように閃く。^{ひらめ}

最初の俺の部屋……電源を切っても“怨体”には関係ないはずなのに襲って来なかった……

次に首を悠姫に絞められたのは瑛士で、俺は何もされなかった……

長岡北署で襲われたのは八前さん……俺はちらっと八前さんの吊っている左手を見る。

新潟のホテルでは……

「瑛士！新潟だ！新潟のホテルで朝襲われたぞ！お前といっしょに悠姫の怨体と戦っただろ？」

俺は怖くなってきていた。瑛士は難しい顔で首を振る。

「崎田……確かに襲われたが、悠姫は本気でお前を殺そうとしていたか？」

俺はあの時の状況を思い出す。あの時は悠姫が何か言いながら迫って来て、俺がバットで攻撃すると上にいて……

「瑛士に声をかけられて悠姫の攻撃を避けられた……」

俺は違和感を感じていた。

“明らかな殺意”……確かに違う……殺す気ならまず俺を捕まえるはずだ……逃げられないように……

「気づいたか？それに悠姫は『見つけた』と言わなかったか？」

……そうだ……確かに俺に迫りながら『みつけた』と言っていた！

「その時は美那ちゃんの仇を見つけたと言ったんだと思い込んでいたが……“お前を”見つけたと言ったんだ。悠姫は。」

なぜ悠姫は俺を捜していたんだ……？

そして八前さんの入院していた病院……看護師さんが犠牲になったけど、俺は襲われていない。

上越新幹線……剛が襲ったのは瑛士……

「新幹線で剛は俺ではなく瑛士に襲い掛かった……」

「ああ……やはりあの時はスタンガンを持ったオレを狙ったんだと思ひ込んでいたが……」

「もしかしたらはじめから俺を狙うつもりはなかった……？」

「おそらく……」

瑛士は頷く。

レンタカーの中でも襲われたのは瑛士だ。

そして『ポニーエンターテイメント』ビルでは御手洗さんと樺島店長が殺された。

「はじめは剛が現れて襲ってきたけど、銘鉄丸を握ってすぐに消滅してしまった……その後現れた孝が狙ったのは御手洗さんだ……」

俺は『ポニーエンターテイメント』での出来事を詳細に思い返す。

「御手洗さんに取り憑いた孝はすぐに拳銃の引き金を引かずに俺の話に黙って聞いていた。瑛士や八前さんが襲われた時は問答無用で襲いかかってきたのに……」

俺はだんだん顔色が青ざめていくのを感じていた。

「そしてただ一人生き残った……それでお前は少し変わった。」

瑛士の言葉を聞いて、俺ははっとした。

「瑛士くん！」

「瑛士さん！」

美鈴と八前さんが咎めるように声を出す。

「いいんだ！美鈴！八前さん！瑛士は俺を責めてるんじゃない……これは事実なんだ……」

俺は目をつぶる。

「はじめからそうとわかっていたなら御手洗さんや樺島店長を救えたかも知れないのに……」

俺の頬を一筋の涙が伝う。

「それでお前の心の中に残ったものはなんだ？」

瑛士は優しく俺に語りかける。

「『憎しみ』……『悲しみ』……『後悔』……【負の感情】だ。」

今 俺は自分自身と向き合おうとしていた。

「そう。『ポニーエンターテイメント』に行くのはお前以外は誰でもよかった。お前に『仲間を殺される体験』をさせるのが目的だったんだ。……お前にそう仕向けたのはだれだ?」

俺は目を開き、瑛士を見据^{みす}える。

「……佐伯 瞳。」

俺はホテルの俺の部屋に佐伯 瞳が現れた時のことを思い出した。

『【死怨教団】を攻撃してください。そうすれば【メンバー】の意識がそちらに向きます。』

「じゃあ……佐伯 瞳は最初から敵だったの? 味方のフリをして御手洗さんを助けたり、晃に近づいたり、瑛士さんを助けたりしたの?」

堰^{せき}を切ったように美鈴が叫びだす。その目には涙が光っている。

「……現時点ではそう判断するしかない。」

瑛士は冷静に分析する。

「そんな……えっちゃんのことだって助け出してくれたのに……」

美鈴はがっくりとうなだれる。

「そしてここに至るまでの亡者の反応……崎田が外に出てからは表立って攻撃されていない。」

ホテルを出発してすぐに亡者に襲い掛かれた。しかしそれははじめだけで、すぐに俺たちを見て怯えたように道を開け始めた。

「……瑛士……俺はいったい何なんだ……？」

「……今までのことから考えると『お前に負の感情を持たせ、ここに来させる』のが目的だとは思えん。……そして『石垣』は壊されていない……以上のことから推測すると……崎田 晃……お前が『死怨』だ。」

「そんな……」

美鈴が絶句する。八前さんは唇を噛み締めて俯いている。

「……途中からうすうす感じていたよ……佐伯 瞳は【しおん】と俺に呼びかけて消えていったんだ……でも、瑛士。俺は死んでいない。生きてるんだ。『死怨』になんかなるつもりはない。」

「もちろんオレだってそう思っているさ。……だから行かせたくないんだよ。……止めても無駄だろうがな。」

瑛士はにやつと笑う。

「へへっ！わかってんじゃない。」

俺も笑い返す。

「大事なのはお前の『意志』だ。【負の感情】なんか飲み込まれるんじゃないぜ。」

「はっ！楽勝！」

俺は右の親指を立てる。

「『死怨』になんかなったらおれが逮捕してやる。青少年健全育成条例違反と抱き合わせにな。」

八前さんも親指を立て、ウィンクする。

「晃……死なないでね……『死怨』になんかならないで……」

美鈴の目からはとめどなく涙があふれている。そして俺の胸に飛び込んでくる。

「美鈴……」

俺は美鈴を抱きしめる。

「約束したろ？俺はお前を絶対を守るって。心配すんなって。」
「晃……」

プシューーーーーー

突然出口のドアが開く音がした。俺たちははっとしてドアの方を振り向く。

すると一人の老人が入って来る。

「どうやら間に合ったようだな。……おっとラブシーンの真っ最中に失礼するよ。」

老人の唸^{しゃが}れ声が室内に響く。

「『福留社長』！よかった。閉じ込められて困っていたんですよ。これから……その人たちは誰ですか？」

瑛士が老人に近づいて行くと、どこどかと変わった銃を持った軍人らしき人たちが部屋の中に入ってくる。

バシユ！

「ぐあっ！」

瑛士に右太ももに黒い穴が開く。

「なっ……瑛士！」

俺たちは金縛りにあったように動けなくなってしまった。

「新堂圭一の息子か。こいつをここまで連れて来てくれて礼を言うぞ。しかし、貴様の出番はここまでだ。旧知^{きゆうち}の友に免^{めん}じて命だけは助けてやるから、そこで大人しくしている。」

福留社長は冷然と言い放つ。

「ううっ……」

瑛士は撃たれた足を押さえて倒れている。

「瑛士さん！」

美鈴が瑛士に取りすがる。

「大丈夫？……とりあえず大動脈は外れているみたいだけど……」

瑛士は脂汗あぶらあせを額ひたいに浮かべて苦しんでいる。

「くそっ……どうして福留社長がこんなことするんだ……」

八前さんは拳銃を構えているが、何人もの軍人が銃で俺たちを狙っているため、動きが取れないでいる。

「どうしてだど？ 決まってるじゃないか。『死怨』はわしのものだからだ。」

俺たちに驚愕きょうがくが走る。

「ど、どういうことだ……」

瑛士が呻うめく。

「瑛士さんしゃべらないで！」

美鈴は涙声だ。

「とりあえず『子音しおん』に行こう。話はそれからだ。」

福留社長は俺に銃を突き付け、ドアへ向かうよう促す。^{うなが}

瑛士、八前さん、美鈴、キヨさんはそれぞれ両脇を軍人に捕まえられて移動する。

後から銃で押されながら、猿轡^{さゐるべつわ}をされた曾根崎さんと十次さんが部屋へ軍人に追い立てられて入って来る。

「曾根崎さん、十次さん、無事でよかった。」

俺には福留社長自らが変わった形の銃を突き付けている。

「おい、いいからさっさと歩け。」

俺は福留社長に押されて部屋を出た。

制御室から出ると金属の通路があり右に曲がった後、階段が下に伸びている。

カンカンカンカン……

数mも降りると、硬質ゴム製の床に降り立つ。そこは幅が約30m、奥行きが約20m、天井の高さが3階分は吹き抜けになっている広い空間になっていた。

目の前には薄緑色の円柱状^{えんちゆうめいよう}の大きなコンピュータがある。円柱状と言っても上下は直径5mほどだが、真ん中にいくにしたがって段差がついて細くなっている。ちょうど杵^{きね}のような形だ。

「これが『ホストコンピュータ』か……」

俺がつぶやくと、福留社長はにやつと笑う。

「そうだ。我が社の創始者である藤原庄三郎^{ふじわらしやうざぶろう}が作り出した夢のネッ

トワークサーバ……『子音』だ。」

「『子音』？『死怨』じゃないのか？」

俺は微妙なイントネーションの違いが気になっていた。

「そうだ。『死怨』ではなく『子音』。だ。」

福留社長は『子音』を見上げる。そして俺たちの方へ向き直り、言葉を続ける。

「俺は初代社長である藤原庄三郎会長のころからの叩き上げだ。俺たち世代の社員はみな社長を“親父さん”と呼んでいた。」

福留社長は『子音』の方へ向き直り、ゆっくりと歩いていく。

「親父さんは太平洋戦争を経験し、人が助け合う大切さを痛感した。」

福留社長は『子音』の前に立つ。

「『FTC』を作り上げ、衛星通信システムさえも立ち上げた一番の理由は“人と人とのつながり”を誰よりも大切に考えていたからだ。」

福留社長は『子音』を見上げる。

「“あなたは今『誰』とつながっていますか？”……『子音』を使ったネットワークのキャッチコピーだ。……世に出ることはなかったがな。」

“『子音』を使ったネットワーク”？」

俺が福留社長の背中にそう問い掛けると、社長はくると振り向く。

「“死者”との通信だ。」

俺は息をのんだ。それが全ての始まりか……

「親父さんはほぼ完成させていた……実際に通信はできていたのだ。……しかし、何度やってもうまくいかなかった。つながるのは強い怨念を持つ“怨霊”としかつながらなかったのだ。」

俺にはよくわからないが、心穏やかに亡くなった人は現世に未練がない。だから、想念のベクトルが現世に強く向いている怨霊とはつながりやすかったのかも知れない。

「しかし、『子音』が画期的なネットワークコンピュータであることに違いはなかった。」

福留社長はまたこちらに向き直る。

「ところが5年前ある事件が起こった。」

「……5年前？」

俺は記憶を探る。

「当時防衛省の幕僚だった坂巻長官のご子息がいじめによって自殺された。」

俺の脳裏に一つの名前が閃いた。

「坂巻信人……」

自然に口からその名が出る。『S i o n』にアクセスした時、最初に見たスレッドだ。

「そうだ……坂巻長官はお子さんを心から愛しておられた。お子さんを亡くされた長官は、以前から軍事衛星業務でつながりのあった親父さんと旧知きうちの仲だった。ご子息の死の真相をどうしても知りたかった長官は親父さんに『子音』を使わせて欲しいと頼み込んだ。」

福留社長はいったい何が言いたいんだ？

「はじめ親父さんは断った。しかし、あきらめきれない長官は最終的には親父さんに圧力をかけ、強引に『子音』を使ってご子息と通信した。……結果、長官はご子息の怨霊に殺された。」

「何ということだ……」

八前さんが呻うめく。

「知ってるぞ……あの事件は事故だと報道されていたはずだ……そんなことがあったなんて……」

当時警視庁のエリート刑事だった八前さんは事件を覚えていた。

「親父さんはそのため『子音』を破壊しようとした。」

俺は藤原庄三郎という人物が、どんな人物なのかはわからない。しかし、それは人として当然の判断だと思う。

「……だから殺した。」

ドクン！

俺は自分の心臓が飛び出すのではないかと思うほどに、鼓動こどうを打つを感じた。

「な……なんだと……？」

八前さんも真っ青な顔をしている。

「藤原会長は鬼島前社長に覇権はけん争いのため殺されたのではないのか？……」

瑛士の声はかすれている。かなり苦しそうだ。

「もちろんそうだとも！」

福留社長は瑛士の方を向いて、禍々《まがまが》しい笑みを浮かべる。

「あいつはいい“盾”になってくれたよ。俺の手のひらの上で上手に踊ってくれた。」

俺にはもう福留社長は人間のように思えなかった。

「……しかし、親父さんが死んでしまったことによって『子音』は不完全なままだった。このままでは『商品』にならない。」
「『商品』？」

俺は腹の底から怒りが込み上げてくるのを感じた。自然に声が震える。

「そうだ。“先生”の計らいによって、『子音』が軍事利用されることになったのだ。そのためには欠点を補正しなければならなかった。」

「欠点？」

俺は何となく福留社長の意図が見え始めた気がした。

「怨霊は一回のアクセスで一体ずつ。しかも、数分間しか実体化できなかった。」

それに、殺害対象は無差別。これでは『武器』にならん。」

な、なんてヤツだ……

「なんてことなの……」

美鈴も絶句している。

「だから悠姫に『仲立ち』をしてもらうようにした。」
「『仲立ち』？」

美鈴が聞く。

悠姫……お前も被害者だったのか……

「鬼島によって失脚させられた藤原大悟が海外から帰国した時に拉致し、大量の麻薬によって昏睡状態にした。ま、ほぼ死んでる状態だな。」

「ひどい！」

美鈴は軍人によって拘束こうそくされながらも、激しくもがく。

「さっきからうるさい小娘こむすめだな！」

バチン！

美鈴の頬ほほが平手打ちされる。

ブツ！

美鈴が鼻血を出している。

俺の頭はもう沸騰ふっとう寸前だった。

「やめろ！」

俺は福留社長に殴りかかろうとするが、軍人の銃で押し戻される。

「……元気のいい小僧だな……ま、そうでなくては困る。落ち着いて最後まで話を聞け。」

「うう……」

美鈴はぐったりとして俯うつむいている。

「さて、どこまで話したかな。」

福留はまた『子音』の方へ歩いていく。

「そうそう、大悟を拉致らちしたところだったな。……悠姫は大悟を愛しておった。父親としてではなく、一人の男として。」

福留の声音はだんだんと熱を帯びてくる。

「お前らも知っている通り、悠姫は大悟の本当の娘ではない。悠姫も大悟もそれは知っておった。……そうだな？ 乳母のババア。」

福留はキヨさんににやっと笑いかける。

「そ、そうですじゃ……」

キヨさんは力なく頷く。

「昏睡状態になった大悟を救うには、現世と黄泉の狭間にいる大悟の魂を呼び戻さなければならん。『子音』ならそれができる。」

福留はまた『子音』を見上げる。

「悠姫は必死になって調べた。ありとあらゆる文献を漁って、とうとう魂だけ肉体から抜け出す方法を見つけ出し実行した。」

悠姫は自殺したわけではなかったのか……

「悠姫の試みは成功したかに見えた。実際悠姫は大悟に黄泉で会えたらしい。」

「……『らしい』？」

どうして『らしい』なんだ？

「……悠姫の魂は戻って来なかった。その代わり怨霊となって現れた。……大悟や親父さんを殺したのは鬼島だと思っていた悠姫は、

まず鬼島を縊^{くひ}り殺した。」

鬼島は自宅の書斎で殺された。

「そして次々と鬼島の家族や関係者を殺していった。」

「……怨念を持たなかった悠姫はなぜ怨霊になったんだ？」

「……『死怨』だよ。」

「なに？……」

「大悟の魂を現世に戻すためには『死怨』の力が必要なのだ。だから悠姫は『死怨』になろうとした。」

『死怨になるために魂を集める』

『あの世とこの世をつなぐ者』

『死怨教団』のヤツが言っていた言葉だ。

「怨霊となった悠姫には、話は通じない。そもそも怨体に意思はない。悠姫の作り出した

『Sion』に『子音』を通じて書き込みをすることによってのみ、悠姫と話すことができた。悠姫はしきりに『お父様のために魂を集める』と言っていたよ。」

やはり『Sion』の掲示板を開くと悠姫とはつながっていたわけか。

「ちょ……ちょっと待て……」

瑛士が苦しげな声を出す。

「俺や崎田は『Sion』にアクセスした。しかし、すぐに悠姫は

現れなかった。お前の話によれば、『S i o n』にアクセスしただけで悠姫とつながるんじゃないか？」

そうだ。

俺の部屋のパソコンでつないだ時も『メニュー』を全部書き終わるまで悠姫は出て来なかった。

確か5分……美鈴が時間を計ってくれてたから確かだと思う。

美鈴は下を向いてじっとしている。鼻血は止まったようだが、かなり憔悴しょうすいしている。

「そのことについては、もうお前たちはわかっているんじゃないのか？」

福留はにやにやしている。

「やはり……『死怨』は崎田なのか……？」

瑛士にしてみれば当たらない方がいい推測だったろう。

「『死怨』には誰でもなれるわけではないらしい。いわゆる『素質』が必要なようだ。」

「……俺には素質があると……」

福留は頷く。うなずく。

「少なくとも悠姫はそう判断した。だからここまでしてお前をここに呼び寄せたんだ。自分だけではなく『メンバー』を使ってな。」

「俺の素質って何なんだ！？それに俺はそんなものになる気はない！たとえ死んでもな！」

俺は怒っていた。

俺は俺だ。他の何者でもない。

「後は悠姫に直接聞くがよろう。」

福留は俺たちのいるところとはホールの反対側にいる。前にはパソコンが一体となっている金属製の机があり、ヤツはキーボードを操作した。

ヒューイイイイイイイイイ……

高い音がして『子音』が動き始める。

キーンと耳鳴りがする。このホールの気圧が変わったようだ。空間そのものに歪みが生じているみたいだ。

しばらくすると、『子音』の前に白いもやもやとした物が現われ、次第に女の人の形を作っていく。

……藤原悠姫。

白くて長いワンピースを着て、これもまた長くて黒い髪は乱れてはいない。

「やあ悠姫、ご機嫌いかがかな。」

福留が話し掛ける。

「悪くはないわ。」

そういうと悠姫はゆっくりと俺を見る。その姿は透き通ることもなく肉感的で、とても怨霊とは思えない。明仁や荻野祥太、ペス、剛はこうやって現われたんだな……

「やっと会えたわね。崎田 晃……いえ、“死怨”^{しおん}。」

悠姫は穏やかな声でそう言った。

「あなたのことをずっと見ていました。」

悠姫は今まで見た悠姫とは違って、とても美しい。

俺の中の悠姫像、少なくとも憎むべき“敵”としての姿はそこにはない。

「“死怨”になるためには素質^いが要る。“魂の素質”が。明仁に聞いた時は本当に嬉しかったわ。やっと見つけたって。」

初めて『Si on』にアクセスした時に勝手にクリックされたメニユーは『怨打^{おんだ}』。つまり明仁が俺を発見したということか。

「私はいろいろな文献^{ぶんけん}や伝承^{でんしょう}を調べたわ。そして“死怨”の存在^たに辿り着いた。はじめは私自身が“死怨”になってお父様を助けるつもりだった……でもだめだった……素質^{そしつ}がなかったのね。」

悠姫は『子音』の前に立っている。その身体は淡く薄緑色^{あわ}に光っている。

「『黄泉^{よみ}』と『現世^{げんせ}』を繋ぐことができるのは“死怨”だけ。そして“死怨”になれるのは『薄緑色の魂』を持った“生者^{せいじゃ}”だけなのよ。つまりあなた。」

悠姫は俺を指差^{ゆびさ}す。

「魂の色は死者にしか見えないのよ。だから死者たちには『Sion』を通じてどんな“仕返し”をしてもらった。」

『Sion』を開設した目的は“素質のある生者”を見つけることと“魂を集めること”だったのか！

「あなたが“死怨”になるためには2つの条件が必要だった。一つ目はたくさんの魂。二つ目はあなたの“負の感情”よ。」

瑛士の推測した通りだ。

「一つ聞きたい。」

俺は悠姫を見据^{みす}える。

「さっきのこいつの話は聞いたはずだ。お前の父親の敵^{かたき}はこいつだ。お前は敵^{かたき}を鬼島だと思い込んで殺した。こいつに復讐^{ふさう}しなくていいのか！」

俺は福留を指差す。周りの軍人たちが色めき立って銃口を俺に向ける。

「……それは……鬼島を殺した後に気付いたわ。でも……だからといってお父様は戻っては来ない……私はお父様をお救いしたいだけ……そのためなら何でもするわ。」

俺は驚くと同時に何か違和感を感じた。しかしその違和感が何なのかはよくわからない。

「ふっふっふっ……『子音』の軍事利用は大悟の目標でもあった。」

悠姫はわしに協力するしかないのだ。……それに……悠姫の本当の父親はわしだ。」

俺たちはみんな息をのんだ。

福留社長が悠姫の本当の父親だと!？

「キ……キヨさん!」

俺は思わずキヨさんに確認するように呼び掛ける。キヨさんは黙ってわなわな震えている。

「わ、わしゃ言えなんだ……お嬢様と大悟様は本当に仲のおよろしい“父子”^{おやこ}でしたので……」

キヨさんはそこまで言うのと下を向いて泣き出す。

悠姫にとって福留は血のつながった父親……たぶんそれだけではなく、大悟の肉体を人質に取られていることもあって手出しができなかったんだろう。

「あなたにここへ来てもらうためにいろいろやったわ。はじめは力づくで連れて来ようとしたけれど阻止^{そし}された。だから、“彼ら”を人質にしておびき寄せるつもりだった。」

悠姫は十次さんを見る。

「“彼ら”とは十次さんといっちゃんのことか……?」

悠姫は頷く。^{うなず}

「十次晋也を使いここへ、諫早江津子を使い『Sion』へ来させるはずだったのに。」

悠姫の言い方はいたずらの見つけた子どものようだ。

「“彼女”のお陰で計画の大幅な変更を余儀なくされた。」
「彼女……？」

俺は誰のことかわからなかった。

「佐伯 瞳……」

瑛士が小さく呻く。それを聞き、また悠姫は小さく頷く。

「彼女のお陰で、あなたをここに来させるためには亡者を出すしかなかった。新堂瑛士のウィルスでの邪魔もあったし。」

佐伯 瞳はやっぱり俺たちの味方だったんだ！
けれどその佐伯も今はもう消滅してしまった……

「悠姫……お前の計画通り俺は確かにここに来た。しかし『Sion』に行くことは俺にはできない。えっちゃんみたいに霊能力はないしな。」

俺はえっちゃんが現われないことが気になっていた。しかし十次さんだけ連れて来られたことが全てを物語っている。

「『Sion』に行くことはできるわ。」

悠姫がそういうと、『子音』は高い音を発し始めた。

ヒュイイイイイイイイイイ……

あしもと
足下から低い震動が伝わってくる。

俺はこのホールに入って来た時、軍人が固くドアを閉めていたことを思い出した。

ヒュイイイイイイイイイイ……

音はますます大きくなってくる。それに従って周囲がぼやけてくる。

「悠姫……これは……」

俺は悠姫を見る。悠姫は俺の後ろの方を見ている。悠姫の視線の先を追うと、瑛士と曾根崎さんを見ているのがわかった。

その目は何か訴えかけるような、すがるような、そんな目に感じる。

いったいどういうことだ……

周囲の壁はさらにぼやけて、すでに元のホールの面影はない。音が高くなるにつれて耳鳴りも強くなる。

ヒュイイイイイイイイイイ……

悠姫の視線に気付いた瑛士が戸惑うように俺を見る。とまじそんな瑛士の視線に気づき、悠姫は俺に視線を戻す。

周囲は次第に白くなり、音も落ち着いてくる。

ヒュウウウウウウウウ……

『子音』の鳴動めいどうがおさまると、辺りには何もない白い空間だけが残った。

「こゝ、ここは……」

俺はえっちゃんの話进行い出す。

悠姫はほほ笑みながら両手を上げた。

「ようこそ。『Sion』へ。」

「はっはっはっ……すばらしい！悠姫、さすがだよ！現世との接続は完璧だな。」

福留は制御机せいぎよくえのあった辺りから俺たちの方へ歩いてくる。

えっちゃんの言っていた通り、ここは何もなく、ただ白い空間が広がっているだけだ。高さも広さもどれくらいあるのかわからない。

「後はこの小僧に“石垣”を壊してもらえば終わりだ。」

福留は俺の前で立ち止まる。

「くっ……俺は“死怨”になんかならない。お前たちの思い通りになるくらいなら死んだ方がましだ！」

俺には守るべき人がいる。守るべき仲間がいる。

俺の気持ち一つで防げるはずだ。

「まあ、そう言うだろうと思ってな。助っ人を呼んである。」
「助っ人？」

俺は福留と悠姫を見る。福留も悠姫もほほ笑んでいる。

すると遠くの方から黒い人影が近付いてくる。

「あれは……」

俺には見覚えがあった。いや、忘れるはずがない。

樺島店長の敵……“死怨教団”の元教祖……

「黒田玲花！……」

俺はその姿を見ただけでアドレナリンが放出されるのがわかる。
生者でありながら悠姫たち怨霊を崇拜し協力していた。

「はっ！また会ったね！」

玲花は樺島店長とともに死んだはずだ。ということはこの玲花は
亡者か！？

「お、お前は店長といっしょに死んだんじゃないのか？」

玲花はあの時と同じゴスロリ系の黒い服を着ている。

「殺されたさ！あのオカマにね！でもこうして悠姫さまに亡者として
面倒をみてもらってるのさ。」

玲花の顔色は真っ青で生気はないので亡者には間違いはない。
問題は“何を助っ人しに現れたか”だろう。

「あたしさあ……結局いいことないままに死んじゃったのよね……
だからみんなも殺してあげる。」

玲花は急に後ろを向く。

「おい！おいで！」

玲花は口に手を当てて誰かを呼んだ。

するとまたもや遠くの方から小さい人影がやって来る。

「ま、まさか……」

八前さんが呻く。

現れたのは白いワンピースを着た、小さい女の子だった。

「み、美那……」

八前さんは拘束こうそくされたままもがいている。

「キャハハ！美那ちゃん！あのお兄ちゃん以外、みいんな殺していいからね！とくんとくんいっぱい聞いていいからね！」

美那は黙って美鈴たちの方へ移動する。

すうっと音もなく移動した美那は曾根崎さんの前に立つ。

「ひいっ……！」

自分の身長の半分もない小さい女の子に曾根崎さんは心底恐怖しんそくしている。その身体から放出される靈気れいきはとても強く、物理的な圧力を持っているようだ。

「や、やめろ……！」

俺は止めに行こうとするが、あまりの靈氣のために足が震えて力が入らない。

くそっ……曾根崎さん……

「キャハハハ！美那ちゃん最近絶好調なのよね！何だか靈氣がすごく強まって！」

「父親が近付いて来ていたのを感じ取っていたからよ。」

玲花に悠姫が静かに応える。

「父親？……ああ！あの腕 吊^つってるオヤジが父親なんだ！じゃお父さんに美那ちゃんのすごいとこ見せてあげなよ！」

そう言うのと玲花は曾根崎さんや八前さんたちを拘束^{こうそく}している軍人たちに目で合図する。軍人たちはさっと離れ、瑛士たちを一か所に座らせ、銃で威嚇^{いかく}する。

「さあ、“死怨”計画のクライマックスだ。小僧よく見ておけ！」

福留はそういうと、軍人たちに指示を出す。

「小僧を暴れないように捕まえておけ。邪魔されたらせつかくの“シヨ”が台無し^{だいなし}だからな。」

二人の軍人が俺の両脇を固める。瑛士たちに銃を突き付けられたままなので、俺にはどうすることもできなかった。

「み、美那！やめろ！」

八前さんは美那に必死に呼び掛けている。しかし、美那は無表情

のまますうつと右手を上げる。手は手刀ていとうの形をとっている。草薙さんと同じように心臓を貫くつもりだ。

美那は小さいので曾根崎さんの心臓を狙うと下から上に突き上げる形になる。

曾根崎さんは恐怖に顔を引きつらせたまま動けないでいる。どうやら何らかの力で動きを止められているようだ。

「知ってるう〜？ここは悠姫さまの作った『Si on』だよお！思念の強さによっていろんなことができるんだよお！」

玲花は楽しそうにぴょんぴょん飛び跳ねている。

「崎田 晃……彼を救いたかったら美那以上の思念で美那を止めてごらんなさい。あなたにはそれができるはずよ。」

悠姫は淡々と落ち着いた口調で俺に話し掛ける。

「み、美那以上の思念……」

それが“憎しみ”や“恨み”などの『負の感情』か！
美那の手は今にも曾根崎さん突き刺そうとしている。

「くっ……くそっ！」

俺は曾根崎さんを助けたいと強く願った。しかし、無情にも美那の手は曾根崎さんの心臓目がけて突き出される。

ズバツ！

白い床に真っ赤な血が飛び散る。

「うわっ！」

ドサツ！

曾根崎さんは仰向けにひっくり返っている。
あおむ

今まで曾根崎さんのいたところに八前さんがいる。八前さんが曾根崎さんを突き飛ばしたみたいだ。

美那の右手は八前さんの右肩に刺さっている。美那の手が突き出た背中側からは大量の血が八前さんのよれよれのスーツを黒く染め上げていく。

「ぐはっ！」

八前さんが血の塊かたまりを吐く。

「きゃああ！八前さん！」

「や、八前さん！」

美鈴がキヨさんをかばいながら下がる。曾根崎さんは八前さんを助けに行こうとして瑛士に止められている。

「く、くそっ！八前さん！」

俺も激しくもがくが、両脇をがちり固められ何もできない。

「もう……娘が……人を殺すところを……見たくない……」

八前さんは時折咳き込んで血を吐く。
ときおり

ズボッ！

八前さんの肩から手を抜いた美那はさらに手刀の形を作る。その顔は青白く、無表情だ。

「美那……おいで……パパが抱っこしてあげるよ……」

八前さんは逃げるどころか、両手を広げて美那を受け入れようとしている。

「パパが出張なんかに行っちゃったから美那は寂しかったんだよね……」

美那は手刀を引く。

「八前さん！」

俺は必死になって叫ぶ。

「美那の金メダル卵焼き食べられなくてごめんな……」

美那は一気に手刀を突き出す。

ズボッ！

八前さんの背中から美那の手が突き出る。

「ぐはっ！」

八前さんはまた血の塊を吐き出す。致命傷なのはだれが見ても明

らかだろう。

「きゃあああ！」

「くっ！」

美鈴も瑛士も目を逸らす。俺は目を逸らせずにいた。

「み……美那……」

八前さんは優しい表情を浮かべている。

ズボッ！

さらに美那の左手も八前さんの背中から突き出る。しかしその手には何も掴まれてはいなかった。

「美那……やっと抱っこできるな……すぐ止まっちゃうと……思うけど、……それまでとくんとくんって聞いてていいぞ……美那……」

八前さんはそのまま美那をそっと抱き締める。美那も八前さんの身体に手を突き立てたまま大人しく抱かれている。

美那の表情には変化が現れている。

「パ……パパ……？」

美那は今初めて気づいたかのように八前さんの顔を見上げる。

「美那？聞こえるかい？」

八前さんは美那の耳がちょうど心臓に来るように抱き寄せる。

ズズッ！

それに合わせて美那の手も肘より深く突き刺さる。

「パパ？　パパ？　どうしたの？　いたいよ？　はなさないといいたいよ？」

美那は状況に気づいたようで、泣き叫んでいる。

「いいんだ、美那。いいんだ。美那は悪くない。悪いのはパパだ……」

八前さんはだんだんと崩れ落ちる。

「パパ……きこえるよ……とくんとくんって……みなはこれがききたかったの……」

美那は八前さんの胸に耳を当て、心音を聞いている。

目をつぶり、じっと聞き耳を立てているその安らかな顔は怨霊だった時の面影は微塵もない。

「と、十次……俺は役割……果たせたかなあ……」

八前さんの焦点は定まってはおらず誰を見ているわけでもない。

「旦那！　十分……十分果たしましたよ！」

猿轡を外した十次さんが涙を流している。

「吉田さん……おれ……吉田さんみたいなお巡りさんになれなかつ

たよ……でも、最後に……いい……父親に……なれたかな……」

ドサツ！

八前さんは倒れ、手が刺さったままの美那もいつしよに倒れる。

「いやだあ！ パパあ！ やつと会えたのに！ 美那のせいで、死んじゃった！」

美那は八前さんに抱かれたまま泣き叫んでいる。

手はもう抜いたらしく、背中から突き出てはいない。

「八前さん……」

俺たちは涙を流し続けた。

新潟で出会って以来、年長者として常に誠実に俺たちを見守ってくれていた。でも最後に一番気がかりだった娘さんに会えてよかったのかもしれない。どんな形であれ。

「かず……み……」

八前さんの目から命の火が消えようとする。

「パパ！？ パパあ！ ごめんなさい……」

美那は八前さんに取り縋^{すが}って泣いている。

「うるさいガキだね！」

ズバッ！

玲花がつかつかと歩いて来て美那を真っ二つに切り裂いた。

美那の左の肩口から右の脇腹までを真っ二つに切り裂き、美那は白煙^{はくえん}を上げ、焦げくさい臭い^{にお}を発しながら消えてしまった。

「な……きさまあ！」

俺の心に『ポニーエンターテイメント』ビルで感じたのと同じ、どす黒い怒りや憎しみが湧き上がるのを感じた。

「ゆ、許せねえ！」

戒め^{いまし}を解いた十次さんが玲花に飛びかかろうとする。

玲花は人間だった時とはまるっきり違う身のこなしで十次さんを避け、腰に手を当てて蔑む^{さげす}ような笑顔を向ける。

「所詮人間じゃ無理よ。信人くん！」

今度は学生服を着た中学生くらいの男の子が現われた。

「坂巻信人か……」

曾根崎さんは十次さんを加勢しに行けるよう、やはり猿轡^{さるづわ}と戒め^{いまし}を解きながら呟く^{つぶや}。銘鉄丸は軍人たちに取り上げられてもうない。このままでは二人とも殺されてしまう。

俺の心の中には“焦り”と“憎しみ”が広がっていた。

「よう！お前は武蔵野署で会ったな。今度は間違いなく殺してやるよ。」

信人はすうっと十次さんの方に音もなく移動する。

「や、やめろ！」

俺は思わず叫んだ。

「信人！お前が辛い^{つら}い思いをして死んだのには同情する。でも、だからといって親父さんや関係ないヤツまで殺すのはおかしいだろ？」

俺は必死になって説得した。もうこれ以上誰かが傷つけられたり、殺されたりするのを見たら、自分を^{たも}保てるか自信がない。

「はあ！？俺は復讐とかつまんない理由で怨霊やってんじゃねえんだよ。楽しいからに決まってんじゃねえか！」

ある意味『子音』の一番最初の被害者とも言える坂巻信人は完全に己の怨念に取り込まれていた。

「“死怨”……彼の魂を解放してあげられるのもあなただけなのよ。」

悠姫の言葉が胸に突き刺さる。

俺が犠牲になればそういった怨霊たちも救えるのか？

「うわあああああ！」

曾根崎さんが信人の隙^{すき}をついて殴りかかる。

「へっ、ばかめ。」

信人は簡単に避けるが、次の瞬間真上から攻撃してきた十次さんの蹴りを避けることはできなかった。

「ひょう！」

ガンッ！

もちろんそんなことで倒すことはできないが、怯ませることは十分できたようだ。

「こ、このや……」

「消えろ！」

十次さんに気を取られた隙に、曾根崎さんはすかさず『干涉波ス Tangan』を信人に押し当てる。

バチバチバチバチバチバチイ！

「ぐああああああ……」

信人はのけ反って苦しんでいる。

「やったか!？」

曾根崎さんが十次さんにガッツポーズをする。

ガシッ！

突然曾根崎さんの頭が鷲掴みにされる。

「あああ……って残念だったなあ！」

「曾根崎くん！」

ガシッ！

次いで十次さんも頭を驚掴わしづかみにされる。

「ぐあっ！」

いまだに『干渉波スタンガン』によって青白く火花を上げているが、信人は全く動じる気配はない。

「ここは『Si on』だ。大火事の中でちよつとばかり水鉄砲撃つたって何の影響もないだろ？」

「ぐああああああ……」

十次さんも曾根崎さんも苦しそうだ。

カラン…

『干渉波スタンガン』が床に落ちる。

青白い火花は消え、曾根崎さんは両手で、十次さんは片手で信人の手を引きはがそうとする。しかし“本物”の怨霊である信人は人間離れした力で掴つかんでいるらしく、全くはがれる様子はない。

俺の頭に二人の頭がスイカのように潰つぶれ絶命ぜつめいする姿が思い浮かび、足ががくがく震えはじめる。

「や、やめろ……」

俺は全身の力が抜け、軍人たちの支えられるままだった。
俺は……

オレハムリヨクダ……

「いやあああ！やめてえ！」

美鈴が信人に取りすがる。

「うるさい女だな！」

バシィ！　ズサツ！

信人に蹴り飛ばされ、美鈴が玲花の足下^{あしもと}に倒れる。

「全く……大人しくしていれば苦しまないで殺してやったのに。」

玲花が美鈴の髪を掴^{つか}んで持ち上げる。

「そんなに死にたいならアタシが殺してやるよ！」

ズボッ！

美鈴の脇腹に玲花の左手が突き刺さる。

「かつ……あああ……の、晃……」

美鈴はかと目を開いて俺を見る。その目からは涙が一筋流れ落ちる。

「かはっ……！」

内臓を逆流したのか、美鈴は八前さんと同じく血の塊を吐いて崩れ落ちた。

「キャハハハ！死ね！死ね！みいんな死んじまえ！」

もはや玲花は怨霊とも呼べないくらい狂気に満ちていた。美鈴の血に染まった左手を舐め上げるその姿は、さながら悪魔のようだった。

十次さんも曾根崎さんも既に力なくだらんと両腕を垂らしている。

「ごふっ！……晃……」

美鈴が何か言おうとして俺の方へ手を伸ばす。

ガスッ！

「まだ生きてんのかい！さっさと死にな！」

玲花が美鈴の手を踏み付け、力任せに殴り付ける。
美鈴が床に倒れる。

プチン！

その時俺の中で何かが切れた。

第19章 藤原悠姫 IIII

赤い何もない荒れ果てた大地

血を流したような赤い黄昏たそがれの空

うねる大地を遠くまで見やると薄墨色うすすみの山並みやまなが霞かすんで見える

オオオオ……アアアア……

その赤い荒野を数百億の声がうねりとなって押し寄せてくる

悪意……怨嗟えんさ……怨念……

感情が大きな渦うずとなって津波のように押し寄せてくる

今 歴史が終わろうとしていた……

“死怨”となった崎田 晃は上空数十mに浮いている。全身ほの赤く光を帯び、髪も赤く変色し逆立さかだっている。

そして何よりも異様なのは、目が緑色に変化し、両眼から薄緑色の強烈な光を放っていることだ。

「おおおっ！ 遂に……遂に目覚めたか！ ……『死怨』！！」

福留は狂喜きやうぎし、頬が紅潮べにうしろしている。周りの自衛隊員たちは呆然ぼうぜんとして上空を見上げている。

信人も玲花も嬉しそうに見上げる。ただ悠姫だけは無表情でじつと“死怨”を見ていた。

周りの白い空間は晃の覚醒かくせいと共に消滅し、その場にいる者たちは植物の一切生えない赤い大地にいた。

石垣は直径50mほどの円状に周囲を取り囲んでいる。大きさも形もバラバラな石が無造作に積み重ねられた石垣は、高さは腰ほどで容易に乗り越えられそうである。

「崎田……」

新堂瑛士は崎田の覚醒を止められなかった悔しさに歯がみしながら膝をついている。

「さあ！ “死怨” よ！ 石垣を壊せ！ 史上最強兵器の完成だ！」

福留は紅潮こうしゅうしたまま両腕を振り上げて“死怨”に叫んだ。

福留の声が聞こえたのかどうかわからないが、“死怨”は“石垣”を睨にらむ。すると石垣はがらりと音を立てて崩れ始まった。

「さ、さすが“死怨”！ 悠姫さまがいくらやっても壊れなかったのに……」

玲花はそう言うのと、はっと気づいたかのように表情をこわ張らせる。

「あ、いえ、決して悠姫さまをバカにしているわけではなく……」

玲花は慌わづてて言い繕つくろう。

「私は何も言っていないですよ。」

悠姫は表情を変えず、淡々としている。

“石垣”はがらがらと音を立てて崩れていく。赤い地面には大きな形もバラバラな石がごろごろと転がりながら積み重なっていく。

オオオオ……アアアア……

死者たちの声は先ほどまでよりもずっと近づいてきている。

「さて……仕上げにこいつらを殺してあいつには完璧な“死怨”になってもらおうか！」

玲花はそう言うのと美鈴に近づき、信人にも声をかける。

「信人くん！アンタもさっさとそいつら殺っちまいなよ！」
「うるせえな！俺に指図さしずすんな！」

信人はまた二人の頭を驚掴わしづかみにしたまま持ち上げる。

「うわあああ！」

十次と曾根崎の口から絶叫ほとばしが迸る。

「はははは……！死ねえ！……って、んっ？」

信人が二人にとどめを刺そうとすると、いつの間にか“死怨”がすぐ隣りにいることに気が付く。

「はっ？……なっ？」

信人は驚いて二人を離す。

ドサドサッ！

「うっ！」

十次は一瞬 呻く。曾根崎は俯せに倒れたまま動かない。辛うじて生きてはいるようだ。

「な、なんだよ！お前は俺らの味方だろ？何で邪魔すんだよ……」

“死怨”は信人をじっと見つめていたが、ずっと目をつぶる。次の瞬間かつと目を見開くと、“死怨”の両眼からは緑色の強烈な光が迸った。

「ガア……ア……アア……」

“死怨”の開かれた口には上下に大きな牙が4本見える。その牙の間から白い蒸気のような風が凄まじい勢いで信人に襲いかかった。

「ぎ……ぎゃああああああああ……」

信人の長い、恐怖に満ちた絶叫が響く。すると、信人の霊体であるはずの身体に変化が現われた。

皮膚が“死怨”の息を受けている部分から溶け始まっている。溶けた皮膚の下からは赤銅色をした血液らしき液体がドロドロとあふれてくるが、次の瞬間には蒸発していく。皮膚の下からは脂肪が現れ、筋肉組織、内臓、骨格……と、どんどん溶けていく。

「ギャアアアアアア……」

信人の断末魔の絶叫が尾を引き、途切れた時には信人の姿は跡形

もなかった。

「し、“死怨”？」

玲花は驚いて後ずさる。

“死怨”は信人が消滅してからも長く息を吐き続けていたが、ゆっくり口を閉じると同じようにゆっくりと玲花の方を振り向く。

「ひっ！」

玲花は小さく叫ぶと、くると振り返り走って逃げ出す。

「ヒイイイイイイイイ……」

玲花の逃げ出した方からは、無数の死者たちがこちらへ向かって歩いて来るのが見える。

“死怨”はゆっくりと歩き出す。

「の、晃……」

苦しそうに荒い息 遣^{づか}いをしながら、美鈴は“死怨”となった晃に呼びかける。しかし、“死怨”は美鈴には気づかないかのように歩み去ってしまう。

「晃……」

美鈴はかつて“崎田 晃”であった者の後ろ姿を見つめることしかできなかった。

「何なんだよ！ あいつは！ 何でアタシたちが狙われなきゃなんない

んだよ!」

玲花は走りながら後ろを振り返る。しかし、後を追っていたはずの“死怨”の赤く輝く姿は見えない。

「は……あれ?」

玲花は立ち止まる。死者たちは玲花の数百m先で津波のように押し寄せて来ている。

玲花が立ち尽くしていると、突然視界が“左右に分かれた”。分かれた玲花の視界には“死怨”が立っている。

玲花は頭頂から股間まで真っ二つになっていた。

「あ……」

「ガア……アアア……」

“死怨”はまた白い息を吐く。

シュウウウウウ……

玲花は一瞬で蒸発した。

“死怨”はさらにまた上空に浮かび、無数の死者に向かい咆哮ほうこうした。

「ガアアアアアア……」

ジョワアアア……

前方の死者たち数百人が“死怨”の息を受けて次々と蒸発していく。

「待って!! 待って! “死怨”!」

悠姫が“死怨”の隣りに浮かび上がって来る。

「お父様が……お父様がいらっしゃるの!」

悠姫が取りすがると、“死怨”は息を吐くのを止め無言で死者たちを見つめている。

「あ、ありがとう……」

悠姫はそう言うと、死者たちの方へ飛んで行く。

「お父様!……お父様!」

悠姫はしばらく死者たちの上を飛び回ると、見えないくらい遠くへ飛んで行ってしまった。

死者たちの行進は止まらない。今は“石垣の残骸”に囲まれた元『Si on』まで二、三百mの距離まで迫っていた。

「まずいな……あの小僧、自分の力を制御できていない。」

瑛士は福留の独り言を聞き逃さなかった。

「……制御できてないってどういうことだ?」

瑛士が聞くと福留は舌打ちをする。

「聡いな……死者まで消してしまったら“武器”にならんじゃない

か。」

「な、なに!?!」

瑛士は福留を睨みつける。

「き、貴様は『子音』を商品にするだけではなく、死者たちまでも利用しようというのか!?!」

「おっと、わしじゃない。“先生”だよ。わしはただの使い走りだ。」

「“先生”?」

瑛士には思い付く人物はいなかった。

「とにかく、今の小僧ではわしらまで殺されてしまう。最後の仕上げをさせてもらおう。」

福留はそう言うと、自衛隊員たちに何か小声で指示を出した。

死者たちが百m手前まで来た時、悠姫が戻ってきた。一人の老人を抱えている。……藤原大悟であった。

「お父様……もう大丈夫ですよ。現世^{げんせ}へ戻して差し上げますわ。」

“死怨”は先ほどから動かず、数百m先の上空で微動^{びどう}だにしない。

「アア……ウウ……」

大悟は死者である期間が長いのか、まともに話せないようだ。

「悠姫……感動の対面だが、そいつをどうするつもりだ?」

「……もちろん、『子音』を通して現世に連れて帰ります。お父様に目覚めていただきたいのです。」

悠姫は大悟の肩にそつと手を添える。大悟は座り込み、焦点の合わない目で辺りをきよろきよろと見回している。

「悠姫……実はそれはもう無理なんじゃよ。」

悠姫の動きが止まる。

「……大悟の肉体はもう死んでおる。」

「なんですって!？」

悠姫は福留を睨む。

「つい先ほどだがな。大悟は一瞬目覚めたんじゃよ。そして死者で溢れた街の様子を見てビルから飛び降りて……」

悠姫にとって大悟の存在は全てであった。その大悟が死んでしまったとなれば、悠姫の存在意義はなくなってしまったのと同じであった。

「そんな……お父様……」

完全なる死者となってしまった大悟は小さくなって震えている。“負の感情”を持たない死者は決して生者に害なす存在ではなかった。

「しかし悠姫、“死怨”によって“あの世”と“この世”が繋がればまた大悟といっしょにいられる。お前の作り上げた『S i o n』

があればそれも可能だ。」

福留が悠姫にそう話しかけると、大悟が身動きし始める。

「アア、ア……オ……オレ……ハ……」

「お父様？何？何が言いたいのか？」

悠姫は大悟に取り縋る^{すが}。

その時気付いたのが曾根崎だったのには理由があった。

瑛士、十次、美鈴に比べて、足を骨折してはいたものの比較的元気だったこと。

曾根崎の位置から、大悟は悠姫の陰になって見えなかったからである。

自衛隊員の一人が静かに“バスターガン”を構えたことを。

「コ……コロサレタ……コロ……サレタ……」

大悟は震える指を福留に向ける。

悠姫の目が紅光^{しゃつしつ}に光った瞬間、“バスターガン”の黄色い光が大悟に向かって放たれた。

バシユ！

「ぐあっ！」

一瞬の出来事にその場にいただけれもが気付かなかった。

曾根崎の身体に黄色い光が突き刺さった。大悟の前に曾根崎が飛び込んでいたのである。

「曾根崎さん！」

瑛士の声は迫り来る死者の壁に吸い込まれるように掻き消えていった。

「ガアアア……アア……」

微動だにしなかった“死怨”がまた暴れ出す。

ジュワアアアアアア……！

崩れた“石垣”のすぐそばまで迫っていた死者たちが一気に蒸発していく。一度の息で数百は消滅しているだろう。

「曾根崎さん！」

今度は悠姫が叫び、崩れ落ちる曾根崎を抱きとめた。

「なぜ……？ お父様はもう死んでしまっているのに……あなたはまだ生きているのに……」

曾根崎の胸の真ん中に真っ黒い穴が空いている。致命傷なのは誰の目にも明らかだった。

「ごふっ……あなたですよ……」

「えっ？ なにが……」

「し、清水さんを送ってくれたのは……『あの女の人』って清水さんは……言っていました……」

悠姫は黙って頷く。

「あ、あなたは憎むべき敵だった……しかし、あなたもまた被害者であり……愛する人を失った……僕も……そうです……」

曾根崎の言葉は次第に途切れとぎれになってくる。死期が近いことがみてとれた。

「あなたがしたことは……決して許されること……ではない……しかし……もう悲しい思いは……誰にも……」

そこまで言うと、曾根崎は静かに目を閉じた。曾根崎の身体からは白い光が離れ、一つの塊となって遠くの山に向かって飛び去ってしまった。

「曾根崎さん……」

悠姫は曾根崎の魂が飛び去った方を見つめる。そして福留の方に向き直った時、悠姫は“怨体”になっていた。

「なんだ！？悠姫！このわしにたて突こうというのか！？」

ジャキ！ジャキ！

十人ほどの自衛隊員が一斉に悠姫に狙いを定める。

悠姫はまぶたがなく、真一文字に結んだ口で福留を睨む。
次の瞬間悠姫は空中にいた。

「わあああああ！」

悠姫は自衛隊員の真っ只中に飛び降り、次々と手刀を繰り出す。

「あああああああゝ！」

悠姫のまぶたのない目からは涙があふれていた。

怨霊の涙……それは憎しみの涙ではなく、悲しみの涙であった。

「ぐあっ！」

最後の一人となった自衛隊員の胸の中央の穴から右手を抜くと、悠姫は福留を睨む。

「くっ……消してやる！」

福留は“バスターガン”を悠姫に向ける。

ガシッ！

しかし次の瞬間福留は首を悠姫に“後ろから”掴まれた。

「ひっ！よ……よせ！わ、わしはお前の本当の父親だぞ！お前は血の繋がった父親を殺すのか？」

福留は哀願する。

「……わたしのお父様は一人だけよ。」

悠姫は一気に締め上げる。

その瞬間“死怨”が悠姫に向かって来る。

「くっ！」

悠姫はすんでのところで“死怨”の手刀しめとうを避よけた。

「な……なぜ……」

悠姫は驚き、“死怨”を見つめる。

「ハア……ハア……」

福留は絞しめられた首筋をなでる。

「くっくっくっ……いいぞ、小僧。そのまま悠姫を消してしまえ！」

福留は落とした“バスターガン”を拾いながら叫ぶ。

「そうか！わかったぞ！」

突然瑛士が叫ぶ。

「崎田は“負の感情”に反応するんだ！“憎しみ”“怨念”……そういったものに反応して排除はいじょしようとするんだ！」

「なんてこと……」

瑛士の叫びを聞いて悠姫は“霊体”に戻る。しかし“死怨”はさらに悠姫に襲いかかろうとする。

「待って下され！」

“死怨”と悠姫の間に割って入った小さな影あった。それはキヨだった。

「お、お嬢様を許してやってくだせえ。お嬢様は本当はいい子なんです。やさしくて聞き分けのいい子なんです。」

「キヨさん……」

悠姫がキヨに近寄ろうとした時、キヨの体に黄色い線が突き刺さった。

バシユ！

「あ……お嬢様……」

キヨは悠姫に手を伸ばしながらその場に崩れ落ちた。

「キヨさん！」

悠姫の叫びが響く。

「ババア！邪魔をするな！さあ“死怨”！そいつを消せ！殺せ」

福留が唾を飛ばし、血走った目で騒いでいる。

「お……お嬢様……キヨの……キヨの最後のお願いです……あの坊ちゃんたちを……助けてくだせえ……キヨは……お嬢様が大好きでした……お嬢様に会うために……ここまで来たんです……」

キヨは小さな身体を地面に横たわらせている。悠姫はそっとキヨを抱き上げる。

「キヨさん……あなたは……私を止めて来てくれたのね……私のわ

がママを叱^{しか}りに来てくれたのね……ごめんなさい……ごめんなさい……キヨさん……」

キヨの身体からも曾根崎と同じように魂が離れ、白く尾を引きながら遠くの山へ向かって飛さってしまった。

「……許さない……」

悠姫の両眼は紅^{あか}く光を放ち始めている。

「だめだ！悠姫！“負の感情”を抑えないと崎田が……」

瑛士の言葉を遮^{さへぎ}るように、福留が叫ぶ。

「うるさいぞ！新堂！いい加減にしないと命はないぞ！さっきの愚^{おろ}かなうちの社員やそのババアみたいにな！」

「だまれ！」

悠姫は福留に襲いかかる。

バキッ！

悠姫の手刀を受けて“バスターガン”が真っ二つに壊れた。

「お前は……お前だけは許さない！」

悠姫の目には再び紅^{あか}い光が輝き始めた。

「いいか！わしはお前の父親なんだぞ！血の繋^{つな}がった肉親なんだぞ！」

「私は怨霊よ。もう血は流れていない。けれどお父様を失った今、私の中にあるのは怨念ではなく虚^{むな}しさだけよ。」

悠姫はゆつくりと手刀^{しゅとう}を構える。しかし、すぐに空中へ飛び上がる。

ドゴッ！

今まで悠姫の立っていた場所に大穴^あが空く。

“死怨”の攻撃がまた始まった。

「ガア……ア……」

“死怨”が“息”を吐いた。悠姫は死者たちの方へ飛び去る。

“死怨”はすぐに飛び上がり、悠姫を追う。

「くっ……どうすれば……」

十次^{じゅうじ}が呟^{ささや}く。

「“負の感情”……そうか！十次さん！オレを美鈴ちゃんのそばまで連れて行ってください！」

瑛士がそう言うのと十次は瑛士に肩を貸し、美鈴のそばに連れて行く。

「み、美鈴ちゃん、わかったんだよ。」

瑛士はわずかな距離を移動しただけだが、かなり辛^{つら}そうである。

「何？瑛士さん……」

美鈴は無力感に苛さいなまれていた。

崎田を止めることができず、八前、曾根崎、キヨまでもが自分の目の前で死んでしまった。

「崎田は完全に“死怨”になったわけじゃないってさつき玲花が言ってただろ？」

「うん……」

「あれは崎田の“負の感情”なんだ。」

美鈴は首をひねる。

「佐伯 瞳は消える直前、俺に『真実は裏側にある』と言い残した。」

美鈴の目に理解の光が灯ともる。

「じゃあ、あの姿は晃の“負の感情”が表になっていて、裏返せば元に戻せるの？」

瑛士は頷うなずく。

「たぶん……さつきから崎田は“負の感情”に反応している。だから、“正の感情”が崎田の中から湧わき上がれば元に戻せると思う。」

瑛士が話している間にも死者たちの上では“死怨”と悠姫が戦っている。

「でも一体どうすれば……」

「呼び掛けるんだ。美鈴ちゃん、君が。」
「えっ！？アタシ？」

美鈴はそう言う顔をしめる。傷口からはまだ出血しており、顔色も優れない。それは瑛士も同じで、比較的動けるのは十次だけであつた。

「十次さん、あいつに邪魔をされないようにしてもらえますか？」

瑛士は死んだ自衛隊員から“バスターガン”を拾い上げ、あわよくば悠姫を撃とうとしている福留を見ながら小声で十次に伝える。

「^{がつてん}合点だ。」

すぐさま十次は自衛隊員の亡骸^{なきがら}に身を隠しながら福留に近付いていく。

「悠姫！こっちに来てくれ！」

瑛士は脂汗^{あぶあせ}を流しながら悠姫を呼ぶ。

『^{よみ}黄泉』は『^{げんせ}現世』とは違い、精神的な世界であるためか、さほど大きな声で呼んだわけでもないのにすぐに悠姫は戻ってくる。

「あなたの考えはわかったわ。たぶん……正しい。それなら“私たち”にも手伝わせて。」

悠姫は全て察^{さつ}しているようだ。

「“私たち”？」

見ると大悟がさっきよりもしつかりとした様子で立ち上がる。

「この『子音』による出来事の原因は俺だ。せめて世の中のためになることをして成仏したい。俺にも手伝わせて欲しい。」

大悟は悠姫を見てほほ笑む。

「そうはさせないぞ！ “死怨” は…… “死怨” はわしの……うげっ！」

“バスターガン” を撃とうとした福留の後頭部に強烈なかかと落としが入る。

十次であった。

「こいつはあつしに任せてくだせえ！」

瑛士は頷く。

「彼の心を元に戻しやすくするために、彼の“負の感情” を少しでも削ぎ落としてあげるわ。お父様、“死怨” の気を逸らせて。」

「ああ、わかった。」

「来るわよ！」

悠姫が振り返ると、死者たちをまた“息” で消していた“死怨” がゆっくりとこちらへ近付いてくる。双眸は禍々《まがまが》しい薄緑色に輝いている。

“死怨” が悠姫の前に降り立った。

「こっちだ！」

大悟は死者たちの集団の方へ走っていく。

しかし“死怨”は大悟には見向きもせず悠姫を睨^{にら}んでいる。

「“死怨”は崎田 晃の心がまだ残っている。だから私に対する憎しみの心が大きい。お父様には“負の感情”がないから気を逸^そらすことができないみたいね。」

悠姫はゆつくりと後退しながら冷静に状況を分析する。

“死怨”の口が開き、今まさに“息”を吐き出そうとした時、遠くから大悟が走って来るのが見えた。

「おおい！こいつならどうだ！？」

大悟の後ろからよろよろと一人の亡者が付いて来る。
縦縞^{たてじま}のスーツ姿にオールバックの頭髪。切れ長な目に細面^{ほそおもて}な輪郭^{りんかく}。
鬼島常晴だった。

「アアアア……アアアア……」

鬼島は生前の無念が強いのか、身体中から紅い怨念^{あか}の淡い光に包まれている。

“死怨”の気が逸^それるには十分過ぎる“負の感情”だった。

「ガア……アア……」

“死怨”はすぐに鬼島の方へ向き直り、“息”を吐こうとする。

悠姫は“怨体”を飛ばした。

怨念のみで構成された“怨体”はネットを自由に行き来し、現世

では15分間だけ実体化して人を殺す存在であった。さらに人の“負の感情”を吸収し、より大きく強い“怨体”となる。

『子音』によって大勢の“負の感情”を吸収し強大化した悠姫の“怨体”は、“死怨”にも対抗しうるほどであった。

「ガ……ア……」

悠姫の“怨体”は“死怨”を突き抜け、そのまま鬼島の前まで飛んで行った。

「アアアアアア……」

“死怨”は“息”を吐いた。

ショワアアアアア……

悠姫の怨体と鬼島が一瞬のうちに蒸発する。しかし“死怨”は“息”を吐いた後、がっくりと膝をつく。

「やったわ！彼の“負の感情”が弱くなったわ！今よ！」

悠姫も力尽きたようにその場に倒れ込む。美鈴はすかさず“死怨”のところへ這^はっていく。

「晃……晃……」

脇腹からは止め処^どなく大量の血が流れ出てくる。動かさずすぐに輸血すれば助かるのだが、美鈴は自分の命はどうでもよかった。晃を助けない。

美鈴を突き動かしているのはその思いだけであった。

「晃……」

美鈴がたどり着くと、“死怨”は弱々しく美鈴を見る。

「ア……？」

美鈴は力を振り絞り、“死怨”を抱きしめる。

「晃……覚えてる？高校時代のこと……」

美鈴は微笑むが、その顔は血の気がなく、蒼白そうはくだった。

「あなたは陸上部で……よくグラウンドを走ってたわよね……」

“死怨”は静かに聞いている。

「アタシね……ずっと見てたのよ……あなたのこと。」

美鈴の目には涙が光っている。

「あなたはいいい記録が出た時、大きな大会に出る前……よくこうしてたわよね。」

美鈴は親指を立てる。

「ふふっ……『楽勝！』って。」

その指は震えている。

「あなたはアタシのことなんか気にしてなかったかも知れないけど……アタシはずっと気になってた……」

力なく親指を立てていた手が落ちる。

「新幹線の中で偶然あった時は嬉しかったな。あなたは変わってなくて……あの時のままの晃だった。」

美鈴の目からは出血と同じく、止め処なく涙が流れる。

「あなたはいつも自然体で接してくれた……まっすぐで……飾らないで……そんな晃をアタシはますます好きになったわ。」

美鈴は力なく“死怨”にもたれかかる。

「これからも……ずっと……いっしょにいたかったけど……無理みたい……」

美鈴の目からは光が消えていく。

「だから……最後に……わがままを言わせて……晃……好きよ……だから……元に戻って……スケベでお人よしで……まっすぐな……あなたに……」

そう言うとき美鈴はその場に崩れ落ちる。

美鈴の心臓はその動きを止めていた。

「美鈴ちゃん！」

瑛士が叫ぶ。美鈴は目を閉じ、何の反応もしない。

赤い地面にさらに鮮やかな血溜り^{ちだま}を残し、美鈴は力尽きていた。

「美鈴ちゃん！」

瑛士が再び叫び、這い^はずりながら美鈴のところへ近寄ろうとする。
その時異変が起きた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

赤い大地と空が鳴動^{めいどう}を始める。

瑛士は涙で濡^ぬれた目を空に向けた。

「あれは……」

赤い空にかかる黒い雲が渦^{うず}を巻いている。

直径数百kmはあろうかという巨大な渦巻きだ。

アアアア……オオオオ……

無数の死者たちは地面にひれ伏し、泣き叫んでいる。

「なに！？何が起こるの……？」

悠姫は大悟の所に飛んで行く。十次も福留を地面に押さえつけながら、不安そうに空を見上げている。

次の瞬間……

「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」

“死怨”^{ほうごう}が咆哮した。

その声に共鳴するかのように大地が大きく揺れ始めた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

立ってられないほどの震動……

そこかしこに地割れが起こり始める。

遠くの山々も崩壊を始めている。

火山があれば噴火してもおかしくはないほどの大地震であった。

「あぶない！」

崩れた“石垣”の大きな石が美鈴の亡骸^{なきがら}の方へ転がる。
瑛士は動かない足を引きずりながら美鈴の亡骸^{なきがら}を庇^{かば}う。

バンッ！

今まさにぶつかろうとしていた大きな石が破裂する。

“死怨”が立ち上がり、空を見上げていた。

そのまま“死怨”は音もなく上空へ上っていく。“死怨”が高度を上げるのに合わせてその渦は“死怨”を中心に回転を早める。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

さらに震動は激しくなり、“死怨”が白い光に包まれ始めた。その光は次第に強まり、直視できないほどになる。まるで太陽が現れたように、あたりは白い強烈な光に満たされた。

あまりに強烈な光に焼き尽くされそうになりながらも、瑛士は必死に美鈴の亡骸^{なきがら}を守っていた。

ゴゴゴゴゴ……

永遠に続くかと思われた震動は、徐々《じょじょ》に収まってきた。それと同時に、あたりを照らしていた白い光も弱くなる。

ファサ……

瑛士は見た。

白い光に包まれた“死怨”から、大きな白い翼が広がるのを。

「あれは……『子音』……」

悠姫の声が聞こえる。

見ると悠姫も涙を流している。それはすべてを流し尽くすような美しい涙であった。

「『子音』……」

瑛士も誰にともなく呟く。

白い光と大地の震動が完全に消えた時、上空に浮かんでいたのは美しい『天使』の姿だった。

「『真実は裏側にある』……」

瑛士は佐伯 瞳の言葉を反芻はんすうしていた。

“死怨”と“子音”……

光には影が付き従う……善と悪しかり……愛と憎しみしかり……
“負の感情”が裏返り、“正の感情”が表になった姿……それが『子音』であった。

「これが“死怨”の本当の姿なのね……」

悠姫の目からも涙が尽きることなく流れ続ける。
背中から大きな白い翼を生やし、髪は赤から銀髪へと変貌を遂げた“子音”は、ゆっくりと降りてくる。

瑛士も悠姫もその場にいる者たちは身動きができず、ただ見つめるだけであった。

ゆっくりと大地に降り立った“子音”の顔は崎田 晃そのものだった。

「崎田……」

瑛士は美鈴を抱きしめたまま、涙を流している。

「美鈴ちゃんが……」

美鈴は青白い顔に涙の跡をつけて息絶えている。

“子音”は微笑み、両手を美鈴にかざす。白い暖かい光が“子音”の両手から出て、美鈴を包み込む。

フワッ！

美鈴の身体が浮き上がる。

“子音”は美鈴を両腕で抱きかかえる。すると、見る見るうちに美鈴の傷口がふさがっていき、美鈴の顔色が元に戻っていった。

「み、美鈴ちゃん……」

服についた血の跡はそのままに、美鈴の傷は完全に消えてしまった。そして“子音”は瑛士にも手をかざし、同じように暖かい光で傷を治していく。

それは奇跡の瞬間だった。

「“子音”の“福音”……よ。」

悠姫がやさしく瑛士に微笑みかける。

怨念の塊である“怨体”を飛ばし、“死怨”に消滅させられたためか、悠姫は憑きものが落ちたように晴れやかな微笑みをたたえている。

瑛士の傷を治した“子音”は、いまだひれ伏す死者たちに“息”を吹きかける。それは“死怨”の時のような“息”ではなく、『浄化』の、『許し』の“息”であった。

シュワアアアアアアアアアアアア……

『Sion』であった場所から扇状に白い光が次々と空へ上っていく。

“子音”の“息”によって許され、浄化された死者の魂たちが成仏していく。

すべての魂が浄化され、赤い大地にはもう何者もいなくなってしまう。

「終わった……わね。」

悠姫が呟く。気が付くと“子音”の姿はなく、地面には崎田 晃が倒れている。

「崎田くん！」

福留に一発食らわせ気絶させた後、十次は崎田のもとへ走りよる。十次が戻って来た時、崎田は十次の腕の中で子どものように眠っ

ていた。

「うう……」

その時美鈴が目を覚ました。

「美鈴ちゃん！」

元気になった瑛士が美鈴に駆け寄る。

「瑛士さん……アタシ……」

「美鈴ちゃん、よくがんばったな。崎田は元に戻ったよ。美鈴ちゃんを助けてくれたんだよ。」

美鈴ははっきりしない頭を一振りすると、よろよろと立ち上がる。

「晃……」

そしてよふらつきながらも崎田を抱える十次の方へ歩いて行く。

「晃……晃……ああ！」

安堵したためか、気が抜けたのか、美鈴はその場に泣き崩れる。
崎田を地面にそっと横たえた十次は優しく美鈴の頭を撫でた。いつの間にか隣りに来ていた瑛士が美鈴の肩に手を置いた時、地面の近くから声がした。

「ううっ……」

「晃！晃！？うああっ！」

美鈴が崎田に覆い被さる様に泣き出すと、崎田が目を開ける。

「あれ……ここは……あれ？美鈴……何で泣いてんだ？」

崎田は状況がよく飲み込めないでいるようだ。

「崎田……お前、覚えてないのか？」

瑛士が呆れたように肩をすくめると、崎田はまだ泣いている美鈴の肩に優しく手を置く。

「声が……聞こえた……」

「声？」

瑛士が聞くと、美鈴も泣きやみ崎田の顔をのぞき込む。

「誰の声？」

美鈴が聞くと崎田は上体を起こし、瑛士の後ろの方を見る。

「たくさん……聞こえた……八前さん……美那ちゃん……八前さんの奥さん……曾根崎さん、キヨさん、キタロー、工藤直樹……それに……」

死者たちの名前を挙げ、崎田は悠姫を見る。

「……悠姫の赤ちゃん。」

その言葉を聞き、悠姫はわっと平伏し、父に取り縋って泣き出す。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

悠姫の慟哭どうこくが赤い大地に響く。

「みんな……『ありがとう』って言った……おかしいよな……赤ちゃんがしゃべれるわけがないのに……『ありがとう』って……」

崎田の目からは自然に涙が溢あふれてくる。

「俺……何にもできなかったのに……」

「ううん……晃こたは応えてくれたわ……アタシの声に……届かないと思っただアタシの声に……」

美鈴は涙できらきら光る目を晃ほほえに向け微笑む。

「美鈴……ちゃんと聞こえたよ……」

崎田は美鈴の手を握って立ち上がる。

「それに、悠姫……お前の声も。」

崎田が声を掛けると悠姫は涙でぐちゃぐちゃになった顔でほほ笑む。

「私は……『肉体』にこだわっていた……お父様の身体……生めなかった私の赤ちゃん……私の“怨体”は人を殺した後もその肉体を羨うらやんだ……」

悠姫はゆっくりと崎田たちのところへ歩いてくる。

「“子音”……私を裁さいて。私は自分のわがままのためにたくさんの罪のない命を奪った。もう……今となっては取り返しはつかない……あなたに決着をつけて欲しいの。この“死怨”の呪縛じゅばくに……」

悠姫は崎田の前でそつと目をつぶる。

崎田はしばらく戸惑とまどった後、右手を悠姫の額に当てた。

「崎田！」

「晃……」

瑛士と美鈴が同時に声を上げる。

十次と大悟は息をのんで見守っている。

辺りが一瞬静まった後……

「つつ！」

悠姫は驚いて目を見張みはる。

崎田は“でこぴん”をしたのだった。

「許す！」

ふしゅーと鼻息が聞こえるくらい気合を入れて崎田は悠姫に言う。

「えっ……？」

その場にいる者全員が言葉を失う。

「八前さんが言ってた……『憎しみは憎しみが生まない。どこかで断ち切らなきゃいけない。』って。」

崎田は八前の亡骸^{なきがら}を見つめる。

「それに瑛士。」

「オ、オレか？」

瑛士は自分を指差^{ゆびさ}す。

「お前新潟のホテルで酔っ払って言ってたよな？ 『いじめは人との繋^{つな}がりを利用した最低の行為だ』 って。」

「あ、ああ……」

「だから、誰かが広い心で過ちを受け止めなきゃいけない。どこかで誰かが許さなければならぬ……悠姫……俺はお前を許す。」

「“子音”……」

悠姫の目からはまた涙が溢^{あふ}れる。

瑛士と十次は肩をすくめ、美鈴は笑顔で崎田に抱き付く。大悟は優しく悠姫の肩を抱き寄せていた。

「あなたたちを現世に戻さなければならぬわね。」

悠姫がそう言うと、十次は顔を歪^{ゆが}めて顎^{あご}をしゃくる。

「“あれ”はどうしますかい？」

見ると福留が地面に大の字になってのびている。

「もとはと言えばあいつが全ての元凶^{げんきゅう}だから殺したい……」
「悠姫、それはだめだ。」

俺は即座^{そくざ}に止める。

悠姫は怨体を切り離すことで怨霊ではなくただの霊体になった。
大悟と同じように。

ここで父親を殺したりしたら間違いなく悪霊になる。

「悠姫……俺だってあいつは許せない。だからこそ……だからこそ許してやってくれないか？」

俺は悠姫に頭を下げた。

「“子音”やめて。あなたにそう言われたら許すしかないじゃない。」

「ありがとう。悠姫。」

「じゃあ、起こす？」

悠姫が福留の方へ行こうとするのを俺は止める。

「いや、そこまでお人好しじゃない。あいつは殺さない。“生き残って”もらう。」

「そいつはいいや！」

十次は手を打った。

ブウン！ヒューイイイイイイイイイ……

周囲の様子が切り替わり、元のホールに戻ってきた。
八前さんや曾根崎、キヨさんや自衛隊員たちの亡骸^{なきがら}はない。

良くも悪くも『意思』がないと現世には行けないらしい。死んでしまったら意思はないもんな……

福留も置いてきた。これは意図的に。目が覚めた時どんな反応す

るのか見られないのが残念だ。

「私たちは黄泉に帰ります。もう死者たちはいないけど、どうせまたすぐに増えるでしょう。」

悠姫は悲しげにほほ笑む。

ホストコンピュータの『子音』は、悠姫の存在によって『S i o n』を作り上げていた。つまり、悠姫がいなくなれば“あの世”とつながることは不可能になる。

「無効になるとしてもやはりこれは破壊してもらおう。」

瑛士は薄緑色の巨大なコンピュータを見上げながらそう宣言する。その場にいる誰もが反対することはなかった。

「それじゃ、いろいろありがとう、ごめんなさい、それに……さよなら。」

「ああ、八前さんたちによろしく。」

悠姫と大悟は次第に透明になり、消えてしまった。

バダン！

突然、ホールのドアが開きスーツ姿の怖そうな男の人と数人の警官が入ってきた。

「き、君たちは何者だ！？どうしてこんなところにいるんだ？」

「俺たちは……」

その人は戸惑いながらも俺たちの話を聞いてくれた。

生前、八前さんと仲がよく、御手洗さんのこともよく知っているというその人は、警視庁捜査一課の五十嵐課長だった。



豊島区封鎖……

死者数百人を超えた未曾有^{みぞう}の混乱は結局のところ原因はわからないままだった。

犯人と思われる集団が煙のように消え去り、その痕跡^{こんせき}さえも残らなかったからである。

テレビやインターネットでは、青白い顔をした死者が人々を襲う映像が繰り返し流されたが証拠はなく、政府の見解は『疫病^{えんびよう}による一時的な混乱』の一点張りで押し通された。

その祭りのような騒ぎの陰で、本来であればトップニュースになるような二つの事件が報道されたが、人々の耳目^{じもく}をほとんど集めることなくひっそりと消えていった。

『戸田防衛科学大臣の辞任』と『(株)Dyson社長失踪事件』である。

一部の報道では、池袋にあるホテル従業員の証言を元に、ある7人グループのお陰で事件が解決されたと流されたが注目を集めるこ

とはなかった。

世間を騒がせていた変死事件も起こらなくなり、時間が経^たつにつれ次第に人々の記憶も薄れ、この『謎の疫病事件』は風化していった。

そして10年の月日が流れた……

第20章 崎田晃一（エピソード）

「パパ〜！」

晃一が手を振る。

暖かな日差しが初夏の訪れを感じさせる。

仕事で忙しい俺にとって、日曜日にこうして息子と公園へ遊びに来るのが一番の休息になる。

「晃一！危ないからあんまり遠くまで行くなよ！」

「うん！」

息子の晃一は5才。やんちゃな盛りだ。

晃一はブランコに揺られて楽しそうに笑っている。この笑顔が何よりも愛しく感じる。

あの事件から10年。俺は美鈴と結婚し、子どもができた。毎日が充実してとても幸せだが、事件のことを忘れたことはない。この幸せを作り出すために犠牲になった人々を忘れることなんかできない。思い出すと辛いことばかりだが、決して忘れてはいけな
んだ。

美鈴は念願の小学校の教師になり、毎日忙しそうにがんばっている。悩みや苦労はあるようだが、それなりに楽しくやっているよう
だ。

普段は家事や育児まで美鈴に頼りっ放しなので、たまの休みくらいは羽を伸ばして欲しい。そんなことから、日曜の午後はいつも俺が公園へ晃一を連れ出して遊ばせるのが習慣となっている。

「晃〜！」

あれっ？美鈴だ。

「なんだよ。せつかくの休みなんだから昼寝でもしてればいいのに……」

美鈴はいつまで経^たってもきれいだ。絶対子どもがいるようには見えない。ちよつとメタボってきた俺とは違うな。

一つめの夢は叶^{かな}ったけど、二つめの夢はほんとに俺なんかでよかったんだろうか？

「……何だか心配で来ちゃった。」

「心配？」

「……うん。」

美鈴は少し暗い表情になる。

「晃一ね……いじめに遭^あってるらしいの……」

「幼稚園で？」

美鈴は頷^{うなず}く。

晃一はいつの間にか砂場でトンネルを掘っている。ときどきこつちを向いては「パパ」とか「ママ」とか手を振る。

「そんなこと誰に聞いたんだ？」

美鈴が答えようとすると、小さい男の子が公園の入口から走って来るのが目に入る。

「こうちゃん！」

男の子は元気に手を振りながら砂場へ駆けて行く。

「あっ！海斗くん！」

同じ幼稚園の早野海斗くんだ。

「実は海斗くんのママに教えていただいたの。」

晃一がいじめられてるのか……

「まあ、幼稚園児のすることだからたいしたことはないけど、やっぱり心配で……あ、早野さんだ。ちょっとご挨拶してくるわね。」

見ると優しそうな女の人が歩いてくる。あれが海斗くんのお母さんか。

俺は立ち上がって軽く会釈をする。海斗くんのお母さんも笑顔で会釈を返してくれた。

美鈴は足早に歩いて行って早速おしゃべりを始めた。

♪
~ ♪

突然ミスチルの着メロが流れ出す。

美鈴のやつ、携帯を置いてしまったみたいだ。

美鈴は相変わらずミスチル好きだ。

この曲はあの事件の年に流行った曲だ。

♪
~ ♪

今の幸せは八前さんを始め、たくさんの人たちからの贈り物だ。
何があるうと怖いことはない。

本当は死んでいたかも知れないんだ。
死んだ気になればなんだってできる。

俺は美鈴の携帯を持って歩き出す。

美鈴は深刻そうな顔をして早野さんと話している。俺が近付いて
いくと着メロに気付き振り返る。

「晃……晃一ね……」

「おい！晃一！ちょっと来てみる！」

俺は美鈴の言葉を遮さへって晃一を呼ぶ。

晃一と海斗くんは不思議そうな顔をして走って来る。

「パパ〜なに〜？」

海斗くんと遊ぶ晃一を見て俺は確信した。

「晃一はいじめになんか負けない。」

晃一の頭に優しく手を乗せる。

「だって俺と美鈴の子だぞ！？俺たちは“死怨”にだって負けなかつた。こんなことでいちいちヘコんでられないって！な！晃一！？」
「うん！」

晃一は何のことか察しているようだが、元気よく答える。

「もう……晃は相変わらずね。」

美鈴は苦笑いをする。

俺はしゃがんで晃一と目線を合わせる。そして右手の親指を立てて前に突き出す。

俺たちの合い言葉。

晃一も同じように小さな手で親指を立てて突き出す。

瑛士……十次さん……元気でがんばってますか？

俺たちは……何があっても負けない。

だって……

心で“つながって”いるから。

「楽勝!」

『死怨』……《完

あとがき

この小説は『モバゲータウン』で、2008年8月から半年間連載しました。

当時はそれほど閲覧数も上がらず、僕ものんきに書きたいことを書きたいように書いていました。

完結近くになるとさすがに閲覧数もランキングも上がり、ホラーカテゴリーで全国69位（たぶん）くらいにまで上がりました。

現在もモバに置いてありますが、閲覧数は5万を超えました。

この作品は僕の作品では2作目にあたります。

まだ小説の書き方もよくわからず、カタカナ擬音語もばりばり使っていて、みなさんに読んでいただけるようなクオリティとは言い難いと思います。

しかし初の長編ということもあって、とても思い入れの強い作品です。

話の中で登場する予定だったのに、都合上登場させなかった人物が二人います。

八前和美（八前刑事の奥さん）と新堂圭一（瑛士の父）です。

八前ファミリーを揃って登場させたかったのです。

瑛士と父親の確執も書きたかったなあ。

しかし、そうすると無駄に話が長くなりそうなので辞めました。

他にも物足りないところとかあるかと思いますが、僕の文章力、構成力不足なので許していただきたいと思います。

この作品を執筆するにあたって僕が意識したのは『キャラ立て』と『整合性』です。

登場人物一人一人に愛着を持って動かすこと。

伏線をきちんと回収することです。

全編に渡って張り巡らされた伏線を全て読みとれましたでしょうか
ww

ちなみにはっきりと描写していませんが、福留の言っていた“先生”とは『戸田防衛科学大臣』のことです。

つまり八前美那をいじめていた戸田恵理香の祖父が、一番の黒幕だったわけです。

また、悠姫が横山瑞希を殺した後、背骨を撫でるシーンがあります
が、ラストで悠姫がそのことについては告白しています。

「私は……『肉体』にこだわっていた……お父様の身体……生めなかった私の赤ちゃん……私の“怨体”は人を殺した後もその肉体を羨んだ……」

ここですねw

がんばって全ての伏線を回収したつもりですが、この二つについてはわかりづらくって、たくさんの方に質問・ご指摘を受けました。

『死怨』は、原稿の準備が整い次第、『アルファポリス』の『ドリムブッククラブ』に挑戦しようと思っています。

出版審査を通過するとは思えないのですが、ぜひ審査は受けたいとは思っています。

その際は携帯投票・購入予約・出資等、僕の夢にご協力いただければ嬉しいです。

よろしく願いいたしますm(_____)m

何はともあれ、こんなつまらなく、無駄に長い僕の小説をここまで読んでくださった方々、心より感謝申し上げます。

これからもがんばって、さらにより作品ができるよう精進したいと思っています。

今後ともよろしくお願いいたします！

2009.7.30 Special thanks to you

u! by 聖騎士

※2009. 8 「夏のホラー2009!!」怖い話は好きですか?」出品のため、一部改稿。

2009. 8. 20 上記企画において人気投票2位。

投票してくださったみなさん、ありがとうございました。

2009. 9 「アルファポリス」の「ドリームブッククラブ」に出品しました。

本作品を気に入っていただけの方は、携帯投票や購入予約などご支援よろしくお願いいたします!

2009. 12 「ドリームブッククラブ」出品終了。最終獲得ポイント73pt。たくさんの支援ありがとうございました。

2011. 4 「アルファポリス」の第4回ホラー小説大賞に参加。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3505h/>

死 怨

2011年7月31日04時49分発行